
平成28年度

東京家政大学 女性未来研究所

活動報告書

Tokyo Kasei University
Institute for the Advancement of Women
Annual Activity Report

第1期（平成26年度～平成28年度）

研究プロジェクト総集編
Research project summary

Higuchi

はじめに

本学に女性未来研究所が創設されて満3年、研究活動第1期のまとめの季節を迎えました。活動記録は年度ごとに発行してきましたが、今回の報告書は、女性未来研スタート3年間の総まとめです。

所長、副所長を含め15名の研究員はそれぞれ本務多忙な中から、みずからの手で女性の未来を拓く心意気を発揮、興味深い実践、調査、研究活動が行われました。専門の異なる研究員が、他の専門の職種、研究分野と出会い、和気あいあいの中で活動がすすめられたこと、他大学や団体、各界の有識者、地域の方々と、あるいは国際的な協働など、一つの活動ごとに、新しい多様な出会いがありました。この多様性は本研究所の幅広い性格をよくあらわし、活動の随所で化学反応を引き起こし、大きな変革につながる可能性を示しています。

どう変化の風が変わろうと、日本社会には確実に未来にかかわる条件があります。長寿化、少子化、人口減という人口構造の変化です。女性の動向が未来の動きを左右するでしょう。

ここまでの活動は、伊藤節副所長のご尽力がなければできないことでした。研究所員のさわやかな行動力に支えられました。いつもバックアップして下さった、大学理事会、大学内外の関係者、教授会の皆様に心より感謝の念を捧げます。

Keiko



樋口 恵子

東京家政大学女性未来研究所 所長
東京家政大学名誉教授

1956年、東京大学文学部美学美術史学科卒業。
東京大学新聞研究所本科修了。時事通信社、学習
研究社、キャノン株式会社を経て、評論活動を行う。
現在、NPO法人「高齢社会をよくする女性の会」理
事長、厚労省社会保障審議会委員。

2	はじめに	樋口恵子
7	Chapter 1	女性未来研究所
8		1. 女性未来研究所 運営委員・事務局・研究員等
9		2. 平成28年度 女性未来研究所 活動記録
11	Chapter 2	女性未来研究所 「提言」
12		1. 「女性の流出と地方創生～なぜ女たちは都市へ逃げたか～」 樋口恵子
18		2. 「男女共同参画施策と女性未来研究所～研究・活動の今後を考える～」 伊藤節
21	Chapter 3	男女共同参画講座
22		1. 板橋区 ^{あい} いたばしIカレッジ前期(全5回) 「時代を切り開いた女たち」 樋口恵子、伊藤節、能澤慧子
28		2. 北区 ^{さんかく} さんかく大学(全5回) 「結婚の理想と現実～イマドキの結婚事情～」 野口麻美
30		3. 群馬県 とらいあんぐるん大学連携講座(全4回) 「スポーツと健康から、男女が共に暮らしやすい社会を考える」 樋口恵子
33	Chapter 4	学園祭
34		緑苑祭企画シンポジウム 「教えて先輩！学びたい、繋ぎたい、打ち立てたい、私の人生」 宮地孝宜、並木有希
39	Chapter 5	女性未来研究所シンポジウム
40		1. 第2回東京家政大学女性未来研究所シンポジウム 「健康はあなたの幸せ、社会の財産～男女の違いも考える～」 斎藤正子、小櫃智子
44		2. 第3回東京家政大学女性未来研究所シンポジウム&ワークショップ (「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」公開シンポジウム) 「戸山ハイツ『未来の物語』を語ろう」 松岡洋子
48		3. 米国大使館・東京家政大学女性未来研究所共催シンポジウム 「人生100年時代、熱望される女性のリーダーシップ ～世代を超えて女性同士が助け合うために～」 並木有希
50		4. 女性未来フェスタ(公開研究報告会) 「3年間の軌跡と未来への展望」 伊藤節

53	Chapter 6	外部セミナー / 研修会等
54		1. NWEC 主催「大学等における男女共同参画推進セミナー」参加報告 平野順子
56		2. NWEC 主催「学習オーガナイザー養成研修」参加報告 平野順子
59	Chapter 7	全学共通教育科目 (A群)「ジェンダー論に学ぶ」授業報告
60		1. 「ジェンダー論に学ぶ」(平成28年度前期) ～社会を知り、自分の生き方を考える～ 岩田三代
62		2. 「ジェンダー論に学ぶ」(平成28年度後期) ～ローカル、グローバルに自分の生き方を考える～ 平野順子、並木有希
65	Chapter 8	研究プロジェクト報告
66		1. 現代の中学生・高校生の自立意識と発達課題 ～発達課題の特徴と課題をクリアするための題材開発～ 青木幸子、崇田友江、鮫島奈津子
86		2. 女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランス ～働きながら自分らしく生きるために～ 宮地孝宜、平野順子、早瀬郁恵、並木有希、田中恵美子、太田八重美
106		3. 健康長寿の延伸を目指したライフスタイルの提案 ～加齢と食事摂取傾向の変化 最終章 課題と提言～ 木元幸一、貝原奈緒子
114		健康長寿の延伸を目指したライフスタイルの提案 ～若い女性が考える父親および男性の家事・育児への参加～ 宇和川小百合、色川木綿子
120		健康長寿の延伸を目指したライフスタイルの提案 ～高齢者ふれあい食事会の健康効果～ 内野美恵、木元幸一
128		4. 男女共同参画で行う地域防災・減災 ～東京家政大学狭山キャンパスの役割の検討～ 齋藤正子、小櫃智子
134		5. 戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト ～都会の限界集落から見える「未来」～ 松岡洋子、斉藤正子、米澤純子、和田涼子、宮地孝宜、井上俊哉
146		6. 本学園アーカイブズ ～校祖渡邊辰五郎翁の書簡～ 林宏一
158		おわりに 伊藤節
159		執筆者一覧
160		編集後記 仲谷ちはる

Chapter 1

女性未来研究所

運営委員・事務局・研究員等

平成28年度研究所活動記録

女性未来研究所 運営委員・事務局・研究員等

運営委員会

- | | |
|-----------|-------------|
| 1. 樋口 恵子 | 女性未来研究所所長 |
| 2. 伊藤 節 | 女性未来研究所副所長 |
| 3. 川合 貞子 | 学長 |
| 4. 岡 純 | 家政学部長 |
| 5. 山本 和人 | 人文学部長 |
| 6. 今留 忍 | 看護学部長 |
| 7. 岩田 力 | 子ども学部長 |
| 8. 高木 くみ子 | 附属女子中学高等学校長 |

事務局

- | | |
|-----------|----|
| 1. 仲谷 ちはる | 主任 |
|-----------|----|

兼任研究員

- | | |
|------------|---------------------------------|
| 1. 平野 順子 | 保育科准教授 |
| 2. 宇和川 小百合 | 栄養学科准教授 |
| 3. 青木 幸子 | 栄養科教授 |
| 4. 早瀬 郁恵 | 造形表現学科准教授 |
| 5. 並木 有希 | 英語コミュニケーション学科准教授 |
| 6. 松岡 洋子 | 教育福祉学科准教授 |
| 7. 宮地 孝宜 | 教育福祉学科講師 |
| 8. 齋藤 正子 | 看護学科講師 |
| 9. 小櫃 智子 | 子ども支援学科准教授 |
| 10. 内野 美恵 | ヒューマンライフ支援センター専門員・准教授 |
| 11. 宗田 友江 | 附属女子中学高等学校教諭 |
| 12. 鮫島 奈津子 | 附属女子中学高等学校教諭 |
| 13. 太田 八重美 | 博物館専門主査 |
| 14. 吉村 扶見子 | 総務部人事課長 |
| 15. 務臺 久美子 | 学生支援センターキャリア支援課書記 (H28.6.30 まで) |

オブザーバー

- | | |
|----------|---------------|
| 1. 木元 幸一 | 前学長・理事・栄養学科教授 |
| 2. 岩井 絹江 | 理事 |

平成28年度 女性未来研究所 活動記録

- 4/ 1 (金) 『女性未来研究所リーフレット』改訂版発行
- 4/14 (木) 第1回研究会開催
- 4/23 (土) 第2回女性未来研究所シンポジウム開催
「健康はあなたの幸せ、社会の財産～男女の違いも考える～」
-
- 5/ 8 (日) 戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト(戸山ハイツPJ)「キッチン・カフェ①」焼肉パーティ
- 5/12 (木) 第2回研究会開催
- 5/22 (日) にっぽん子育て応援団・女性未来研究所共催「にっぽん子育て応援団結成7周年フォーラム」
-
- 6/ 9 (木) 第3回研究会開催
- 6/17 (金) JDN(Japan Diversity Network)主催緊急シンポジウム出席
- 6/19 (日) 第3回女性未来研究所シンポジウム&ワークショップ(「戸山ハイツの『未来の物語』を語ろう!プロジェクト」(公開シンポジウム))
- 6/19 (金) 北区男女共同参画センター主催「平成28年度男女共同参画週間講演会」出席
- 6/24 (金) JDN 定時社員総会出席
-
- 7/ 3 (日) 戸山ハイツPJ「キッチン・カフェ②」冷凍食品活用
- 6 (水) 第1回運営委員会開催
- 14 (木) 第4回研究会開催
- 20 (水) 戸山ハイツPJ「井戸端カフェ・まなび塾①」大牟田から学ぶ
- 30 (土) 研究プロジェクト報告会・意見交換会「男女共同参画で行う地域防災・減災～東京家政大学狭山キャンパスの役割の検討～」
-
- 8/10 (水) 戸山ハイツPJ「井戸端カフェ・まなび塾②」地域LPO
-
- 9/11 (日) 戸山ハイツPJ「キッチン・カフェ③」食物繊維のちから
- 14 (水) 板橋区共催事業「いたばしIカレッジ前期①」「長谷川町子～戦後70年女・子どもの生活史～」樋口恵子
- 15 (木) 第5回研究会開催
- 23 (金) 板橋区共催事業「いたばしIカレッジ前期②」「井伊直虎～初のおんな城主～」渥美雅子

- 9/30 (金) 板橋区共催事業「いたばしIカレッジ前期③」「吉屋信子～『花物語』と女たちの共同体～」伊藤節
- 30 (金) 『第2回東京家政大学女性未来研究所シンポジウム報告書』発行
-
- 10/ 8 (土) 北区共催事業「さんかく大学①」「結婚と「女の幸せ」の現在～夫婦間の溝はなぜ埋まらない?」水無田気流
- 13 (木) 第6回研究会開催
- 14 (金) 板橋区共催事業「いたばしIカレッジ前期④」「アガサ・クリスティ～ミステリの女王、光と闇～」平井杏子
- 15 (土) 北区共催事業「さんかく大学②」「男性学の視点からみた恋愛と結婚」田中俊之
- 15 (土) } 日本キャリア教育学会第38回研究大会 参加
- 16 (日) }
- 19 (水) 戸山ハイツPJ「井戸端カフェ・まなび塾③」みんなのサロンと不用品交換
- 22 (土) 北区共催事業「さんかく大学③」「専業主婦の揺らぎとゆくえ」石崎裕子
- 23 (日) 緑苑祭企画シンポジウム「教えて先輩!学びたい、繋ぎたい、打ち立てたい、私の人生」
- 26 (水) 板橋区共催事業「いたばしIカレッジ前期⑤」「ガブリエル・シャネル(ココ・シャネル)～実在のガルソンヌ～」能澤慧子
- 29 (土) 北区共催事業「さんかく大学④」「婚活時代から見える結婚事情～お見合いの現場から～」板本洋子
-
- 11/ 2 (水) 群馬県共催事業「とらいあんぐるん大学連携講座①」「鏑木毅が「山と健康」を語る」鏑木毅
- 5 (土) 北区共催事業「さんかく大学⑤」「まとめの会～意見交換～」笹川あゆみ
- 6 (日) 戸山ハイツPJ「キッチン・カフェ④」ねえ知ってる?豆の秘密
- 10 (木) 第7回研究会開催
- 13 (日) 埼玉県西部地域まちづくり協議会男女共同参画部会(所沢市・飯能市・狭山市・入間市)東京家政大学域連携推進センター共催 講演会 「人生案内」に見る男と女の生き方…いろいろ 樋口恵子

-
- 11/20(日) 群馬県共催事業「とらいあんぐるん大学
連携講座②」「神山雄一郎が“健康と体
育”を語る」神山雄一郎
- 30(水) 国立女性教育会館主催(NWEC)「大学等
における男女共同参画推進セミナー」出席
- 30(水) 『第3回東京家政大学女性未来研究所シ
ンポジウム&ワークショップ報告書』発行
- 12/4(日) 戦後引揚げ70周年記念シンポジウム『『奥
底の悲しみ』(2015)・『水子のうた』(1977)
上映会」樋口恵子
- 8(木) 第8回研究会開催
- 11(日) 群馬県共催事業「とらいあんぐるん大学
連携講座③」「石田良恵が“生きる力”
を語る」石田良恵
- 15(木) } NWEC「平成28年度学習オーガナイザー
16(金) } 養成研修」出席
- 18(日) 群馬県共催事業「とらいあんぐるん大学
連携講座④」「樋口恵子が“相撲”“マ
ラソン”を語る」樋口恵子
- 21(水) 戸山ハイツPJ「井戸端カフェ・まなび塾④」
戸山ハイツでつどい場はできるか?
- 1/8(日) 戸山ハイツPJ「キッチン・カフェ⑤」大鍋
大会
- 12(木) 第9回研究会開催
- 26(木) アメリカ大使館・女性未来研究所共催シ
ンポジウム「人生100年時代、熱望され
るリーダーシップ」
- 2/9(木) 第10回研究会開催
- 3/9(木) 女性未来研究所「女性未来フェスタ」
(公開研究報告会)
- 31(金) 『平成28年度東京家政大学女性未来研
究所活動報告書・研究プロジェクト総集
編』発行
-

Chapter 2

東京家政大学
女性未来研究所
「提言」

樋口恵子所長

女性の流出と地方創生～なぜ女たちは
都市へ逃げたか～

伊藤節副所長

男女共同参画施策と女性未来研究所
～研究・活動の今後を考える～

女性の流出と地方創生

～なぜ女たちは都市へ逃げたか～

樋口恵子 Higuchi Keiko

「女性活躍」のかけ声とともに、日本の各界リーダーに女性がいかに不在であるかが明きらかになった。とくに「地方創生」政策とうらはらに、地方議会における女性議員の不在が目立つ。とくに20～39才女性の流出率の高い自治体に女性議員ゼロ議会が目立つ。村の若い女性は何を思い、どこへ消えたのか。女たちがのびやかに息づける地域創生が望まれる。

東京家政大学に女性未来研究所が設立された2014年、その後の国内政治・経済界に大きな影響を与える研究結果が発表された。日本創成会議人口減少問題検討部会(増田寛也座長・他委員10名、以下「創成会議」)が行った今後2010年から2040年までの間に「20～39歳の女性人口」が5割以下に減少する自治体が、全自治体数の49.8%、896自治体に上る、とする報告書である。(注1)これらの自治体を「創成会議」は「消滅可能性都市」と名付けた。(以下、「創成会議」のレポートを「増田レポート」)

この反響は大きく、各自治体はいっそう真剣に人口減対策、地域起こし事業に取り組むことになった。何より大きな政治的・行政的変化は、政府の中に「まち・ひと・しごと創生本部」が創設され、初代地方創生担当大臣に石破茂氏が任命され、増田氏を含む有識者による委員会等が設置された(ex. 日本型 CCRC 構想)(注2)。政府の省庁を1つ新設するほどの影響力を持ったわけである。私もこの「増田レポート」を以下2つの点で評価している。

第1は、多くの日本人に人口減少社会の到来の必然と、その少子高齢化がもたらす未来を数の上で実感させたことである。「増田レポート」の分析に使われたのは主として、国立社会保障・人口問題研究所(社人研)の「日本の将来推計人口」(平成25年3月推計)などによるもので、政府から公表されている。近ごろはさすがに人口問題とくに少子化には関心が集まっているから、毎年の出生率、平均寿命などはメディアにもよく取り上げられる。そこで日本総人口が2008年の1億2808万人

をピークとして、すでに人口減少社会に突入していること、このままでは2030年には1億1662万人、2050年には1億人を割り9708万人になること(2016年版高齢社会白書)。このような数字は多くの人々が何度か目しているはずである。ドラッカー(注3)がかつて指摘したように人口構造は社会のすべてに影響を与える。人口の動きを自分と自分の属する社会の未来を左右する要因として常に認識する必要がある。日本人も、人口減について危機感を持つ人は増えてきたが、数は数であり知識であり、自分の人生の未来との具体的につながりは乏しかった。「増田レポート」は、それぞれが住む基礎自治体が消滅危惧種であるかどうか、というたった一つの軸で全国を区分けした。これほど具体的でわかりやすいことはない。すべての人が自分の人生の未来と人口という数を重ね合わせることができた。

評価すべき第2の点は、これこそが「増田レポート」の真髄というべきだが、消滅可能性のメルクマールに若年女性の流出率を取りあげたことである。20～39歳の女性という年代は、出産可能年齢と解すべきだろう。若い世代の人口流出は、進学・就労で故郷を離れる機会が多い男性を中心に語られることが多かった。人口の社会移動に関しては男性が先行するとしても、自然増減の鍵を握るのはまぎれもなく女性である。その女性の人口流出率を基準としたことは慧眼であり、事実を迫る正確なアプローチである。

さて、それから先が実は私が最も言いたいことだ。若い女性が流出する自治体やがて消滅可能の危険があるというのだったら、なぜ彼女らは故郷を離れるのか、そ

の理由を突きとめて、女性の環境を改善し、女性が生きやすくする条件を整えることが必要だろう。まずは女性たちが何を望むか、女性の声と意識を知ることから出発し、女性の定着率の高い自治体と低い自治体と、何が違うかを分析するのが当然であろう。

ところが「創成会議」からも政府のまち・ひと・しごと対策本部から出される提言や政策にも女性を軸に据えたものがほとんど見当たらない。東京の高齢者人口の激増を回避するため、日本型 CCRC を地方に展開するなど、あいかわらずどこかで箱物づくりにつながる論議が交わされている。せっかく「女性」に着目した指標を用いているにもかかわらず、その女性の意識や行動に関する好奇心の欠如は唖然とするほどだ。女性の能力や資質について、生活実態と不満や希望について、どうして関心を持たないのだろうか。女だって自分の行く末を考え、悩み、決断しているのだ。女性を「生む性」としてしか定義できないのか。そう言えば「女性は子を産む機械」と言って物議をかもした元高級官僚がいたけれど。たしかに人類のうち「産む機能」を持つのは女性だけであるが、女性もまた男性と同じく「考える輩」であり、意識の持ち主であり、ひいては自分の意識を動機とする行動の主人公たり得るのだ。そして女性と男性は言うまでもなく、この社会を形成するパートナーである。

〈少ない女性地方議員〉

社会のパートナーと言えば、近年「女性活躍」が政策として浮上する反面、肝心の政策決定の場に女性の数の過少が問題視され、新たな運動がひろがっている。女性議員増加を支援する WinWin (1996 創設)、Q の会 (2012 創設)。2015 年には国会に超党派の「政治分野における女性の参画と活躍を推進する議員連盟」が生まれ、ようやく 2016 年秋からの臨時国会で議員立法による「政治分野における男女共同参画の推進に関する法律」案提出まで漕ぎつけた。法案の文章を、「男女同数」を「男女均等」という幅のある表現にまとめ、「努力義務」とすることで与野党の一致を取り付けた。ゆるやかな表現ながら女性議員進出に弾みをつけるよう期待される。何しろ国際的機関(注4)の発表のたびに日本の順位は落ち込み、今や144国中111位(第一院=衆議院)というのだから。人口問題の上から見ても、保育施設の増設や、育児介護にかかわる雇用制度、男女の働き方、税制・社会保障制度に至るまで、立法府である国会に左右される。法を司る最高裁判所判事は内閣によって任命され

る。2016年末現在、15名の最高裁判事中女性は3人に過ぎない。昨年「今度こそは」と多くの女性たちが期待した「夫婦選択別姓」はまたしても壁に阻まれ、立法府に委ねられるかたちとなった。最高裁の大法廷は合憲とする判断を示したが、ちなみに15人の裁判官のうち女性3人を含む5名が違憲とした。女性裁判官はすべて「選択的別姓」を承認する立場であった(注5)。

そして、国の立法府よりも、女性議員の少なさが目立つのは地方自治体議会である。1995年地方分権推進委員会が設置され、2000年4月、地方分権一括法が施行された。その間私は地方分権推進委員の一人として、憲法に掲げられた「地方自治」の推進に微力を盡したつもりだが、最後まで気になったのは、地方政治にも行政(自治体職員など)の場にも、中央政府以上に女性の姿が見えにくいことであった。20世紀のうちに、女性の県知事が選出されたこと(注6)は、むしろ驚きをもって迎えられた。昨2016年は東京都に女性知事が誕生し、少なくとも現在まで、歴代の男性知事にできなかった活躍を示している。時代はためらいがちに、しかし確実に変化を遂げていくのだろう。

しかし、それにしても遅々たる歩みである。2014年「増田レポート」が発表された翌2015年は、統一地方選が行われ、自治体各レベルで多少の女性の増加を見せたものの決定的に新たな流れをつくるに至っていない。一方、福祉はすでに1990年、福祉八法の改正によって地方自治体の責務とされているし、地方分権一括法の施行(2000年)により、地方の権限は機関委任事務(注7)が廃止されるなど、地方自治の権限は高まる方向にある。とくに同じ2000年施行された介護保険法は、実施主体が市町村という基礎自治体に決定したことから、「地方分権の試金石」とも呼ばれた。今、日本の少子高齢化とくに高齢化の部分を支える政策として、地域包括システムが注目を浴びている。今のところ介護保険制度の中に位置づけられているが、私自身日本の人口の高齢化を支える砦の一つと期待している。今は中学校区にほぼ一か所(全国で約7200カ所、H26.4月)設置されているが、日本の高齢者激増に対して家族の介護力が激減する中でどう介護・医療サービスを提供するか。そればかりか障がい児・者のケアを含めて人生100年社会のケアを地域が引き受けざるを得ない日が近々到来するに違いない。そのような民生・福祉にかかわる施策が、地方自治体の中で現在よりさらに大きな役割を占めていくとき、人間一生のケアについて経験の多い女性のリーダー

シップが否応なく必要となる。その「経験値」なるものが、たとえ旧来の差別的性別役割分業の結果女性の身についたものであったとしても、その分野の経験値こそが未来を拓く鍵となる。いずれにせよ、私たちの社会は、すでに既定の事実として少子化と人口減少、おそらく2030年ごろから30年以上続く65歳以上30～40%社会は避けることのできない確定未来なのだ。

この人口構成の中で、日本人も日本社会も、その存在の条件として新たな価値観を加えねばなるまい。経済成長というのもきっと引き続き人気価値であるかもしれない。しかし国連が2030年へ向けての活動目標としてSDGs（注8）（Sustainable Development Goals）を定めたように、私見としては、持続可能な地球環境のための活動と実践をはじめとして、豊かで対等な人間関係の形成、行動の自由と自己決定権、他者に役立つ活動、美を探求する創造活動、自らの属する社会への参画——などの新たな項目が新しい価値を形成する重要な要素になると予想している。

中でも、豊かで対等な人間関係、行動の自由、そして社会への参加・参画は、現在よりはるかに大きな生きる目標となるのではないか。以上の価値観が発揮される場合は、職場を含めて多様であるが、中でも最大の場合は地域、地方自治体であろう。

〈女性流出自治体に女性議員は少ない〉

それならば、ということで、私は「増田レポート」の消滅可能自治体のデータに乗せて地方自治体議会議員の女性比率との間に、何らかの相関関係が見出されるのではないかという仮説を立てて、検討してみることにした。増田分析に従って、女性流出率50%以上、消滅可

能自治体とされた自治体議会と、流出率50%以下（存続可能自治体というべきか）の自治体議会とその女性比率を比較してみることにした。その基礎データとして増田レポートを使わせていただいたことに深く感謝と敬意をささげるものである。

結果は、予想以上に高い関連性が示された。ここで自治体議会の女性比率の現状を述べると、2015年統一地方選後の2015年6月現在、女性議員数は4,078人で、その内訳は都道府県議会では女性議員が259人、女性議員比率9.6%、市・区議会では2,775人、14.1%、町村議会では1,044人、9.2%。市区町村議会全体の女性議員比率は12.3%であった。女性議員ゼロ議会は、全体で344に及び、女性流出率50%以上の884自治体の約3割、そのうちの人口1万人以下の523自治体の中で221自治体と4割超、全自治体議会では2割以上を占めている。そして、女性流出率が50%以下で「存続可能」とされる自治体の中でも女性ゼロ議会比率10.4%とかなり高い比率を示している。要するに、日本の自治体議会全数の約2割は女性不在、ゼロであるのだ。

しかし、女性議員比率では、2つのグループの間に明白な差があった。流出率50%以下、すなわち存続可能な自治体議会の女性議員比率が14.7%であるのに対し、消滅可能自治体のそれは9.0%という大差があった。

「風が吹けば桶屋が儲かる」よりはるかに緊密な関連性を持って、自治体議員比率と女性流出率との関連性が見えてくるのではないか。「自治体人口に比例しているだけのこと。都市化社会では女性が外に出やすいだけさ」という見方も可能であろう。ならば今あらためて問う、なぜ人口規模の小さい中山間地というか農村部で、女性議員が出にくいのか、ゼロなのか。政治の担い手は男性、と決まりきった社会と、少数派とはいえども女性

表 若年女性人口減少率ランク別自治体数、議員定数、女性議員数・比率並びに女性議員ゼロ議会比率

項目	自治体数 ^①	議員定数 ^②	女性議員数 ^③	女性議員比率 ③÷②×100	女性ゼロ議会 自治体数 ^④	女性ゼロ議会 自治体比率 ④÷①×100
①自治体の、若年女性（20～39歳）の人口減少率（2010→2040年）が50%未満	799	18,226人	2,675人	14.7%	83	10.4%
②自治体の、若年女性（20～39歳）の人口減少率（2010→2040年）が50%以上	884	12,726人	1,144人	9.0%	261	29.5%
計	1,683	30,952	3,819人	12.3%	344	20.4%

出所) 日本創成会議『全国市町村別「20～39歳女性」の将来推計人口』、市川房枝記念会女性と政治センター『女性参政資料集 2015年版 全地方議会女性議員の現状』（2015年12月刊）、全国市議会議長会および全国町村議会議長会資料をもとに作成。

注) 福島県は市町村の県合計1本で作成・表示。

作成 樋口恵子
協力 玉木康平

が立候補し、選挙運動をし、当选すれば議場で発言する風景が「あり得る」風景になっている地域と、どちらが女性にとって住みよいか、伸びやかな行動の自由があるか、多様な意識の存在を前提としているか。女性議員の存在、数の多少は、その地域における女性全体の「自立度」「伸びやかさ」の1つのバロメーターになると言ってもよい。酸欠状況にある女性たちが、唯一自由獲得の手続きとして故郷から逃亡したのは当然ではあるまいか。その逃亡を、地域の息苦しさを知り尽くした母親世代が助けた。

〈アジアから来た花嫁の嘆き〉

私は東京育ちのわりに、若いころから日本青年団女子活動の講師をつとめたり、1980年代の初めにはNHK長野の仕事で放送エリアは県内に限られたが月1回、農村部の「老人問題」のレポーターを一年間務めるなどの機会に恵まれた。当時すでに農村部の「嫁不足」は決定的で、1960年代から「農業後継者の配偶者対策」がすすめられ、現在で言うなら婚活がさかんに講じられたが効果は上がらず、ついに1990年、一部の自治体ではフィリピンなど「アジアからの花嫁」を自治体の後押しで迎えるという嫁対策に乗り出した。結果として相手国側の意向も変わり下火になったが。

90年代の初め、私は板本洋子氏(注9)と共に「アジアからの花嫁」を積極的に迎えている東北の町村を訪ねたことがある。すでに子に恵まれた人たちもいた。一軒の家で子のない短大出だという女性が暗い顔つきで一人留守番をしていた。日本語ができない、車の免許など取れるはずもない、夫がいなければどこへも行かれない不自由を語った。受け入れ先の町村は、日本語研修など行わなかったようだし、あっても「足」がなくては受講不可能だろう。

村当局は花嫁側に「溶け込め」というばかりでなく、受け入れの日本側も、花嫁たちの故郷への理解が必要ではないか、と気づいたのだろう。私たちが訪れた村では、その日たまたま「アジアの映画祭」を行っていて、花嫁出身国の著名な映画が上映されていた。私たちはまず会場で花嫁の何人かに会えると期待していたが1人もいなかった。前述の1人留守番をしていた花嫁はそのことを知らなかった。せめてそんなときぐらい行政側が車で相乗りにして迎えに行く配慮はできなかったものか。

同じ東北だが、少し離れた地域で今離婚話が進行、子供を夫の親に預けて別居中、という女性を訪ねた。元気

のよい女性で「もはんの的アジアからの花嫁」として農作業する姿がNHKの番組で放送されたこともある。彼女は重労働も大家族も少しも苦にならない、と言った。ただし、家族はあくまでも夫婦が単位で「義父母」と「自分たち夫婦と子供」2家族が一緒に暮らすのが大家族だと思っていた。しかし義父母は全体が義父母を中心とした一大家族でない気がすまないらしい。彼女が最も怒っていたのは、東京へ嫁いだ夫の妹が、ひんぱんに子連れでやってきて、その間汚れものの洗濯から食事作りまで、すべて「嫁」である彼女の仕事となっていることだった。異国から来た花嫁のつらさは、実は代々の日本の嫁が耐えてきた仕打ちであり、それに文句も言わず順応するのが日本の嫁であった。ただし、高度経済成長の余波で、都会に安全な逃げ場ができたとき、彼女らは逃げた。

〈日本に生きつづけた「嫁哀史」〉

1985年と言えば、日本でも世界に広がる第2波フェミニズムの波が一応のひろがりを見せ、国際的集大成というべき女子差別撤廃条約を日本の衆参両院満場一致で批准した年である。その批准要件として難航しつつも男女雇用機会均等法が成立、家庭科の中・高校における男女共修も約束された。いささか意気揚々としていたその翌年、私は山間部の地方で一冊の手記に出会った。難しいがんに侵された、私と同世代の農家の主婦の1年にわたる克明な闘病記録であり、今なお終末期医療に示唆を与えるに違いない資料である。しかし当時の私に強力に迫ってきたのは、同世代として想像もつかぬほどの「病む嫁」の過酷な状況だった。嫁いで4半世紀以上、働きづめに働いて長男は嫁を迎える。夫は農業経営の方針を切り替えてまで、毎晩妻を入院先へ見舞いにやってくる。その上、亡き妻を忍んで立派な手記を刊行してくれた。その点では幸せな妻である。手記には病気の記述が多く、家族関係も感謝のことばが続いているのだが、「嫁としての述懐」が時たま登場する。

「私の人生には嫁の時代しかなかった。のんびりと一番日当たりのいい部屋をもらって、自分のやりたいことをしてだれにも見張られない気楽な人生を送りたかった。気を落ちつけて寝ている部屋もなく(中略)、いつも働け働けと3人のしゅうと様に言われて土方にも行った(中略)。それでも最後はいやなことばが聞こえてくる悲しい人生」。「いやなことば」というのは、きっと病んで金のかかる嫁に対する年寄りたちの視線であろう。戦前は、「嫁」の病気の費用は実家持ちが原則の地域もあった。

「9か月も入院して、と言われることは分かっています。でも派手な生活をしたわけでもないし、地味な着るもので働いて、悲しい一代でした」「又、生まれ変われるとしたら気楽で昼寝のできる家庭へ。『働き、働き』というしつけでは、自分の人生なんか何もない」「お墓へ行けばきついおばあさんが待っている。死んだら実家へ帰りたい。死ぬこともいやになった。お墓でおそろしい年寄りが待っている」

婚家で50歳までこれだけのものが言えなかった嫁。終始嫁として近所からも勤務評定され見張られた生活へ、一身をかけての告発である。

〈村が変われば女性も変わる〉

1986年は、国際的国内的な女性の動きを受け止めたかのように、地方の農村自体の意志による動きが始まった年でもあった。福島県飯館村という人口約8200人の村で、20～39歳の若妻を募集してドイツに研修に派遣したのである。この年代ははからずも「増田レポート」のメルクマールとなったものと一致する。

その土地・飯館村の畜産農家であり、民間から抜擢されて公民館長(当時)を務める菅野典雄氏の発案であった。菅野氏はのちに村長として、福島第一原発被災前後の村政を担うことになる。「増田レポート」と同じ年代の「若妻」に条件を限ったのは、彼女らのほとんどが「嫁」の立場だったからである。

村は大騒ぎとなった。自己負担はあるものの公的資金を使って、若妻＝嫁をヨーロッパ研修に出すというのだ。多くは夫の家に義父母、子どもらと住む三世大家族であった。

先に紹介した闘病記の著者より10～20年若い世代であっても、女子差別撤廃条約が批准されようと言われまいと、農村の「嫁」の立場はあまり変わっていなかったようだ。まだ海外へいった経験のない義母から最後まで「嫁の分際で」と大反対され、「区長さん」という地域のリーダー男性の説得でようやく実現した例もあった。こうして出発した「嫁」(婿取りもいるが、「婿取りも楽じゃない」というレポートあり)たち19人。全員がこの地域内か周辺で育っているというのに「ほぼ初対面」という事実は、いかに嫁たちがそれぞれの家の中に囲い込まれて生きてきたかの証拠でもあるだろう。

しかし、この地域は、リーダーである男性が主唱して嫁を「見える化」することによって、つまり男たち自身、村自身が変わることによって、「嫁に来たくなる

村」を創ろうとした。だからこそ、最初おずおずと参加した若妻たちの中から、のちに村の主要な役職になる例が続出することになる。飯館村に1994年策定された村の第4次総合振興計画において、部会の専門委員の半数は女性を選出、「若妻の翼」のメンバーが数多く就任した。(注10)。農産物加工、レストラン、カフェなどを起業したメンバーも多い。かつて村の隅々にバラバラに孤立して、顔が見えなかった「嫁」たちが、若手女性住民として、個性ある顔を立ち上げた。村を形成する、それぞれの意見を持った村民の一人となった。(注11)

村の「嫁」たちを個性ある「村民」にする活動は、戦後なんと40年以上を経てやっと始まった、とあってよい。この飯館村のイベントに続く自治体もあらわれた。時代が少しずつ変わり始めたところ、2009年、福島第一原発の爆発によって、飯館村民は最も大きな被害を受け、村民は今もばらばらの状態である。この「村の男たちの変化」が女性参画をもたらし、嫁たちの生き方を変える活動が、災害によって一時中断したように見えるのが残念である。しかしもはや若くはない、60～70代の祖母となった「19妻」たちは、2016年9月、28年前の経験をあらためて振り返りその後の人生の変化を記録した記録集『飯館の女性たち』(SEEDS出版)を発行した。

議員になるのが能じゃない、審議会委員が幸せなのか、という異論は自由である。幸福論を戦わずつもりはない。しかし女性が「嫁」という家父長的家制度のもとに息をひそめて「見張られ」「気楽ということのない」状態で、どのようなしあわせをめざそうと、しあわせに生きられるものだろうか。酸欠状態にある地方の女性たちは、地元で嫁ぐよりも、せめてのびやかな息づかいを求めて都会に逃亡した。息苦しさを経験しつくした「実の母親たちが娘の逃亡を助けた」ということばは、私が農村取材中に母親の立場の人からこの耳で聞いている。

そのような日本の地方、村自体が変わらなくて、村の実権を握る男性が変わらなくて、女たちの町づくり村起こしへの参画なくして、地方創成の成功はありうるのだろうか。

注1) 本稿における増田論文の引用は『中央公論』2014年6月号の数字を基本としている

注2) CCRC Continuing Care Retirement Community. の略語。「日本版CCRC構想有

識者会議」などが設置された

- 注3) ピーター・ドラッカー (1909～2005)
ユダヤ系経営学者。「現代経営学」あるいはマネジメントの発明者
- 注4) 世界各国の男女平等の度合いを指数化した世界経済フォーラム (W E F) の2016年版
- 注5) 2015年12月16日 最高裁大法廷は「民法における夫婦同姓の規定は合憲」の判定を下した
- 注6) 2000年大阪府太田房江知事、2000年熊本県潮谷義子知事 続いて2001年千葉県堂本暁子知事、2003年北海道高橋はるみ知事、2006年滋賀県嘉田由紀子知事、2009年山形県吉村美栄子知事、2016年東京都小池百合子知事、現在、北海道高橋はるみ知事、山形県吉村美栄子知事、東京都小池百合子知事の3名
- 注7) 機関委任事務廃止：国の指示に基づく機関委任事務を廃止して自治事務と法定受託事務に再構成し、国と地方の関係を従来の上下関係的なものから対等・協力の関係に移行させた
- 注8) SDG s 国連が定めた2030年までの活動目標 Sustainable Development Goals の略。「国連に加盟するすべての国は、全会一致で採択したアジェンダをもとに、2015年から2030年までに、貧困や飢餓、エネルギー、ジェンダー平等、気候変動、平和的社会など、持続可能な開発のための諸目標を達成すべく力を尽くす。スローガンの「誰も置き去りにしない」leaving no one left behind は本研究所出発時点の確認事項と共通している。
- 注9) 板本洋子 元日本青年館結婚相談所長 現在、全国地域結婚支援センター代表
- 注10) 『飯館の女性たち』2016年 SEEDS 出版
P98～ 板本洋子「この時代の農村の結婚支援と飯館村」
- 注11) 注10と同書。P136～「住民と行政の協働の村づくりと女性のエンパワーメント」千葉悦子

男女共同参画施策と女性未来研究所

～研究・活動の今後を考える～

伊藤 節 Itoh Setsu

男女共同参画の動きは1975年の国際婦人年世界会議における「世界行動計画」採択から始まっている。基本法成立から17年目にあたる本年度は女性活躍推進法も施行された。問題点も含めながら、女性参画の未来構築を掲げて発足した本研究soのこれからの取り組みを考える。

〈男女共同参画社会基本法とその施策〉

ここで改めて男女共同参画社会基本法そのものについて振り返ってみたい。法律制定は1999年。基本理念として次の5つの柱が示されている。①男女の人権尊重 ②社会における制度または慣行についての配慮(男女の社会活動に及ぼすこの影響を中立化する) ③政策等の立案及び決定への共同参画 ④家庭生活における活動と他の活動の両立 ⑤国際的協調(他の国々、国際間と協力して取り組む)というもので、一応基本的なものが網羅されている。

行政によるこの施策は地方レベルまで進展し、地域の特性を生かして共同参画社会づくりに取り組むことを求められた各自治体は、センターを設立し、独自の行動計画書を発表しながら講座や講演会その他の意識覚醒の行事にいそしんできた。女性未来研究所もプロジェクト研究とは別に、3つの自治体と共催してこれに一部関わってきている。そこで垣間見られたのは、女性の働き方、男女のあり方(ジェンダー問題)、地域活動等に関する講座でもなかなかひとが集まらない、男女参画の意識の浸透度が低い、どのように進めていったらいいかわからないといった現場の本音であり、施策の効果が十分でないことがうかがわれる。又管理職に占める女性の割合も当初の目標にはほど遠い状況にあった。

2012年末に発足した第2次安倍内閣が「日本再興戦略」、「成長戦略」を掲げ、女性の活躍推進を最重要課題の一つとして取り組みを始めたのもそうした焦りともみられる。少子高齢化は進行するばかりで、これに伴う働き手不足の加速が顕在化してきたのである。今後10年

間、2026年までに日本の生産年齢人口(15～64歳)は560万人も減り、労働力不足がさらに深刻化すること。その対処策としてこれまで看過されてきた女性の潜在的能力の活用が求められているのだ。こうして状況のなかで2016年4月、女性活躍推進法が施行され、推進のための体制作りが急ピッチで進められているというわけである。

「女性活躍推進」などというのもどこか空々しく、女性活用も経済戦略にすぎず、要するに利用されているという面もあるだろう。だが少子化や働き手不足が深刻化した結果、ようやく社会が女性参画の重要性に気付いたということで肯定的にとらえることはできよう。何しろWEF(世界経済フォーラム)による2015年の男女格差報告では、日本は145カ国中101位という驚くべき低さだ。また「女性活躍」の名称はともかくとして、働く女性の可能性を広げることは、1986年施行の男女雇用機会均等法施行以来ずっと取り組まれてきた課題でもあるからだ。均等法以降、表向きは職場における男女の差別は禁止されたとはいえ、実質的にはいわゆるガラスの天井、もしくは性別職務分離によって男女別処遇の格差は是正されなかったのである。

〈働き方における意識改革—ワークライフ・バランス〉

女性は出産、子育てという時期と働き盛りの年代が重なる。特に日本では最も生産性の上がる年齢であり、キャリア形成にとって重要な働き盛りの30代で、仕事を辞めてしまっている女性が圧倒的に多い。日本の女性

は家事や育児に費やす時間が長いのだ(それだけ男性の家事・育児へのかかわりが少ないということになる)。

こうした問題を考えると、男女共同参画、および女性活躍推進法とは、たしかに女性が働けるようにする基盤作りに編み出された方策ととらえることができる。そこに欠かせないコンセプトが「仕事と生活の調和」である。つまり「ワーク・ライフ・バランス」(当研究所のチームでは「ワーク・ライフ・ケア・バランス」)とは、男女共同参画理念とセットの考え方であり、両者は切り離せない関係にある。またそれは「働き方改革」なしには達成しえない。ということは、女性活躍推進(これを違和感を持って受け止めている男性も多いだろう)とは働く女性側の問題だけではなく、長時間労働を常態とする男性の働き方を含めた問題でもあるのだ。

女性の活躍推進が進まない根本的な理由として、日本は高度成長期の家族モデルにとらわれ、男性は仕事、女性は家庭という性役割分業への根強い意識があげられる。先に述べた地方自治体における共同参画の浸透度の低さもうなづけるし、今だに公の場での「失言」と称される事件(?)も氷山の一角。男女共同参画とは、社会全体の意識改革、また男性を含めて職場風土に関する意識改革なしには実現しないことがわかる。

〈ジェンダー教育の重要性〉

女性の生き方と男性の生き方のイメージを変える意味でも、ジェンダー教育の重要性を改めて確認する必要があるだろう。そもそも女性活用政策において抜け落ちてきているのは、男女の不平等、性差別を是正するという視点である。90年代以降のフェミニズムのバックラッシュや、ポストフェミニズム現象と複雑に絡みながら展開してきた男女共同参画の施策には、男女が共同に社会参画するのを推進すれば、ジェンダーの問題はすべてクリアすると思わせるトリックが潜んでいることを注視する必要がある。また少子化対策と結びついた共同参画推進の施策は、婚活をも強力に推進し、従来のジェンダー秩序をより強固にしていく方向にあり、うたい文句の「多様性(ダイバーシティ)」との矛盾も看過されてしまう傾向にある。

先の「ワーク・ライフ・バランス」ということもある意味で理想に近い。なぜなら現在の日本においては女性の多くが非正規雇用で就労し、育児休業をとることも保育園確保も難しいところで、やりくりのために四苦八苦しているというのが実態に近いからである。近年の労働

環境の悪化やフェミニズムへの否定的イメージという要因も関わるのだろうが、学生を含めて若い世代の専業主婦願望や、性役割分業への肯定感が高まっていることにもきちんと目を向け、そうした問題の解決策を打ち出していく必要があるだろう。

〈キャリア教育とライフ・プランを共有できるプラットフォーム作り〉

就職実績が大学評価に直結する傾向の中で、各女子大は共学に学生を奪われる危機感からキャリア形成を考える意欲的なプログラムを活発に展開するようになった。特に2010年度以降、女性活躍推進の機運にのり、生き残りをかけてキャリア教育に力を注いでいるのだ。働く女性が出産を機に退職する傾向のある日本において、人生における長期的なキャリア形成を考えさせることは極めて重要なことではある。ただ女性未来研究所はこうした傾向に単に右ならえではなく、ジェンダー論に結びついた独自のキャリア教育プログラム開発に取り組むべきだろう。ただ数として多くの学生を職場に送り出せばいいというのではなく、その先である。就職しても職場とのミスマッチで離職率が高くては意味がない。大学で得た知識を活用してどのような働き方をしたいのか、どのような社会人になるか、どのように地域、社会に関わり貢献できるか、多様なメンターを通じて自らの価値観や理想像を想像し、進路を考えられるようにする必要がある。又はじめからすべてが整えられていると考えるのも甘い。先の見えないこれからの時代、社会環境を自分たち自身が作り替えていくような気概と、批判的思考を養っていく仕組みも考えるべきだろう。何よりも女性が安心して自分のキャリア・プランや人生100年の物語を共有できるプラットフォーム、情報交換も含めたサポートし合える交流の場作り、ネットワーク作りも喫緊の課題でなないだろうか。

Chapter 3

男女共同参画講座

地域支援・交流の一環として、男女共同参画社会推進のため、各地方自治体（平成28年度は「板橋区」「北区」「群馬県」）の要請にこたえて、以下3件の共催事業（講座企画、内容の助言、講師派遣など）を行った。

- 1 東京都板橋区 いたばし^{あい}Iカレッジ前期（全5回）
講師：樋口恵子／渥美雅子／伊藤節／平井杏子／能澤慧子
- 2 東京都北区 さんかく大学（全5回）
講師：水無田気流／田中俊之／石崎裕子／板本洋子／笹川あゆみ
- 3 群馬県 とらいあんぐるん大学連携講座（全4回）
講師：鍋木毅／神山雄一郎／石田良恵／樋口恵子

板橋区 いたばし^{あい}I カレッジ前期 (全5回)

「時代を切り開いた女たち」

【東京都板橋区・東京家政大学共催事業】

期 間：平成28年9月14日～10月26日、水(金)曜日、14:00～16:00 定員：40人

講座名：長谷川町子～戦後70年女・子どもの生活史～ / 井伊直虎～初のおんな城主～ / 吉屋信子～『花物語』と女たちの共同体～ / アガサ・クリスティ～ミステリの女王、光と闇～ / ガブリエル・シャネル(ココ・シャネル)～実在のガルソンヌ～

【講師】

樋口恵子

(東京家政大学名誉教授
女性未来研究所長)

渥美雅子

(渥美雅子法律事務所弁護士)

伊藤節

(東京家政大学教授
女性未来研究所副所長)

平井杏子

(昭和女子大学名誉教授)

能澤慧子

(東京家政大学教授)

東京家政大学共催 いたばしI (あい) カレッジ【前期】 男女平等参画基礎講座

時代を切り開いた女たち 保育つき



自らの人生をかけて新しい道を切り開いた女性たち。各分野において、そのあとに続く女性たちの道しるべとなりました。

この5回の連続講座では、各回様々な分野の『時代を切り開いた』女性を取り上げ、その分野・人物に精通した講師を迎えて興味深いお話をさせていただきます。その国・その時代で女性を取り巻く社会環境がどんな状況だったのかを学んでみましょう！



	と き	取り上げる人物・講座内容	講 師
1	9月14日(水)	長谷川町子 <small>サザエさん生誕70年</small> ～戦後70年女・子どもの生活史～	樋口 恵子 東京家政大学 女性未来研究所長
2	9月23日(金)	井伊直虎 <small>2017年 NHK大河ドラマ</small> ～初のおんな城主～	渥美 雅子 渥美雅子法律事務所 弁護士
3	9月30日(金)	吉屋信子 ～『花物語』と女たちの共同体～	伊藤 節 東京家政大学 女性未来研究所副所長
4	10月14日(金)	アガサ・クリスティ ～ミステリの女王、光と闇～	平井 杏子 昭和女子大学 名誉教授
5	10月26日(水)	ガブリエル・シャネル (ココ・シャネル) ～実在のガルソンヌ～	能澤 慧子 東京家政大学 家政学部服飾美術学科教授

日程 平成28年9月14日～10月26日(14:00～16:00)(全5回)

会場 板橋区保健所B1講堂(板橋区大山東町32-15)

対象 区内在住・在勤・在学中、原則として全日程受講できる方

定員 40人(申込順)

費用 無料

申込 8月15日(月)朝9時から、Eメール・FAX・往復はがきでお申し込みください。※申込方法の詳細は、裏面を参照してください。

保育 4ヶ月から未就学までのお子さんをお預かりします(定員6人、申込順、※保育については、9月1日(木)締切)

問合せ 板橋区役所男女社会参画課男女平等推進係



長谷川町子

～戦後70年女・子どもの生活史～

樋口恵子 Higuchi Keiko

本年は「サザエさん」(長谷川町子著)にとっても、板橋区民にとっても、いや日本の戦後史にとっても記念すべき年であった。「サザエさん」は、1946年に博多の「夕刊フクニチ」に登場、間もなく東京の「朝日新聞」に場を移し、戦後のマンガ界における代表的な作品となった。1994年まで30年近く、途中で休載をはさみながらも続いたロングセラーでもあった。ここから映画、アニメなどが生まれ、アニメーション(フジテレビ)はいまだに続いている。長谷川町子一家をモデルとしたNHK朝の連続ドラマ「マー姉ちゃん」としても登場した。その国民的漫画ともいべき「サザエさん」が誕生して今年70年。朝日新聞社は紙面のみならず全国展開で「サザエさん」の原画など多彩な展示を行った。

1年以上にわたり全国4か所で開催され、東京都でただ一か所展示場として選ばれたのが本学が位置する板橋区立美術館である。建物が優れている上に展示の方法が来館者に親しみやすく、評価の高い美術館である。高島平の展示会場にも出かけたが、かつての愛読者であるらしい高齢者から赤ちゃんをおぶった若い母親まで幅広い観客で賑わっていた。本講座の共催者である板橋区と今回のテーマ「サザエさん」が協働できたことを感謝している。

私は実はささやかながら「サザエさん」研究者の一人である。今から24年前、私は「サザエさんからいじわるばあさんへ」(ドメス出版)を刊行したが、今回のサザエさん70周年で、朝日新聞出版から文庫版で再版された。「サザエさん」も「いじわるばあさん」も、女・子どもの視点からみた戦後生活史・家族史として分析したもので、私としては再版は望外の喜びである。

今回の講座では「サザエさん」の家族関係についてジェンダー的分析を紹介した。広範な国民的人気を獲得し長期間連載された「サザエさん」。保守層の男性を含めて幅広く国民的人気を集めた秘密の1つは、一見、伝統的な家族関係にあったのではないかと。少しずつ共働きが増えていく戦後にあって、サザエさんの磯野家は50歳前後の母と20

代後半のサザエさんが終始一専業主婦で通している。サザエさんはほんの2回ほど「パート」と称して働きに出ているが、それは金満家の家の家事手伝いであった。

何よりも人々を安心させたのは、サザエさん一家が三世代7人同居、それも一家7人が常に同じ食卓を囲み、トイレも浴室も同じ、という昔ながらの日本的同居スタイルである。昔の日本の家庭では、夕食後いろりを囲んで夜なべをした。サザエさんの家では、父と、娘婿であるフグ田さんといっしょにテレビを観る。お茶を入れるサザエさん。その後流行っていく2世帯住宅のとり澄ました様子など少しもない。

しかし、別の側面から見ると、この磯野家の家族構成は当時はもちろん、現在でさえ少数派であり、一般の常識の真逆を行く女系家族である。

連載出発当時女性の平均初婚年齢は23歳、結婚は女性にとって「嫁入り」「嫁に行く」と言われ、夫の姓を名乗り、まずは夫の家族とともに住む。戦後、憲法に則って改正されたというものの明治民法に記された「妻ハ婚姻ニ依リテ夫ノ家ニ入ル」は現在に至るまで女性に圧力となって続く男系中心の家父長制である。サザエさんは、その「嫁」ではなかった。既婚ではあるが「嫁入り」はしていなかった。住む家は、娘時代から住み慣れた実家、近隣も顔なじみ。「嫁入り」した同世代の女性が、地域から孤立し、いわゆる「近所姑」たちから嫁としての一挙手一投足を勤務評定されるのとは大違いである。

漫画の主人公に、勤厳実直は似合わない。サザエさんは、粗忽ものであり、いささか行儀も悪く、天衣無縫の行動を楽しんでいる。おやつを奪った弟のカツオくんをハエたたきを振り上げて追い回す。近所隣のつき合いでは、母親をさし置いて自分が呼びかける。こんな「嫁」は今も珍しいだろう。この28年連載のうち、サザエさんの夫の実家(フグ田家)が登場したのはなんとわずか4日間。連載当時はもちろん、今も、ここまで「嫁役割」から解放された既婚女性は少ないのではないかと。一見平凡に見えるサザエさんだが、行動は天衣無縫であり、社会的にも家庭的にも男性の専横を許さない。お父さんの姿は造形的にも母のおフネさんより小さく画かれている。

それどころか、サザエさんはメディアで世界的フェミニズム第2波への風当たりが強かった1971(昭和46)年1月4日付(朝日新聞)で、無法なやくざに一歩も引かぬ「ウーマンリブ御一行様」の一員として和服で登場している。「サザエさん」を読み直してみると、フェミニストとしてのサザエさんの半面が生き生きと立ち上がってくる。

吉屋信子

～『花物語』と女たちの共同体～

伊藤節 Itoh Setsu

いわゆる“正統”と呼ばれる文学史にも載らない少女小説の作家が、なぜ時代を切り開いた女たちの1人として取り上げられるのか、不思議に思われるかもしれない。だが大正から昭和にかけて吉屋信子(1896〈明治29〉～1973〈昭和48〉)ほど広く読者を持ち、女性たちに大きな影響をもたらした人はいないことを考えれば合点もいく。時代と人物が運命的な出会いをしたともいべき吉屋信子。その人物、時代環境、作品の意味を概観してみよう。

吉屋が誕生したのは、明治近代の最初の意識的な職業作家樋口一葉が24歳で没した年である。公務員家庭の8人兄弟の紅一点。家事も裁縫も嫌いで本ばかり読んでいた不器用な文学少女は、男尊女卑の家庭の中で生きづらさを感じながら育った。14歳(1910)で『少女界』の懸賞小説に入選し、作家になろうと決意。1916年(大正15年)に『少女画報』に「花物語」を持ち込んで連載され、大変な評判を呼びたちまち人気作家となる。いわゆる大正の大事件とまで称される出来事であった。

この吉屋を取り巻く時代環境はどのようなものであったのだろうか。日本は明治維新以来、欧米諸国に追いつき、追い越せと近代化を推し進めようとしていた。欧米をモデルに封建主義から資本主義社会への転換を図り、富国強兵政策のもとに政治、教育、文化の仕組みを立て直そうと躍起になっていた時代であった。欧米への劣等感を克服することになった日清戦争、日本のアジア諸国への支配権を振う第一歩となった日露戦争。こうした軍国主義のもとで、よき国民を生み育てる女の役割が見直され、女子教育の必要性が生じてきた。良妻賢母育成を目的に1899年、高等女学校令が公布され、その後全国につぎつぎと女学校が設立される。

更によき国民を育てるとい学校教育を家庭でも補填するという意味で、少年向け雑誌が出版され、やがてそこから少女向け雑誌が分離し、少女雑誌が続々と誕生する。「花物語」が最初に掲載される『少女画報』という

雑誌名に見られるように、これらの雑誌すべてに「少女」がつくことは特筆すべきことである。幼女でも女でもない、この時期に誕生した「少女」という言葉は、良妻賢母への修養という雑誌の使命から逸れ、若い女性の心と身体を、自由へと羽ばたかせることになった。少女雑誌や吉屋信子という作家は、婦徳を説く女学校がはらんだ鬼子ともいべきものであった。

“少女時代”という特別な“時”を生みだそうとする動きが女学校の中に生まれ、同世代の若い女性の共同体が形成される。読者投稿欄を設け、少女たちを読み、書き、思考することへといざなった少女雑誌がこれを強力で後押ししたのである。1910-20年代は少女雑誌の全盛期であり、吉屋信子はここから生み出された少女文化の最大のスターであった。「女学生」、「少女」という読者の出現、出版文化の普及、吉屋という天才的書き手という様々なファクターが偶然というより必然的にここで重なったのである。少女雑誌の文化は、少女たちの押さえ込まれていた思いを解放していった。

さて肝心の「花物語」とはどのようなものだろう。一篇一篇を花に託して綴られていく「花物語」の最初の7編は、初夏の夕方、洋館の一室に集まった7人少女たち一人一人が過去の思い出を語り、皆がそれに深く“共感”し合うというものである。すぐ終わるつもりが、その爆発的人气で足掛け9年も続き、女学校を舞台に年齢差のある少女間の憧れにも近い、遂げられない恋を描いたものなど全52編が最終的な『花物語』を構成している。その特徴とはズバリ男を介しない物語だということである。少女が少女と出会い、慕い、励まし合い、別れる。いわゆるラブロマンスに見られるような“女を愛の対象物として扱う男”は登場しない。徹頭徹尾、女が主人公。女同士が助け合い、女が肩入れする物語である。感傷過多といわれることもあるが、家制度によって生涯にわたり男性から土足で踏み込まれるのを運命づけられていた女性にとって、この少女小説は、現実逃避とは違う夢、すなわち今とは違う世界を持てるという夢を抱くことで、現実の辛さの中で強く生きていく力を与えてくれるものだった。この時代、多くの女性がこうした少女文化に育まれ、女性解放の思想にも目覚めていったことは不思議ではない。

ガブリエル・シャネル

～実在のガルソンヌ～

能澤 慧子 Nohzawa Keiko

1. ガルソンヌの時代

19世紀末から20世紀初頭、ファッションナブルな女性たちが身に着けていたのは脚を隠す長いスカート、女性らしさと上流の象徴としての細いウエスト、ブルジョワ社会の美意識を表現する豊かな装飾であった。しかし、1906年、パリ・ファッション界には幾人もの革新的デザイナーの登場により、これらの特徴を全く無視した、直線的シルエットのシンプルなデザインが登場し、一つの方向性が生まれた。

この方向を明確にし、社会に定着させたのが第一次世界大戦である。戦時中、戦場に赴いた男性に代わって、銃後の社会の機能を支え、維持した女性たちは生活様式を一変させただけでなく、男女平等の意識を強めていった。戦後の1922年に出版された小説『ラ・ガルソンヌ (*La garçonne*)』(ヴィクトール・マグリット著)に描写された、経済・精神的自立と自由恋愛を実践する女性像は熱狂的に支持され、その表題、「少年のような女性」を意味する著者による造語「ガルソンヌ」は流行語となった。

美意識を超えた女性たちの強い自立の意識、家に従属する性と従来の女性らしさの否定の姿勢は、ボーイッシュな、あるいは性を未だ明らかにしない少女風の外見を生み出し、ショート・ヘア、ショート・スカート、ロー・ウエストが流行した。

2. ガブリエル・シャネル その人生

こうしたガルソンヌのファッションを先導したのがガブリエル・ボヌール・シャネル (Gabriel Bonheur Chanel 1883-1971)、通称ココ・シャネル (Coco Chanel) である。第一次世界大戦中の1916年に発表した伸縮性に富んだウール・ジャージィのドレスは、まさに行動する女性たち、ガルソンヌの求める物理的機能性と価値観に合致するものであり、彼女のデザイナーとしての名声を確立した。

フランス西部のオーヴェルニュ地方で孤児同然の境遇に生まれ、修道院の孤児院で養育されたシャネルは、やがて富裕階級の男性、E. バルサンの愛人となる。しかしその立場に飽き足らず、帽子店を開業した。優れた感性与企業家としての才能、そして何よりも強い独立心によって、バルサン、次いでA. カペルの援助から自立し、事業を拡大していった。

シャネルはしばしば恋多き女性と言われる。バルサンの次に彼女が出会ったA. カペルは彼女を理解したが、不慮の事故で早世した。ウェストミンスター公爵との出会と別れの後に、彼女は多くの芸術家たちとの恋愛を重ねる。20世紀初頭のパリの演劇、絵画、音楽など多方面に影響を与えたバレエ団「バレエ・リュス」の主宰者ディアギレフ、画家のダリ、風刺画家でファッション挿絵画家のイリーブなど、彼女の交際相手の名は枚挙にいとまがない。これらの男性との関係の経験から、シャネルは多くを学び、ファッション・デザインに活かして行く。そして常に彼らを支援し、協力した。

愛されることを待つよりも、自ら愛する彼女の姿勢の中に、ガルソンヌの姿を見ることができよう。

3. シャネルのスーツ

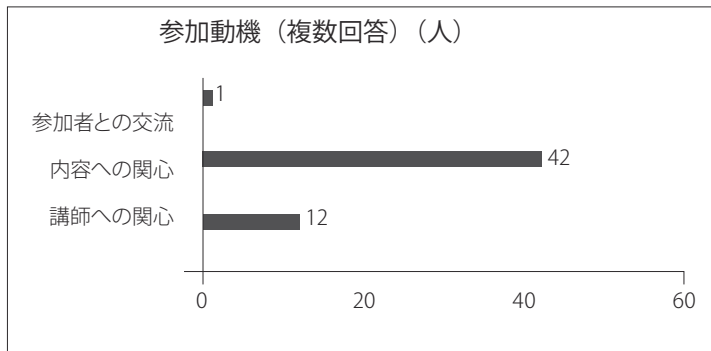
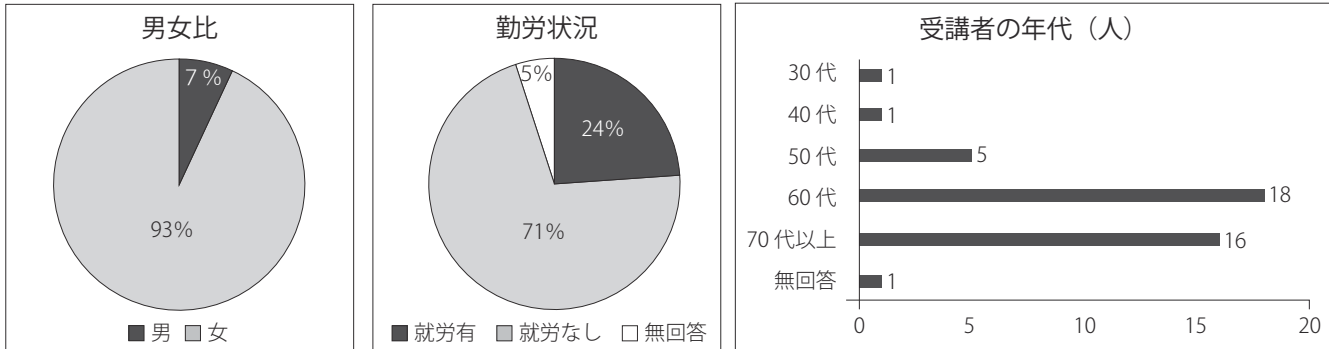
シャネルは着易さをファッション・デザインのなかで最重要な要素として捉えた、最初のデザイナーと言えよう。その彼女が常に関心を寄せたのがスーツ (共布で仕立てた上着とズボンの一そろい) である。元来、男性固有の服装であったスーツは、19世紀後期に少しずつ増えていった働く女性の間導入された。当初は、スカート以外はほとんど男性の上着をそっくりまねた、いわば男勝り風の「テーラード・スーツ」であった。しかし同時に上・中流階級の旅行やスポーツ用として、さらに世紀末には一層洗練され、上流社会の新しい趣味の洒落た外出着として普及していた。

シャネルはその1913年から88歳の死の時点までの全キャリアを通して、男性の服装の持つ合理性を総合したスーツ・スタイルをデザインの基本としながら、柔らかな風合いと多様な色彩を持つツイードを使い、男性の物真似ではない、女性固有のスーツ、いわゆる「シャネル・スーツ」を仕上げた。世界中のキャリア・ウーマン、プリンセス、ファースト・レディ、映画スターらが競うように身に着けたが、それが誰よりも似合ったのは、仕事を愛し、愛されるよりも人を愛することを求め続けた実在のガルソンヌ、ガブリエル・シャネル自身だったと言えよう。

あい I カレッジ 全5回 受講者アンケート集計

受講者：55人 回答数：42人 回収率：76%

過去3年間の受講者数は、若干ではあるが増加傾向にある（平成26年度28人、27年度36人、28年度55人）。参加の動機は、講座内容への関心が一番多く、次に講師への関心であった。以下にアンケート結果をまとめる。



感想

- ・人物の生の行き方を知ることができた。
- ・今は女性の時代。ここまで切り開いてきた諸先輩の地道な努力と社会の変遷を振り返れました。
- ・紹介されたり参考になった本を読みたい。
- ・時代の、メディアの伝える価値観から自由になる。孫の生き方にも関心を持つ。
- ・超高齢化社会を迎える知恵と勇気・やる気は不可欠。
- ・小説の舞台となった場所に行ってみたい、家政大学の展覧会に行く、区立美術館に行く、先生方の本を読む。
- ・女性が幸せにならなければ男性も幸せになれない。またその逆もしかり。
- ・まだ具体的には頭に浮かびませんが、これからの人生を積極的に生きてみようと思った。
- ・女性自身の意識改革がなければ女性の社会参画はない。若い女性の中にも専業主婦志向が多いというが、社会を知らぬ女性は危ないと思うので、この講座のようなチャンスを多くいただきたい。
- ・以前女性史講座を受講してとても楽しかったので今回も楽しみにしていました。
- ・女性の生き方のとらえ方&見方を学べた。もっといろいろな女性の生き方が知りたいと思った。

※自治体によるアンケート集計表より一部抜粋

第1回 樋口恵子 所長



第3回 伊藤節 副所長



第5回 能澤慧子 教授



北区 さんかく大学 (全5回)

「結婚の理想と現実～イマドキの結婚事情～」

【東京都北区・東京家政大学共催事業】

期 間：平成28年10月8日～11月5日 土曜日 14：00～16：00 定員40人

講座名：結婚と「女の幸せ」の現在～夫婦間の溝はなぜ埋まらない?～ / 男性学の視点からみた恋愛と結婚 / 専業主婦の揺らぎとゆくえ / 婚活時代から見える結婚事業～お見合いの現場から～ / まとめ
の会～意見交換～

【講師】

水無田気流

(國学院大学教授)

田中俊之

(武蔵大学助教)

石崎裕子

(跡見学園女子大学准教授)

板本洋子

(NPO 法人全国地域結婚
支援センター代表)

笹川あゆみ

(北区男女共同参画
センターアドバイザー)

東京都北区・東京家政大学連催事業

2016年度 北区さんかく大学 —連続5回講座—

結婚の理想と現実

～イマドキの結婚事情～

1970年代頃の日本は、ほとんどの人が結婚をしていた時代といわれています。しかし、現在では、生涯未婚率も高く、今後、その比率がさらに高くなるものと推測されています。今年のさんかく大学は、「なぜ結婚が減っているのか」、「なぜ結婚することのハードルが高くなっているのか」などについて、様々な視点から学び、これからの結婚の展望について考えます。

参加費 無料

第1回	10/8(土) 午後2:00～4:00	結婚と「女の幸せ」の現在 ～夫婦間の溝はなぜ埋まらない?～	國学院大学経済学部教授 水無田気流 さん
第2回	10/15(土) 午後2:00～4:00	男性学の視点からみた恋愛と結婚	武蔵大学社会学部助教 田中俊之 さん
第3回	10/22(土) 午後2:00～4:00	専業主婦の揺らぎとゆくえ	跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部准教授 石崎裕子 さん
第4回	10/29(土) 午後2:00～4:00	婚活時代から見える結婚事情 ～お見合いの現場から～	NPO 法人全国地域結婚支援 センター代表 板本洋子 さん
第5回	11/5(土) 午後2:00～4:00	まとめの会 ～意見交換～	北区男女共同参画センターアドバイザー (東京家政大学非常勤講師) 笹川あゆみ さん

受付：9月13日(火) 午前9時から電話・FAX・Eメールにて受付(裏面参照)
会場：男女共同参画センター 多目的室 A/B 北とびあ5階
定員：40名(申込先着順)
対象：関心のある方、原則として5回全回出席できる方

申込・問合せ先
東京都北区男女共同参画センター「スペースゆう」
〒114-8503 北区王子1-11-1 北とびあ5階(月曜・祝日・9/20・10/11休館)
☎ 03(3913)0161 FAX 03(3913)0081
Eメール danjo-c@city.kita.lg.jp

保 育 1歳～就学前まで、定員あり
ご希望の方は裏面参照
申込締切9月27日(火)

バスロータリー
三軒茶屋駅 三軒茶屋駅(北口) 三軒茶屋駅(南口)
みぎはな駅 北とびあ5階
りそな銀行
王子駅 王子駅(北口) 王子駅(南口)
三軒茶屋駅(北口) 三軒茶屋駅(南口)
三軒茶屋駅(北口) 三軒茶屋駅(南口)
三軒茶屋駅(北口) 三軒茶屋駅(南口)

●東京線東武東上線王子駅北口徒歩5分
●東京メトロ有楽町線王子駅南口徒歩5分

受講者アンケートと

学生ボランティアの声から

野口麻美 Noguchi Asami
(女性未来研究所 事務局)



本学女性未来研究所と北区との共催事業「さんかく大学」は3年目を迎えた。今年度は「結婚の理想と現実～イマドキの結婚事情～」をテーマに開催し、当研究所副所長・英語コミュニケーション学科伊藤節教授のゼミ生、7名が有償ボランティアとして講座に参加した。

昨今、生涯未婚率が高くなり、今後もその比率がさらに高くなると言われている。女性はなぜ結婚しないのか、結婚をすることへのハードルとは…。

世代間を超え「女の幸せ」について様々な視点から考える時間となった。学生にとっては、自身の未来像を描くヒントにもなったことであろう。

参加した学生の感想を一部抜粋し、以下に紹介する。

【第1回】

- ・女子大生として聞いたが、こんなにわかりやすくストレートな話は初めてでした。日本の政界は女性に対して求めすぎていると思いますし、その前に男性の働き方を見直すべきでは？と感じました。
- ・今回の講義で深く考えた気がします。私たちの世代にはより重くかかってくる問題であるので、これからは自分でも、もっと考えていきたいと感じました。

【第2回】

- ・恋愛と結婚というと、どうしても個人の問題と考えていましたが、社会全体の問題であるとわかりました。社会のいろいろな原因が、現在の問題へと続いているんだと感じました。データから現在と過去の結婚に対する考えや行動が全く異なるとわかりました。
- ・男性学の視点からということでしたので、男性目線的なところが多いのかと思ったのですが、女である私もとても楽しく聞かせていただきました。イクメンというとポジティブなイメージしか湧いてこなかったのですが、様々な問題がのこっているということをはじめて知ることができました。

- ・これから私達に深くかかわる問題であるということで、話も興味深かったです。

【第3回】

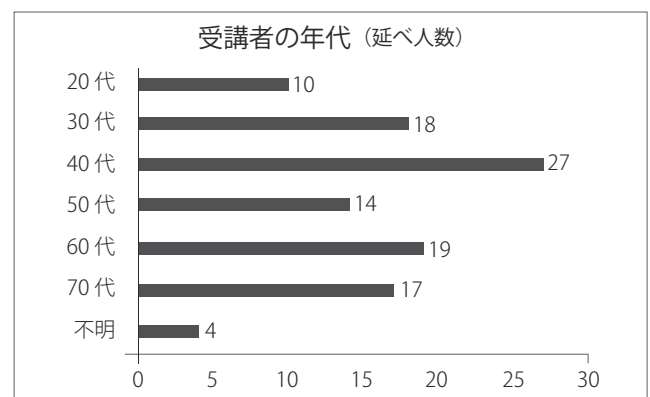
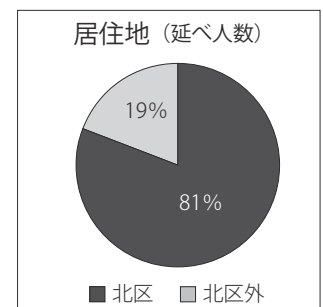
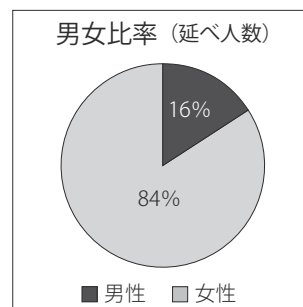
- ・専業主婦といっても働き続ける女性ではなく、趣味やおしゃれをしたいと思う女性が多くなっていったのを知りました。しかし、専業主婦になれる人が少なくなっているし、生活が成り立たなくなっているのは私自身も感じます。今の時代、女性も社会に出て働き続けることが願われていると思いました。

【第4回】

- ・国が婚活を23億円もかけて支援しているなんて知りませんでした。結婚をするにあたり、出会う場面やお付き合いをする場面が面倒になっている若者がいる。同じ若者として驚きでした。

【第5回】

- ・参加者の結婚についての考えを聞くことができ参加して良かった。



群馬県 とらいあんぐるん 大学連携講座 (全4回)

「スポーツと健康から、男女が共に暮らしやすい社会を考える」

【群馬県ぐんま男女共同参画センター・東京家政大学共催事業】

期 間：2016年11月2日～12月18日、13：30～15：30(第1回のみ 18：30～20：30) 定員70人

講座名：鎬木毅が『山と健康』を語る / 神山雄一郎が『健康と体育』を語る / 石田良恵が『生きる力』を語る / 樋口恵子が『相撲』『マラソン』を語る

【講師】

鎬木毅

(プロトレイルランナー)

神山雄一郎

(群馬県立女子大学名誉教授)

石田良恵

(日本ウェルネススポーツ大学
教授)

樋口恵子

(東京家政大学名誉教授
女性未来研究所長)

とらいあんぐるん 平成28年度大学連携講座〈全4回〉
ぐんま県民カレッジ連携講座

各回のみ
受講も可能

スポーツと健康から、 男女が共に暮らしやすい社会を考える

第1回 11/2(水) 18:30～20:30 鎬木毅が『山と健康』を語る 講師：鎬木毅さん (プロトレイルランナー) <small>※この回のみ夜間開催です。</small>	第3回 12/11(日) 13:30～15:30 石田良恵が『生きる力』を語る 講師：石田良恵さん(日本ウェルネススポーツ大学 教授)
第2回 11/20(日) 13:30～15:30 神山雄一郎が『健康と体育』を語る 講師：神山雄一郎さん (群馬県立女子大学名誉教授)	第4回 12/18(日) 13:30～15:30 樋口恵子が『相撲』『マラソン』を語る 講師：樋口恵子さん (東京家政大学 女性未来研究所長)

第26回
ぐんまマラソン
(H28年11月3日開催)
のゲストランナー
です!!

■会場：ぐんま男女共同参画センター (前橋市大手町 1-13-12)
■費用：無料
■定員：70人 (先着順)
■申し込み方法：電話、FAX、メール ※詳細は裏面をご覧ください。
TEL 027-224-2211 FAX 027-224-2214 Eメール sankakuse@pref.gunma.lg.jp
※手話通訳を希望する方や車椅子をご利用の方はその旨をご連絡ください。(手話通訳は各回2週間前までにお願います)
主催：東京家政大学 女性未来研究所・群馬県ぐんま男女共同参画センター

樋口恵子が「相撲」「マラソン」を語る

樋口恵子 Higuchi Keiko

2016年はリオデジャネイロ・オリンピックの年であり、次回2020年は東京開催とあって、かつてないほどスポーツへ関心が高まっている。もう一つ、スポーツ志向を高めているのは、人生100年社会を迎えて、これまたかつてないほど健康への関心が高まっている。

日本人の平均寿命(男子80.21、女子86.61)、健康寿命(男子71.19、女子74.21)は共に世界トップクラス(2013)であるものの、今後さらなる長寿化に向けて「健康寿命の延伸」こそは、国民の総意ともいえるテーマである。健康にとって必要な条件は、栄養(食生活)、運動(スポーツ)、社会参加の三点と言われ、健康社会の進展のためにもスポーツはさらに重要性をもたらすと思われる。

すでに本研究所は、北区との連携事業、第4回北区さんかく大学において、スポーツとジェンダーを取り上げ、新しい分野に視点を広げた。今回はぐんま男女共同参画センターとの連携によって、健康づくり、スポーツライフを楽しむ視点から講座を組み立てた。

私は、スポーツとジェンダーの視点から、年来の「得意種目」である「マラソン」と、オリンピック種目ではないが日本古来の競技であり、近来外国でも人気が高まる「相撲」を取り上げた。

1. マラソン

古代オリンピックは、その開催時には一時的に各地の戦乱を休止した事実から見ても平和の祭典である。しかし古代オリンピックにおいては、女性の競技参加はなく、観戦のための入場さえ許されなかった。

近代オリンピック(1896)以降は、最初少なかった女子種目が社会の進展とともに拡がり、オリンピックにおける女性の歴史は、社会全体の女性史と歩みを共にしている。

私が「マラソン」とかかわったのは、実は競技種目のマラソンではなく、1980年、小田原市の定年近い女教師が「マラソン」という名で、クラス全員が目標を定めて長距離走の指導を行った。その経緯を作文にした女子児童の作品が大手教科書会社に採択されることになったが、編集の過程でこの女教師は男性に転換されてしまった。男女のことがばづかいの違いから明らかに意図的に男性に変えた理由は、教科書会社側の説明によると「マラソンは伝統的に男性の

スポーツ」であったから。実はこの前年(1979)、東京国際マラソンが開催され、このときから女子の記録が公式に記録されている。1988年ロサンゼルス・オリンピックから女子マラソンが正式種目となることも決定されていたにもかかわらず、である。伝統に依存しやすく、未来に目を閉ざしやすい典型と言えるだろう。このときは、女性関係団体の応援により、女教師はめでたく女性復活を遂げた。

オリンピックごとに、日本の女性選手の参加数も増え、旗手、団長に登場、選手に既婚者、母親の姿も見かけるようになった。たしかに女子選手の見かけの参加は増えているが、これからの課題は、役員と指導者に女性を増やし、スポーツ界の方針決定に参画をすすめることである。日本社会全体と同じように、スポーツ界の女性の本格的参画は、これからの課題である。

今やオリンピック全体の華ともいえる女子マラソンが、少し前までは「女子には無理な長距離」と言われ、アムステルダム・オリンピック(1928)で800メートル銀メダルを獲得した人見絹枝は、称賛される反面、今だったらセクハラとしか言いようのない言葉を投げつけられた。当時人見絹枝は言った。「いくらでも罵れ!私はそれを甘んじて受ける。しかし私の後から生まれてくる若い女子選手や、日本女子競技会には指一つ触れさせない」

2. 相撲

幼いころからの相撲ファンで、観戦は大好きだが、ジェンダーという視点で見ると、「日本の伝統」の見本を見る思いである。強固な日本の伝統に立ち向かう力は、やはり国際的潮流という「黒船」であったことを再認識した。戦後70年、とくに1975年(国際女性年)以降の女性史に刻み付けておきたいと思う事実である。1975年国際女性年、大相撲が小学校高学年を対象とする「ちびっ子相撲」を行った。ある小学校代表に女子が選ばれた。相撲の土俵は女人禁制、最初は女の子の土俵参加の是非から出発して、表彰状授与の政府高官の女性も土俵に上げないという問題となった。私は、オリンピックに男女の種目別が認められるのは当然であり、男女を同じ土俵で相撲を取らせる必要はなく、するとすれば他の種目のように男女別であるべきと思う。しかし、政府を代表する存在に男女の別はない。「女と土俵」の問題で言えば、税制面で政府の優遇措置を受ける財団法人が、政府高官の参加を女性だからと言って拒否できるか、という政治的、行政的問題にもなってくる。

この問題は思いがけぬほど難航し、今も解決していない。日本の神事、日本の伝統という壁に阻まれている。何かというと日本人は「同じ土俵に乗って」と言うが、伝統的格技において日本相撲協会は、女を「同じ土俵」に今も乗せていないのだ。

とらいあんぐるん 大学連携講座 第4回受講者アンケート集計

第4回「相撲」「マラソン」を語る 講師：樋口恵子 受講者：50人 回収数：45人 回収率：90%

■感想

- ・自分の中学時代の技術家庭は技術だけだったというのを今分かりました。女性の家庭科はどんな授業だったのだろう。小学校時代手先が器用だった私は、人生が変わっていたかもしれません。(50代、男性)
- ・樋口先生がスポーツ「相撲・マラソン」について語られるとは、とても興味がありました。高齢ながら素晴らしい講話をお聞きする事が出来ました。日本で行われる4年後のオリンピックの後もずっと講話を続けてほしいと願っています。(60代、女性)
- ・平均寿命：男は劣っているのが女性に近づく様に！健康寿命：女性は平均寿命と健康寿命の差が大きい、運動を大切に要介護にならないように(60代、男性)
- ・まさに男女が共に暮らしやすい社会、時代への方向を考えさせられる講話だった。(60代、男性)
- ・題名のようにもう少しオリンピックについて話してほしいかった。年齢にもかかわらず意欲があり、元気をもらえた。(60代、女性)
- ・感情論ではなく論理的にお話される姿勢に大変心を打たれた。(50代、男性)
- ・語り口が軽妙で、知識、話題が豊富。内容は面白かったがスポーツとジェンダーについてももう少し踏み込んでほしい。(60代、女性)

※自治体によるアンケート集計表より一部抜粋

第4回 樋口恵子 所長



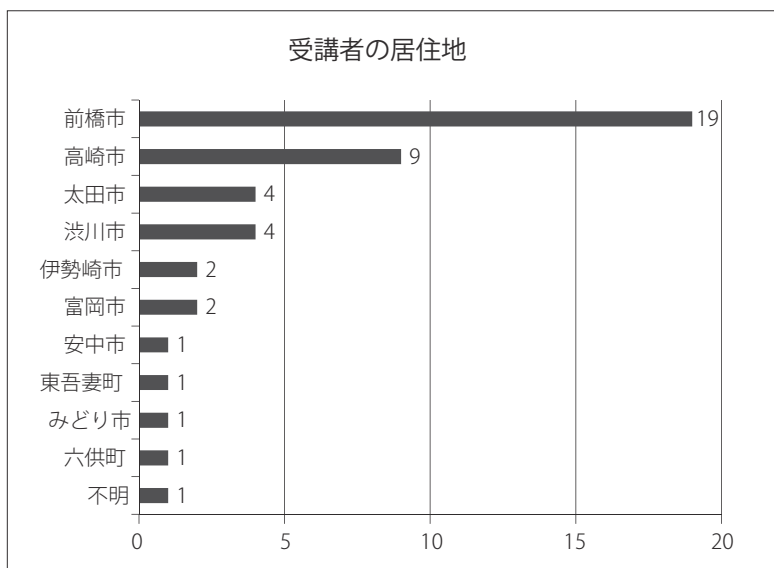
会場の様子



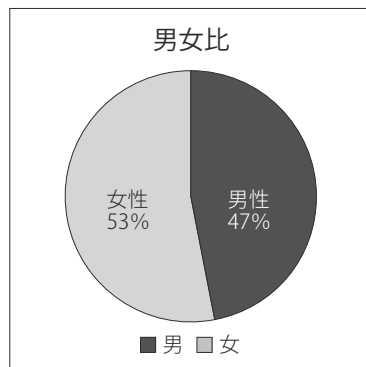
「上毛新聞」掲載の紙面



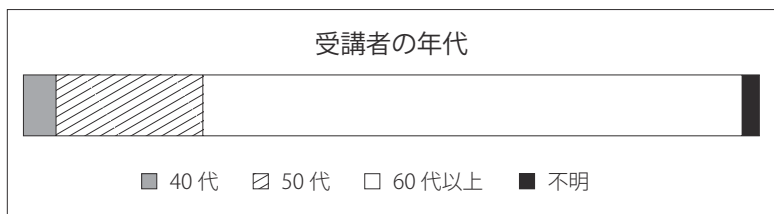
受講者の居住地



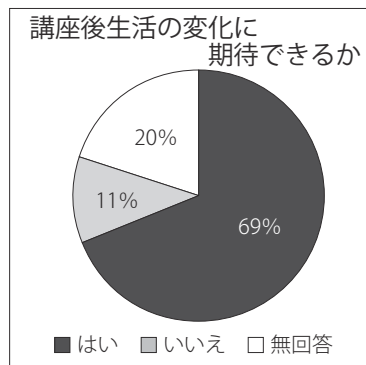
男女比



受講者の年代



講座後生活の変化に期待できるか



Chapter 4

学園祭

緑苑祭企画シンポジウム

「教えて先輩!学びたい、繋ぎたい、
打ち立てたい、私の人生」

日時：平成28年10月23日(日) 14:00～16:00

会場：東京家政大学 板橋キャンパス

120-2C 講義室 (120周年記念館2階)

第1部 インタビュー

岡戸絹枝(語り手) / 並木有希(聞き手)

第2部 座談会

樋口恵子 / 伊藤節 / 早瀬郁恵 / 田中恵美子 /
宮地孝宜(司会)

緑苑祭企画

教えて先輩！学びたい、繋ぎたい、打ち立てたい、私の人生

宮地孝宜 Miyachi Takayoshi 並木有希 Namiki Yuki

開催日：2016年10月23日(日) 13:00~16:00 定員：200人

会場：板橋キャンパス 120-2C 講義室(120周年記念館2階)

「女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランス」プロジェクトにて、大学卒業後の進路について卒業生アンケートを実施したところ、様々な場所で活躍して各自の人生を輝かせている先輩の声がたくさん寄せられました。これらのメッセージを元として、女性未来研究所緑苑祭企画シンポジウムが開催されました。

第1部 インタビュー

岡戸絹枝 (『つるとはな』編集長)

並木有希 [聞き手]

第2部 座談会

樋口恵子

伊藤節

早瀬郁恵

田中恵美子

宮地孝宜 [司会]

私の人生
打ち立てたい、
繋ぎたい、
学びたい、
教えて先輩！

平成 28 年度 女性未来研究所 学園祭企画シンポジウム
日時：平成 28 年 10 月 23 日(日)
13:00~16:00 (開場 12:30)
場所：東京家政大学 板橋キャンパス
120 周年記念館 2 階 120-2C 講義室

入場無料
申込不要
定員
200名
(先着順)

卒業後の人生について卒業生アンケートを実施したところ、様々な場所でいろいろな仕事をしながら、それぞれの人生を豊かに精一杯に生きている先輩たちからの声沢山寄せられました。この「先輩」たちからのメッセージをご紹介しますながら、日々の普通の生活の楽しさ、当たり前の人生の深さを学ぶ機会を持ちたいと思います。

「普通の人生・生活・生き方からこそ学ぶ」

▶第1部 インタビュー「人生の先輩に聞く」

岡戸 絹枝 氏 (ゲスト)「つるとはな」編集長
1955年埼玉生まれ。立教大学文学部卒業。81年マガジンハウス入社。『週刊平凡』『Hanako』『Olive』等の編集を経て98年から『Olive』編集長。02年『ku:nel』を創刊、編集長。10年マガジンハウス退社。14年『つるとはな』を創刊。

第1部では、『Olive』『ku:nel』の編集長として普通の生活の楽しさ美しさを教えてくださり、今は「人生の先輩に聞く」雑誌『つるとはな』を作っている岡戸絹枝さんに、雑誌を作るお仕事のこと、「普通」の素晴らしさや面白さ、今まで出会った先輩のことなど、伺いたいです。

▶第2部 座談会「教えてください、先輩！」

アンケートに寄せられた先輩からのメッセージです。本当にそうなの？この先、どうなるの？今何をやっておきたいの？第2部では、先輩からのメッセージを紹介しながら、後輩世代のリアルな質問を、樋口恵子所長をはじめ、女性未来研究所の先生方につぶつけてみたいと思います。会場から質問も大歓迎です！

過ぎたがままではいけない。
若い頃に理想としていたじぶんとは違った生活をしているが、それはそれで幸せ。
育児は大変ですが子供は可愛いです。
次は何をしようか、私自身もまだ考え中です。

交通アクセス
◆JR 埼京線「十条駅」下車徒歩5分
◆都営三田線「新板橋駅」下車徒歩12分
◆JR 王子駅より国際商業バス「板橋駅」行き8分
バス停「区境」下車徒歩1分
※お車での来校はお控え下さい。

東京家政大学 女性未来研究所
The Institute for the Advancement of Women
東京家政大学女性未来研究所は、建学の精神である「自主自律」の道を歩み、生活伝承である「愛憎・勤勉・聡明」を実現できる女性を育成するとともに、グローバル時代によまされい、女性の社会貢献を追求することを目的として、2014年4月より当大学板橋キャンパスに設置されました。初代所長として樋口恵子名譽教授が就任いたしました。

企画・主催 / 東京家政大学 女性未来研究所
〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1
☎ 03-3961-5305 ✉ josei-mirai@tokyo-kasei.ac.jp
Designed by Tokyo Kasei Hulp

第一部「人生の先輩に聞く」岡戸絹枝氏インタビュー

第一部は「人生の先輩に聞く」と題し、インタビュー企画を行いました。

1990年代にマガジンハウス社発行の雑誌『Olive』と『ku:nel』の編集長として一時代を築き、現在は「人生の先輩に聞く」というテーマの雑誌『つるとはな』を作られている岡戸絹枝氏にご登壇いただきました。本学准教授並木有希が聞き手となり、雑誌を作るという仕事のことと、その中で出会われた先輩達の素晴らしさやお話の面白さについて伺いました。

まずは、「人生の先輩に聞く」という印象的なフレーズができたきっかけとして、岡戸氏にとっての先輩とはどんな存在なのか、女性の人生のいろいろなあり方を伺いました。『つるとはな』の中に登場する取材対象のお年寄りのアクティブな人生であったり、岡戸氏の実際の先輩から教わったことであったり、また、フィクションの中から見る先人の人生であったりと、様々な場面での、「先輩との出会い」についてお話いただきました。また、取材対象はどのように見つけ出して交渉するのか、今までの取材の中でどのような出会いがあったのか、以前作られていた雑誌での写真・デザインにあるこだわりなど、雑誌を作るという仕事と、その制作過程の裏話を伺いました。

さらにお話は進み、「理想の先輩」、つまり、このようにありたい、あって欲しいと思う高齢者、若者、生活のイメージはあるのかという質問をしました。女性誌の世界において、従来の美や価値観を超えて普通の生活の美しさ楽しさを提案され、日本の少女文化に大きな影響を与えたと言っても過言ではない岡戸氏の仕事全てに通底する姿勢に近づけるよう、写真を見ながらあれこれとお話を伺いました。雑誌を作っていた側と読者が共に老いていく時代に、自分の一番読みたい記事を発想として、時代にあった新しい高齢者像を打ち出していこうという意味と、そのときに当然従来の高齢者像とは違ってくることがよくわかり、興味深いものでした。

若い学生達は、仕事に対する姿勢と好奇心を持つことの大切さを感じ取ったようでした。そして、世代が同じものにとってはただ懐かしくそして元気の出る、先輩に励まされて過ごすゆったりとした時間を楽しむことができました。

第2部 座談会

「教えて先輩！

学びたい、繋ぎたい、打ち立てたい、私の人生」

第2部は第1部「人生の先輩に聞く」の貴重なお話を受け、本研究プロジェクトが実施した「卒業生の大学時代の学習とキャリア・ライフコースに関する調査」において諸先輩から在学生にいただいたアドバイスを基に座談会を行いました。

本座談会は以下の3つのテーマ毎に、上記アンケートの自由記述(抜粋)、休憩時間中にいただいた会場の方からの質問をそれぞれ紹介し、それらを受けて、登壇者の先生方からお一人ずつコメントをいただきました。なお、「先輩」からいただいたアンケートの自由記述は、「後輩」である人文学部教育福祉学科4年生の佐々木香奈さんに朗読いただきました。

【テーマ】

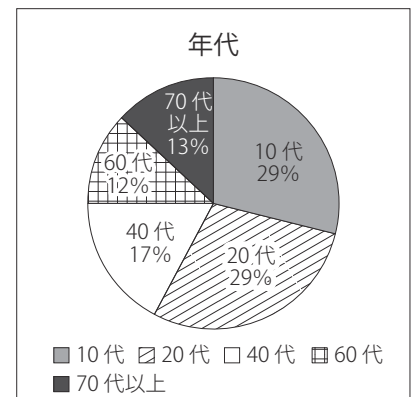
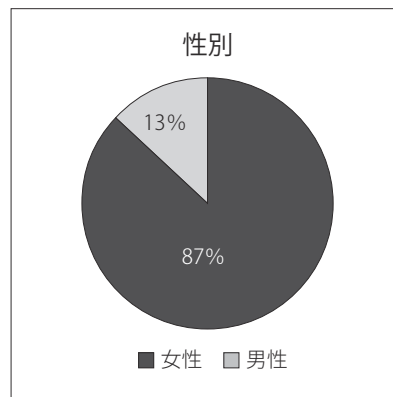
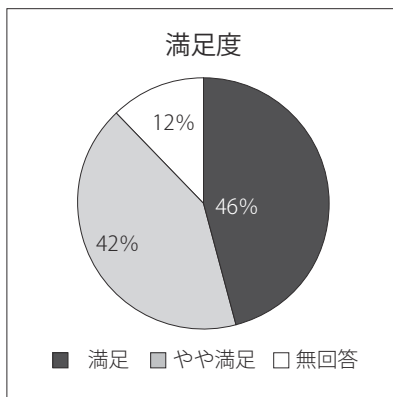
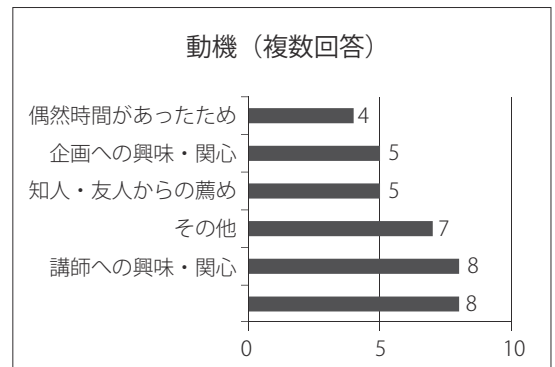
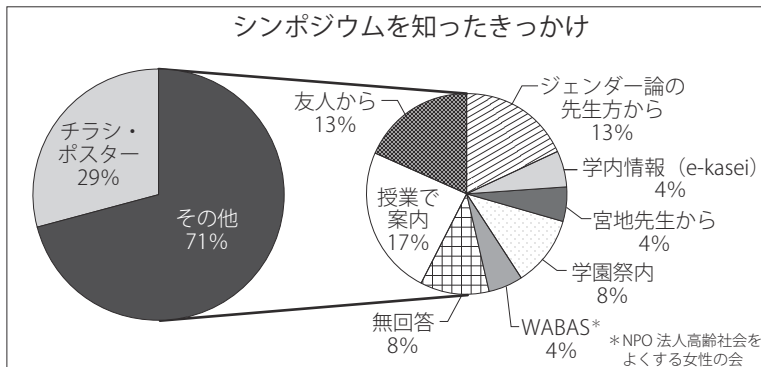
- ①大学生活(学習、資格、課外活動、ボランティア活動)について
- ②仕事、キャリアについて
- ③家庭生活、家族間の役割などについて

次頁の「第2部の意見・感想」からも見て取れますように、アンケート調査にお書きいただいた先輩からのアドバイスや樋口先生をはじめとした登壇者の先生方からのお言葉は、とても暖かく、かつ、自身を奮い立たせるメッセージとして学生や参加いただいた皆様に届きました。

本座談会は、世代間交流の意義を実感する貴重な機会であり、参加いただいたすべての皆様のこれからの人生の道標のひとつとなり得る貴重な時間、空間となりました。

(本シンポジウムの詳細については、本報告書94～105ページを参照ください。)

参加者アンケートの結果と感想



第1部の感想

- ・雑誌をつくるきっかけや、なぜインタビューしたのかなど自分が経験したことのないお話を聞いて将来の自分に役立つきっかけを学ばせていただきました。先輩から聞くお話は面白いですし、タメになりました！（10代、家政大生）
- ・女性で編集長として長く勤めていらっしゃるの、かっこいいと思いました。私は造形表現学科で将来何かを「つくる」仕事がしたいと考えていて、岡戸さんの仕事に対する思いや、自分をしっかり持った面など、女性としても憧れる部分がたくさんあって、私も岡戸さんのような女性になりたいと思いました。（10代、家政大生）
- ・老いの形や家族の形にもいろいろあるということが分かりました。普通の人の普通の生活をメインにしているので、今度雑誌を見てみたいと思いました。（10代、家政大生）
- ・会いたい人にインタビューしに行き、インタビューの相手も年齢層の幅が広く、個性あふれる人ばかりという印象でした。会いたい人には、できるなら会っておこうと思いました。（20代、女性）
- ・岡戸さんの生き方にパワーをもらいました。（40代、女性）



第2部の感想

- ・自分に自信がない人が今の若者は多いというのは、確かにそうだなと思いました。私自身も全く自信がないので、心に刺さりました。（10代、家政大生）
- ・先輩方のアドバイスに耳を傾け、大学生活を過ごしていきたいと思いました。これだけは誰にも負けないという何か強みを大学四年間で見つけていこうと思いました。（10代、家政大生）
- ・経験するのが大切であることは、分かっていたけど、どうしても就活のためと考えてしまう所がありました。自分のためと考えてそれが就活のためにつなげてもいいなと思いました。（20代、家政大生）
- ・「あきらめない」という事が印象に残りました。出来る時に、出来る事とやりたい事をするという考えにエールをいただいた気持ちがしました。（40代、女性）
- ・もっと若い時にこんな時間があつたら良かったなと思います。とても若い時に返ったような気持ちになり凄く刺激を受けました。（70代、女性）



第1部 インタビュー (1)



第1部 インタビュー (2)



第1部 インタビュー (3)



第1部 インタビュー (4)



会場の様子 (1)



会場の様子 (2)



第2部 座談会 (1)



第2部 座談会 (2)



第2部 座談会 (3)



集合写真

Chapter 5

女性未来研究所

シンポジウム

1 第2回女性未来研究所シンポジウム

「健康はあなたの幸せ、社会の財産～男女の違いも考える～」

日 時：平成28年4月23日(土) 13:30～16:00

会 場：東京家政大学 狭山キャンパス AV 教室(2号館2階)

司 会：伊藤節

登壇者：村木厚子／三澤寿美／岩田力／今留忍／樋口恵子

2 第3回女性未来研究所シンポジウム&ワークショップ

(「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」公開シンポジウム)

日 時：平成28年6月19日(日) 13:30～17:30

会 場：新宿区立戸山シニア活動館(東京都新宿区)

司 会：伊藤節

調査結果報告：松岡洋子 基調講演：樋口恵子

登壇者：秋山正子／西上ありさ／猿渡進平

3 米国大使館・女性未来研究所共催シンポジウム

「人生100年時代、熱望される女性のリーダーシップ
～世代を超えて女性同士が助け合うために～」

日 時：平成29年1月26日(木) 19:00～20:30

会 場：アメリカンセンター Japan (東京都港区)

モデレーター：並木有希

登壇者：マルゴ・キャリントン／樋口恵子

4 女性未来フェスタ(公開研究報告会)

「～3年間の軌跡と未来への展望～」

日 時：平成29年3月9日(木) 13:00～16:00

会 場：東京家政大学 板橋キャンパス

120-2B 講義室(120周年記念館2階)

健康はあなたの幸せ、社会の財産 ～男女の違いも考える～

斎藤正子 Saito Masako 小櫃智子 Obitsu Tomoko

女性未来研究所第2回シンポジウム「健康はあなたの幸せ、社会の財産—男女の違いも考える—」が狭山キャンパスにて開催されました。行政・看護師・医師・助産師の立場から「健康」をテーマに男女の違いも含めてお話しして頂き、いかに「健康で自分らしく生きる」ということが重要であるかを考える機会になりました。

【コーディネーター】

樋口恵子
(女性未来研究所長)

【登壇者】

村木厚子
(前厚生労働事務次官)

今留忍
(東京家政大学看護学部長)

岩田力
(東京家政大学子ども学部長)

三澤寿美
(東北福祉大学健康科学部
保健看護学科教授)

第2回 東京家政大学 女性未来研究所シンポジウム

健康は
あなたの
幸せ、
社会の
財産

— 男女の違いも考える —

戦後70年が経過し、日本の健康寿命は男性が71.11歳、女性が75.56歳、男女とも世界1位となりました。WHOでは単に寿命を延ばすのではなく、健康に長生きする「健康寿命」を重視しております。そこで女性、男性、多様なセクシュアリティの方々がお互いを理解し、生き生きと健康で長生きし続ける方法についてさまざまな視点から参加者の皆さんとともに一緒に考える機会を持ちたいと考え、企画致しました。

2016年 **4月23日** (土)
13:30~16:00 (開場 13:00)

東京家政大学狭山キャンパス AV教室 (2号館2階)
最寄り駅：西武池袋線「稲荷山公園駅」南口下車 徒歩3分
定員300名/申込不要・入場無料

登壇者

むらき あつこ 村木 厚子 前厚生労働事務次官	みさわ すみ 三澤 寿美 東北福祉大学 健康科学部 保健看護学科教授	いわた つとむ 岩田 力 東京家政大学 子ども学部長	いまとめ のぶ 今留 忍 東京家政大学 看護学部長	兼シンポジウム コーディネーター ひぐち けいこ 樋口 恵子 女性未来研究所長	総合司会 いとう せつ 伊藤 節 女性未来研究所副所長
-------------------------------	--	-------------------------------------	------------------------------------	---	--------------------------------------

I. 企画主旨

戦後70年が経過し、日本の健康寿命は男性が71.11歳、女性が75.56歳、男女とも健康寿命が1位となりました。WHOでは健康寿命を単に寿命を延ばすのではなく、健康に長生きすることを重視しております。

そこで女性、男性、多様なセクシュアリティの方々がお互いを理解し、生き生きと健康で長生きし続ける方法についてさまざまな視点から参加者の皆さんとともに一緒に考える機会をもちたいと考え企画致しました。

II. 参加者

このシンポジウムへの参加者は、地域住民、社会参加を考える女性の会、学生、教職員の皆様など150人余りの参加を頂きました。

III. 登壇者発表

前厚生労働省事務次官の村木厚子氏からは、「長寿と健康を考える」をテーマにお話頂きました。日本の少子高齢化の現状をわかりやすく示して頂きました。健康を守るための社会保障を構築していくにあたり、女性と高齢者の活躍が重要となります。一番良い健康づくりの方法は「生涯現役」と述べられました。

東北福祉大学健康科学看護学科教授の三澤寿美氏からは、子育てや災害時における性役割の現状を具体的にお話頂きました。一人一人が尊重され、セクシュアリティの枠組みを超えて、性の多様性にどのように向き合っていくかが大切であることをお話して頂きました。

本学の子ども学部の学部長でもあり、小児科医でもある岩田力氏からは、「健康の源は子どもである。健全な精神は健康な身体に宿る」ことや「病気、発達障害を持っている子どもを含めた子どもを育てる保育者の役割」についてお話頂きました。

また、本学の看護学部学部長でもあり、看護師の今留忍氏からは、看護の歴史と「自分らしく生きる」の要素である健康を専門職として支える看護師の役割や男性看護師、「原始、看護は男の仕事であった」についてお話頂きました。

IV. 全体シンポジウム・質疑応答

会場の参加者から「一億総活躍社会と言われていますが、医師や看護師の高度の専門職を身につけながらも社会から引きこもり、社会還元できていない方への卒業生へのフォローアップはありますか」と質問がありました。今留氏より、「現在、卒業生は出ていないのですが、今後は働いていない卒業生がいれば、社会貢献できる仕組み作りをしていきたいと思います」と回答されました。

また、会場の教職員から「母親の役割、女の役割という

ところで3人の子育てをしながら仕事を今日まで続けて来ました。女性はどんどん仕事をしなさい、子どもは産みなさいという政府の方向性の中で実際に今、子どもの貧困率の問題もありながら、母親は、女はどうしたらよいのか、学生に子育ての辛さを思うといっぱい産みなさいとは言いにくいところが心の奥底にある、そういった中での政府の方針や先生の私見を踏まえてお聞きしたいと思います。村木先生からは、「多分、政策はそのように聞こえるかもしれませんが、女性は子どもを産みなさい、女性は働きなさいと言う事ではなく、もし、そうだったら女性はパンクしてしまいますね。女性も男性も働いて、親が共に子育てできるようにというのが目指している姿だと思います。仕事をしていなくても一人の子育てはすごく大変です。全部、女性が背負い込んでいたらきっと投げ出すし、投げ出して当たり前だと思います。」と回答されました。

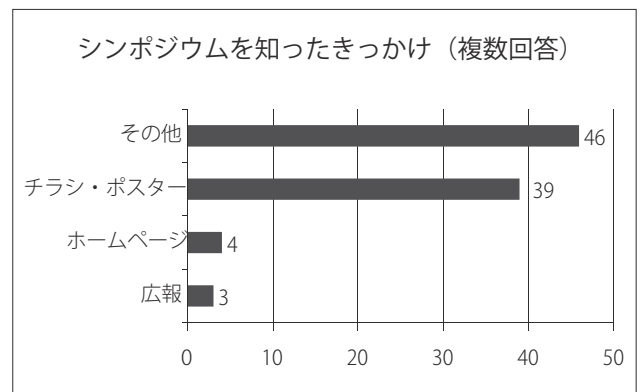
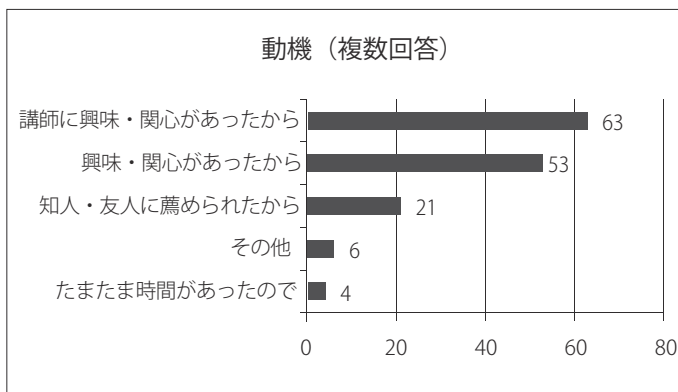
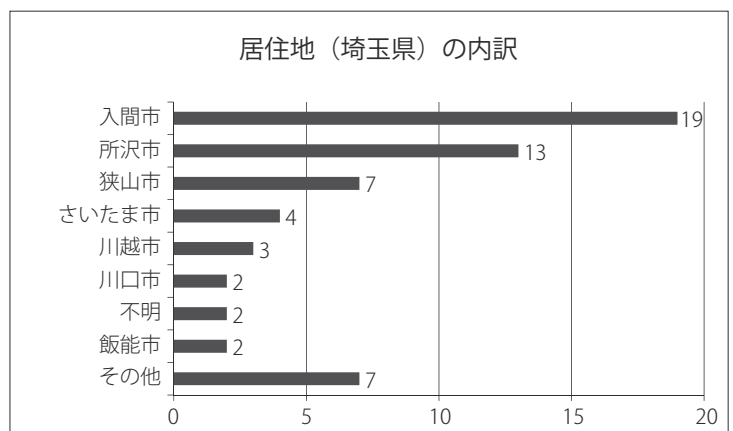
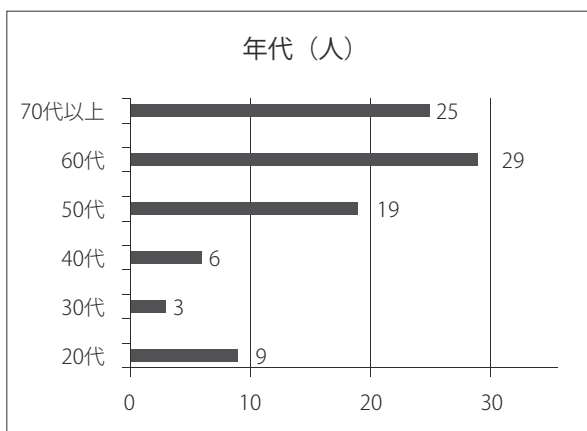
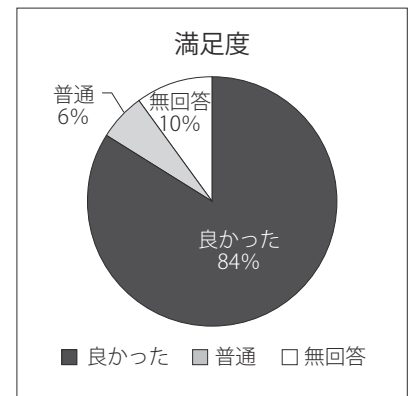
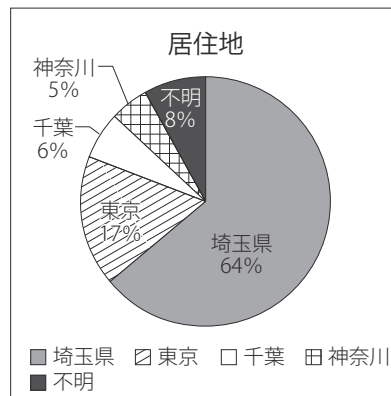
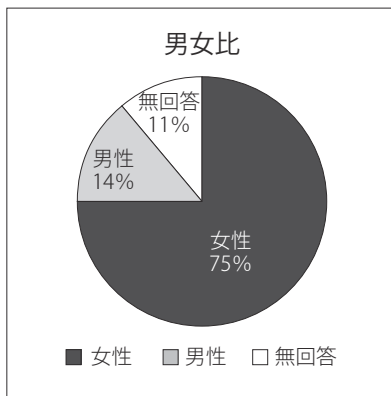
最後に、女性未来研究所の所長およびシンポジウムコーディネーターの樋口恵子氏から、今回の共通していることのひとつに「主人公」、それは「自分らしく」という言葉と同じだと思います。「健康の主人公はまずその人である。」ことです。その健康を守る役割を担うのは、行政的な公衆衛生部門でもあり、個々の医師や看護師でもありますが、自分の具合が悪いとか、自分の身体に配慮するのは少なくとも大人たるもの、まずは基本的に本人が気付いてくれないと困るのです。今後の超高齢化社会では、男女を問わず一人暮らし世帯の激増が見込まれます。食生活の自立の有無が人の最後の健康と幸福を左右することになりかねません。おそらく、地域で顔を合わせて「共に食べる」のカフェのような動きは、健康づくりの上でも評価されるようになるでしょう。健康な生活を支えるには、日常生活の人間関係が大切で、よく出かけて人に会う人ほど健康が保たれるという報告もあります。特に医療・介護の需要が増える高齢期の人々の健康が保持されるとしたら、それは個人の幸福でありばかりでなく、この世界一長寿社会全体の大きな資産となります。多様性を認め合うことを前提に、一人、一人が自分の健康に関心を持つ、他者の健康を気遣う、そんな社会に向けて歩み続けたいと存じますと締めくくられました。

V. まとめ

このシンポジウムから健康であることは「自分らしく生きること」、自分らしく生きることを尊重し合う一人一人の存在、自分らしく生きることを支える専門職の養成、自分らしく生きられる社会の構造の重要性を学ぶ機会になりました。最後になりましたが、このシンポジウムの開催にあたり、ご協力頂きました関係者の皆様へこころより感謝申し上げます。

第2回シンポジウム 参加者アンケート結果

アンケート回収92人





会場（狭山キャンパス）



村木厚子氏（1）



村木厚子氏（2）



今留 忍 看護学部長



岩田力 子ども学部長



樋口恵子 研究所長



三澤寿美氏（1）



三澤寿美氏（2）



シンポジウムの様子（1）



シンポジウムの様子（2）



シンポジウムの様子（3）



シンポジウムの様子（4）



シンポジウムの様子（5）



シンポジウムの様子（6）



集合写真

戸山ハイツ『未来の物語』を語ろう

松岡洋子 Matsuoka Yoko

2016年6月19日(日)「第3回 女性未来研究所シンポジウム&ワークショップ」が開催された。研究プロジェクトのひとつである「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト(『暮らしの保健室』との共同プロジェクト)」の公開シンポジウムとしての位置づけである。

【司会】

伊藤節

【登壇者】

秋山正子
(暮らしの保健室室長)

西上ありさ
(スタジオ・Lコミュニティ
デザイナー)

猿渡進平
(大牟田市中心地区地域包括
ケアセンター管理者)

【基調講演】

樋口恵子

【調査結果報告】

松岡洋子

第3回 東京家政大学 女性未来研究所 シンポジウム&ワークショップ
「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」シンポジウム



戸山ハイツ『未来の物語』を語ろう!

女性未来研究所は地域づくり・ひとづくりに貢献すべく、さまざまな側面で活動しています。今回は、戸山ハイツ* 住人の方とともに「暮らしの保健室」秋山正子室長とのコラボでスタートした「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」のご報告とともに、地域づくりのトップランナーたちを迎えて公開シンポジウムを開催いたします。2部のワークショップにもご参加ください。

*戸山ハイツ(都営住宅)は1960年代にできた「団地」です。高齢化率は52.2%。昨年度、住人の方との井戸端会議、全戸アンケート調査、訪問、ワークショップを経て、地域のニーズと資源を探りました。

平成 28年 6月 19日 (日)

開場 13:00~

第1部 シンポジウム 13:30~

第2部 ワークショップ 15:45~

[要申込]
定員 100名
先着順

(終了予定時刻 17:30)

無料
[受付開始]
5/10(火)
10:00~

会場/戸山シア活動館 1階多目的ホール (新宿区戸山2丁目27-2、戸山ハイツ27号棟となり)

第1部 シンポジウム

「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」

【司会】 伊藤 節 東京家政大学女性未来研究所 副所長(英語コミュニケーション学科教授)

シンポジスト



樋口 恵子 《基調講演》

東京家政大学女性未来研究所 所長

東京都生まれ。少子高齢化、介護、女性の生き方にメッセージを発信。最近の著書に『2050年超高齢社会のコミュニティ構想』岩波書店(共編著)、『人生100年時代への船出』ミネルヴァ書房、『女、一生の働き方』海電社、『大介護時代を生きる』中央法規。



秋山 正子 氏

暮らしの保健室 室長

秋田県生まれ。新宿区で20年以上にわたり訪問看護を実践。2011年戸山ハイツに「暮らしの保健室」をオープン。「その人の力を引き出すケア」は看護の領域を超えて、多くの人々に感銘と共感を与えている。著書に『在宅ケアの不思議な力』『在宅ケアのつながる力』医学書院。



西上 ありさ 氏

スタジオ・Lコミュニティデザイナー

1979年北海道生まれ。2005年より「建物を造るのではなく、コミュニティをデザインする」studio-L参画。住民参加による総合計画づくりや集落診断・支援、特産品開発、地域包括ケアの実践が主な仕事。共著書に『地域を変えるデザイン』英知出版、『コミュニティデザインの仕事』ブックエンド社。



猿渡 進平 氏

大牟田市中心地区地域包括ケアセンター所長

1980年福岡県生まれ。「認知症徘徊SOSネットワーク」で有名な大牟田市の白川病院医療ソーシャルワーカー。住人と一緒にNPO法人やさまざまな事業を立ち上げてきた。「地域を変えるには、地域を知る。住民とともに!」「人を支えるのは制度ではなく、人!」が信条。

調査結果報告

松岡 洋子 東京家政大学女性未来研究所 兼任研究員(教育福祉学科准教授)

1955年兵庫県生まれ。「住み慣れた地域でその人らしく最期まで」をテーマにデンマーク・日本の住まいとケアの研究をしている。本プロジェクトではリーダーを務める。著書に『デンマークの高齢者福祉と地域居住』『エイジング・イン・プレイスと高齢者住宅』新評論。

このプロジェクトは、高齢化率50%を超える戸山ハイツ(新宿区にある都営住宅団地、3400世帯、6000人)の状況を「日本の未来(2050年)」ととらえ、その解決策を住民の方とともに、学生とともに考え行動し広く日本へと発信していこう、というものである。

戸山ハイツ住人だけでなく、近隣の方、関東圏域の地域住民・ボランティア活動を行なう方、福祉専門職、住宅関連組織職員、研究者など、幅広い層から150名を超える方にご参加いただき、会場は熱気に包まれた。最後は70名を超えるワークショップによって、これからの行動への指針を得るシンポジウムとなった。

1. 目的と内容

このシンポジウムでは、プロジェクトとして2015年度に行った各種調査の結果を踏まえ、専門家の知見に学びながら、住民ワークショップによって解決への糸口を得ることを目的とした。

内容は、第1部シンポジウムと第2部ワークショップから成る。

<第1部 シンポジウム>

調査結果報告：松岡洋子

基調講演：樋口恵子

登壇者発表：西上ありさ氏、猿渡進平氏

ディスカッション：コーディネーター(秋山正子氏)

パネリスト(西上ありさ氏、猿渡進平氏)

第2部 ワークショップ

ファシリテーター：西上ありさ氏、猿渡進平氏

まず、2015年に行われた調査結果の報告を行ない、「一人暮らしと高齢化の不安」「関係・交流の希薄化」「孤立死・認知症」などの課題とともに、住民が「戸山ハイツが大好きでずっとここで住み続けたい」と希望していることを確認した。

樋口恵子所長の基調講演では「戸山ハイツは未来の日本であり、血縁がなくても『地域』を基盤に互いに関心を持ち合って、支え合う社会、誰一人置き去りにしない社会づくりの挑戦を、ここ戸山ハイツから日本に向けて発信していきましょう」との提言があり、秋山正子氏(共同研究組織『暮らしの保健室』室長)のコーディネートにより、「地域づくり」で活躍する若手二人によるディスカッションが行われた。猿渡進平氏(大牟田市中央地域包括支援センター長)、西上ありさ氏(スタジオ・L コミュニティ・デザイナー)の2人である(詳細は134ページ)。

このあと、ワークショップ参加希望者は8グループに分かれ、「地域で困っていること」「余っている資源」から「あったらいいな!事業」を考えるワークショップを猿渡氏、西上氏のファシリテーションで行った。学生も各グループでファシリテーターとして話し合いを盛り上げた。

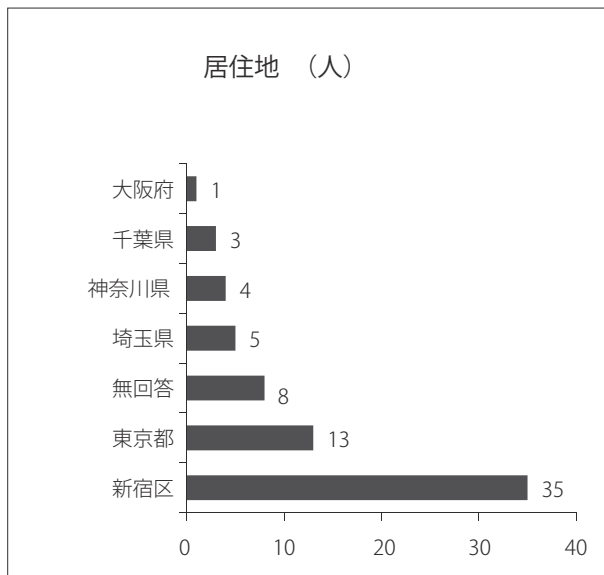
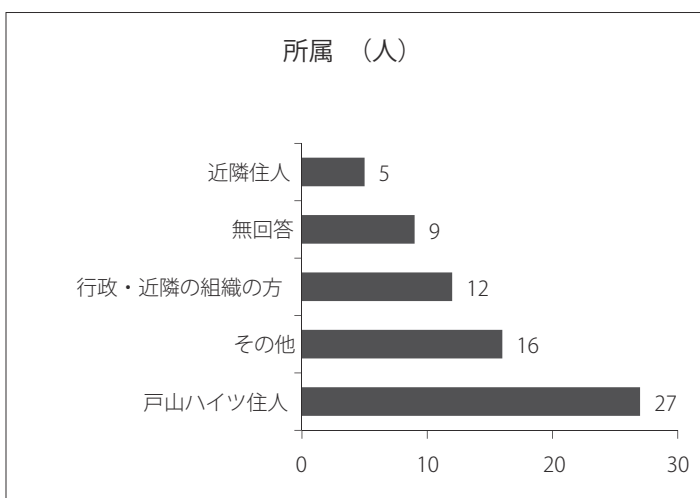
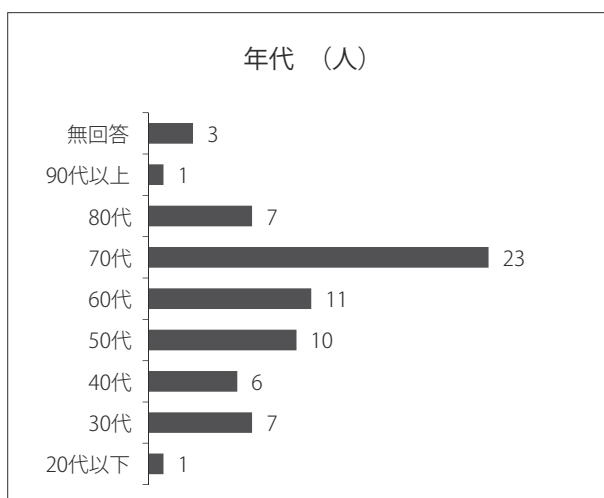
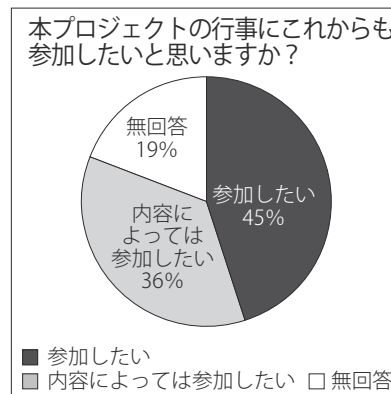
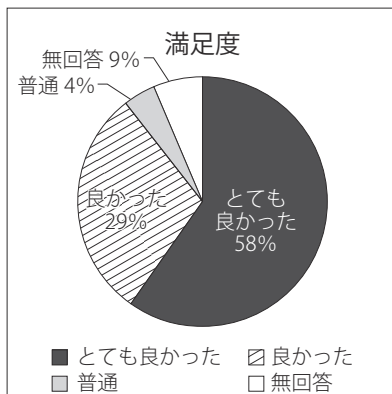
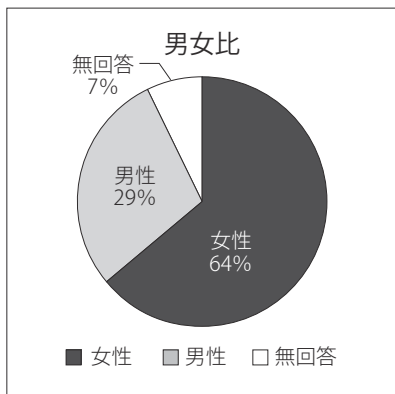
2. 成果と反響

地域における課題解決と絆づくりは日本における普遍的な課題であり、都会型のソリューションを探る当シンポジウム&ワークショップは注目を集めた。そして、住民の方々が一堂に会し、ともに戸山ハイツの課題を考える上で貴重な機会となった。さらに外部からの参加も多く、マスコミ取材(福祉新聞、シルバー新報、アエラムックなど)もあり、アンケートでも87%から「良かった」との評価を受けた。女性が64%を占め、各年代で最も多かったのが70代(33%)であった。

シンポジウムの最後は秋山正子氏からの「みなさん、これから頑張りましょう!」の呼びかけとともに「エイエイオー!」の掛け声で締めくくられた。

第3回シンポジウム & ワークショップ 参加者アンケート結果

アンケート回収69人



居住地の内訳

東京都	13
都内	1
稲城市	1
多摩市	1
台東区	1
大田区	1
町田市	2
武蔵野市	1
文京区	1
北区	1
墨田区	1
目黒区	1
練馬区	1
埼玉県	5
埼玉県内	2
越谷市	1
鳩山町	1
比企郡	1
神奈川県	4
神奈川県内	2
横浜市	1
平塚市	1
千葉県	3
千葉県内	1
松戸市	1
船橋市	1



シンポジウムの様子



基調講演 樋口恵子女性未来研究所長



共同研究拠点『暮らしの保健室』室長 秋山正子氏



ディスカッション (左より、猿渡進平氏、西上ありさ氏、秋山正子氏)



「ワークショップ」は、楽しくなごやかに



閉会時の「エイエイオー！」

人生100年時代、熱望される女性のリーダーシップ

～世代を超えて女性同士が助け合うために～

並木有希 Namiki Yuki

「人生100年時代」：日本が人口構成の変化と長寿化に伴う未曾有の社会状況に踏み出そうとしている今、女性にまつわる問題を考え、世代間で知恵を繋ぎ、それぞれの場所で行動を起こすことが、これまでにないほど強く求められているのではないのでしょうか。たゆまぬリーダーシップをとってこられた先達お2人にお話を伺いました。

【モデレーター】

並木有希

(東京家政大学人文学部
准教授)

【登壇者】

マルゴ・キャリントン

(駐日米国大使館 広報文化
交流担当公使)

樋口恵子

(東京家政大学 名誉教授・
同大学女性未来研究所所長)

人生100年時代、熱望される女性のリーダーシップ

Sustainable Women's Leadership in an age of Longevity

Women Helping Women across Generations

～世代を超えて、持続的に、女性同士が助け合うために～

「女性が女性を助ける」。今ほど、女性自身が、自らリーダーシップを発揮し、世代を超えて互いにメンターとなり、励ましあうことが必要とされている時代はないのでしょうか。2016年4月には、女性活躍推進法が施行され、女性の経済活動への貢献がにわか

に期待され始めました。少子化による労働力人口減少と国内経済活動の成熟化等の変化に対応するには、あらゆる女性の力が必要

なことは自明です。一方、2015年、日本女性の平均寿命は、87.05歳で、世界第2位にランクイン。世界に先駆けて「人生100年時代」が

到来しています。女性の働き方や社会保障、地域との関わり、男性と女性のあり方など、あらゆる分野を長期スパンで考え直すタイ

ミングに来ています。

本シンポジウムでは、日米の女性エンパワメントの発展において重要な役割を担い、尽力続けている、アメリカ大使館広報・文化交

流公使 マルゴ・キャリントン氏と東京家政大学名誉教授で 同大学・女性未来研究所所長 樋口恵子氏のお二人を迎え、各分野で

ミッドキャリアとして活躍され、これから各分野の中核を担っていく30代40代の女性を対象に、お二人の仕事や人生におけるチャレン

ジ・成功について、お話いただきます。社会の大きな変化をチャンスと捉えるにはどうすればよいのか、持続可能な女性のキャリアは

どのように築けるのか？について、出産・育児・介護などのケアワークの観点からも、日米双方の経験談、意見、ベストプラクティスな

どを共有します。(※同時通訳あり。このイベントは、Youtubeで生放送配信

されます)

日程	2017年1月26日(木)
時間	19:00～20:30(18:30開場)
会場	アメリカンセンターJapan 港区赤坂1-1-14 NOF溜池ビル8階
定員	先着80名 入場無料(要申込)
申込み方法	お名前・ご連絡先を 並木 namiki@tokyo-kasei.ac.jp 迄 お送りください
モデレーター	並木有希 東京家政大学准教授、同大学女性未来研究所研究員、フルブライター
登壇者	



Ms. Margot Carrington
マルゴ・キャリントン氏
在日米国大使館
広報・文化交流担当公使

公使就任前は、ワシントンおよびニューヨークの国務省フォーリン・プレスセンターでディレクターを務めた。2010年には特別研究奨学金を受け、女性の地位向上に関する研究に取り組み、同年「国際女性フォーラム・リーダーシップ基金フェロウシップ」に参加した。2007年から2010年まで在福岡米国領事館の首席領事を務め、同領事館初の子供を持つ女性首席領事として、女性問題に関する講演を頻繁に依頼された。



Professor Emerita Keiko Higuchi
樋口恵子氏
東京家政大学名誉教授、
同大学女性未来研究所所長

女性・教育・高齢社会など幅広い評論と、多くのNGO活動で知られる。これまでに内閣府男女共同参画会議議員、「仕事と子育て両立支援専門調査会」会長、女性と仕事の未来館初代館長などを歴任。政府代表団メンバーとしてカイル国連人口開発会議(1994年)に参加。また、北京国連世界女性会議(1995年)等、国際会議に多数参加。2005年には、「高齢社会をよくなる女性の会」理事長としてモーリソン・アンド・マイク・マンスフィールド財団フェローとして、Women in Politics and Public Service(WIPPS:女性の未来にむけてー政治、公共部門で働く女性たちが考える)プログラムに招聘され、米国の公共・非営利組織を訪問。

アメリカ大使館 東京都港区赤坂1-10-5
東京家政大学 女性未来研究所 東京都板橋区加賀1-18-1

在日本国米国大使館と東京家政大学女性未来研究所は、2017年1月26日(木)に、「人生100年時代、熱望される女性のリーダーシップ」(Sustainable Women's Leadership in an Age of Longevity)と題した共催シンポジウムを行いました。「世代を超えて、持続的に、女性同志が助け合うために」という副題の通り、今ほど女性自身が自らリーダーシップを発揮し、世代を超えて互いにメンターとなり、励ましあうことが必要とされる時代はないというメッセージを伝えました。本イベントは「女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランス」のプロジェクトチームが中心となり企画されたものです。

2016年4月には女性活躍推進法が施行され、女性の経済活動への貢献がにわかに期待され始めました。少子化による労働力人口減少と国内経済活動の成熟化等の変化に対応する一方、2015年、日本女性の平均寿命は世界第2位に。日本には世界に先駆けて「人生100年時代」が到来しています。女性の働き方や社会保障、地域との関わり、男性と女性のあり方など、あらゆる分野を長期間で考え直すタイミングに来ています。

社会の大きな変化をチャンスと捉えるにはどうすればよいのか、このような時代に持続可能な女性のキャリアはどのように築けるのか?というテーマで、出産・育児・介護などのケアワークの観点からも、日米の比較、体験談、ベストプラクティスなどを共有する会を企画しました。講師には、日米の女性エンパワメントの発展において重要な役割を担い尽力し続けている、アメリカ大使館広報・文化交流公使マルゴ・キャリントン氏と、東京家政大学名誉教授で同大学・女性未来研究所所長樋口恵子氏のお二人を迎え、仕事や人生におけるチャレンジ・成功についてお話をいただきました。聴衆にはこれからそれぞれの分野で中核を担っていく30代40代の女性を中心として、100名ほどの出席を得ました。

まず開会に先立ち、当日の来賓日本ユニセフ代表・元文部大臣の赤松良子先生をご紹介しました。その後、女性未来研究所より並木有希准教授が「人生100年時代」というキーワードを中心として、企画趣旨導入のプレゼンテーションを行いました。伝達すべきメッセージとしては、これからの30、40代は高齢化する社会の余波を受けて生き方を本格的に変え、柔軟にキャリアを考える必要があるということ。また、相違点も多いながら共通点もある女性同士、世代間で知恵を伝えあって行くことが大切だということを強調しました。

続き、キャリントン広報・文化交流担当公使から講演

をいただきました。公使就任前は国務省フォーリン・プレスセンターでディレクターを務め、2010年には特別研究奨学金を受け女性の地位向上事例に関する研究に取り組みました。2007年から2010年まで在福岡米国領事館の首席領事を務め、同領事館初の子供を持つ女性首席領事として、女性エンパワメントに関する活動を続けています。

公使は、政府機関及び民間での様々なポジションでの経験から、どのように家族内でも職場でも自分のワークライフバランスを達成するかということについて個人的な経験を交えてお話をいただきました。公務にありながら奨学金を受け、他の職業のベストプラクティスを調査し、それを政府機関での環境向上に役立てるといふ、公使が初めて取り組まれた始め研究をご紹介いただきました。

次に、樋口女性未来研究所所長の講演では、日本個別の事情に注目し、先生自身の就職に関する進路の迷いやその後も女性の人生には何があるかわからないから働き続けることの大切さ、また、日本の女性を取り巻く環境が良い方向に変化しつつあるという励ましをいただきました。「高齢社会をよくする女性の会」の取り組みのように、アメリカでも日本でも女性たちが手を取り合っテアクションを起こすことを推進しているとの報告がありました。

講師の先生方の親身な語り口に会場の雰囲気は暖かく、質疑応答には真剣で熱のこもったコメントが続いて時間を惜しみながらも、最後に赤松良子先生からの勇気付けで夜が終わりました。

この問題に対する世間の関心の強さ、また、家政大学の与える知見に関する需要の存在が明らかとなった有意義な会となりました。



女性未来フェスタ（公開研究報告会）

～3年間の軌跡と未来への展望～

伊藤節 Itoh Setsu

東京家政大学に女性未来研究所が創設されてから3年。樋口恵子所長をリーダーとして教職員からなる兼任研究員15名とその共同研究者が情熱を傾け調査・研究活動を進めてきた。そのI期3年間の成果が女性未来フェスタにおいて発表された。これらが更なる変革へとつながっていくことが期待される。

【研究プロジェクト 代表者】

青木幸子
(栄養科教授)

宮地孝宜
(教育福祉学科講師)

松岡洋子
(教育福祉学科准教授)

木元幸一
(栄養学科教授)

齋藤正子
(看護学科講師)

The Institute for the Advancement of Women

女性未来フェスタ

女性未来研究所の三年間の活動プロセスと結果を

研究員をはじめ多くの人達と共有し
私たちの未来と発展につなげていく

～3年間の軌跡～

2017年3月9日(木)

13:00-16:00 (開場12:30)
無料(先着80名・要申込)
120-2B 講義室

女性未来研究所
兼任研究員が大集结

- 平野順子(保育科准教授)
- 宇和川小百合(栄養学科准教授)
- 青木幸子(栄養科教授)
- 早瀬郁恵(造形表現学科准教授)
- 並木有希(英語コミュニケーション学科准教授)
- 松岡洋子(教育福祉学科准教授)
- 宮地孝宜(教育福祉学科講師)
- 齋藤正子(看護学科講師)
- 小櫃智子(子ども支援学科准教授)
- 内野美恵(ヒューマンライフ支援センター専門員・准教授)
- 崇田友江(附属女子中学高等学校教諭)
- 鮫島奈津子(附属女子中学高等学校教諭)
- 太田八重美(博物館)
- 吉村扶見子(人事課)



所長 樋口 恵子



副所長 伊藤 節

企画・主催/東京家政大学 女性未来研究所



I. 研究成果報告会

女性未来研究所の3年間（I期）の活動を、多くの人たちと共有する公開研究報告会が2017年3月9日、本学（120-2B 講義室）にて行われた。

①「大人になってどうということ～中学生・高校生の自立に向けて～ ②女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランス ③戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト～1970年代の都営住宅で安心して老いていくために～ ④健康寿命の延伸を目指したライフスタイルの提案～世界一の平均寿命を支える健康寿命？～ ⑤男女共同参画で行う地域防災・減災～東京家政大学狭山キャンパスの役割の検討～ ⑥本学アーカイブズ～校祖渡邊辰五郎と女子教育～、と題した6つの研究報告がそれぞれのプロジェクトによって発表された。その内容は本活動報告書に収録されている。

II. 女性未来研究所の3年間の活動プロセス

女性未来研究所は研究員制度を導入して2014年（平成26年）にスタートした。掲げた目標は、女性の過去、現在を分析し、問題点を解決する方法を探りながら女性の未来の可能性を更に拡大し構築することで、具体的には以下の通りである。

（1）21世紀は地域によってタイムラグはあるものの世界まるごと高齢化時代となる。史上初の超高齢化社会における男女のあり方は世界中に解答はないが、急激に変化する日本の未来は一つのモデルとなる。やがて地球に広がるこの長寿社会がジェンダーに与える影響を研究する。
（2）妊娠出産というライフイベントを持つ女性にとって、長い人生の中でライフプランとキャリアプランの両立はなお幾多の問題を抱えるが、幼少のころから未来を拓く力を、本学をはじめとする教育の場で涵養する方法論を探る。

（3）現在の法制度はすべて男性多数で構築され、とくに日本は政策決定および社会活動における女性の参画が世界的に低位であることは複数の国際機関から繰り返し指摘されている。あらゆる現行の法制度などを女性の視点から分析し直す。労働、社会保障、さらに女性の貧困などは、現実に国民が直面する問題であり、避けて通れない課題である。

（4）自主自立をモットーとし、人間の一生をケアし、自立を支え、生活を豊かにする専門性を育ててきた本学として、一生を通して女性が社会に貢献し、経済的に自立することを支援する。再就職、再スタート支援、職場開発につながる研究は、女子大学である本学の建学の精神

に鑑み、ひろく社会に主導すべき役割がある。

（目標に関する公開「樋口メモ」より）

研究員の専門と関心によって大きく3つ（①——女の人生100年ライフサイクルアプローチ、②——災害と女性、③——女性と栄養）のテーマにそってグループを作り、そこから今回報告を行った6つのプロジェクトチームが立ち上がり、活発な調査・研究活動が進められてきた。

研究所活動はそのほか月1回の研究会、公開研究会、シンポジウム、講演会など多岐にわたるものである。加えて地方自治体と共催で男女共同参画の講座を開催し、また本研究所発足を機に厚生労働省の推奨するJDN（日本ダイバーシティネットワーク＝産学民間協同の女性活躍推進ネット）の誘いを受け、本学としてこれに参加し9月から活動を開始するなど、社会的にも多方面において活発な活動を展開してきた。

今後これまでの研究成果を踏まえながら、①繋ぐ（関連性）②ひろげる③深める（究める）④呼びかける（提言する）を軸に活動を展開し、本学の発展と私たちの未来につなげていくことが期待される。



Chapter 6

外部セミナー 研修会等

独立行政法人国立女性教育会館 (NVEC) 主催
「大学等における男女共同参画推進セミナー」

参加報告

期 日：平成28年11月29日(火)～30日(水)

会 場：放送大学東京文京学習センター（東京都文京区）
国立女性教育会館（埼玉県比企郡嵐山町）

参加者：平野順子

独立行政法人国立女性教育会館 (NVEC) 主催

「学習オーガナイザー養成研修」参加報告

期 日：平成28年12月14日(水)～16日(金)

会 場：国立女性教育会館（埼玉県比企郡嵐山町）

参加者：平野順子

NWEC 主催

「大学等における男女共同参画推進セミナー」参加報告

平野 順子 Hirano Junko

2016年11月30日に、放送大学東京文京学習センター（初日・参加せず）、国立女性教育会館（NWEC）（2日目）にて開催された、表題のセミナーに参加をした。セミナーのテーマは「経営戦略としてのダイバーシティ&インクルージョン」である。本節は、その報告である。

1. 開催目的、参加校等

学内全体への男女共同参画意識の浸透や推進体制づくりの進行などについて大学の使命を踏まえて考えること、また、少子化が進み大学間競争が高まる中で大学の経営戦略について、ダイバーシティや男女共同参画、ワーク・ライフ・バランスの視点からとらえることの意義を学ぶことを目的に開催された。本テーマの研修は平成22年度から実施されており、今年度で7回目である。当日は、全国国公立大学・高専から、約80名の参加があった。

2. 日程

本セミナーは、11月29日～30日の1泊2日で開催されていたものである。しかし、報告者は授業との兼ね合いがあるため、2日目のみ参加をした。

セミナーのテーマは「経営戦略としてのダイバーシティ&インクルージョン」である。初日は参加できなかったため、日程の紹介にとどめておく。主催者あいさつ等のあと、基調鼎談「経営戦略としてのダイバーシティ&インクルージョン」(井野瀬久美恵氏、甲南大学文学部教授と脇坂明氏、学習院大学経済学部教授)が行われ、その後パネル・ディスカッション「女性も活躍できる職場風土を考える」(中野浩子氏 東京大学工学系・情報理工学系等国際推進課長、腰越朋子氏 聖心女子大学教務課長、面川弥生氏 東京工業高等専門学校総務課総務係長)、情報提供「企業主導型保育事業について」(内閣府子ども子育て本部担当者)、夕食・情報交換会、と

続いたようだ。

2日目から参加したが、伊藤公雄氏(京都大学大学院教授)による特別講義「ジェンダーに敏感な視座に立ったキャリア支援の必要性」のあと、午前・午後に分科会が開催された。分科会1は「大学等における働き方改革」、分科会2は「出口戦略としてのキャリア支援」(報告者はこちらに参加)である。それぞれの分科会では、午前中に2校ずつから事例紹介があった後、午後はそれをもとにグループ・ディスカッションを行い、最後に全分科会が集合して報告をしあい、閉会となった。

3. 内容

ここでは、報告者が参加したそれぞれのプログラムについて簡単に紹介したい。

①特別講義「ジェンダーに敏感な視座に立ったキャリア支援の必要性」

OECD等の様々なデータに基づき、日本での多様性に関わった社会づくり・キャリア支援の必要性について説明があった。日本ではまだそれに追いついていない現状について触れられた。

②分科会2「出口戦略としてのキャリア支援」

事例①「女子大学生キャリア形成セミナーについて」
(佐伯加寿美氏 国立女性教育会館事業課専門職員)

ロールモデルや先輩が創るキャリア教育の仕組みについて、NWECで過去3回行っているセミナーの事例が紹介された。

事例②「女性が活躍する会社は、好い会社」(松橋卓司氏

株式会社メトロール代表取締役社長)

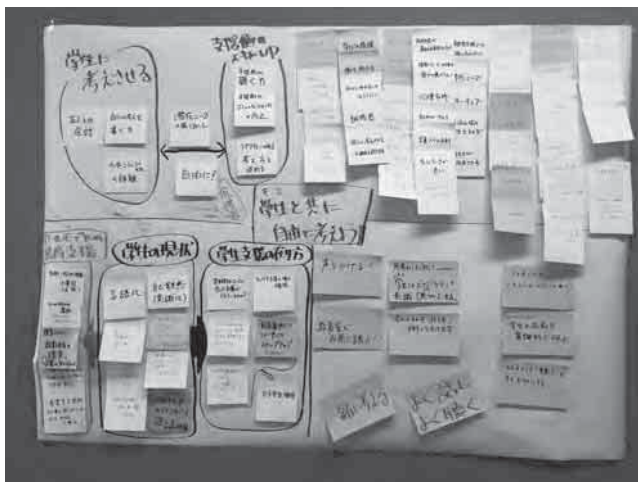
立川市の社員124人の会社。2014経済産業省「ダイバーシティー経営企業100選」受賞、2015東京都「東京都ベンチャー技術大賞」受賞。男女差ない職場での取り組みについて紹介された。この会社は、5年連続で売上・利益ともにアップしている。それは、社内がきれいでチームワークがよく、現在は退職者は毎年1人くらいにとどまっているそうだ。松橋氏の経営理念が熱く語られた。

事例③「内的キャリアを重視した自律型キャリア教育と支援のあり方」(中谷敬子氏 大阪府立大学工業高等専門学校 准教授)

女子チーム ROSE の実践例をもとに、能動的・自立のキャリア発達の誘導について紹介された。ここでの取り組みは、「世代の違う彼らの社会で効果的な成長の方法を、我々は自力でみ出すことはできない」という前提のもと、行われている。この考えは非常に重要で、それは、若い学生がこのことを認識していないと、社会人となったあとに「会社が教えてくれないから」「会社がやらせてくれないから」と言って簡単に退職してしまう、ということだ。この考えにもとづき、教員が連携し、学生たちの活動を支援しているということが紹介された。

③分科会2におけるグループディスカッション

3つの事例について話を聞き、グループになってワークを行った。グループワークは、現在の学生をとりまく状況や直面する課題について、就職だけではなくその後のキャリアを形成するために、高等教育機関は学生をどう育て、どのように社会に送り出すべきなのか、という点で行われた。また後半は、グループ内で共有された課題の具体的な解決策についてディスカッションを行った。



【写真：グループワークでの取り組み】

4. 感想など

2日目のみの参加であったが、本学におけるキャリア支援・教育、またジェンダー教育を考えるにあたり、有意義な時間であった。主に分科会での話をまとめると、重要なのは「学生を巻き込むこと」「学生に主体的に関わらせること」ということが印象に残った。それがなかなか難しいのが、本学のような大人数での授業を行っている大学の欠点であるが、大阪府立高専での取り組みは、学生の中から意識の高いリーダー的女子学生を見つけ出し、少しずつ動き出すという点で、非常に具体的に参考になるケースであった。今後、取り組みをしていきたいと思う。また、それに加え、どの教育機関であっても、学生のキャリア教育・ジェンダー教育について、暗中模索の中で取り組みをしていることを共有できたことも大きかった。

本学の男女共同参画、学生向けキャリア支援を相対化する機会を得て、たいへん有意義な時間であった。

NWEC 主催「学習オーガナイザー養成研修」参加報告

平野 順子 Hirano Junko

2016年12月14日～16日に、国立女性教育会館(NWEC)にて開催された表題のセミナーに、一部(2日目午前、3日目午前)参加をした。本研修の趣旨は、「男女共同参画の視点に立つキャリア開発」をテーマとした体系化された学習プログラムを企画・実施する「学習オーガナイザー」を養成することである。本節は、その報告である。

1. 開催目的、参加者等

本研修は、NWECが、①男女共同参画意識の醸成、キャリア開発の基礎的理解、実態・課題把握をふまえた課題解決に結びつくプログラムの企画・実践力を形成する、②「男女共同参画」と「キャリア開発」の視点に立った学習プログラムを企画・実施できる人材の育成、を目的として開催している。

当日は、全国の女性関連施設、公民館、行政、大学、NPOなどで事業等の企画・実施経験を有する約30名の参加があった。

2. 日程

本研修は、12月14日～16日の2泊3日で開催されていたものである。しかし、報告者は所用や授業との兼ね合いのため、2日目午前、3日目午前のみ参加をした。

第1日目

開会のあと、講義「プログラムデザインの意義と役割」(NWEC事業課長 櫻田今日子氏)、講義「男女共同参画の基礎的理解を深めるために～社会参加の経験の発展として～」(東洋大学名誉教授 神田道子氏)、講義「キャリア開発上の課題について」(十文字学園フェロー 亀田温子氏)、ワークショップ「課題の共有と整理」(NWEC専門職員 引間紀江氏)と続いた。(筆者は参加せず)

第2日目

ワークショップ「キャリア開発実践報告」(報告者：NPO法人パートナーシップながれやま代表 山口文代氏、カラーズジャパン(株)代表取締役 西村和代氏、コーディネーター：NWEC事業課客員研究員 西山恵美

子氏)から開始。2人の報告者より、それぞれのライフコース、過去から現在までの事業での取り組みについて話を伺ったあとに、グループワークを行った。話し合いのテーマは「キャリア開発を進めるために、必要な資質や要素を考える」である。報告者のケースや各自の経験より、思いつくことをふせんに書いて挙げ、KJ法によって分類を行い、グループ毎に発表をした。

その後、ワークショップ「統計から考える男女共同参画の現状」(NWEC国際室長 中野洋恵氏)の中で、意識調査や国際比較調査などの統計データを通して日本の男女共同参画の現状と課題を深掘りした。

午後はそれをもとにグループ・ディスカッションを行い、その後、講義「男女共同参画の視点に立った事業計画を考える」(NPO法人男女共同参画フォーラムしずおか代表理事 松下光恵氏)、ワークショップ「キャリア開発に向けたプログラムをデザインする①」(ファシリテーター：NWEC 西山恵美子氏)、情報交換会と続いた。(筆者は午前のみ参加)

第3日目

講義「協働型学習の理論・方法について」(国立教育政策研究所総括客員研究員 笹井宏益氏)から開始。社会教育の視点から見た協働型学習の重要性について講義を受けた。

その後は、ワークショップ「キャリア開発に向けたプログラムをデザインする②」(ファシリテーター：NWEC 西山恵美子氏)として、2日目午後のグループワークを進めて発表し、他グループやオブザーバーの方から講評をいただいた。

午後は、まとめと成果の共有、振り返り・閉会となった(筆者は午前のみ参加)。

3. 内容

ここでは、報告者が参加したワークショップについて簡単に紹介したい。

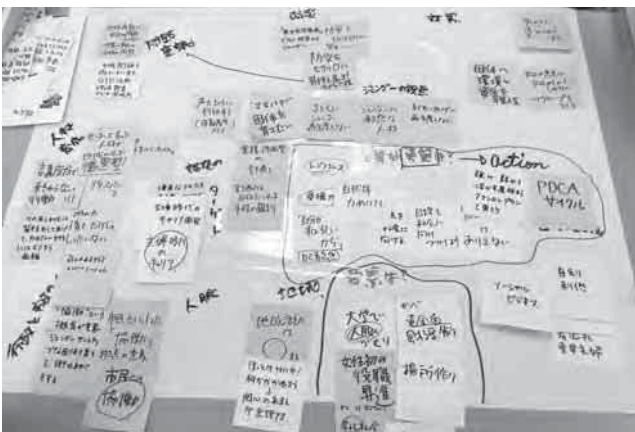
①ワークショップ「キャリア開発実践報告」

2名の報告者の話を聞き、「キャリア開発を進めるために、必要な資質や要素を考える」というテーマで話し合いを行った。筆者の属したグループでは、必要な資質については、レジリエンス、受援力、自己肯定感、アクションプランと実行・PDCA、力を入れすぎないこと、社会に眼を向けることなどが挙げられた。要素については、人脈や資金、場所などが挙げられた。このようにまとめてしまうと非常に単純化された思考のように捉えられてしまうかもしれないが、時間をかけてグループ5名で話し合いをし、それぞれが自分の経験に基づいた話をしながらまとめて行ったため、非常に有意義な時間であった。

②ワークショップ「キャリア開発に向けたプログラムをデザインする」

2日目のグループワークには参加できず、3日目から「大学1,2年生の女子学生に対して行うキャリア教育」を考えるグループに合流させてもらった。プログラムデザインにあたり大切なことは、「対象、目的、目標をはっきりさせ、そのために必要な内容を適した方法でプログラムする」ことである。筆者は毎日、女子大学生に接して授業や指導を行っているものの、これらについて明確化することは、考えていた以上に難儀した。対象ははっきりしているものの、彼女たちの課題やそのためのプログラム開発がはっきり見えていなかったのである。

グループワークの最後に、各グループが開発したキャリアプログラムを採用したいかオブザーバーが評価を行ったが、採用に至ったグループはなかった。思った以上に、プログラムや授業の開発は難しいことが実感として感じた。



【写真：グループワークでの取り組み】

4. 感想など

限られた時間であったが、参加できてよかったと思う。また、できれば全会通して参加できればなおよかったと思う。筆者は特に、ジェンダー論やキャリアデザインの講義を担当しているため、個人的には非常に役に立ったと感じている。

改めて気が付いた大切な点がいくつかある。

①キャリア開発については、大学教育に携わる者全てに関わることであり、キャリア開発の基本的視点は多くの教職員に必要であるということ

②プログラム(授業)を実際にディスカッションしながら組み立てるプロセスは、実際に授業を行っている立場の者にとっても、貴重な機会であること

③教職員側は、学生のことを理解しているつもりでも、その理解は明確ではないこと。そして、その理解がプログラム(授業)の組み立てに反映されているか第三者から意見をもらう機会がないので、改善される機会が少ないと思われること

上記のことを感じた。ジェンダー視点に立った講座ということであるが、多くの教職員にとって、プログラムのPDCAの基本を学ぶ、有意義な講座であるように思われる。

Chapter 7

東京家政大学

全学共通教育科目(A群)

自立の探求(a)

「ジェンダー論に学ぶ」

授業報告

平成28年度 前期 岩田三代

平成28年度 後期 平野順子／並木有希

「ジェンダー論に学ぶ」(平成28年度前期)

～社会を知り、自分の生き方を考える～

岩田三代 Iwata Miyo

「ジェンダー（社会的・文化的性差）とは何か」。大学に入るまでジェンダーという言葉すら聞いたことがない学生たちに、ジェンダーの視点を持って社会をながめ自分の生き方を考えることの重要性を伝えたい。ジェンダーをめぐる社会にはどんな問題があり、どんな方向に進もうとしているのか。受講生たちもさまざまに考えてくれたようだ。

I 授業の到達目標

- ①ジェンダー（社会的・文化的性差）の実態や歴史を理解し、自らの問題として感じ取れる。
- ②現在の社会で起きていることがらについてジェンダーの視点で評価できる。
- ③社会の在り方や、自分の生き方について考え議論できる。

II 授業概要

「女性活躍推進」という言葉が躍る時代になったが、本当に女性は社会や家庭、地域で男性と対等に個性や能力を発揮できているだろうか。労働分野に目をやれば、管理職に占める女性の割合はまだ1割強だし、世界国際フォーラムが毎年発表しているジェンダー・ギャップ指数も2015年度の日本の順位は145か国中101位だ。「男は外で働き、女は家を守る」という固定的性別役割意識はまだ根強く、仕事を持つ女性たちは家事・育児・介護など何重もの負担にあえいでいる。夫婦間暴力も深刻だ。なぜ、こうした事態は解決しないのか。どうすれば男女が対等の立場で生きることができのかが本講座の狙いだ。ジェンダーの視点を中心に真に自立するとはどういうことかを伝える。

III 授業計画

- 第1回 ジェンダーの視点を持つ(上)：固定的性別役割はどう形成されたのか。
- 第2回 ジェンダーの視点を持つ(下)：歴史にみる女性たちの闘い
- 第3回 男女雇用機会均等法(上)：なぜ法律は必要だったのか
- 第4回 男女雇用機会均等法(下)：法律施行から30年、職場の変化と女性
- 第5回 男女共同参画社会基本法成立の意義と現状
- 第6回 ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)の重要性
- 第7回 長時間労働をもたらす固定的性別役割意識の根深さ
- 第8回 「男もつらいよ」。男性にのしかかるジェンダーの重圧
- 第9回 少子化が後押しする女性の活躍推進
- 第10回 教育分野のジェンダー：リケジョはなぜ少ないのか

- 第11回 家庭におけるジェンダー(上)：夫婦別姓の議論と民法改正
- 第12回 家庭におけるジェンダー(下)：DV(夫婦間暴力)はなぜ起きるのか
- 第13回 税・社会保障におけるジェンダー：103万、130万円の壁とは
- 第14回 世界の動きと日本：クォータ(割り当て)制で女性の活躍を促す
- 第15回 まとめ(授業の内容整理)

IV 準備学習

【受講開始前】ジェンダーに関連する本を最低1冊は読んでおく。女性の生き方に関連する伝記や映画などを読んだり見たりすることも勧めたい。日々のニュースにも敏感でいること。

【受講開始後】毎回のテーマをより深く理解するため、受講後に関連の資料や本で調べる。次回のテーマについても事前に本を読むなどして予備知識を仕入れておくことと理解しやすい。

V 評価方法

- ①平常点(50%)。授業に出席し終了後にコメントを書いてもらう。授業中の発言や発表も評価。
- ②レポート(50%)。テーマを与え、2000～3000字程度のレポート提出。全体の理解度をみる。

VI 教科書等

毎回、レジュメのプリントを配布。授業内容に関連する参考図書などもその都度、紹介する。

VII その他

参考図書として川口晃著「日本のジェンダーを考える」、伊藤公男「男女共同参画社会が問いかけるもの」、辻村みよ子「ジェンダーと人権」、鹿嶋敬「男女共同参画の時代」など。内閣府や厚生労働省のHPで女性に関連する項目も参考になるので目を通しておくとよい。

長く新聞社で働き、記者として女性労働や家族の問題、社会保障などを幅広く取材してきた。1986年に男女雇用機会均等法が施行されたころから働く女性を巡るさまざまな問題を追いかけて、1999年に成立した男女共同参画社会基本法やそれをめぐるバックラッシュ、選択的夫婦別姓の動きなども取材した。2015年4月末で退職したが、今もジェンダーにかかわる社会の動きや女性たちの活躍を注意深くみつめている。ただし、私は研究者ではない。ジェンダー論を学問的に突きつめた経験もない。若い学生に教えることができるのは世の中には社会的、文化的性差に基づいたさまざまな制度や慣行がある。その歴史をひもとき、私たちの先輩はこうした問題にどう立ち向かってきたのかを自分の体験やこれまで得た知識をもとに伝えること。そして今現在、どんな課題が残され、それをめぐってどのような対応がなされようとしているのかを紹介し、学生自身に自分の問題として考えてもらうことだ。できるだけホットなニュースをまじえ、日本だけでなく世界の状況も組み入れて、時間を縦軸に世界を横軸に、学生たちがこれからの生き方を考えるきっかけになってほしいとの思いで15回の授業を組み立てたつもりだ。

まず、なぜジェンダーの視点をもつことが大切なのかを受講生に知ってもらうためジェンダーの意味するもの、近代以前の女性の地位、その中から生まれた女性解放(フェミニズム)の歴史、日本における女性の地位の変遷などを駆け足で解説。さらに、著名な女性の生き方を紹介し、ヒューマンストーリーを通じて過去におけるジェンダー差別の実態とジェンダー平等の大切さを伝えた。「女性と労働」の授業では男女雇用機会均等法を中心に女性と労働の歴史を振り返り、なぜこの法律は必要だったのかを解説。ワーク・ライフ・バランスや長時間労働をめぐる政策の流れを含め、これから学生たちが身を置こうとしている職場の実態について自分の経験も含めて紹介した。男性からみたジェンダーの問題、教育分野でのジェンダーの歴史と現状、世界の女性を取り巻く厳しい差別や先進国のクォータ制(割り当て制)など、なるべく幅広くかつ制度や法律改正の動きなど「今」を伝えるよう努力した。

授業は木曜日の2限と3限。学生はそれぞれ約130人のぼり、一人ひとりとじっくり向き合うことは難しかった。授業自体も、間口がやや広すぎてまとまらない講義になったかもしれない。だが、毎回、授業の最後に出してもらったコメントペーパーには多様な感想や質問があり、講義を通じて学生たちがさまざまなことを考え自分の生き方についても思いを巡らせていることが伝わってきた。過去の女性たちがいかに苦勞し、差別と闘い実力を認めさせることで今の世の

中が実現したか。きちんと理解し感謝や感嘆の言葉があった。日本ではなぜ政治や経済の分野でジェンダー平等が遅々として進まないのか、海外ではどうなっているのかなどの疑問やもどかしさ、長時間労働の現状やドメスティックバイオレンスへの反発や恐怖などもつづられていた。

選択的夫婦別姓についてはこれから結婚を控えた若い学生だけに関心は高かった。「海外で同姓を義務付けている国はない。日本も早く別姓を認めるべきだ」という積極的賛成派から「愛する人と同じ姓を名乗りたい。親と違う姓を名乗る子どもがかわいそう」という断固反対派、「自分は別姓にしないと思うけど、したい人がいるなら認めてもいいのでは」という穏健派まで熱心なコメントが寄せられた。LGBT(性的少数者)に関する質問やコメントもあった。昨今、日本でも関心が高まっている問題だけに、学生たちも無関心ではいられないようだ。

できるだけ客観的な事実を伝えつつも、女性(学生)が男性に頼るのではなく自分の足でちゃんと立って、これからの生き方を考えてほしい。親や夫に言われるままに生きて、うまくいかなかったら誰かのせいにするような人生を送ってほしくない。できれば経済的にも精神的にも自立した人生を歩んでほしいというメッセージをこめたつもりだ。だが、コメントの中には「早く結婚して専業主婦になりたい」「子どもを産むには夫の給料が高くないと難しい」「女性はやはり理数系は苦手だと思う」などなど、ちょっと考えてしまう反応もあった。ジェンダーについて教える難しさも実感した。

アンケートというほどきちんとしたものではないが、授業の中で、学生に簡単な質問もぶつけてみた。今、世の中では少子化が大きな問題になっている。これから出産。育児に向き合おうとしている若い女性たちはどう考えているのか。2つのクラスで「あなたはどんな社会なら子どもを産みたいと思いますか」という質問をし、コメントペーパーに自由に答えを書いてもらった。「子どもを安心して預けられる保育所・幼稚園がある」「産休・育休がとりやすい」「復職しやすい」「国や自治体から経済的支援がある」「男女差別がない」「男性も育児に積極的にかかわる」。2、3限の学生ともにこうした声が上位にきた。「男は外、女は内」という固定的性別役割意識は社会のすみずみに残り、学生の反応にもその根強さを感じたことがあったが、自分の将来について大半が働きながらできれば子どもも産み育てたいと思っている。社会は確かに変わっている。

「ジェンダー論に学ぶ」(平成28年度後期)

～ローカル、グローバルに自分の生き方を考える～

平野 順子 Hirano Junko , 並木有希 Namiki Yuki

「ジェンダー論に学ぶ」後期では、人は誰でも、状況や機会において弱者になりうることを理解し、しかし、その中でも弱者になりやすい社会的属性、ジェンダーだけでなく年齢・障害の有無・社会的立場などがあるということを伝えていきます。

I 授業の到達目標

- ①女性・外国人・子どもといった社会的弱者の現状を理解することができる。
- ②これまで自分にとって自明であったことについて、疑って見る視点を持ち、受動的ではなく積極的態で社会を見ることができる。
- ③理解できた問題点について、自分が今学んでいることと関連付けて、どのように貢献できるか述べるができる。
- ④考えたことや理解したことを言葉にして表現することができる

II 授業概要

社会で不利益を被ることの多い社会的弱者の視点、そしてジェンダーの視点で、社会のさまざまな場面を考える。講義と資料によって現状・理論について把握し、各分野で活動している方からの講義を聞き、人権について考える。さらに、それぞれの問題について自分に引き寄せて考え、積極的に社会に貢献していけるような視点を持つことを目標に、授業を進めていく。

III 授業内容

- 第1回 オリエンテーション&ワーク①こうなりたいと思う自分
- 第2回 現在の家族の現状と私たちができること(平野講義)
- 第3回 育児をしながら働きやすい社会を作るために(モーハウス代表 光畑由佳氏)
- 第4回 育児の現状と親を支えるための地域活動(ほっこりーの代表 内海千津子氏)

第5回 男性から見たワークライフバランス(ファザーリングジャパン理事 村上誠氏)

第6回 緑苑祭シンポジウム参加(レポート)

第7回 暮らしが多様化した時代のコミュニティ作り(コレクティブハウジング社理事 狩野三枝氏)

第8回 ワーク② 夢の実現のためにすべきこと

第9回 世界の中の日本で生きていく(並木講義)

第10回 日本と教育・アフリカ(Enije 代表 矢野デビット氏)

第11回 日本と難民・祖国を離れること(アルーシャ代表 岩瀬香奈子氏)

第12回 日本とものづくり・アジア(Tammy's Treat 代表 杉原たみ氏)

第13回 日本と食べ物・アメリカ(セカンドハーベストジャパン 武田幸佳氏)

第14回 これまでの振り返り

第15回 まとめ

IV 授業準備

次回授業の内容について、関連する出来事をニュース記事などによって探し、興味を深めておくこと。

V 評価方法

出欠・遅刻の状況(25%)、コメントシート(25%)、試験(50%)の総合評価

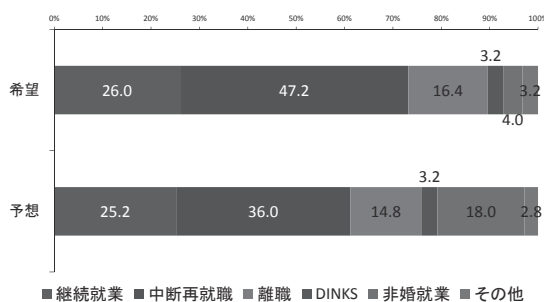
VI その他

東京家政大学女性未来研究所がコーディネーターとなり、平野と並木が中心となって授業を行う。学内外の講師をお呼びして講義を聞く機会も多いため、遅刻・欠席は厳禁。

授業の前半では、自分のこの先のライフコースを考え、そこで起こり得る生活課題を具体的に想像することにより、女性のライフコースと家族関係について考えることを目的としました。初回授業では、「こうなりたいと思う自分」と題し、30歳と50歳の2時点を想像し、①どんな女性？、②こんな毎日を送っています！、③どんな仕事・働き方？、④どんな生き方をしたいか、そのためにどんなことをしている？、という4つの点についてそれぞれ考えてもらいました。学生たちの反応を見ると、30歳はともかく50歳の自分を考えることは大変難しく、これは当然のことと思われます。長期間のスパンでライフコースを考えることの難しさを感じました。

また、「あなたが希望するライフコースはどれですか？ また、実際にはどうなると予想しますか？」という質問に対して、「①継続就業型：結婚し子どもを持って、ずっと働き続ける、②中断再就職型：結婚や出産等を期に退職し、子どもが大きくなった後などに再就職する、③離職型：結婚や出産等を期に退職し、その後は働かない、④DINKS型：結婚するが産まねず、ずっと働き続ける、⑤非婚就業型：結せず、仕事をずっと続ける、⑥その他(具体的に→)」という選択肢から、それぞれ希望ライフコースと予想ライフコースを選択してもらいアンケートを行いました。このライフコースの分類法は、国立人口問題研究所「出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査」を参考として作っています。

希望・理想のライフコース (授業内アンケート集計結果)



結果は上の表の通りです。希望・予想ライフコースともに、中断再就職型がトップ。特に希望ライフコースとして中断再就職型が選択されていることが目立ちます。主要な全国調査と比較しても、非常に中断再就職型の希望が大きいことが、家政大生の特徴として挙げられると思われました。従来型のジェンダー観・家族観にとらわれている学生が比較的多いのではないかと考えられます。

そこで、家族・子育て・暮らしに関わりながら活動しているゲストスピーカーにお話をいただきました。

授業の後半は「世界の中で生きていく」と題して、自分たちが生きていく将来社会の姿と、そこでどのような仕事ができるか具体的なイメージを持ってもらうことを目的としました。導入で2つの共通理解をもたせました。第一に、日本は人口減少と少子高齢化が急激に進展して人口構成が成長に対してマイナスに働くいわゆる「人口オーナス時代」に突入すること、それにつれて、生き方や働き方を根本的に考え直していかなければいけないということ。第二に、その状況を打開するためには、世界との関係の中で生きることが必須となるということです。日本で暮らし働く外国人の人数が増え、また、世界で働く日本人の人数も増えていくでしょう。その意味で、グローバルなキャリアは、選択ではなく、当たり前前の生き方になっていくと言えます。「グローバル人材」という言葉が喧伝されていますが、ともすれば概念的なものに留まりがちです。社会的背景を踏まえることで、自分に引きつけて考えさせることを狙います。

その上で「ローカルコミュニケーション」に対する「グローバルコミュニケーション」の特徴を考えてもらいました。家族や親しい友人とのコミュニケーションのように顕著な言外の意味に頼ったものと、文化を共有していないことを前提としたコミュニケーションの違いについて考えさせました。

コミュニケーションの取り方だけでなく、視点においても相対的・俯瞰的になることの重要性を強調しました。学生の視点を広げ、世界で起きている問題について知識を持つことでグローバルな文脈で自分のキャリア構築していく上で指針となるように、後半では、弱い立場に置かれた人たちのための仕事を国際的な文脈で展開されているゲストスピーカーの講演への導入としました。



Chapter 8

研究プロジェクト報告

15名の兼任研究員を中心とした3年間の研究プロジェクト

第1期(平成26年度～平成28年度)の総集編

1 ライフサイクルアプローチ

- (1) 現代の中学生・高校生の自立意識と発達課題
代表者：青木幸子／崇田友江、鮫島奈津子
- (2) 女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランス
代表者：宮地孝宜／太田八重美、田中恵美子、並木有希、早瀬郁恵、平野順子
- (3) 戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト
代表者：松岡洋子／井上俊哉、齋藤正子、宮地孝宜、米澤純子、和田涼子

2 栄養と女性

- (1) 健康寿命の延伸を目指したライフスタイルの提案
代表者：木元幸一／内野美恵、宇和川小百合、貝原奈緒子、色川木綿子

3 災害と女性・子ども・高齢者

- (1) 男女共同参画で行う地域防災・減災
代表者：齋藤正子／小櫃智子

4 アーカイブズ

- (1) 本学園アーカイブズ
代表者：木元幸一／岩井絹江、太田八重美、川合貞子、吉村扶見子

現代の中学生・高校生の自立意識と発達課題

～発達課題の特徴と課題をクリアするための題材開発～

青木幸子 Aoki Sachiko, 崇田友江 Muneta Tomoe, 鮫島奈津子 Samejima Natsuko

現代とはいつの時代も過去と未来の狭間で課題を抱えて立ち止まり、方向性を模索している時代である。現代の若者は社会の著しい変化の中で、より柔軟な生き方が求められている。時代が求める青年期の発達課題の特徴を把握し、それをクリアするための題材を開発し、授業実践を試みた。教科のみならず、学校のさまざまな教育活動の一助となることを願い、最終報告とする。

I. 研究の背景と目的

平成26年4月に女性未来研究所が新たな使命を担って始動した。私たちは兼任研究員として、「未来の女性を、ひいては人間と環境の未来をより豊かにすることを目指し」¹⁾、ライフサイクルに照準をあてたアプローチから研究課題を設定し、3か年のプロジェクト研究への取り組みを開始した。

本プロジェクトの研究テーマを「現代の中学生・高校生の自立意識と発達課題」に設定した。それは私たち研究員が中学・高校・大学に籍をおき、青年期の若者に日々接することで若者の生態と教育の役割に大きな関心をもち、使命を自覚しているためである。研究スタート時点がまさに女子差別撤廃条約の批准から30年の節目を迎えようとしていたこと、そしてこの間、社会生活のあらゆる場面において男女平等を実現するための様々な施策が展開され一定の成果を収めていたが、成果と表裏一体の関係において男女を問わず生涯にわたる格差が確実に進行しており、青年期の若者が安定した将来生活を設計することの重要性をより強く認識したことも大きな要因であった。このような我が国の動向や現状を踏まえ、これから男女共同参画社会の構築を担いつつ、自らの将来生活を設計していく青年前期の中学生・高校生に照準を当て、人間形成における発達課題の視点から彼らのライフコースの設計に影響を及ぼす要因と課題そして対策について検討することを目的とした。

初年度の平成26年度は、「現代の中学生・高校生の生活と意識—ライフコースの選択に関与する要因の特徴—」

を把握することを目標とした。そのため、若者の家庭生活・学校生活の実態や意識を先行研究の調査結果から把握し、ライフコースの選択に影響を及ぼす要因の特徴について検討した²⁾。

2年目の平成27年度は、前年度の成果を踏まえ、「現代の中学生・高校生の自立意識と発達課題—自立意識に関する調査項目の設定」を目標と定め、青年前期の中学生・高校生を対象に生活と自立意識に関する調査項目を作成し、私立中高一貫校の男子校・女子校・男女共学校で3年生を対象に調査を実施した³⁾。

最終年度の平成28年度は、調査結果の分析を通して、中学生・高校生の自立意識と発達課題の傾向や特徴を学校種別に明らかにするとともに、先行研究との比較を通して現代の青年前期の若者の発達課題の特徴を把握し、発達課題をクリアするための題材開発を最終目標とした。21世紀の男女共同参画社会の構築を担いようとする教育の実現を目指す必要性から、特定の教科に偏ることなく各教科や特別活動、総合的な学習の時間など教育活動のさまざまな場面で開発題材を活用していただけるよう配慮して題材開発を進めた。さらに、この開発題材による検証授業を実施した。

II. 研究の方法

(1) 調査対象

都内の私立中学校・高等学校一貫教育校の男子校、女子校、男女共学校の3学年を対象とした。内訳は、中学校183名(女子校97名、共学校86名)、高等学校733

名(男子校121名、女子校320名、共学校292名)である。なお、中学校男子校は調査の承諾が得られなかったことを付記する。

(2) 調査時期

2015年7月～12月

(3) 調査方法

校長・教頭を通じて調査票の配布・回収を依頼した郵送調査法で実施した。

(4) 調査内容

調査票の内容は、「学校生活について」17問、「家庭生活について」19問、「あなた自身のことについて」29問の計65問で構成されている。詳細は別冊に掲載した。

(5) 分析方法

①全調査項目を単純集計する。

②ハヴィガーストの青年期の発達課題に準じて、課題と関係性の強い自立項目を設定し、発達課題に該当する調査項目を選定した。

③それぞれの発達課題・自立の傾向と特徴を把握する。その際、男子校、女子校、男女共学校ごとに分析し、学校種の特徴を把握する。あえて男女別の分類をしないのは、学校文化を尊重し、その中で育まれる生徒の発達度合を明らかにしたいためである。

データ解析は、SPSS statistics22により行った。

本報告では紙数の関係で研究の概要および調査結果の特徴、そして検証授業のエッセンスについて述べるにとどめる。自立意識に関する調査結果ならびに検証授業の詳細については別冊に譲る。青年前期の発達課題をクリアするための一助として両冊子を広くご活用いただければ幸いである。なお今後も題材や教材の開発に努めていきたいと考える。

Ⅲ. 研究の枠組み

1. 自立と発達課題

(1) 自立とは

人は学ぶ事によって人間になる。人は、その生活する社会環境の中で様々な価値観を身に付け、社会に適応していくことの出来る力を習得しながら成長していく。

「教育基本法」には、我が国が目指す人間像が示されている。つまり、人格の完成を目指し、個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた平和的・民主的な国家及び社会の形成者となる心身ともに健康な国民を育成することが

目指されている。しかも、生涯に亘って平等に教育を受けることができるような様々な措置が講じられている。

こうした人間像への到達を目指して行われる教育の営みは、換言すれば、子どもの成長発達と国民一人ひとりの自己実現を支える営みであるともいえる。しかし、この営みもまた社会の進展とともにその内容も変化していく。とりわけ学校教育は、そうした変化を的確に把握し、国の未来を切り拓いていくことのできる有意な人材の育成を目指して行われている。知・徳・体とバランスのとれた人間形成は必須であり、ねらいは変わらなくとも時代の変化とともにその内容が変化していくことは、学習指導要領の変遷からも理解される。

教育現場における子どもの発達支援は、自立を目指した営みである。中学校・高等学校の教科書等において自立はどのように記述されているのであろうか。社会科と家庭科の教科書および道徳の資料を調べた⁴⁾。その結果、対象としたすべてに自立の記載はあったが、家庭科の教科書にもっとも詳細な記述が確認された。そこには、たとえば「衣食住や家庭生活など身のまわりのことを自分一人のできる生活的自立、ものごとを決めるときに人に頼らず自分で決めることができる精神的自立、自分や家族の生活に必要な収入を得ることができる経済的自立、まわりの人や組織、地域社会に配慮した行動ができる社会的自立、自己の性を受け入れ、性に関することを自分の意思で決定し責任をとることができる性的自立などがある。いずれの自立にも共通することは、自分で決めて、実行し、結果に責任をもつということである。」⁵⁾そして社会の一員として対等な関係において尊重し合い、協力し合い、支え合う関係を共生という。家庭科では自立と共生の関係を築いていく力を育成することを目指している。一方、道徳では、各教科や他の領域との密接な関連を図りながら道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などを育むことが目指されている⁶⁾。その内容は、「自分自身に関すること」「他の人とのかわりに関すること」「自然や崇高なものとのかわりに関すること」「集団や社会とのかわりに関すること」の4つの観点から生徒の実態に応じて適切に指導をすることが求められている。4つの観点の内容項目は、いずれも自立と共生を支援する内容である。

(2) 発達課題とは

こうして人が人間になる成長発達の過程には節目がある。その節目ごとの発達の過程をライフステージと呼ぶ。ハヴィガースト(R.J.Havighurst)は、特定の個人が、その生涯のある時期に、必ず達成すべき主題を、

具体的に記述し、「発達課題」として提示した。ハヴィガースト(1997)は、「生きることは学ぶことであり、成長することは学ぶことである。」「人は生涯、自分の生きる道を学習するのである。」⁷⁾と、学習による人間の成長発達の独自性を強調している。そして「発達課題は、人生の一定の時期あるいはその前後に生じる課題であり、それをうまく達成することが幸福とそれ以後の課題の達成を可能にし、他方、失敗は社会からの非難と不幸をまねき、それ以後の課題の達成を困難にする」⁸⁾と述べている。つまり、「ある発達段階において成すべき能力は、それまでの段階を通じて、その周囲から与えられた主題を、どれだけ獲得してきたかに関わ」っており、「個人に見られる独自の行動の発達課程を」「個人の独自の欲求と、周囲からの要請との統合的観点において人格形成を捉え」ようと試みた先駆的理論であったと評されている⁹⁾。

ハヴィガーストは、発達課題の起源を3つ指摘している¹⁰⁾。

一つは、身体の成熟に起源をもつ課題であり、そこでは歩行の学習、青年期に異性に好かれようとふるまうことの学習、また中年期の女性の閉経に適応する学習である。

二つは、主として社会の文化の圧力に起源を持つもの

で、読むことの学習や社会的に責任ある市民として社会に参加することの学習が当てはまる。

三つは、各個人の私的な価値観や動機などを起源とする人格の一部であり、職業の選択と準備、価値尺度や人生観の形成に繋がっていく。

こうした発達課題をクリアしていく「教育の好期」¹¹⁾を6つの年齢段階に区分して、論じた。その6つとは、幼児期・早期児童期、中期児童期、青年期、早期成人期、中年期、老年期である。そのうち、本稿では中学生・高校生を対象としていることから青年期の発達課題に照準を合わせて検討していくことにする。

2. 青年期の発達課題

ハヴィガーストは、青年期の発達課題として次の8つを挙げており、それぞれの課題の本質と教育との関係について述べている。それをまとめたのが表1である。

上述のハヴィガーストの青年期の発達課題とその本質、教育との関連を踏まえ、「Ⅲ 1 (1)」で述べた5つの自立との関係性、およびそれらに対応する調査項目を選定し、中学生・高校生の自立及び発達課題の実態を明らかにしていくことにしたい。

表1 発達課題と課題の本質・教育との関連

発達課題	課題の本質	教育との関連
①同年代の男女と新しい成熟した関係を結ぶ	<ul style="list-style-type: none"> 女子を女性として、男子を男性としてみることを学ぶ 大人の仲間入りをする 個人的な感情を抑えて共通の目的のために他者と一緒に仕事をするを学ぶ 支配ではなく導くことを学ぶ 	満足のいく社交活動の用意(クラブ、パーティ、学生自治会、運動、音楽、芸術などの教科以外の活動) 民主的な政治的手順を教える(一緒に仕事することを通して学ぶ)
②男性あるいは女性の社会的役割を身につける	<ul style="list-style-type: none"> 社会的に認められた大人としての男性、女性の役割を受け入れ学ぶ 	性別役割分業への疑問に応える援助
③自分の体格を受け入れ、身体を効率的に使う	<ul style="list-style-type: none"> 自分の身体に誇りを持つ、少なくとも自分の身体を受け入れる 自分の体を効率的に、自ら満足して使い、大切ににする 	身体の発達や運動技能に基づきグループ分けした体育の授業、教科の授業で身体の変化を教え、個人差は正常であることを強調、身体の発達に気軽に質問できるようにする
④親や他の大人たちから情緒面で自立する	<ul style="list-style-type: none"> 親への子どもっぽい依存から脱する 親に依存せずに親への愛情を育む 年配の大人に対して依存せずに尊敬する気持ちを育む 	家庭の責任が優先する 教師の役割;生徒の心理的離乳と親への援助 時代の変化と価値観の多様化の中での葛藤
⑤結婚と家庭生活の準備をする	<ul style="list-style-type: none"> 家庭生活や子どもを持つことに対する積極的な態度を身に付ける 家事や育児に必要な知識を習得する 	同年代の異性との満足のいく関係の達成と親からの情緒面での自立の達成、家庭科の設置、幼児に接する経験、性や恋愛についての専門的助言指導、カレッジで結婚と家庭に関する科目の設置
⑥職業につく準備をする	<ul style="list-style-type: none"> きちんとした職業に就けるよう自分の計画と努力を組織立てる 生計を立てる自信を得る 	自分の能力と関心にあった職業選択への援助、社会的価値と職業選択への援助、職業教育と一般教養の充実
⑦行動の指針としての価値観や倫理体系を身につける—イデオロギーを発達させる	<ul style="list-style-type: none"> 生涯の仕事もしくは家庭づくりのための選択と準備をする 経済・政治・倫理的イデオロギーを形成する 	美的、倫理的価値の付加と適用、同一化や模倣の対象となる人を通して価値観について学ぶ、儀式・現代科学の意味と重要性の学習と価値観の形成
⑧社会的に責任ある行動をとりたいと思い、またそれを実行する	<ul style="list-style-type: none"> 社会的イデオロギーを育む 責任ある大人としてコミュニティや地域、国家の生活に参加する 社会的価値観を考えて個人的に行動する 	その土地のコミュニティについて学びそれを良くする、コミュニティや国家、より大きな社会に対する忠誠心を教えるため儀式を利用する、奉仕活動の必要性

(ハヴィガースト, 1997, pp. 67-124要約)

3. 発達課題と自立と調査項目との対応関係

発達課題と自立、そして主に関係する調査項目との対応関係を示したのが表2である。

表2に見られるとおり、発達課題には複数の自立が関わっているものが多く、厳密に区別することは難しく、また、それが有意味であるとも思われない。そこで、本稿では、「表1 発達課題の本質・教育との関連」の内容を踏まえ、発達課題に関する主たる自立を決め、発達課題と特に強い関係性が認められる調査項目を選定して対

応関係を表した。その際、発達課題間の調査項目の重複をできるだけ避けるよう留意した。こうした対応関係に基づき、中学生、高校生の発達段階の傾向や特徴を把握し、青年期の発達実態に迫りたいと考える。

調査項目の分析は、選択肢に準じて行うが、例えば4段階評価での回答においては、「満足＋大体満足」を合わせた割合を肯定的な評価、「少し不満足＋全く不満足」を合わせた割合を否定的な評価として分析する。

表2 発達課題と自立と調査項目との対応関係

発達課題	自立	調査項目
①同年代の男女と新しい成熟した関係を結ぶ	社会的自立、性的自立	1-2)、10)、11)、12)、16)、3-10)、11)、12)
②男性あるいは女性の社会的役割を身につける	社会的自立	2-2)、7)、8)、2-5)、2-9)、10)、3-13)
③自分の体格を受け入れ、身体を効率的に使う	性的自立	3-2)
④親や他の大人たちから情緒面で自立する	精神的自立	2-11)、15)、16)
⑤結婚と家庭生活の準備をする	精神的自立、生活的自立	2-9)、10)、3-5)、3-14)、15)、16)
⑥職業につく準備をする	経済的自立、生活的自立	3-6)、7)、8)、3-21)
⑦行動の指針としての価値観や倫理体系を身につける —イデオロギーを発達させる	精神的自立、社会的自立	3-9)、18)、20)、23)、24)、25)、26)、27)、28)
⑧社会的に責任ある行動をとりたいと思い、またそれを 実行する	社会的自立	3-29)

IV. 結果および考察

(1)「①同年代の男女と新しい成熟した関係を結ぶ」

この発達課題には表2のとおり8つの調査項目が該当し、その内訳は学校生活に関する5項目、あなた自身に関する3項目である。まず、学校生活に関する5項目のうち、「1-2) 学校生活で何が一番楽しいですか」については、中学生、高校生とも「友達と話したり、一緒に何かをすること」が約70%以上と最も高い割合であった。(図1)中学生は二番目に「学校行事」、高校生は「部活動」を挙げているが、二番目の割合はともに10%台と低い。「1-10) いじめをしたことがありますか」「1-11) 仲間はずれにされたことがありますか」については、中学生・高校生ともいじめをした経験よりも仲間はずれにされた経験が、男子校・女子校・男女共学校の学校種を問わず上回っている。しかし、高校では両項目について共学校の割合がもっとも低く、学校間に有意な差が見られた ($p < .01$)。また、「1-12) あなたは親しい友人が何人いますか」については、中学生・高校生とも学校種を問わず「4~9人」と回答した割合がほぼ40%以上である。「1-16) 部活動に満足していますか」については、中学生では学校種を問わず肯定的評価がほぼ70%以上であるが、高校生は男子校・女子校

がほぼ70%、共学校が約50%であった。これは男子校5.8%、女子校18.4%に比べて共学校での部活動への不参加率が40%と高い割合を占めていることが影響していると推察される。

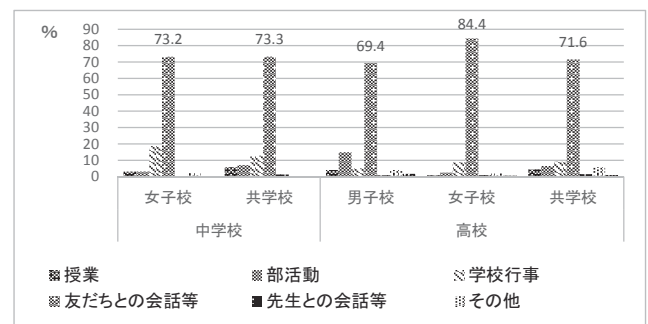


図1 学校生活で一番楽しいこと (n=916)

あなた自身のことに関する「3-10) 援助交際や出会い系サイトについてどう思いますか」「3-11) 友人と個人的に旅行や買い物、映画などに出かけますか」「3-12) 友人関係に満足していますか」の3項目のうち、特に大きな差が見られたのは「3-10) 援助交際や出会い系サイト」に関する結果である。(図2)

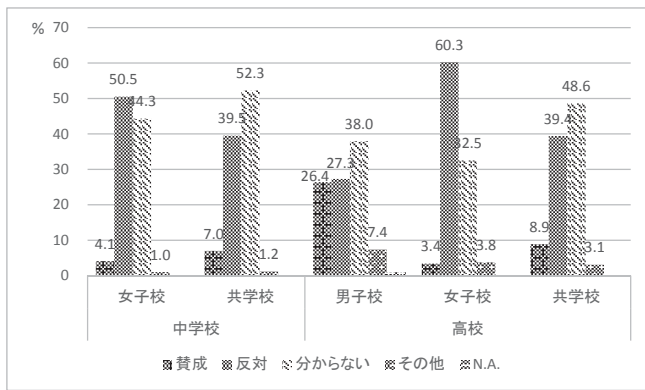


図2 援助交際・出会い系サイトへの意識 (n=916)

中学生は女子校で「賛成」4.1%、「反対」50.5%、「わからない」44.3%、共学校で「賛成」7.0%、「反対」39.5%、「わからない」52.3%である。高校生は男子校で「賛成」26.4%、「反対」27.3%、「わからない」38.0%、女子校で「賛成」3.4%、「反対」60.3%、「わからない」32.5%、共学校で「賛成」8.9%、「反対」39.4%、「わからない」48.6%で、学校間に有意な差が見られた ($p<.01$)。その他の「3-11) 友人との外出」は、中学生、高校生とも肯定的評価が約80%以上、「3-12) 友人関係の満足」は肯定的評価が90%以上と高く、友人関係は良好と推察される。

中学生、高校生とも校内での友人関係づくりはほぼ順調であるが、校外での人との関係の築き方には学校間に差が見られるので、それにふさわしい指導のあり方が望まれる。

(2)「②男性あるいは女性の社会的役割を身につける」

この発達課題には7つの項目が該当し、そのうち家庭生活に関する6項目は父母のワークライフバランスと本人の家事参加に関することである。「2-2) 父親は仕事重視ですか、家庭重視ですか」については、中学生は「仕事と家庭のバランスが取れている」とする「両立」が女子校で64.9%、共学校で55.8%と高く、「生活重視」は女子校が4.1%、共学校は10.5%で両校間に有意な差が見られた ($p<.05$)。

一方、高校生は「仕事と家庭の両立」がほぼ60%、「生活重視」もほぼ10%と差は見られなかった。「2-7) 父親はどれくらい家事をやりますか」「2-8) 父親はどんな家事をやりますか」については、中学生も高校生も「ほぼ毎日」と「週4~5回」を合わせて約20%であり、日常的な家事参加には遠い現実があった。(図3) 家事労働の内容は、料理、後片付け、買い物、部屋掃除、ごみ出しなどである。

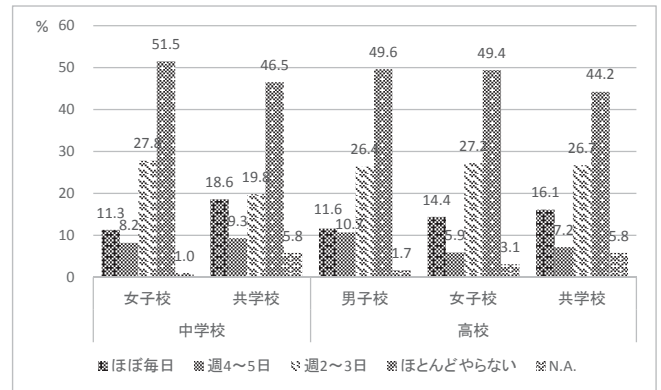


図3 父親の家事参加 (n=916)

一方、「2-5) 母親は仕事重視ですか、家庭重視ですか」については、中学生・高校生とも「仕事と家庭の両立」と「生活重視」の割合が高い。特に、高校生については男子校で「生活重視」61.2%、「両立」24.0%であり、他の学校種とは異なる根強い役割分業の実態があり、学校間で有意な差が見られた ($p<.01$)。「2-9) 平日、あなたは家事をしていますか」については、中学生・高校生とも女子校・共学校の生徒は「ほぼ毎日」と「週4~5日」を合わせて30~37%の家事参加が見られたが、男子校の生徒は13.3%であった。この結果から、男子生徒には家庭での親の役割分業をロールモデルとした意識形成の実態が垣間見える。「2-10) あなたはどんな家事をやりますか」については、後片付けと部屋掃除であった。

あなた自身に関する項目として「3-13) “男は仕事、女は家庭”という性別役割分業についてどう思いますか」については、中学生は女子校で「賛成」11.3%、「反対」46.4%、「わからない」39.2%、共学校で「賛成」11.6%、「反対」41.9%、「わからない」33.8%である。高校生は、男子校で「賛成」30.6%、「反対」39.7%、「わからない」26.4%、女子校で「賛成」9.4%、「反対」58.4%、「わからない」28.1%、共学校で「賛成」13.0%、「反対」48.3%、「わからない」34.6%であり、学校間で有意な差が見られた ($p<.01$)。(図4)

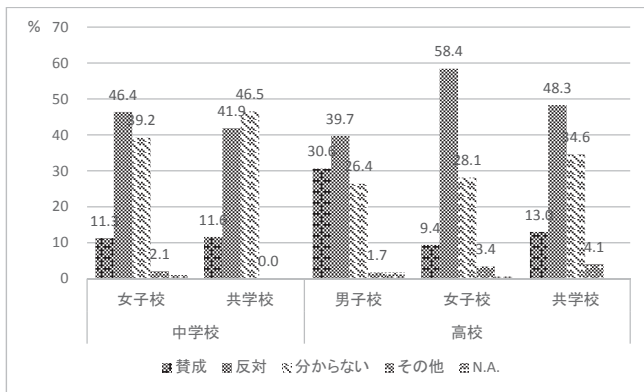


図4 性別役割分業への意識 (n=916)

高校生では性別役割分業への意識が明確になりつつあり、「反対」の割合が平均して高いが、男子校では「賛成」の割合が高く、分業意識が根強いことがわかる。

(3)「③自分の体格を受けいれ、身体を効率的に使う」

この発達課題にはあなた自身に関する1つの項目が該当する。「3-2)自分の身体的・心理的成熟を自覚していますか」については、中学生では約60%、高校生では約40%が「自覚していない」と回答している。なかでも高校の女子校は48.2%と半数近くに及び、学校間で有意な差が見られた ($p<.01$)。身体的・心理的成熟度は、高校生のほうが自覚の度合いは高くなるが、女子校の生徒の自覚度は低い特徴が見られた。

(4)「④親やほかの大人たちから情緒面で自立する」

この発達課題には家庭生活に関する3項目が該当する。「2-11)父親・母親と朝晩の挨拶をしますか」については、「する」割合は女子校の中学生・高校生と、男子校の高校生は80%以上、共学校では共に70%以上である。(図5)「2-15)あなたは親離れしていますか」については、中学生は「どちらともいえない」が約45%で、「親離れしている」は女子校24.7%、共学校27.9%で約四分の一を占めている。一方、高校生は「どちらともいえない」が男子校37.2%、女子校47.5%、共学校23.8%であり、「親離れしている」割合は男子校33.9%、女子校23.8%、共学校39.0%と学校間で有意な差が見られた ($p<.01$)。「2-16)親離れをしたのはいつですか。また、いつごろ親離れできそうですか」については、中学生は「中学生になったころ」を「親離れの時期」としている割合が女子校22.7%、共学校26.7%であり、「高校生になるころ」(女子校21.6%、共学校12.8%)、「大学生になるころ」(女子校11.3%、共学校10.5%)での親離れを予想している。一方、高校生は「中学生・高校生になったころ」を合わせて男子校31.4%、女子校29.0%、共学校49.4%がすでに親離

れしており、今後「大学生になるころ」(男子校19.8%、女子校20.9%、共学校14.7%)、「就職するころ」(男子校18.2%、女子校19.4%、共学校11.0%)を親離れの予想時期としているが、学校間で有意な差が見られた ($p<.01$)。

中学生と高校生を比較すると、親離れの年代が先送りにされる傾向にあることがわかる。

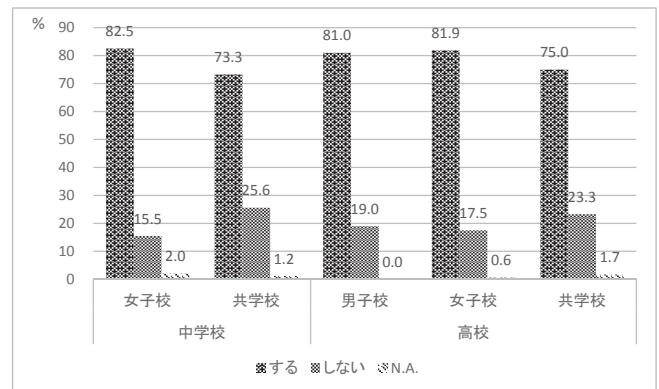


図5 父親・母親との朝晩の挨拶 (n=916)

(5)「⑤結婚と家庭生活の準備をする」

この発達課題には6項目が該当し、その内訳は家庭生活に関する2項目、あなた自身に関する4項目である。家庭生活に関する「2-9)平日、あなたは家事をしていますか」「2-10)あなたはどんな家事をやりですか」については、中学生は「ほぼ毎日」が女子校18.6%、共学校17.4%、「週4~5日」が女子校18.6%、共学校12.8%であり、日常的な家事参加率は女子校37.2%、共学校30.2%である。それに対して「週2~3日」は女子校34.0%、共学校29.1%、「ほとんどやらない」は女子校28.9%、共学校40.7%である。一方、高校生は「ほとんどやらない」がどの学校種でももっとも高く、男子校68.6%、女子校35.6%、共学校39.0%である。「ほぼ毎日」と「週4~5日」を合わせた日常的な家事参加率は男子校13.3%、女子校33.1%、共学校31.5%であり、学校間で有意な差が見られた ($p<.01$)。(図6)家事の内容は、中学生・高校生とも後片付け、部屋掃除である。中学生と高校生を比較すると、高校生の家事参加率が低下傾向にあることがわかる。

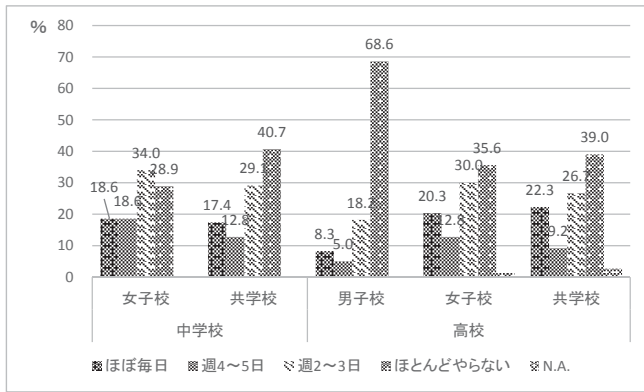


図6 あなたの平日の家事参加 (n=916)

あなた自身に関する4項目のうち、「3-5)自分でできることは何ですか(複数)」については、中学生・高校生とも「自分の身の回りや部屋を片付ける」「朝、一人で起きる」「見たいテレビ番組だけを選んでみる」「大きくなったらやってみたいことがある」は50%以上であり、学校間に有意な差が見られた ($p < .05$)。高校生は男子校で「計画を立てて勉強する」が高く、女子校は「将来何になりたいか決めている」割合が高かった。「3-14)あなたは結婚したいですか」については、「したい」と回答したのは中学生が60%以上、高校生は70%以上であった。「したくない」割合は女子校(中学校7.4%、高校8.4%)で高い傾向がある。「3-15)あなたは子どもが何人位ほしいですか」については、「2人」が中学生50%以上、高校生60%以上であった。「ほしくない」は女子校(中学校20.6%、高校11.6%)で高い傾向が見られた。「3-16)あなたは結婚後、どのような働き方をしたいですか」については、中学生では「ずっと働く」が女子校32.0%、共学校52.3%、「子どもが成長した後、再び働く」が女子校29.9%、共学校25.6%、「結婚したらやめる」・「子どもができたらずっと働く」が女子校9.3%、共学校3.5%である。一方、高校生は「ずっと働く」が男子校90.9%、女子校28.4%、共学校64.4%、「子どもが成長した後、再び働く」が男子校1.7%、女子校45.3%、共学校19.9%、「結婚したらやめる」・「子どもができたらずっと働く」は男子校1.7%、女子校7.8%、共学校4.8%である。(図7)

ワークライフバランスや一億総活躍社会の実現を目指してさまざまな取り組みが行われているが、中学生・高校生にはまだ性別役割分業意識が根強いことがわかる。とりわけ自分の進路選択が迫る高校生のジェンダーロール回帰が高い傾向にあることが特徴といえる。

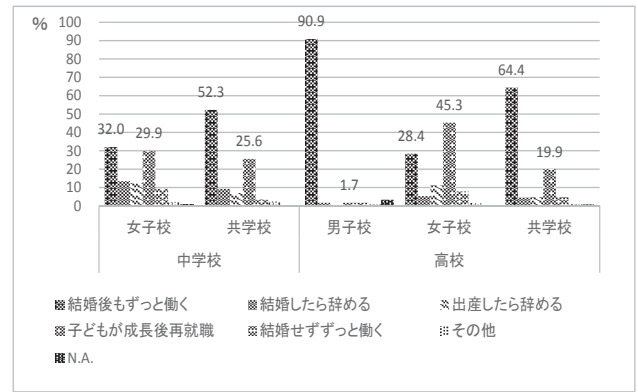


図7 結婚後の働き方 (n=916)

(6)「⑥職業につく準備をする」

この発達課題にはあなた自身に関する4項目が該当する。キャリア教育は以前にもまして各学校で盛んに取り組まれているが、キャリア形成に向けた基礎的な準備段階の実態を把握する。「3-6)平日の学校外での勉強時間はどれくらいですか」については、中学生は女子校で「2時間未満」が37.1%、共学校で「30分未満」が43.0%ともっとも高い割合を占めた。同様に、高校生は男子校で「30分未満」61.2%、女子校で「2時間未満」24.1%、共学校で「30分未満」35.3%であった。一方、「3時間以上」が男子校9.9%、女子校20.4%、共学校25.4%と学校外での学習時間にはばらつきがあり ($p < .01$)、通塾との関係が強く伺われる。また、「3-7)平日のテレビの視聴時間はどれくらいですか」についても、中学生は学校間の差は見られず「2時間未満」が約60%であった。一方、「3時間以上」は女子校約15%、共学校約20%である。高校生では「2時間未満」が男子校80%、女子校約70%、共学校約77%である。「3時間以上」は男子校9.1%、女子校12.2%、共学校10.9%である。テレビの視聴時間は、高校生になって短くなる傾向が見られるが、学校間で有意な差が見られた ($p < .01$)。また、「3-8)スマホ/ipadなどの時間はどれくらいですか」については、中学生では女子校で「1時間以上2時間未満」が35.1%、共学校で「2時間以上3時間未満」が36.0%ともっとも多かった。「3時間以上」も女子校12.4%、共学校26.8%であった。高校生は、学校種を問わず「2時間以上3時間未満」がもっとも多く、男子校33.9%、女子校31.9%、共学校30.5%である。「3時間以上」は、男子校29.0%、女子校12.5%、共学校15.7%である。スマホ等の使用時間も学校間で有意な差が見られた ($p < .01$)。(図8)

この発達段階に関する学校外での学習時間、テレビの視聴時間、スマホ等の使用時間は、いずれも高校生で有

意な差が見られ、発達課題を達成するためにも将来設計を含めた生活時間の使い方について振り返る指導が必要である。

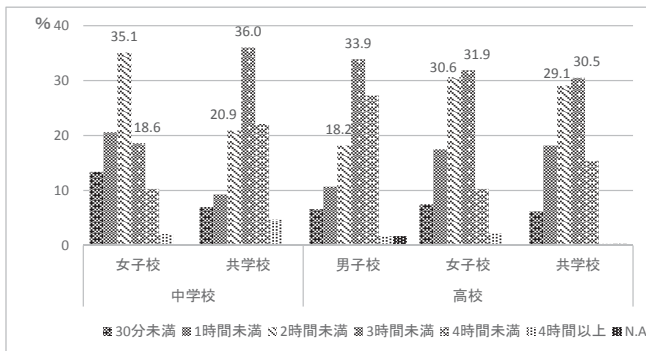


図8 平日のスマホ・ipadの使用時間 (n = 916)

「3-21) 仕事を選ぶ際、重視するのは何ですか」については、中学生も高校生も「自分の適性」「仕事の内容」「収入」がベスト3であり、その割合の傾向も同じであるが、高校生は学校間で有意な差が見られた ($p < .01$)。つまり、「自分の適性」は男子校47.1%、女子校47.2%、共学校52.4%、「仕事の内容」は男子校18.2%、女子校23.8%、共学校21.6%、「収入」は男子校17.4%、女子校11.3%、共学校11.0%であった。

(7) 「⑦行動の指針としての価値観や倫理体系を身につけるーイデオロギーを発達させる」

この発達課題に該当するのはいずれもあなた自身に関する9項目である。「3-9) よく見たり、利用したりするものは何ですか(複数)」については、中学生は「テレビ」「CD」「パソコン」の利用度が高く、高校生はこの3種類に「映画」が加わる。「3-18) 自分が将来なりたいたいものや進路が決まっていますか」については、中学生は「決まっている」「大体決まっている」という肯定的評価は60%以上、高校生は女子校と共学校では80%以上であるが、男子校は約60%と低い ($p < .01$)。「3-20) 進路を決める際、重視するのは何ですか」については、中学生は50%以上が「将来の職業」を最優先に考えているが、高校生は「将来の職業」を優先しながらも、「将来の生活」を思い描きつつ「資格」「能力」等を考慮した幅広い具体的な事項を重視するように変化している。では「3-23) 将来どんな生活を送りたいですか」については、中学生・高校生とも「自由楽しく暮らす」「計画を立てて豊かな生活を築く」「身近な人たちと和やかな毎日を送る」が共通しており、「みんなと力を合わせて世の中をよくする」は両者とも約3%であった。「3-24) 将来どのような生き方をしたいですか」につ

いては、中学生・高校生とも「自分の思ったとおりに生きる」「のんびりと人生を楽しむ」に収斂されるが、中学校 ($p < .05$)、高校 ($p < .01$) で学校間に有意な差が見られた。「3-25) 今、悩みや心配事がありますか(複数)」については、中学生も高校生も「勉強のこと」「進学のこと」に関心が集中している。

次の3項目は日本について尋ねたものである。「3-26) 日本についてどう思いますか(複数)」「3-27) 日本のイメージを表すものはどれですか(複数)」「3-28) 日本人に当てはまるものはどれですか(複数)」といずれも複数選択での回答を求めた。中学生・高校生とも「日本はよい国だ」「自分が生きている間に戦争が起こるかもしれない」「老人、障がい者などの福祉が不十分」と考えている割合が高い。「日本はよい国だ」と思う割合は、中学生は60%以上であるが、高校生は男子校57.0%、女子校44.7%、共学校51.7%と学校種を問わず低下している。「戦争が起こるかもしれない」は中学生・高校生とも女子校の割合が40%以上と高く、「福祉が不十分」とする割合も、中学生より高校生が高くなっている。(図9) ニュース報道による法制度の改正議論や選挙権年齢の引き下げ等が影響していることも推察される。「3-27) 日本のイメージ」については、中学生は女子校・共学校とも「科学技術」「歴史・文化遺産」「文化・芸術」をイメージする割合が高い。高校生も上記3項目の割合が高いが、男子校において「生活水準」41.3%が挙げられている。「3-28) 日本人の気質・国民性」に関する割合は、中学生・高校生とも「礼儀正しい」がトップである。中学生では女子校77.3%、共学校75.6%、高校生では男子校59.5%、女子校71.6%、共学校65.1%である。続いて「勤勉」「平和愛好的」であると捉えている。高校間において「礼儀正しい」 ($p < .05$)、「勤勉」「平和愛好的」 ($p < .01$) は有意な差が見られた。中学校では「寛大」「知的」も評価され、「知的」には学校間で有意な差が見られた ($p < .05$)。(図10)

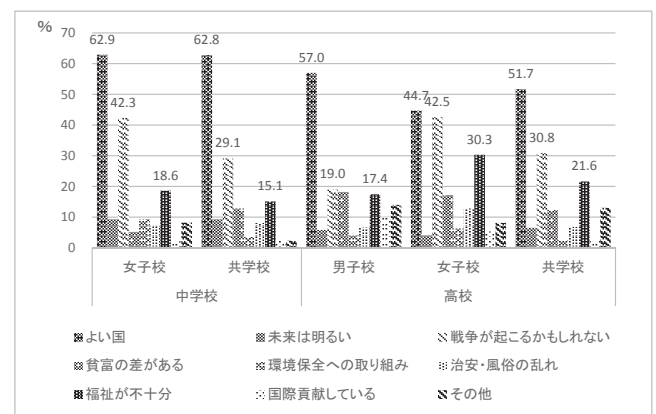


図9 日本について(複数)(n=916)

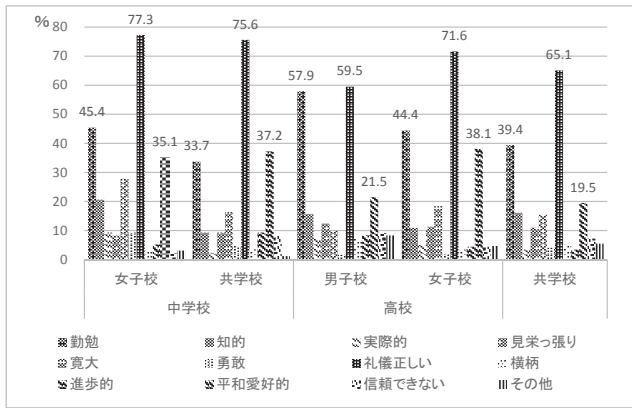


図10 日本人の気質・国民性(複数)(n=916)

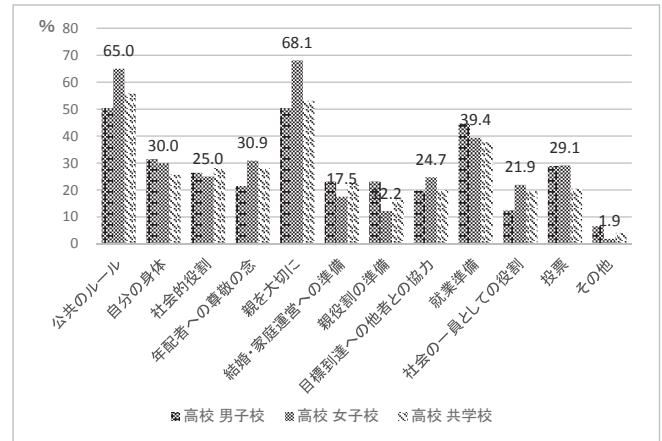


図12 これから大事にしたいこと(高校生)(複数)(n=733)

(8)「⑧社会的に責任ある行動をとりたいと思い、またそれを実行する」

この発達課題に該当するのはあなた自身に関する1項目である。「3-29)あなたがこれから大事にしていきたいことは何ですか(複数)」について、中学生も高校生も「公共のルールを守る」「親を大切にする」「職業に就く準備をする」ことが共通に挙げられた。「公共のルールを守る」は中学生より高校生の割合が少し低下するが、「親を大切に」や「就業の準備」については高校生の割合が上昇している。また、すべての項目で平均して割合が高いのが高校生の特徴である。(図11)(図12)

中学生は、「公共のルールを守る」「年配者への尊敬の念を持つ」「共通の目標のために他者と一緒に力を合わせる」「職業に就く準備」は学校間で有意な差が見られた(p<.05)。また、高校生も、「公共のルールを守る」「親を大切にする」(p<.01)、「親としての役割の準備をする」「選挙に行く」(p<.05)は、学校間で有意な差が見られた。

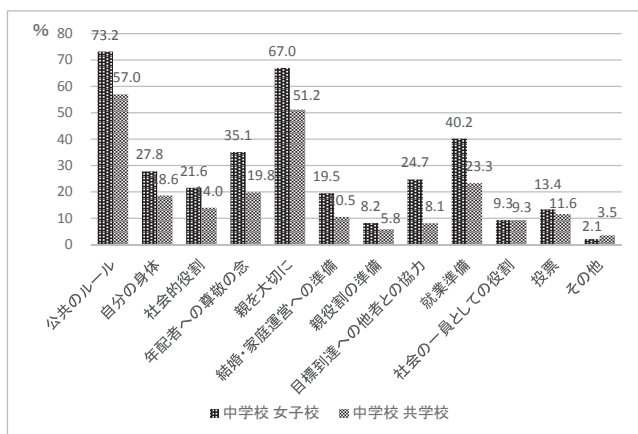


図11 これから大事にしたいこと(中学生)(複数)(n=183)

V. 青年期の若者の発達課題の特徴 — 先行研究との比較を通して

現代の若者の実態について調査結果を見てきたが、先行研究との比較を通して、現代の若者の発達課題の傾向と特徴を把握する。先行研究¹²⁾として、内閣府「第8回世界青年意識調査」(2009)とNHK「中学生・高校生の生活と意識調査」(2012)を取り上げる。本調査においても両研究の調査項目を一部援用している。それらには必要に応じて新たな項目を追加したり、表現を変えたりしながら活用した。

さて、ここで、本調査結果と先行研究との調査結果を比較するに当たり、注意しなければならないことがある。それは先行研究の対象者である。内閣府調査は、1972年に第1回調査が始まってからほぼ5年ごとに世界の国々で同一調査が実施されてきた。第7回調査は日本のほかアメリカ、ドイツ、スウェーデン、韓国の5カ国であり、第8回調査は日本、アメリカ、イギリス、フランス、韓国の5カ国である。対象年齢は18~24歳の青年であり、日本の対象者は1090名であった。また、NHK調査は1982年の開始から5年ごとに2002年まで実施され、それ以降10年ぶりの5回目の調査が2012年に実施された。対象は全国の12~18歳の中学生・高校生であり、2012年調査の対象者は1142名であった。

このように両先行研究には対象者の年齢層に幅があり、本調査では中学生・高校生とも3年生と限定されていること、都市部の私立学校に通う生徒であること等である。その違いを前提に比較することをまずお断りしたい。それでもなお、本調査結果と全国調査の結果を比較することで、本調査対象者の傾向と特徴とともに現代の若者の発達課題の特徴を把握し、指導に必要な適切な題材開発につなげたいと考えたからである。

さて、「Ⅳ」では発達課題ごとに中学生・高校生の傾向と特徴を分析してきたが、ここでは視点を変えて5つの自立の観点から若者の傾向と特徴を把握することとする。

(1) 精神的自立

精神的自立に関する発達課題は、表2の④⑤⑦である。これらの結果を要約すると、親と朝晩の挨拶をするのは中学生・高校生の70%以上ができており、親子だから挨拶ぐらいしなくても顔を見ることで体調のよしあしは理解できるだろうという情緒的甘えから脱しているという理解できる。挨拶は、人との関係性を築く上で基本となる行動である。「親離れ」の意味として情緒面だけでなく、経済面の自立も考慮して回答した生徒もいる。調査時には「親離れ」について特に定義せずに尋ねたが、「親離れ」の時期は先送りにされる傾向が見られた。それは進学率の上昇や就業時期とも関係している。特に近年の就業形態の多様化、経済格差による貧困の浸潤は、結婚に対する若者の意識や行動の変化とともに、パラサイトシングルの年齢層の上昇とその割合の増大をもたらしている。精神的自立は経済的自立とも関連している。

(2) 社会的自立

社会的自立に関する発達課題は、表2の①②⑦⑧である。挨拶が精神的自立のファーストステップだとすると、仲間とうまく人間関係を築いていくのがセカンドステップである。生徒は、中学校・高校という新たな学校空間で、男子同士、女子同士で、そして男女で人間関係を築き、良好な関係にあった。しかし、校外での関係の築き方には、情報ツールの活用に学校間で差があり、適切な指導が必要である。また、学校現場の課題のひとつであるいじめについては、本調査結果は全国調査に比べて高いのも傾向のひとつである。(図13)

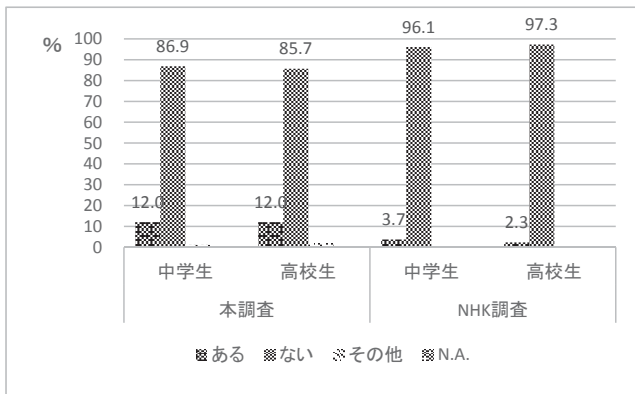


図13 いじめの経験 (n=916、N=1142)

また、一個人として社会的役割を遂行する立場になると、男女共同参画社会の構築と関わる性別役割分業意識については、中学生・高校生とも平均して反対の割合

が多かったが、男子高校生は性別役割分業意識が根強く、家庭環境を反映した結果でもあった。さらに、「わからない」が中学生で約40%、高校生で約30%おり、自分の人生を選んでいくためにも学習活動の場面を活用しながら意思決定の機会を増やしていくことが必要である。

性別役割分業について内閣府の調査(2009)と比較すると、賛成、反対の割合がいずれも低く、意思決定できずにいる割合も多いのが特徴である。(図14)対象者の年齢構成も異なるため、一概に比較することはできないが、内閣府の同様の第7回調査結果(2004)では、本項目に対する賛成は16.1%で、反対は68.5%であった。また、第2回調査(1978)では賛成が50.4%、反対が31.7%であったが、第4回調査(1989)で反対(43.7%)が賛成(30.6%)を上回り、以降第7回調査まで賛成の割合は減少を続けていた。しかし、第8回調査(2009)では、賛成が20.6%と上昇に転じ、性別役割分業へのゆり戻しが見られるのが特徴である。

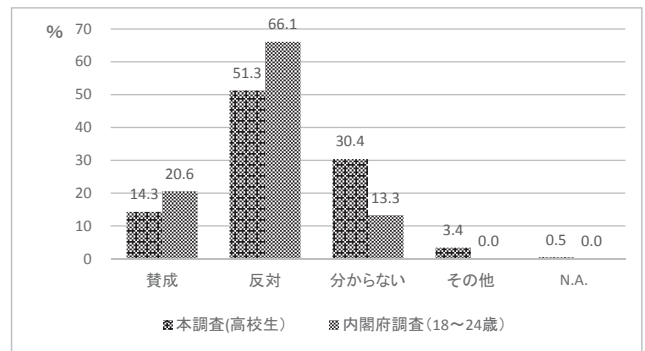


図14 性別役割分業への意識 (n=733、N=1090)

では、若者は日本にどのような未来を描いているのであろうか。日本のイメージを表すものについてたずねた結果と内閣府調査の結果を比較する。(図15)

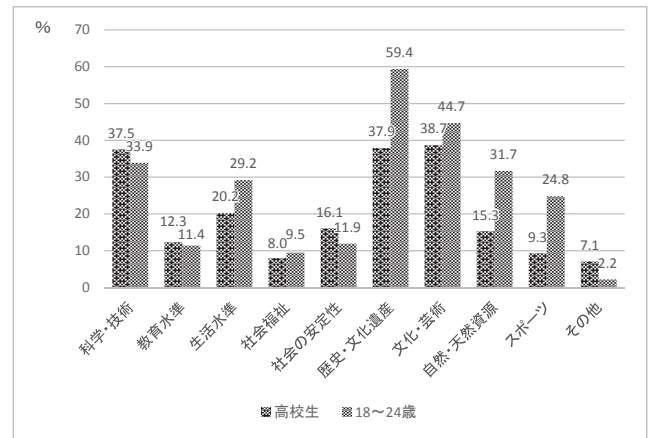


図15 日本のイメージ (n=733、N=1090)

両者が共通にあげているのは、「歴史・文化遺産」「文化・芸術」「科学・技術」「生活水準」「自然・天然資源」などが高い割合である。「歴史・文化遺産」は世界遺産への登録なども大きく影響して再評価されていると考えられる。過去の調査結果と比較しても、これらの5項目は、日本のイメージとしての認識割合が高まりつつある。

一方、日本人の国民性に対してはどのように認識しているのだろうか。同じく内閣府の調査結果と比較したのが図16である。「礼儀正しい」「勤勉」「平和愛好的」は両者に共通しているが、「見栄っ張り」は18～24歳で際立って高い割合となっている。

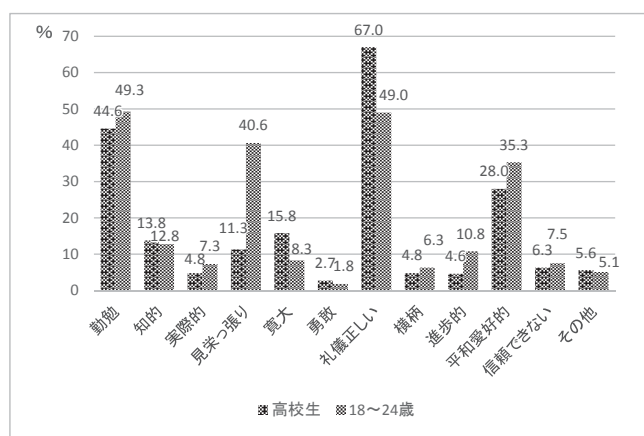


図16 日本人のイメージ (n=733, N=1090)

「礼儀正しい」「平和愛好的」は調査回数を重ねるごとに割合が伸びている項目である。一方、減少しているのが「勤勉」であり、第2回調査では66.5%で第6回調査まで60%台であったが、第7回調査で46.1%まで急落し、第8回で49.3%であった。「見栄っ張り」も第2回調査では52.8%であったが、第7回調査で38.9%、第8回で40.6%であった。

「これから大事にしていきたいこと」として「公共のルールを守る」「親を大切にする」は中学生・高校生に共通している。社会的に責任ある行動をとりたいとする意識は強いことがうかがえる。

(3) 経済的自立

経済的自立に関する発達課題は、表2の⑥である。前述の「(1)精神的自立」の親離れの意味に、経済的自立を見据えるならば、自分の描いた将来像に向かって、自らの個性を伸ばし、具体的な修養や鍛錬に結びつけた活動をしていることが望ましい。しかし、特に高校生は学習時間、テレビ視聴時間、スマホ等の使用時間について学校間で差が見られるものの、調査対象者が3年生であることを考慮すると将来を見据えたキャリア形成への姿勢や意欲・態度の涵養が求められる。それは自らの価値

観の形成にかかわる内容とも関連し、よく見たり聞いたりするものの中で「新聞(一般紙)」の割合が低いことは彼らの視野や価値観の形成に大きな影響を及ぼすと推測される。新聞を活用したNIE授業も盛んに行われているが、要は生徒の生活実感に響くような授業のあり方について検討の必要があるように思われる。

それに代わって「パソコン」利用率は高いがその内容は定かではない。NHK調査(2012)と比較すると、本調査結果では1時間未満が約25%、1～3時間未満が約55～60%であるが、NHK調査では1時間未満が約52～58%、1～3時間未満が20～33%と大きな差が見られ、本調査における生徒の利用時間が多く、不可欠なツールとなりつつある。一方で、情報ツールはいじめや交友関係、生活時間への影響などトラブルも多い実態への理解が必要である。しかし、情報ツールの使用時間の多さは、テレビの視聴時間への影響は見られず、NHK調査の結果とほぼ同じである。(図17)

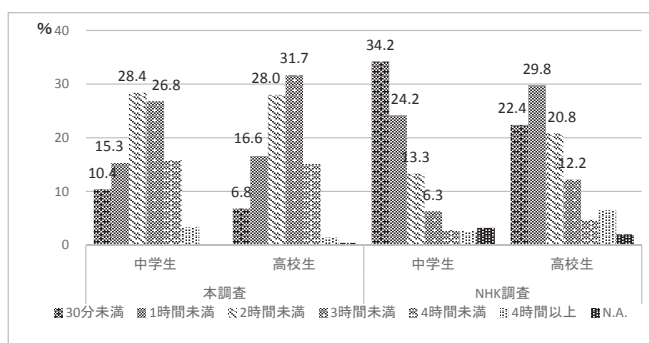


図17 スマホ/インターネットの利用時間 (n=916, N=1142)

通塾率で比較すると、中学生は約15ポイント低く、高校生は約25ポイント高くなっている。本調査の対象者はすべて私立学校の生徒であることも通塾率に影響していることが推察されるが、NHK調査の対象高校生の約2割が私立高校生であることを考慮すると、本調査の生徒の通塾率が高いことがわかる。

また、彼らは日本について、40%以上の生徒が戦争への不安を持ち、福祉が不十分だと感じる一方、よい国であるとも思っている。不安を払拭し、理想とする国づくりについて考える機会が学校教育のあらゆる場で用意されていなければならない。

(4) 生活的自立

生活的自立に関する発達課題は、表2の⑤⑥である。いずれも精神的自立や経済的自立と重複する課題である。生活的自立に絞ってみると、「⑤結婚と家庭生活の準備」に関する項目として「3-16)結婚後の働き方」に関しては男女の意識が異なり、女子校の高校生は「再

就職」の割合が高く、性別役割分業を前提とした働き方の支持が強い。また、ワークライフバランスを目指した取り組みが進展しているが、平日の家事参加率は、女子校・共学校の中学生・高校生とも30%台であるが、男子校の生徒は10%台である。自分でできることは、「朝、一人で起きる」「テレビ番組を選んで見る」「計画を立てて勉強する」ことなど自分自身に関することである。一方、家事は「後片付け」と「部屋の掃除」であり、自分の身の回りに関する家事の実態が見える。こうした実態の中で、働く意識を継続して持ち続けることは困難であろうし、ワークライフバランスの実現は遠いといわざるを得ない。この将来の働き方について、女子の意識を本調査(女子校)とNHK調査で比較したのが表3である。

表3 女子生徒の就労への意識 (n = 417、N=557)

(%)

	対象者	結婚後もずっと働く	結婚したら辞める	出産したら辞める	子どもが成長後再就職する	結婚せずにずっと働く	その他	N.A.
本調査	女子中学生	32.0	13.4	12.4	29.9	9.3	2.1	1.0
	女子高校生	28.4	5.3	11.3	45.3	7.8	1.6	0.3
NHK調査	女子中学生	39.5	8.1	13.7	33.9	—	0.0	4.8
	女子高校生	36.0	7.6	11.2	43.2	—	0.0	2.2

両調査結果とも類似した傾向を示しており、結婚後も働き続けたいとする意識といったん退職し再就職を望む意識とが相半ばしている。本調査の方が職業の継続を望む割合が若干低いが、本調査にのみ採用した「結婚せずにずっと働く」割合を合計するとほぼ拮抗した値となる。生徒は、能力・適性と仕事、子育て、介護、年金など自分と家族を取り巻くさまざまな問題状況を視野に入れつつ自らのライフスタイルを模索しているのかもしれない。ワークライフバランスの浸透とともに、さまざまな働き方も検討されている。働き方の変化は子育て環境や労働環境の整備を要請し、同時に人々の意識変革も要請している。ワークライフバランスの実現に向けて、今一度その理念と構築された社会の構図を確認した施策の展開が望まれる。

(5) 性的自立

性的自立に関する発達課題は、表2の③である。思春期に入り、身体的・心理的な成熟が著しい中学生・高校生であるが、身体の変化と特性、将来への影響に関する自覚に乏しいのが現状である。高校生で40%が身体的・心理的成熟を「自覚していない」と回答している中で、女子校の生徒は約50%に及ぶ実態が明らかになった。表4に見られるとおり、容姿や健康、異性に関する悩みや不安も多い年代であり、そうした悩みに対して適切な

対応や指導が必要であるとともに、情報ツールの発達により無用心なアクセスが事件や病気に関連することもあり、発達段階に応じた適切な指導が必要である。

表4 身体に関する悩み・心配事 (n=733、N = 1090)

(%)

	対象者	異性のこと	健康のこと	容姿のこと	悩みはない
本調査	高校生	7.8	12.7	18.1	13.8
内閣府調査	18~24歳	12.8	21.1	11.1	17.9

(青木幸子)

VI 発達課題をクリアするための 題材開発と授業実践

5つの自立の観点に関連した本調査項目の結果と全国調査の結果について、比較分析した。その中から親離れをし、新たな人間関係を築いていくことに関連して、性的自立意識の低さが目立った。援助交際・出会い系サイトへの意識とともに、次代の命を生む性として自らの身体を大切にすることを主眼として題材開発に取り組んだ。

1. 題材開発の趣意

中学校学習指導要領(平成20年3月)によると、“技術・家庭”の目標は、「生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技術の習得を通して、生活と技術とのかかわりについて理解を深め、進んで生活を工夫し、創造する能力と実践的な態度を育てる」¹⁴⁾ ことにある。また、家庭分野においては、「生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、家庭の機能について理解を深め、これからの生活を展望し、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる」¹⁵⁾ と明記されている。このように、生活的な自立を目標としている“技術・家庭科”であるが、実際に、課題をもって生活をよりよくする(生活の主体者になる=自立する)ためには、生活的自立の他に、精神的自立、社会的自立、経済的自立、性的自立という大人になるために獲得すべき5つの自立が必要であり、技術・家庭科では、それらの5つの自立を獲得することを目標に授業を行っている。

本調査項目の中で、特に男女間に意識の差があった“性的自立”を題材とした授業実践の報告をするとともに、年齢に合わせた発達課題達成のために必要な自立意識の育成には、学校教育の場において、どのような実践が有効であるか、題材開発を含めて検証する。

2. 題材計画

(1) 題材名

A：家族・家庭と子どもの成長

第1章「家族と家庭生活」

6. 将来の自分の家族や家庭

使用教材：新・技術家庭 家庭分野(教育図書)

(2) 題材のねらい

- ① 今の自分と家族を見つめることで、これからのよりよい家庭生活について考えるとともに、そのために必要な自立に向けて大切なことを理解させる。
- ② 男女は共に、対等な構成員として社会に参加させ、男女共同参画社会の実現に積極的に取り組む姿勢を養う。

(3) 指導計画

題材名	小題材	目標	配時	実践
将来の自分の 家族や家庭	大人になるとは、 どういうことか	大人になるために獲得すべき5つの自立について理解し、自分の将来へつなげる力を養う。	1	[実践1]
		自立のピラミットの一番上に性的自立があることの意味を理解し、生命の継承者としての観点を学ぶ。	1	
	性と生命の誕生	生命の誕生のしくみを理解し、産む性としての自覚を培う。 *男女の身体や心の違い(生殖機能の成熟)	1	
		*生命の誕生 ー受精と出産ー	1	
		*性衝動の発現と性行動	2	
		*性行動がもたらす結果 (妊娠・中絶・性感染症・心に傷を負う)	2	
		*中高生を取り巻く性に関する問題	1	[実践2]
*妊娠の徴候(胎児の成長と母体の変化)	1			

次單元 「幼児の心身の発達」へ続く

3. 実践報告

[実践1] 小題材：大人になるとはどういうことか？

(生命の継承者として～自立するために大切なこと～)

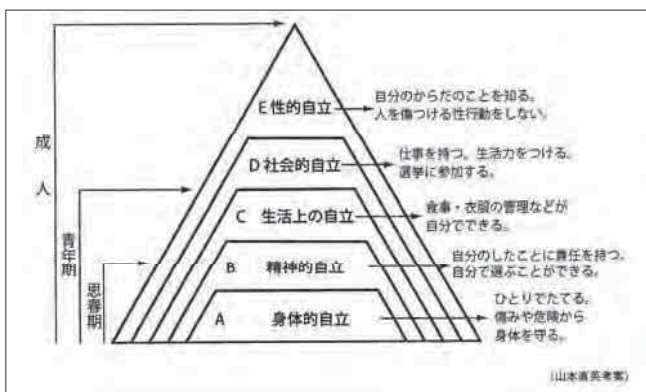
(1) 小題材の設定理由

現在、生徒を取り巻く環境は日々変化し、家庭生活も多様化している。中学生の時期にあたる生徒は、家族に依存して生活をしているが、家族を必要だと思う反面、家族から干渉を受けずに生活したいという自立心を芽生えさせる時期でもある。本時は、「将来の自分の家族や家庭」の題材の中で、家族の役割を再認識させ、家族の大切さを考えさせるとともに、大人になるために獲得すべき5つの自立(自立のピラミッド)¹⁶⁾を用いて、自立する(生活の主体者となる)ために必要なことを理解させる。と同時に、学んだことが、自分の現在と将来の生活に生かせるようになることを目標とし、生命の継承者としての観点から、自分の性を理解し、自立のピラミットの一番上にある性的自立の意味へとつなげていきたい。

(2) 対象生徒… 3年X組 女子32名

(3) 本時のねらい

- ① 大人になるために獲得すべき5つの自立(自立のピラミッド)について理解させ、自立するために必要なことを認識させる。
- ② “自立のピラミッド”に当てはめながら、学んだことを自分自身のことに置き換え、日々の生活や将来の生き方へつなげる姿勢を養う。
- ③ 生命の継承者としての観点から、“自立のピラミッド”の一番上に“性的自立”があることの意味を考えさせ、次時の学習「心と身体の変化(第二次性徴期の発現)」へつなげていく。



(4) 授業展開

過程	指導項目	学習のながれ	資料
導入	1. 大人になるとは、どういうことか	<ul style="list-style-type: none"> ・ どんとき大人になったと感じたか、どんなことができたか大人か、問いかけ、プリントに各自、記入させる。 ・ “大人” から連想するキーワードを、ブレインストーミング法で黒板に列記させる。 ・ 列記されたキーワードをもとに“大人になるとはどういうことか”を班で話し合わせる。 ・ まとまった意見を、各班の代表者に発表させる。 ・ 発表を聞き、自分自身の身に置き換えて自立度のチェックシートを使い、点検させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ プリント ・ 自立度チェック
展開	2. 自立するために大切なこと 3. 生命の継承者として	<ul style="list-style-type: none"> ・ 思春期の心身の特徴を確認しながら、大人に向けて自立するために大切なことを“自立のピラミッド”をもとに考えさせる。 ・ “自立のピラミッド”の中でも、一番上位にある“性的自立”について、生命の継承者としての観点からも学んでいくことを伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自立のピラミッド
まとめ	4. まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習する中で感じた“大人になる”“自立する”ために必要なことを、まとめさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ワークシート

(5) 授業内容

① 自立度チェック

(%)

		いつも (4点)	だいたい (3点)	たまに (2点)	しない (1点)
A 身体的自立	1 朝一人で起きる	39	35	26	0
	2 ベッドの片付け	32	42	19	6
	3 掃除	39	35	23	3
	4 服の管理	65	19	16	0
	5 服選び	90	10	0	0
	6 服の補修	16	29	26	29
	7 道具の片付け	48	39	10	3
	8 食事の用意	71	13	10	6
	9 服の購入	26	32	23	19
B 精神的自立	1 挨拶	74	23	3	0
	2 冷静	32	39	29	0
	3 したくなくてもやる	39	45	16	0
	4 穏やか	42	48	10	0
C 生活上の自立	1 食事作り	16	26	45	13
	2 食事の片付け	35	16	42	6
	3 ゴミ出し	32	29	19	19
	4 掃除分担	29	29	16	26
	5 買い物の協力	39	23	35	3
D 社会的自立	1 お小遣いの使い道	55	42	3	0
	2 お小遣い不足にならない	35	42	16	6

(南野, 2011, P37より)

※個人平均 59.6/80点 (74.5%) 最高点 73点(91.3%) 最低点 48点(60%)

②あなたが考える『大人になる』『自立する』とは(生徒の感想より抜粋)

A. 身体的自立に関する感想(該当なし)

B. 精神的自立に関する感想

- ・ 自分自身、自分の身の回りのことはもちろん、自分の周りにいる人や家族を大切にできる。
- ・ 人との接し方をしっかりと理解し、自分も他人も大切にできる人を「大人」といい、一人でも生きていける。
- ・ まずは、自分自身が精神的に自立することが大切。

C. 生活上の自立に関する感想

- ・ 自分だけで生活できる、つまり自分の事は自分が責任を持って行えること。
- ・ 親の力を借りずに生活することができる。

D. 社会的自立に関する感想

- ・ 成人して、お酒やたばこ、ギャンブルなどの自由を得て、自分自身のことに責任を持つこと。
- ・ 親離れをし、一人暮らしをすることも大人になるということだと思う。
- ・ 自分一人できちんと生活を賄っていくこと。
- ・ お酒を飲んだり、タバコを吸うことが許されるようになる。大人になったら自分で責任を取るようになる。
- ・ 自分で働くことができ、お金を稼ぐことができることや責任を持つこと。
- ・ 社会の一員として、働いて経済的に自立をし、自分の身の回りのことは自分で責任を持って親がいなくても

やっていけるようになること。

- ・自分が自由になる代わりに、その行動に責任を取らなければならない。
- ・子供の頃にはできなかったことが沢山出来るようになったり、法律上でも大人と認められること。
- ・成人となり、人との関わり方や、人としての礼儀などを知った上で社会に貢献することができる。
- ・自分の行動に責任を持ち、自分で判断し行動できる。
- ・人に頼らず、自分で自己管理をして、政治に関わったり、ギャンブルや競馬などの賭博をしたりすることもできる。
- ・成人式を迎え、働くようになり、自分のお金で好きなことができる。
- ・経済的に自立する、つまり衣食住を自分の稼いだお金で賄うことや精神的に自立する。考え方が違う人とも冷静に話し合える。
- ・大人になるとは、ただ大人になるというわけではなく自立でき、しっかりとした社会の一員になることだと思う。
- ・大人になることは、色々なことから解放され自由になると思われがちだが、憲法など自分の責任が重くなっていくと思う。
- ・社会人として、責任感、判断力、思いやりなどを持ち、周りの人の意見に耳を傾けられる。

E. 性的自立に関する感想

- ・自分の後の世代に受け継いでいく準備ができています。
- ・性的自立をし、結婚をしたり子供を産んだりして家族を持つようになる。
- ・自分の性のことを理解し、新たな命が生まれることへの関心も深めていくこともだと思う。

F. その他の感想

- ・大人になると、子育てや仕事で自由がなくなるのではないかと思いましたが、子供を産むという選択は自分で選べるのでそれも1つの自由だと思う。
- ・自立するといっても、5段階あり上に行くにつれて自分の責任が重くなっていくと感じた。
- ・単に年齢で区切ることはできない。

(6) まとめ

中学生のこの時期は、親や教員など周りの大人から精神的に自立しようとする時期であり、自分の成長過程を確認し、周りの大人からどのような支援を受けてきたのかを理解することは、自立への一歩となる重要なことである。授業の中で行った自立度チェック¹⁷⁾、また、授業後の感想から生徒の自立意識を推察すると、「身体的

自立」について、自立度チェックの結果は、高得点の割合が高く、すでに獲得している部分が多いことがわかる。そのため、具体的な感想の記述がなかったと思われる。このことは、「身体的自立に」関しては、思春期・青年期の課題としてではなく、すでに獲得すべきこととして意識している現れと言える。「精神的自立」「生活上の自立」に関しては、自立度チェックの結果から、青年期までに獲得しておくべき課題として認識し、取り組む努力をしていることが読み取れる。また、「社会的自立」に関しては、学校での学習やキャリア教育、さらに本時の「大人になるとはどういうことか」という題材に関連付けて、たくさんの記述があった。このことから、「社会的自立」を青年期以降の課題として捉え、今後獲得すべきこととしていることが考えられる。しかし、「性的自立」に関しては、感想の記載が少なかった。このことは、学校教育の場で、性と自立を結びつける教育の機会が少ないことが関係すると思われる。この結果から、特に女子中学生・高校生に対して、生命の継承者としての観点から授業を展開することの重要性を強く感じる。



実践2 小題材：今を生きる ～売春する中高生について～

(生命の継承者として ～自立するために大切なこと～)

(1) 小題材の設定理由

現代社会では、メディアや雑誌、インターネットやSNSを通じて、簡単に多くの情報を入手することができる。しかし、そのような情報化社会に氾濫する情報の中には、現実とは違った情報も多く含まれており、女子中学生・高校生にとって、危険性が心配されることも多い。

本時は、具体的な事例として、社会的問題となっている“JKビジネス(援助交際)”を題材とし、性に関する間違った価値観や誤解によって生じるさまざまな問題は、当事者(女性)だけの問題ではなく、社会的な問題として捉えることの重要性を理解させる。また、本調査結果を踏まえ、援助交際や売春に対する意識が男女間では大きな違いがあることを示唆する。同時に、正しい性の知識から、自分の性に誇りを持ち、“次代の命を生む”ということを主体的に選択できる姿勢を養うことを目標とし、次回の授業である「妊娠の徴候(胎児の成長と母体の変化)」へとつなげる。

(2) 対象生徒…中学3年X組 女子32名

(3) 本時のねらい

- ① “援助交際”、“JKビジネス”の実態を伝え、女子中・高校生が“買われる”側にあることを理解させる。
- ② “売春する中・高校生”や“居場所のない中・高校生”に対し、自分ができることを考えさせる。
- ③ “性”の学習を通して、生命の継承者としての観点から、“自立のピラミッド”の一番上に“性的自立”がある意味を考え、今の自分にとり大切なことを認識させる。

(4) 授業展開

過程	指導項目	学習のながれ	資料
導入	1. 売春する中高生について、どんなイメージを持っているか	・援助交際や売春をする中高生にどんなイメージを持つか、男女中高生のアンケート結果を基に想起させる。 ・“性”をめぐる、社会問題になっている“援助交際”“JKビジネス”の実態を伝える。	・プリント
展開	2. 売春する中高生の現状や背景を知る	・“援助交際”や“JKビジネス”に陥りやすい中高生の現状や背景を新聞記事から読み取らせ、学校や家庭から孤立した生徒に対す自分が出来ることを考えさせる。 ・その中高生に、自分の思いを込めたメッセージを書かせる。 ・自分の書いたメッセージを元に、班の中で話し合わせる。	・メッセージシート
まとめ	3. まとめ	・“性”の学習を通し、生命の継承者としての観点から、“自立のピラミッド”の中でも、一番上に“性的自立”がある意味を考え、まとめさせる。	・ワークシート

(5) 授業内容

① “難民中高生”に手紙を書こうーあなたの近くに居場所のない“難民中高生”がいると仮定しメッセージを送ろう(生徒メッセージより抜粋)

A. 居場所(まわりに助けてくれる人がいる。まわりを信じて)

- ・「やむを得ない」と考えている方も多いと思うが、そんなあなたたちに手をさしのべてくれる人達がいることを知って欲しい。
- ・私は、社会全体の皆さんへの偏見・差別がいつかなくなるように努力したい。だから、皆さんはもっと自分の身体を大切に、将来、後悔しない生き方をして欲しい。
- ・自分と同世代の子が、性被害に遭っていると知ってとても悲しくなりました。しかし、それは誰にでも起こりうることで近い存在に感じます。理由は様々ですが、それを理解してくれる人がいることを知ってください。
- ・私立学校に通わせてもらっていて周りに相談できる人がずっといて育ってきた私には、そのつらさの1/10位しか分からないし、「あなたなんて、分からない」って言われれば何も言い返せない。でも、こうして話を聞いて心を痛める友達はあるんだということを知ってください。「居場所がない」なんて言わないでください。間違った方向に進まないで下さい。諦めるのではなく自分で居場所を求めていけば相談できる友達もあなたのことを本当に考えてくれる大人もいるはずですよ。
- ・直接助けてあげることは出来ないかもしれないけれど、自分は1人と思わずに相談してください。心配していることを知って欲しい。
- ・どこにも居場所がないと思っているかもしれないけれど、頼れる大人がいらないと思っているかもしれないけれど、みんなを支えてくれる大人はいて、居場所も作ってくれる。相談しなければ、今の状況は悪化するだけ。もっと自分の体を大切に。自分は世界に一人しかいない貴重な人間として生きていることを理解してほしい。
- ・今の私は本当に無力です。皆さんが言ってほしいこともわからない。でも困っている人がいたら助けたいのが人間です。「助けて」その一言を誰かに言えば絶対助けてくれるはずですよ。私だってできるかわからないけど、できる限り頑張るから。
- ・私を含めて、みんなを助けたい、救いたいと思っている人はたくさんいます。SOSを出してください。そ

して、自分が望んだ人生を送れるようにこの先、生きていってほしいです。

B. 自分(自分が居場所。自分を頼って)

- ・私が、あなたの気が少しでも楽になるような居場所になりたい。自分の気持ちを人に話すだけでも心の荷が軽くなると思います。私は、何も出来ないけれど話を聞くことなら出来ます。何も話したくなければ一緒にいます。力になりたい。1人で考えず、私に頼って下さい。
- ・食べ物がないなら、私の食べ物を分けます。泣きたいのなら肩を貸します。居場所がないなら友達になります。私には、あなたが見えています。
- ・生活が苦しくて困っているなら、一緒にどうするか考えよう。少しでも悲しい思いをする人が減って欲しい。そして、幸せな生き方をして欲しい。
- ・危険な仕事なんかやらないで。私も一緒に探すからよい仕事見つけようよ。
- ・お互い助け合える仲間になろう。何かあったら、相談してね。
- ・最近色々あるみたいだけど、大丈夫？困っていることがあるなら、いつでも私に相談してね。あっ、そういえばクッキーを作ったから、明日私の家に来て一緒に食べよ。

C. 感想

- ・どんなに辛くても傷ついても自分の心と身体は絶対に大事にして下さい。
- ・ちゃんとした知識を身に付けて、危険なことには手を出さないで欲しい。
- ・私は、今まで売春をする人達の殆どがお金を手に入れることだけが目的だと間違ったとらえ方をしていました。1人1人に様々な背景があるのだと知り、他人事だと思わずに、向き合っていきたいと思うようになりました。まずは、現状を知り、一緒に考えていきたいです。
- ・あなたがどれだけ苦しめられ、傷つけられたのかを考えると、とても胸が痛みます。
- ・自分の体をもっと大切にしてほしい。手に入るのはお金だけ。思いやり、優しいこと…何も手に入らない。お金よりも大切なものはたくさんある。
- ・“援助交際”という言葉だけ聞くと、まるでいいもののように聞こえてしまいます。それが違うことがわかりました。
- ・何もできないけど、まずは、私も他人事だと思わず、皆さんの状況をどんどん知ることが大切だと思いました。

② “自立のピラミッド”の中で、性的自立が頂点にある理由を考えてみよう(生徒感想より抜粋)

A. すべての自立が出来てから

- ・性的自立が頂点にある理由は、自分だけの問題ではないからだと思う。ピラミッドの中で、身体的・精神的・生活上の自立まで、ある意味自己中心的な考え方も構わないし、親などの力を借りて育つことが出来るが、性的自立は相手の気持ちを考えなくては行けない。自分のことをよく理解した上で相手を思いやり大切にするという2つの観点から考えなくてはならない。それが出来たらやっと本当の大人になれると思った。
- ・自分のしたことに責任を持つこと(精神的自立)が出来なければ性的自立は出来ない。なぜかという、もし妊娠した場合それは自分がやったことなどで逃げる事ができない。だから、自分のしたことに責任を持ち出産するかしないかを自分で選ばなければならない。身体を守ること(身体的自立)も性的自立には必要だ。また食事・衣服の管理など自分ですること(生活上の自立)が出来ていないと自分や子供を育てる事も出来ない。また、子供を育て生活していく上ではお金が必要だ。そのことから社会的自立もしていなければならない。このことから、性的自立は自立のトップであると思った。
- ・全てのことが出来るようになって性的自立ができると思う。今は、精神的・肉体的に成熟した人になることが必要。しっかりと知識を持った上で、自分で考えて責任ある行動をとれるようになりたい。そのためには、人に頼り過ぎず、困っている人がいたら積極的に助けてあげることも心がけたい。

B. 命の大切さ

- ・私たちの世代が、次の世代へ命をつないでいくためには、多くのことを自分で理解しておかなくてはならないし、今、世の中ではどんなことが起きているのか現状を知ること大切だと思った。そして、そのことを知った上で、今後、自分はどうしていくのか考えることで自立へ繋がると思う。
- ・性を理解し、生命の継承者になって、次の時代に命をつなぐために性的自立が頂点にあると思った。
- ・性行動は、「子供が出来る」ということに繋がるかもしれない。「子供が出来る」ということは新たに生命が生まれるということで、私たちはその子を尊び、良い環境の中でその子を育てていかなければならない。もし、誤った判断をして望まない妊娠をしてしまったら、自分の夢をあきらめて、自分の子供を幸せにする

ために子供に尽くす、もしくは中絶するということになる。全ての命が尊いものであるからこそ、不幸な子供が0になるべきだからこそ、性行動の判断というのはとても大切なものであると思う。そういうことから、性的自立が自立の頂点にあるのではないか。

- ・子供を産み育てる事まで考えておかなければならない。社会にも目を向け、子供を取り巻く環境についても正しい理解をして、今の自分に出来ることも見つけて行動していきたい。
- ・子供が生まれたら、自分以外の生命とも向き合わなくてはいけなくなる。責任の重さを感じる。
- ・よくニュースなどで「赤ちゃんが捨てられている」ということを耳にするが、もしそれが、誤った性行為によるものだとしたらとても悲しい事だと思った。ストリートチルドレンの話などを聞いても、「子供を育てる」ということは、責任が伴うものだと感じる。

C. 感想

- ・子供を産める身体になったとしても、その子を健やかに育てるための社会的自立や精神的・生活上の自立が出来ていないと性的自立は成り立たない。
- ・人生において生き方を変えることになるかもしれない妊娠・出産。大切な選択になることを常に心にとめておくべき。
- ・私たちは、次の時代に生命をつなげていくという大きな役目を担っている。そのために性的自立が必要だ。性的自立をするためには自分の身体を知り、異性の身体を知ることが大切だ。また、性行動やS T Dなど性に関する様々な知識を持つことが必要だ。これは、人を傷つけないために、また、自分自身が正しい選択をするために必要なことだ。
- ・性欲は、人間の本能でもあるので、自分自身で自立しようとしなければ出来ない。だからこそ、いろいろなことを知って自立しようと努力することが大切だと思う。
- ・性交の目的の一つである「種族保存」が出来なければ、身体的・精神的・社会的自立はできないと思う。

(6) まとめ

男女共同参画社会の実現のためには、人権教育の観点からも、異性に対する思いやりの心を育て異性との良好な関係を築くことが大切である。そのためには、「異性の心と体を理解すること」「異性を尊重する態度を身につける」ことと同時に、自分の“性”に対する正しい意識を身につけることが重要なことである。

本時の小題材である「今を生きる～売春する中高生～」は、性ビジネスに手を染めざるを得なかった背景を、被

害少女たちの言葉で語り実情を訴えた「私たちは買われた展」¹⁸⁾を参考に、トピック学習的な試みとして取り組んだものである。今まで表に出なかった被害少女たちの生の声は、生徒たちにとって、より現実的なものとして捉えることができる題材になると考えた。

本時の授業を通して、被害に遭う少女(子ども)は、実際には、保護を必要としている少女(子ども)たちであり、児童福祉のあり方、そして、社会全体で支える仕組みについても学んで欲しい。しかし、行き場のない少女(子ども)たちに、一見優しく手を差し伸べて近づき、少女(子ども)たちがだまされていく現状がある中、当事者の一人は、「被害に遭う少女(子ども)を増やさないためには、彼らの置かれている状態や状況を知り、その背景を見直すことが必要」¹⁹⁾と訴えている。実際に女子中学生・高校生と接している教育現場で、本時のような題材を取り上げ、女子生徒へ伝えることの大きさを感じるとともに、性と自立をつなげた人権教育の観点を取り入れた授業実践として、今後もさらに進化をさせたい。

VII. まとめと今後の課題

文部科学省は、キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議の報告書の中で、子どもたちの生活・意識の変容として「精神的・社会的自立が遅れ、人間関係を築くことができない、進路を選ぼうとしないなどの子どもが増えつつあること」²⁰⁾を確認している。そのような状況への対策として、自立心が芽生える中学生の時期に、自分を振り返り、さまざまな環境に目を向けさせ、課題意識を持って生活することの大切さに気づかせることは、良好な人間関係を築き、自分の進路を切り拓いて行くための力を身につけさせる上で、とても重要なことである。

すべての教育活動は、子どもたち一人ひとりの生き方や進路と深く結びついている。どの教科においても、自立と共生の視点に立ち、一人の人間として、社会人として自立させることを目標とし、各教科の取り組みによって、子どもたちが自らの将来に関心を持ち、何事にも前向きに生きていく力を養うことができる。そのように、子どもたちが生きていく力を身につけ、社会の変化に流されることなく、自立していくことが教育活動の最終的な目標となる。

本稿では、中学校・高等学校時代の発達課題達成のために必要な自立意識の育成について、中学技術・家庭科

の実践例を報告した。自立をめざす教育活動は、子どもたちが「今の自分はどのような自分なのか」という自己分析と、「将来どのような自分になりたいのか」という進路選択を主体的に考え、より良い自己実現を目指すことを支援する活動である。学校教育では、主に保健体育、家庭科、道徳及び総合的な学習の時間などで取り組まれている。しかしこの活動は、学校におけるあらゆる教育活動を通じて行われるものであり、全教科・領域等において子どもの発達段階に応じた内容を計画的・系統的に実施することが求められる。本報告事例が他教科・領域など自立に関する教育活動の一環として役立つなら幸いである。

(崇田友江・鮫島奈津子)

謝辞

本研究の調査にご協力くださいました学校の教職員、生徒の皆様にご心より感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

- 1) 平成26年度東京家政大学女性未来研究所活動報告書. 東京家政大学女性未来研究所, p.9
- 2) 同上, p.24-25
- 3) 平成27年度東京家政大学女性未来研究所活動報告書. 東京家政大学女性未来研究所, p.12-13
- 4) 中村達也他編(2016). 中学校社会「公民」, 教育出版
越智貢他編(2014). 高等学校「倫理」, 第一学習社
佐藤文子他編(2016). 高等学校「家庭総合」, 大修館
文部科学省(2014). 私たちの道徳中学校. 廣済堂あかつき株式会社
- 5) 佐藤文子他編(2016). 高等学校「家庭総合」, 大修館, p.16
- 6) 文部科学省(2008). 中学校学習指導要領, p.112-115
- 7) ハヴィガースト・児玉憲典・飯塚裕子訳(1997). ハヴィガーストの発達課題と教育, 川島書店, p.1
- 8) 同上. p.3
- 9) 同上. p.i
- 10) 同上. p.7-8
- 11) 同上. p.9-10
- 12) 内閣府(2009). 第8回世界青年意識調査.
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/pdf/gaiyou.pdf> (2016.10.18)
NHK(2012). 中学生・高校生の生活と意識調査.
<http://www.nhk.or.jp/bunken/summary/yoron/social/pdf/121228.pdf> (2016.10.18)
- 13) 西文彦(2015). 親と同居の壮年未婚者 2014年.
<http://www.stat.go.jp/training/2kenkyu/zuhyou/parasi11.pdf> (2016.12.16)
鈴木 亘(2011). 10年後のパラサイトシングルとその家族.
<http://cis.ier.hit-u.ac.jp/common/pdf/dp/2011/dp526.pdf> (2016.12.16)
- 14) 文部科学省(2008). 中学校学習指導要領, p.98
- 15) 同上, p.100
- 16) 永畑道子監修・山本直英他編(1989). 生きる 男と女の自立・共生. 実教出版, p.46
- 17) 南野忠晴(2011). 正しいパンツのたたみ方. 岩波書店, p.37
本書で「身体的自立」に包摂された項目は、本報告書では「生活的自立」に近い項目である。自立の分類はさまざまであるが、授業では本書の分類に沿って実施した。
- 18) 私たちは『買われた』展(2016) 主催 Tsubomi (Colabo とつながる少女によるグループ/一般社団法人 Colabo).
一般社団法人 Colabo (代表: 仁藤夢乃) は「すべての少女に衣食住と関係性を。困っている少女が暴力や搾取に行き着かなくてよい社会に」を合言葉に、虐待や性暴力にあうなどした女子を支える活動を行っている。
- 19) 仁藤夢乃(2013). 難民高校生. 英治出版, p.15
- 20) 文部科学省(2004). キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書. p.5

女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランス

～働きながら自分らしく生きるために～

宮地孝宜 Miyachi Takayoshi , 平野順子 Hirano Junko , 早瀬郁恵 Hayase Ikue
並木有希 Namiki Yuki , 田中恵美子 Tanaka Emiko , 太田八重美 Ota Yaemi

本研究プロジェクトは、本学のキャリア教育推進に役立つ知見の提供、他大学研究者とのネットワーク形成による質の高い情報取得、研究交流のプラットフォームの構築、ワーク・ライフ・ケア・バランスに関する研究の成果をキャリア教育に活用することによる自主自律に向けた学生の意識改革を目指し、3年間の研究活動を行いました。

「大学でワーク・ライフ・ケア・バランスを考える会」活動3年間のまとめ

並木有希 Namiki Yuki
田中恵美子 Tanaka Emiko

1. はじめに

この取り組みは、研究プロジェクト「キャリア教育について」の一貫として計画されました。本学や他の都内の女子大学におけるキャリア教育の実態を学び、それを踏まえて、本学の学生のニーズを探ってキャリア観についての現状や課題を把握し、これからの時代の女子大学のキャリア教育のありかた、可能性について検討し、よりよい教育を提供することを目指します。

「大学でワーク・ライフ・バランスを考える会」は、その中心的なテーマとなる「ワーク・ライフ・バランス(以下WLB)」についての総合的な研究会です。2015年度より女性未来研究所の方針に合致するように「ワーク・ライフ・ケア・バランス」という名前にしました。具体的には、①大学関係者を中心として当該テーマに興味を持つ人のネットワークを構築すること②研究成果の発表、および情報収集のための研究会・シンポジウムを実施して、研究成果を本学教職員、学生、学外研究者へ発信すると共に、参加者等から情報を得ることの2つを目的としています。3年間の活動で、7回の研究会を持ちました。

2. 2014年度の活動

2014年度は、会を立ち上げ、3回の会合を持ちました。

平成26年9月27日の第一回会合は、東京家政大学板橋キャンパスにて産婦人科医・国立保健医療科学院生涯健康研究部主任研究官の吉田穂波氏を講師とし研究会を開きました。「「受援力」ってなに?—あなたも私も「楽」に「生き生きと生きられる方法」をお知らせします—」と題し、吉田氏の提唱する「受援力」について、アサーティブ・コミュニケーションの考え方を取り入れた「抱え込まず・あきらめず・自分を尊重する」働き方についての講演・ワークショップを行いました。3カ国において5人の子育ての経験/産婦人科医として災害時の妊産婦支援体制整備の研究/地域・学校でのコミュニティ作りの経験/政府有識者会議参加など、表記のテーマについて広い知見を持つ講師の知見を活かし、WLBに関する諸問題の提示・対応の方法を学んだ他、会の今後の活動の可能性について、学内外の参加者と意見交換を行いました。

平成26年12月4日の第2回会合は、在日本米国大使館との共催で研究会を行いました。東京アメリカンセンター(港区・虎ノ門)において、本学専任講師並木有希が担当し「ミシェル・オバマ大統領夫人から学ぶライフ・ワークバランス」と題し、アメリカ大統領夫人の講演を紹介しながら、WLBについて世代間の交流の重要性について講演を行いました。2014年6月にワシントンDCで開催されたThe White House Summit on Working Families Summitで、弁護士であるオバマ夫

人が、自身の体験を踏まえ「働く女性の環境」と「現状をどのように飛躍させることができるか？」などを対談形式で話したビデオを見た後、講師の専門であるアメリカ文化研究の知見から、アメリカのワークライフバランスおよび女性のエンパワメント事業のあり方について、具体例を紹介しながら、当該テーマについて出席者と討論しました。この研究会は、在日本米国大使館広報部およびフルブライト同窓会との共催で開かれ、米国国務省奨学金授与者に広くご参加いただいて、大学関係のみならず幅広い層と意見交換・ネットワークすることができました。

平成 27 年 3 月 28 日の第 3 回会合は、東京家政大学板橋キャンパスにて、平成 26 年 11 月 29 日に開催された「丸の内イクメン部フェスティバル」での調査成果を踏まえて、男性の育児参加についての研究会を開催しました。丸の内イクメンプロジェクトの活動紹介の発表、プロジェクトで行った調査の結果について平野先生から報告、そこで抽出された課題について、本学児童学科尾崎先生とナースリールーム井桁先生にそれぞれのお立場からお話いただき、それらを基に、討論・意見交換を行いました。

3. 2015 年度の活動

第 2 年目にあたる 2015 年には、会での成果を元に研究所の取り組みを紹介する出張授業を行い、また、学生を対象にして、女性のライフコースにおいて知っておくべき身体のことについて学ぶ講演会を行いました。

2015 年 5 月 26 日、東北大学グローバルラーニングセンター助教水松巳奈先生担当の授業「グローバル社会で活躍する人材のための国際教養」において、「女性と社会進出」の題目で、本学准教授並木有希がゲストスピーカーとして講演する機会をいただきました。授業目的は「女性の社会進出」の現状と課題について理解し、また、その理解を踏まえて学生が具体的なアクションを取れる」と設定されていました。これは、女性未来研究所のワーキングプロジェクト「女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランスグループ」のそれと合致するものです。そこで、昨年度からプロジェクトで行っている研究会「ワーク・ライフ・ケア・バランスを考える会」の活動について、またそこで得られた気づきと行動のきっかけについて、学生によるワークを挟んだ講演を行いました。

今回の授業は学部 1 年生対象で、将来的に海外留学

や就職を考える意欲の高い学生ばかりでした。特に男子学生が多く、まだ将来のプラン作りにはピンとこないという正直な反応もあり、また、はじめて自分の両親、特に母親のことについて客観的に考えたという声もありました。とかくライフプランは、育児・出産との兼ね合いで、女子学生に考えさせることとなりがちですが、本授業全体のテーマである「国際教養」の通り、自分の進路と将来のプランについて、大きく多様性のある文脈において、自分の立ち位置を考えることこそ教養であるという立場が今後重要になると考えました。男性だからこそ、若いからこそ、海外で活躍する人材だからこそ、ライフプランをキャリアプランと切り離すことなく「社会の現状と、自分の希望を正しく把握し、知っておくことが重要である」というメッセージを発信して、大学の進歩的な姿勢を明らかにするものでした。このような東北大学の先見性を見習い、本学でのキャリア教育にも取り入れて行きたいと考えました。

2016 年 1 月 30 日、講師に中島かおりさんを招いて「女性として生きることー 20 代の女性に知っておいてほしいことー」と題してお話いただきました。講師の中島かおりさんは、助産師であり、前年 12 月に「にんしん SOS 東京」という団体を立ち上げ、思いがけない妊娠によって困難に陥った人たちの支援を行っています。講義ではご自身がキャリア中途での「思いがけない妊娠」によって出産、育児が楽しめなかったこと、やがて自らの第二子出産を通して助産師という仕事に出会い、学びなおして地域で活動できる助産師を目指したことなど語っていただきました。その後、助産師という仕事と日本の妊娠・出産の歴史的变化をご説明いただく中で、出産が病院に隔離されていくと同時に助産師も病院へ、そして出産とその後の育児が孤立していくことが語られました。

続いて生物としての女性の体について、そして生物的な子どもの産み時と社会的な産み時についての議論となり、女性は女の子を妊娠したとき、その胎児の子である孫になる卵子まで体内に抱えているということや、母体としての最良の時期である 20 代から 30 代の中絶が、避妊技術が進んでいるとはいえ、増加していることなどを説明いただき、妊娠環境の重要性、生物としての女性と社会の中での女性の立ち位置の乖離を認識することとなりました。

そのような中、思いがけない妊娠によって苦しむことになる（主に）女性たちと小さな命をどう救っていくのか。にんしん SOS の活動は、決して産むことを強制す

るのではなく、その人の産み時を考え、場合によっては産むことと育てる事を分けて、生まれてくる命を守る活動であることが語られました。

感想には、当たり前と思っていた女性としての自分の体のこと、妊娠・出産という営みについて改めて知ることが多かった、また自分の産み時はいつなのか考えていきたいなどの意見があり、学生だけでなく保護者や教員も含め参加したそれぞれが知ることの多い講演となりました。

4. 2016年度の活動

最終年度に当たる第3年目は、別途実施された卒業生調査の結果に基づいて緑苑祭でのシンポジウムを主催し、また、キャリア教育学会に出張して国内外の大学におけるキャリア教育の取り組みについて最新の知見を得ました。最後に今までの活動の総まとめとして、さらなるネットワークの契機を作り新しい発展の可能性を探るために、在日本米国大使館と共催シンポジウムを企画・開催しました。

2016年10月26日の緑苑祭においては、二部制のシンポジウムを開催しました。第一部では、雑誌『つるとはな』編集長の岡戸絹枝さんに「教えて先輩!」というタイトルでご講演をいただきました。それに続く第二部としては、2016年4月に行われた卒業生アンケートの自由記述部分から、大学で学ぶ後輩へのメッセージを取り出し紹介しながら、パネリストの先生方（樋口恵子先生、早瀬郁恵先生、田中恵美子先生）にお話をいただきました。講師の先生方や卒業生からのメッセージはどれも心に響くもので、世代を超えて女性が対話することの大切さを再確認する機会となりました。（詳細な講演内容については94ページをご覧ください）。

2017年1月26日には、3年間の活動の総まとめとしてアメリカンセンターJAPAN（港区虎ノ門）にて在日本米国大使館と女性未来研究所の共催シンポジウムを企画・主催しました。この催しは、ワーク・ライフ・ケア・バランスを考える会と、アメリカ大使館広報・文化交流部の協働の実績の中から実現したものです。女性未来研究所樋口恵子所長と、アメリカ大使館文化交流担当公使のマルゴ・キャリントン氏のお二人にご登壇いただき、これから社会の中核を担っていく30 - 40代のプロフェッショナルの女性を対象として、キャリアや仕事との両立についてのアドバイスをいただきました。また、日本ユニセフ協会会長・元文部大臣の赤松良子先生

にもゲスト参加していただくことができました。緑苑祭とテーマを同じく「先輩」として、キャリアを持って働き続ける女性に特有の人生にありうる挑戦について、日米双方で道を切り開いた女性のお話を聞くことができました。学外にもインターネット中継を含め1000人近い聴衆を得て、東京家政大学女性未来研究所の広報としても成果をあげる機会となりました。

2016年10月15 - 16日には、このプロジェクトでの取り組みをより大きな日本の大学のキャリア研究の中に位置付けるため、他大学の取り組みの調査と研究分野の趨勢を把握を目的とし、北海道大谷大学にて行われた第38回日本キャリア学会全国大会に参加し、研究発表およびシンポジウムを聴講しました。先進的な米国の事例と合わせ、特に他の女子大の取り組みに学ぶところが多く、直接の就職指導だけではなく、ライフプランニングを含めて自分の道を考えさせる取り組みが各大学で4年間包括的に行われていることを確認しました。また、大規模に卒業生調査を行ない、その結果とそれで得られた卒業生ネットワークをキャリア指導に生かしている大学の取り組みは本学でも取り入れるべきだと感じました。

5. まとめとこれからの展望

3年間「ワーク・ライフ・ケア・バランス」という言葉をテーマとして様々な活動を試みてわかったことは、女性が職業を持ちながら自分らしく持続可能な方法で生きて行くことには、意識して戦略を立てることが不可欠であること、またそれを後押しするエンパワメント活動を組織し、運営するのが重要であることでした。当プロジェクトでの活動及び、並木が2013年から参画している在日米国大使館をはじめとした他機関でのエンパワメント講座の企画・運営の経験を通して見えて来たのは、昨年「女性の」エンパワメントというくくりが、すでに自明かつ唯一のものではないということです。2014年に本学で講演いただいたデラウェア大学災害研究センター副所長トリア・ヴァクテンドルフ社会学部准教授の、東日本大震災に関する知見が参考になると思われます。すなわち以下の3点です。

①「弱者」はその場面や状況によって替わり、固定されたものではない。②ただし、女性、高齢者、子供など、危機的な状況において困難に直面する可能性の多い、脆弱性の高い属性がある。③しかし、そのようなグループの持つ強みを認めて活かすことで、危機的な状況から脱し、さらに社会の紐帯を強めることが可能になる。

これらの気づきは「empowerment（力を持たせる・力に気づかせる）」の本質を言い表したものです。日常的な社会生活の中で、自分が強者にも弱者にもなりうるということ、また、自分の特性や能力を活かしたアクションを起こすことで、どんなにそれが小さくとも、何らかに社会を変える縁になりうるということ、自分はそのような多様性を含んだ存在であるということ伝えることで、エンパワメントやリーダーシップという漠然とした概念を行動に変えるきっかけを与えられるのではないのでしょうか。

この知見は、女性未来研究所が提供し、2016年度より並木有希・平野順子で担当している共通教育科目「自立の探求(a)ジェンダー論に学ぶ」に活かされ、実践されていますが、今後とも、このメッセージを伝えるようなキャリア教育の授業を開発して行きたいと思います。

この会の活動を通して、基礎的な啓発及び人脈作りは十分な成果をあげたと考えています。今後はこの活動をさらなるネットワークとして効率化し、サステナブルな組織として運営していけるように発信の仕組みを作っていきたいと思います。今後は、研究会を定期的開催するほか、各大学・男女共同参画センターなど、学内外の関係者のネットワークを作り、質の高い情報取得、研究交流のプラットフォームを構築することを予定しています。また、国際的な協働の機会を作っていければと思います。女性未来研究所の全体目標である「ワーク・ライフ・ケア・バランス」を多角的に考え、総合的な提案ができる大学としての東京家政大学の強みを十分に伝え、研究・調査の成果を社会に発信していく場であるべく尽力して参ります。ご協力いただきました学内外の先生方に、心より御礼申し上げます。

卒業生の大学時代の学習とキャリア・ライフコースに関する調査

1. 調査の目的

本調査は、卒業生のキャリア形成の実態を明らかにすることを目的とする。特に、本学における学修がその後のキャリア形成に与えた影響について調査し、大学におけるキャリア教育のあり方について検討を試みるための基礎資料の収集を目的とする。

2. 調査の概要

(1) 調査主体

東京家政大学女性未来研究所

(2) 調査期間

平成28年4月1日～平成28年4月30日

(3) 調査方法

郵送による質問紙調査

(4) 調査対象

東京家政大学卒業生（緑窓会の協力により、5年毎、学科毎に無作為抽出）

(5) 調査担当者

女性未来研究所 兼任研究員

「女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランス」プロジェクト

(6) 配布数・回収数

配布数 1876, 回収数 368 (回収率 19.6%)

3. 調査結果

調査結果は調査報告書により報告を行うが、本稿では、大学時代の様々な学びが職業生活に役立っているか調査した項目を紹介したい(図1)。

なお、在学生に対するアドバイス(自由記述)については、学園祭シンポジウム第2部座談会において紹介しているので報告を参照いただきたい(p.100～)。

調査では、①共通科目・教養科目等の学習、②外国語科目の学習、③専門科目の学習、④コンピューター等の情報科目の学習、⑤演習(ゼミ)の学習⑥教育実習、⑦教育実習以外の資格に関わる実習、⑧卒業論文・制作・研究の学習、⑨部活動、サークル活動、⑩ボランティア

活動、⑪大学で取得した資格の11項目が、職業生活に役立っているか、「役だっている」「やや役だっている」「あまり役立っていない」「役だっていない」「経験していない」の中から1つ回答を求めた。「経験していない」と回答したもの、および無回答については、集計から除外した。

②外国語科目の学習、⑤演習（ゼミ）の学習以外は、肯定的な回答（「役だっている」「やや役だっている」）が50%を超えており、概ね、大学時代の学びが職業生活に役立っているということが見て取れる。特に、③専門科目の学習、⑪大学で取得した資格については、肯定的な回答が70%を超えている。

さらに、⑥教育実習や⑦教育実習以外の資格に関わる実習も肯定的な回答が多い。一方、②外国語の学習につ

いては、肯定的な回答が約25%と他の項目と比べ、著しく少ない結果となっている。

以上、専門的な学習や資格取得、実習などが、職業生活に役立っていると認識している卒業生が多いことが分かった。これは、本学の建学の精神である自主自律に向けた本学の教育の成果ともいえるのではないか。一方で、①共通科目・教養科目等の学習や⑩ボランティア活動も肯定的な回答が多いことも注目される。

教養を身につけることやボランティア活動を通したコミュニケーションなどが職業生活に役立つということは、大学における教養の意義、ボランティア活動を通した能動的な学びの重要性を表す結果ともいえよう。

（その他の調査結果は、調査報告書を参照いただきたい。）（宮地孝宜）

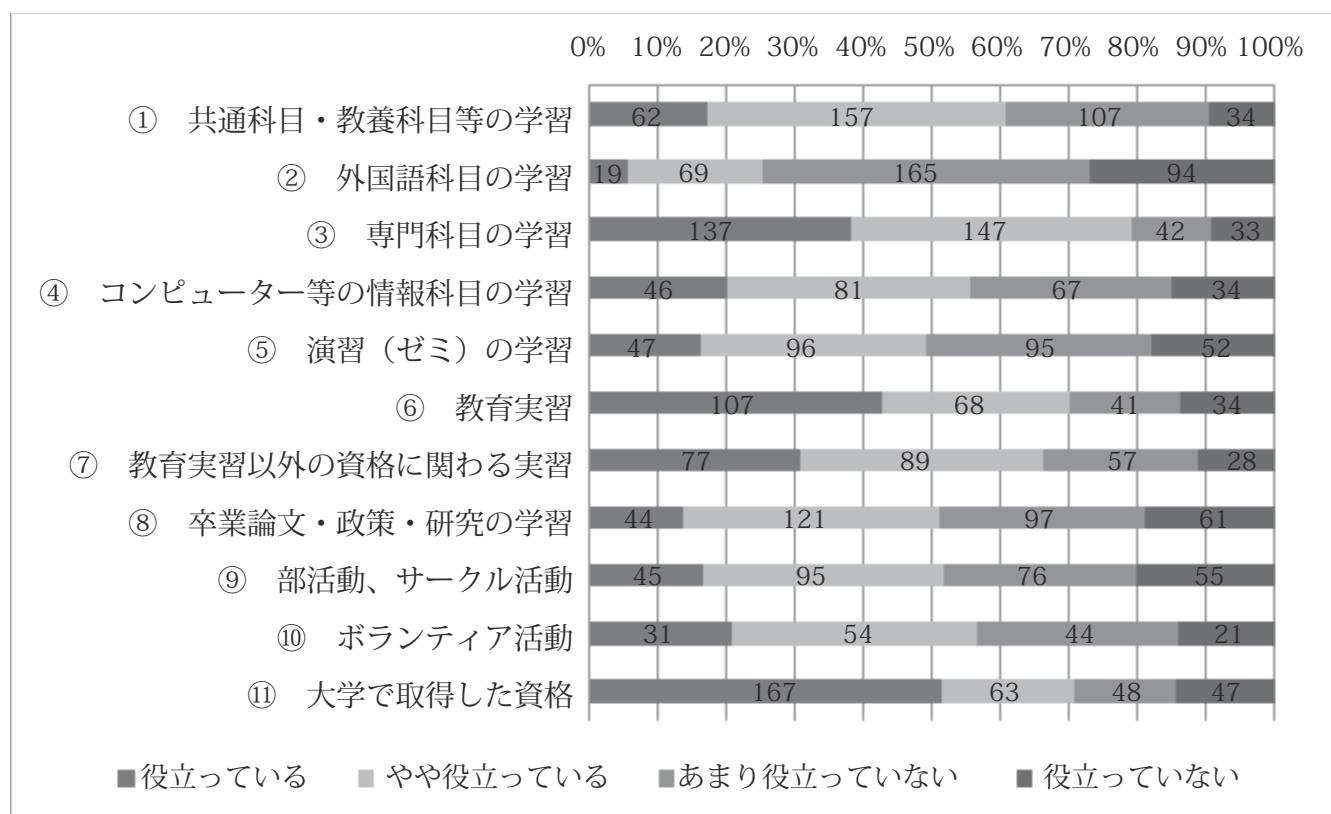


図1. 大学での学習が職業生活に役立っているか（単位：人）

3年間で振り返って

本研究プロジェクトのテーマは「女子大学におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランス」ですが、私自身を振り返っても、大学時代の学びが自身のキャリアに少なからず影響しているといえます。ここでいう学びには、学部の専門教育における学修はもちろんですが、それだけでなく、幅広い教養を身に付ける学修、演習や実習などより能動的に取り組む学修など、広範かつ多様な学びが含まれるのは言うまでもありません。

さらには、ボランティア活動に代表される大学の授業以外の学びも、各人のキャリアに大きな影響を与えるものです。これらのことは、本研究プロジェクトで実施した調査においても示されました。

現在、本学では、2019年度に向けたカリキュラムの検討が行われていますが、資格や専門的な学修の充実だけでなく、より能動的な学修を促す工夫が求められています。また、授業だけでなく、授業外において、学んだことを活かして、ボランティアとして社会貢献を行うことを可能とする時間的な「ゆとり」を作ることも必要です。これらの活動によって、学生は、理論と実践の間を行き来することができます。いわゆる「活用型の学力」の獲得につながるのではないのでしょうか。

さらに、専門科目で学んだ理論や知識、技術を地域コミュニティの中で活かし、地域コミュニティの課題解決に向けた活動に結びづけることによって、市民性を高め、学生の成長を促していく、いわゆる「サービス・ラーニング」へと発展させていくことも検討すべき事柄といえるでしょう。

本学の建学の精神である「自主自律」は男女共同参画社会における女性に求められる姿勢や態度であるといえます。その基盤となるのは、生きる力や社会人基礎力を備え、社会に貢献するために活用できる専門知識・技術を身につけようと学び続けることができる「生涯学習力」ではないのでしょうか。

本研究の成果を活かし、学生にとってより効果的な教育となるよう、微力ではありますが努力したと思います。3年間、ありがとうございました。

(宮地孝宣)

女子大学生のキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランスについて3年間研究を行ってきた。途中、産休育休を頂いて離脱し、ワーク・ライフ・ケア・バランスを現実問題として考えても来た。

私が考える成果は、以下のものである。

- ①学科横断型で、教員が集まって、それぞれの学科が抱えたキャリア上の課題について検討する機会を持ったこと。学科毎に卒業後の進路には違いがあり、専門性に応じた教育を行うことは重要である。しかしながら、特に低学年の学生にとっては共通して行わねばならないキャリア教育があるはずであり、その検討を始めることができたことは、大きな一歩であったと考える。
- ②卒業生のキャリアについて、調査できたこと。卒業生がどのようなキャリアを辿り、またワーク・ライフ・ケア・バランスを取っているのかを把握することは、その後続く学生たちにとっても興味深いことであろう。
- ③外部機関とのネットワークを持てたこと。これは、今後後も続けて行かねばならない。

また、キャリア教育、ワーク・ライフ・ケア・バランスというテーマは、これからの社会を生きていく女子学生にとって重要であり、本学としては今後とも取り組みを進めて行かねばならないテーマである。今後の課題について、以下に考えを述べる。

- ①他大学等の取り組みなどのインプットを行うと同時に、アウトプットを積極的に行うこと。
- ②学内のキャリア関連部署や教職員との連携を行い、体系立てて研究を行う。この3年間でも、他部署との連携を試みはしたが、成功するには至らなかった。そのため、
- ③学生に対するフィードバックを行う。それは、キャリア関連の授業での実践ということもあるが、多くの卒業生たちとのつながりを、いかにして学生たちに持ってもらおうかということも重要であると考えている。本学の多くの卒業生から得られる知見は多いはずである。それを直接学生に届ける機会を作ることは、課題として残ろう。

(平野順子)

最近、頻繁にワークライフバランスという言葉を目にする。日本でその考え方が知られるようになったのは、1990年代以降の景気低迷による国際競争力の激化や少子高齢化の進展に伴い、女性活用の必要性が急速に増すなどの雇用環境が変化するなかで、働く意識が多様化

したことがその背景にあると思われる。従来の会社中心の生活はものの豊かさを求めるものだったが、心の豊かさを求める方向へと働く人の意識が変化してきたのである。むしろ、仕事以外の時間を確保することが仕事も生活も充実する相乗効果が得られて好循環に繋がると、現在では考えられている。それに呼応するように、働き方の見直しに官民ともに動き出したことにより、その認知度はさらに高まってきた。

そこで、女子大学でのキャリア教育を考えていくため、社会と関わりながら女性が主体的に生きることについて、さまざまな視点で学内外の方を招いての研究会や調査を実施した。女性は社会に出て、キャリアを築く時期と出産や子育ての時期が重なる。そのためか、社会的な産み時は平成になってから30代となり、時代とともに高くなっている。働く女性が仕事を続けるにあたり、子供を持つタイミングに悩んでいる現状がうかがえる。

女性がキャリアプランと人生プランの対立を乗り越えるためには、働き方の選択肢が増えるような制度づくりを考えると同時に、個人ひとりひとりが変化に応じて周りの協力を得ながら働けるようにキャリア教育を通して広い視野とバランス意識を養成する必要がある。

そのためにも今後は世代を超えて、就職、結婚、出産、育児に加えて介護や定年後も含めた生き方について、共に考える機会を増やしていくことが望まれる。

生きていくためや自己実現のために「働く」とはどういうことなのかを考えるにあたり、個人で考えるだけでなく、周囲の人とともに問題解決に向けて考えながら行動することの大切さをこのプロジェクトを通してあらためて実感した。

(早瀬郁恵)

キャリアについて、働きながら生活することについて様々な人と話し合う機会を作りたい、と思ったきっかけは、同世代女性研究者の集まりで話に上がった、学位取得・専任職・結婚出産が「三冠王」とも揶揄されるほどの、女性研究者のワークライフバランスの成立の難しさに対する、個人的な忸怩たる思いでした。若く、職もなく、研究に必死だった最中に妊娠して、ロールモデルがいなかった私が苛まれた孤独感と焦りを、これからの同じ進路をとる人は感じなくても済むようにしたいと思ったのです。

キャリアを中断しながら、たくさんの妥協と諦めを持ちながら、なんとか、細々としぶとく辞めずにいる自分

には、与えられた仕事があると思いました。第一に、キャリア作りとライフイベントに関する理解の重要性を教える教育プログラムを作ること、第二に、社会の中でのジェンダーロールとワークライフバランスに関しての意識を変えていくように、広い意味でのメンター制度を世代を横断して作っていくことです。

当プロジェクトでの活動を通して、現実的に達成できたことはまだ少ないのですが、先生方の情熱に触れ取り組みの多岐を知るにあたり、自分の個人的な経験を文脈・構造化することができるようになりました。常に自分の経験を振り返り、狭くなっていく自分の世界を広げる意識を持ち続けることで、学生に語る言葉にも、少しでも説得力が生まれるのかと思います。

また、ご縁があり東京家政大学で働かせていただくことになり、有能で誠実な卒業生の皆様とお話しする機会をいただいたのが何よりの財産でした。最後を締めくくる在日本米国大使館との共催イベントでわかったように、若い年齢層の人、家政と縁のない人、また外国においても、家政の教育と知見は熱望されているものだと思います。

この先は、この大学の魅力をさらに広く知らしめるように活動を続け、始まった活動をさらに大きくしていきたいと考えます。3年間お世話になりました先生方とスタッフの皆様にご心より御礼を申し上げます。

(並木有希)

2014年からの女性未来研究所との関わりの中でお役に立てたことは本当に少なかったと思います。最初に立ち上げた「大学でワークライフバランスを考える会」が目指したのは大学で働く子育て世代がつながり、抱える課題について一人で悩むのではなく、皆で共有できる場を作ることでした。また大学が出産や子育てを支援する職場であってほしいしそのために改善するべきことがあるのではないか、という問題意識もありました。

この3年間に私が確認できたことは、職場として東京家政大学が環境としてある程度整っているということでした。このプロジェクトの間にお子さんをご出産されるという素晴らしい経験をされた平野先生と並木先生がいらっしゃり、お二人のご努力は並大抵のものではないということは十分承知したうえで、大学にある程度の設備と制度があったことは確認できたと思っています。

しかしながら、第一の目的については難しいものがありました。私も含め、子育て世代は時間がなく、場の形

成にまで時間を割くことができませんでした。唯一できたことといえば、ご支援をいただいて2回の会合を催すことだけでした。

今後は場の形成及び大学の設備と制度が職場としてだけでなく、学生のための設備と制度として利用できるようにしていくことが残された課題であると思っています。他大学では子どもを産み育てる学生のための制度が徐々に整いだしています。本学もその方向性で準備をしていく必要があるだろうと思っています。私自身の子育てを楽しみつつ、ぼちぼちと確実に取り組んでいきたいと思っています。

(田中恵美子)

私たちは3年間「女子大におけるキャリア教育とワーク・ライフ・ケア・バランス」のテーマで様々な角度から活動を続けてきました。

平成28年度に研究プロジェクトで「卒業生の大学時代の学習とキャリア・ライフコースに関する調査」を実施しました。

「あなたがこれまで働いてきた経験から、仕事や家庭生活に関して、若い世代の後輩、在学生に対してよいアドバイスがあればお書きください。」の項目には、大学で学んでほしいこと、会社選び、子育て、介護・健康など実体験から得たアドバイスが数多く記載されていました。

これが男性だったら「結婚・出産後も働きたいのか考えて会社を選ぼう」などというアドバイスが書かれないでしょう。女性の場合、企業を選ぶとき、「事業内容・社風・給与」などのほかに「結婚・出産・育児」などが含まれるのです。以前、就職を担当していた時（昭和63年頃）、学生に「長く働きたいと思ったら制服にマタニティ用があるか調べてみたら」など、アドバイスをしていました。最近では「介護」も含まれるかもしれません。

女性が仕事を続けるうえで、ワーク・ライフ・ケア・バランスは欠かせないことです。家族や同僚の協力は必要不可欠。「イクメン」ということばが浸透していますが、男性が「育児」を経験することにより、将来直面するであろう「介護」にも向き合えるようになるという話を聞いたことがあります。「育児」だけでなく「介護」も協力してできたら女性の生き方はもっと広がるのではないのでしょうか。

平成28年4月より、女性の職業生活における活躍の推進に関する法律「女性活躍推進法」が施行されました。ワーク・ライフ・ケア・バランス等を推進する企業を積

極的に評価するとの事です。

多種多様な生き方が認められる今、働きたい人が性別に関わりなくその能力を十分に発揮でき、出産、子育て、介護等により就業を中断することなく継続できるような環境になればと思います。

(太田八重美)

女性未来研究所 学園祭シンポジウム

「教えて先輩!学びたい、紡ぎたい、打ち立てたい、私の人生」

日時：平成28年10月23日(日)

第一部 インタビュー

【ゲスト】

岡戸 絹枝氏(『つるとはな』編集長)

【聞き手】

並木 有希 (兼任研究員/人文学部准教授)

『つるとはな』という雑誌をご存知でしょうか。本屋で見かけた表紙から「私から年齢を奪わないでください」という言葉が目飛び込んできて、ハッとしました。ちょうど聞きたかった言葉に出会った思いでした。

勉強して働いて妊娠出産して、人生を築いていくことを考えると、キャリアも生活も完璧な、何でも出来る素晴らしい人ばかりがモデルになりがちです。そんな人を尊敬しながらも、私には厳しいな、ついていけないな。とひるんでしまいます。しかし、派手ではなくても毎日普通に生き、普通に働き、普通に子育てをしている人はたくさんいて、そんな「普通」の人の普通の言葉こそ心に響くのではないかということ思い出させられました。東京家政大学の同窓会である緑窓会の皆さんからのメッセージを読んで、その思いは強くなりました。堅実に働き、困難に立ち向かい、真面目にきちっと人生を積み上げてきた「先輩に聞く」、つまり、その人の言葉と生き様に触れる機会を持つことが、人生の道しるべになるのではと思われました。

編集長の岡戸絹枝さんは、1955年埼玉県出身、立教大学文学部卒業、1981年からマガジンハウスにて『週刊平凡』『Hanako』『Olive』などの編集を経て、98年から『Olive』の副編集長、のちに編集長として90年代の少女文化にたいへん大きな影響を与えられました。そして『ku:nel』の創刊編集長として、2002年から2010年まで活躍されました。こちらも、斬新で革新的で、一時代を築いた伝説の雑誌です。2010年に退社し、新潮社の編集者だった作家の松家仁之さんと始められた雑誌が『つるとはな』です。本日は「先輩のお話を聞くことのおもしろさ」を考えるきっかけとして、『つるとはな』をご紹介しますと思います。

●『つるとはな』について

並木：どのような経緯で、このような他に類のない雑誌を作るということをお考えになったのでしょうか？

岡戸：『つるとはな』は、もちろん私一人で作っているわけではなく、元はと言えば私が会社を辞めた後に、同じ時期に違う出版社を辞めた先輩というか友人といえますか、年は下なんですけれども、男性の仲間といえますか、松家さんという知人がいまして、同じ時期に会社を辞めたのです。たまにお茶なんか飲んだりして、どうしたもんでしょねっていう、私たちどうなるんでしょね、みたいな話をよくしていたんですけども。

並木：大変失礼ですが、そのときおいくつ位ですか？

岡戸：私、55歳で、ちょうどマガジンハウスを辞めたんですね。松家さんはもうちょっと若かったかもしれませんが。そのときお互いに、「おじいちゃんとおばあちゃんの話はおもしろいね」という話はもちろん話していました。そのときに、「そういう本があるといいね」という漠然とした話はしていたんですけども、松家さんがいつからか、「つる」という名前でその雑誌の話をし始めたんですね。

並木：「つる」というのは？

岡戸：「つる」というのは、長寿ということで繋がるだろうし、響きも良かったし、そのようにして雑誌をやるなら「つる」という名前なのかなっていうふうに思っていたんですけども、あるとき別のスタッフと、これまで仲良しでオリーブ時代から一緒に仕事をしている編集者兼ライターの前マガジンハウス社員だった女性の鈴木みこさんという人と温泉に二人で行ってまして、「雑誌やりたいんだけど、「つる」という名前らしいのよ」という、まるで人ごとみたいに話をしたらですね、彼女が、「うちのおばあちゃんの名前は「つる」なのよね」と言ったんですよ。そしたら、「いやあ、うちの祖母は「はな」なんだけど」という話をしまして、「じゃあ「つるとはな」がいいんじゃない?」みたいな、勝手に温泉場で盛り上がりまして、そのまま事務所に帰ってそういう話をしたらですね、「つる」より「つるとはな」の方がおもしろいんじゃないかっていう感じに、話はとんとんと進んでいったという状況です。

並木：「人生の先輩に聞く」が先にあって、「つるとはな」が後ですか？

岡戸：そうですね。おじいちゃんとおばあちゃんの話がおもしろいっていう風には、考えていました。

並木：取り上げていらっしゃるの、80歳、90歳の方が多いですね。

岡戸：そうですね。一応、自分の中でなんですけれども、70歳以上の方に出ていただきたい、その方たちのお話を聞きたい、この中にはそういう人しか登場しないってことを一応ルールにしまして、中には若い子もちょっとだけ出てくるんですけども、基本話を聞くのは70歳以上かなという風に、勝手なルールを作りました。

並木：なるほど。それはご自分のおじいちゃん、おばあちゃんのお歳ということになるのでしょうか？

岡戸：まあ、当時、自分にとって話が聞きたかったのが70歳以上なのかなと、勝手に決めたということはあるのでしょうか。

並木：想定している読者層はありますか？

岡戸：その時点では自分が読みたいというつもりだったので、今私61歳なんですけれども、一応50歳以上の方が、年配の方の話を聞くのに良いなと思われることを想定して作りました。

●話を聞くことについて

並木：この雑誌は主にインタビューで構成されているんですけども、創刊号で心に残っているのが、小澤征爾さんのインタビュー「勉強は楽しい」でした。楽譜を読み込むことについてのお話なんですね。小澤征爾さんという指揮者のインタビューで、楽譜読むところに注目して構成されているのが、多分、なかなかないのではと思ったんですね。小澤征爾さんは著作も多くありますし、インタビューも多くありますが、この話はあまり聞いたことがないなど。でもこの記事を読んで、実際、音楽家の一番大切な作業は事前の準備だと納得しました。このように、この人のお話の肝心の部分はここだ、っていうことはどのように見つけられるのですか？

岡戸：そうですね。まずこの人に出ていただきたいと思ったのは、本のパートナーの松家さんが、「岡戸さん一番出てほしい人は誰ですか？」って聞くんですね。なので、「ああ、会いたい人は小澤征爾さんです。」って即答したんですけども、それは私、小澤征爾さんが好きだからなんですけれども、会えれば嬉しいし、話が聞けたらもっと嬉しいし、まさかそんなことが叶うとも思わないから、小澤征爾さんに会いたいっていう風に、そういう風に言ったらばですね、松家さんが段取りをつけてくれて、会えるようにしてくれたんですね。

並木：お話してすぐに譜面の話になったんですか？

岡戸：そうですね、もちろん小澤さんは、指揮をするのに、朝の5時に起きて、指揮棒を振る以外の全ての時間は譜面を読んでいるっていうことをしていたんですね。誰よりも時間を割いて音楽の解釈を楽団の人に伝えるっていうことをすごく大事にしてるっていうことがわかっていたので、話は譜面の話です。私は特に楽譜が読めるわけではないし、何にもわからないんですけども、そこに費やす時間とエネルギーの内容を聞きたかったので、それを聞いたと。音楽のオペラの話なんかされると私もわからなくて「すみません、それどういう意味なんですか？」ってすごくそういうこともあって、行ったり来たりなんですけれども、肝っていうのは、譜面を読むことの大事さっていうことが伝わればいいのかって思います。

並木：それはある程度事前にご存じだったんですか？

岡戸：そうですね。小澤さんの若いころの著作に『ボクの音楽武者修行』（1961年、新潮社）っていう本があるんですけども、そこに譜面のことがあったり、NHKなどでたくさん特集されたりして、小澤さんの勉強ぶりっていうのは知っていた感じですね。

●面白い人には会いに行く

並木：小澤さんのように有名な方の知らなかった一面を引き出して下さる一方で、先ほど樋口先生もおっしゃっていたように、よくこの方を探してこられましたね！という方もいらっしゃいます。第3号の「今日は地球を一万歩」は、内藤ミツさんのインタビューです。

岡戸：はい。内藤ミツさんは、この当時91歳で、お元気で、体が柔らかく、前屈も十分できていました。この方の娘さんは向井千秋さんという日本人で初めての女性飛行士で、パートナーは、向井万起男さんという慶応のお医者様なんですけれども、この2人の素晴らしい夫婦ぶりについては、昔の本で恐縮なんですけれども、『君について行こう：女房は宇宙を目指した』（1998年、講談社）という本に書かれています。向井千秋さんについていくんだと、宇宙飛行士についていくんだという、お医者様の人柄も分かるし、家族も分かるし、大変愉快な本で印象深かったものですから、それ以降私はもう、この夫婦に会えたらなと強く思っていたんです。

並木：ミツさんではなく、お嬢さんに。

岡戸：そうなんです。向井千秋さんに会えたらいいなと。向井万起男さんにはマガジンハウス時代に、何度か原稿をお願いしたりしていたんですけれども、このお母様が『君について行こう』の中で、だいぶおもしろいエピソードを持ったお母様だったものですから。ミツさんは別に宇宙飛行士でもなければ先生でもなければ、館林に住んでいる普通のおばあちゃんなんですけれども。あるときテレビを見ていたら、深夜の番組でピンクの上下を着たおばあちゃんが街頭で「あなたの自慢は何ですか？」ってインタビューされていました。彼女は「私の自慢は娘と息子です」って言ったんです。そうしたら、インタビュアーの人が「え？」って。「いや、向井千秋なんです。娘は」っていう風に言ったら、インタビュアーの方は若すぎて、向井千秋のことを知らなかったんですね。私はそれで、お母様もお元気だということが分かり、お話を聞けたらいいなと思いました。旅行ばかりしているという大変元気なおばあちゃまで、当時はまだアメリカに住んでいた向井千秋さんのところに行ったり来たりとか、たいそう忙しいスケジュールだったんですけれども、ようやく会って、話を聞くことが出来て、記事にしたという次第ですね。

●印象的な言葉

並木：このように、とても有名な方も、よく聞いたら有名な方も、有名でない方も、様々な方の印象的な言葉が表紙に並べられています。インタビューの中からとってある言葉なんです。これ、誰の言葉かなっていう予想と結構違うんですよ。実際に見てみると。こんなとこ

ろにこの言葉が出てくるんだっていうのが意外な驚きなんですけれども、これらの言葉はどうやって選ばれるんですか？

岡戸：これはですね、全部の原稿が自分のところに集約されるので、印刷所に原稿を出す際に、「あ、いいな」っていう言葉をメモしてるんです。メモの中からこのスペースにあった分だけ抽出しているっていうことですね。印象的な言葉ですよ。

並木：インタビューの中から普通に出てくる言葉ってことなんですね。印象的で、その後すぐ残るものもありますが、普通の生活の中の言葉なんですね。

岡戸：そうですね。私には誰の言葉かっていうのはあんまり大事ではないです。

●生活の中に素敵なものを見つける

並木：以前作っていらした『ku:nel』からそうなんですけれども、写真が素敵で、普通の人の普通の生活の中に、こんなにきれいなものがあるんだって気づかされるビジュアルで一杯です。第3号の「梅のことなら、一步先をいかにくちや」というインタビューの、表紙にもなっている、梅干作りの先生とはどちらでお会いになったのですか？

岡戸：梅干先生の藤巻あつこさんですね。創刊号に、ホルトハウス房子さんという料理家の方に出て頂いていたんですけれども、このホルトハウス房子さんに「先生、どなたか紹介して下さいませんか？」っていう話をしたらですね、藤巻さんは、ホルトハウスさんに毎年梅干を送っていたんです。「毎年毎年、自分の作った梅干を送ってくれているのよ、それがおいしいのよ」とおっしゃっていたんです。藤巻さんはホルトハウスさんの料理教室に通っていたことがあったそうです。なので、藤巻さんも料理家で、『ku:nel』でも紹介していて、でも改めて紹介してもらって、まあ梅干がおいしいと。

並木：それで会いに行くってすごいですね。

岡戸：そうですね。

並木：この写真もちょっとハッとするくらいきれい。普

通の梅干ですよね。

岡戸：梅干にしそを巻いて、自分の家の桜の葉を巻いて漬けたものを結わえているんですね

並木：一瞬で心を掴まれ、よく見たらこれ普通のお漬物か！となるような。このような魅力的な写真の撮り方のこともお話頂けますか？

岡戸：雑誌は、インタビューして書く人と、写真を撮る人と、それをデザインする人と、編集する人と、分担作業が行われています。アートディレクションもその中のひとつですが『つるとはな』は、『ku:nel』と同一人物の有山達也さんにディレクションをお願いしています。彼がこの本の構成をはじめから作っているのでありまして、カメラマンも、どういう写真なのかを分かっている仕事を依頼する、そうするとテーマにそった写真を撮ってくる、それを選ぶ。で、選ぶときに独特な選びをしてくれるのが有山さんです。

並木：「この写真をおいて他にない」という感覚を共有されていたってということですか？

岡戸：そうですね。

並木：他に何かこういうものをとりあげたいって考えていらっしゃることはありますか？

岡戸：探しているのは、いつも、人だったような気がして、会いたい魅力的だなんていう人に会えばそこからいかにでも、台所でも、お料理でも、おしゃれでも、いくらでも聞くことはできるっていうか、その人の魅力に迫っていけるのではなからうかと思うんですよ。なので、いろんなことをしたいっていうことはないんですよ。

並木：ものやことではなくて、基本はその人なんですね。

●お年寄りも、若い人も

並木：『つるとはな』に戻りますけれども、「先輩」としてご自分より年上の世代を取り上げていらっしゃるって、今、高齢化社会が日本全体で進んでいる中、このような雑誌が登場し支持されているということが興味深いです

が、そもそも、そういう社会全体へのメッセージは意識していらっしゃるんですか？

岡戸：それは意識しているんですけども、雑誌の中でそれを明解にするっていう、そういう気持ちはあまりないです。個人的に、インタビューの中で、自分の老いと、やがてくる死ってことについては、話してくれるのであれば、聞くというつもりで、どの企画のときにも、インタビューの中で聞くようにしています。それを記事にするかどうかはそれぞれですね。

並木：「高齢者」を強調しないようにしている感じ。

岡戸：そうですね。そういうことだと思いますね。例えば、こちらの記事(第2号「91歳のマイルール、マイリズム」)で取り上げられた女性はですね、プールに週3回行って泳いでいるっていうおばあちゃんでした。プールで泳いでもらいたいなっていう、ちょっと会いに行きましたら、さすがに水着姿は嫌だとおっしゃったので、お話を聞いてみたらすごく自分を律している生活をされていたので、それもおもしろいなと思い、自分で作った朝食、自分で出かける場所、自分で何かをする時間など、その人の生活ルールについてインタビューしてこうなったのです。

並木：じゃあ特に元気なお年寄りを取り上げてるという訳でもなく、その方が先にあって、その方のお話を聞いたら、元気なお年寄りだったと。

岡戸：そうですね。

並木：若い方も出ていらっしゃってますね。

岡戸：女性が読者なのでボーイフレンド的な、素敵なお男性に出てもらいたいと思い、素敵なおちょっと色っぽい男性に、ちょっとフェロモン出しているリリー・フランキーさんに登場をお願いしました。そういうページもあった方がいいと思い、「マイ・ボーイフレンド」と名をつけて出てもらったということです。だから年齢はちょっと低め設定ですね。

並木：こちらの方は19歳。フィギュアスケートの宇野昌磨選手。

岡戸：年配の方ばかりの記事の中に、若者のこんな姿の跳躍ぶりとかあったら雑誌はちょっと楽しいかなという、そういう気持ちもあったりして。インタビューも年配の方ばかりよりもこういう方の話もとても新鮮に思えるので。アスリートのストイックさに魅かれますね。

●私たちの「関係性」

並木：素敵だなと思ったのが、年の離れた組み合わせ。こちらは、73歳の男性と大学受験生19歳のホームシェアですね(第3号「心を開くのはまず自分から」)。血縁のない人が一緒に住むのを特集されているんですけども、このような関係っていうのに注目されたのは。

岡戸：宮本さんっていうんですけども、この時奥さんが入院されていて、自分の家に一人になってしまって、部屋が広い、もったいないと。人に貸すといっても、この場合は無料でなんですけども、部屋を若い人に住んでもらえば、その分、防犯上にも良いし一人よりも楽しかろうと。そういう暮らし方が日本だけではなく、スペインや、ヨーロッパでは進められている住み方なんだそうですが、それを真似て、文京区ではじめて運動のひとつだったんです。

並木：おじいちゃんと孫の年齢差ですよ。

岡戸：部屋も別々で、食事だけ一緒にするわけですね。なので、身内感覚はそれほどないわけですね。なので、割とドライな感じで、かといって冷たくもないし、独特な距離感でそれがすごく良かったなと思うんですけども。

並木：じゃあ、こども年の差というよりは、この人たち2人の関係の方にご興味がある。

岡戸：そうですね。

並木：他にも、こちらの2人もいわゆる家族ではないですよ。一緒にお店をやってるイギリスの女性おふたりのお話です(第3号「正反対のふたりだから」)。

岡戸：そうですね。たまたま50代に道でばったり会った元知り合いの2人です。夫同士が友達で、歳を取ったらお店やろうよっていう約束を実現させた。

並木：古い形も色々であるように、友情とか家族の形態にも色々あるっていうのを伝えて下さっていると思います。実際に血縁のある関係もありますし、社会的にも個人的にも、歳の離れた人とのつながりを見せて下さっているということが素晴らしいと思います。

岡戸：どうなんですかね。関係に注目というよりも、その人に注目すると、人同士の関係性がこう自然とつながっていくっていうことになるんでしょうかね。

●私たちの「先輩」

並木：関係性のことで伺いたいんですが、岡戸さんはご自身に先輩はいらっしゃいますか？取材の中で出会った方でも印象に残っている方はいらっしゃいますか？

岡戸：そうですね。雑誌は会う方ごとに、本当に驚くようなことがたくさんあるんですけども、それをそのまま記事にしているので、そのまま読んでいただければいいと思うんです。個人的にはホルトハウス房子さんは、個人的にも仕事がきっかけで何度か会うようになったんですけども、あまりにもさばけた・・・さばけたっていうほか正しい言い方が見つからないんですけども。人の話をあまり詮索しないんですね。80歳を超えて、料理教室をやっていて、もう何十年も通ってる生徒さんがいっぱいいるのに、その生徒さんたちのことを詮索しない。けれども、生徒さんのことをよく見ていらして、顔色一つで、生徒さんのことがわかり、調子が悪ければ短い端的な言葉で励ましたりするのです。その先生の人柄を慕って生徒さんが絶えることがないっていう先生なんです。私も会社勤めを辞めたので先生のところに、お料理全然得意じゃないんですけども、教えて下さいと生徒の1人になっているわけなんです。

並木：やはり、ホルトハウスさんの他人との関わり方みたいなのがいいなって思われたところなんですか。誰かを好きだって思う時って、どこかしら好ましく思うところがあると思うんですけど。

岡戸：そうですね。その人の良いところってあるじゃないですか。もちろん嫌なところもあって、悪口も私すごい好きなんですけど、それって両方ありますよね。良いところを魅力的だと思えば、今すぐ聞きにいきたいっていう、そういう思いがあります。いや、どの人も素敵で

魅力的でしたよ。すごいなって本当に思いました。

並木：お仕事上ではどなたが印象に残っていらっしゃるんですか？

岡戸：そうですね、仕事はマガジンハウスにいましたので、会社の先輩にはずいぶんお世話になりました。それからテニスが好きなんですけれども、70代80代でもやっている先輩方がいらっしゃるの、それはすごいなと思います。

●本の中の先輩

並木：『つるとはな』でも、『ku:nel』でも、作家の方をたくさん紹介されていて、メイ・サートンという作家の「私から年齢を奪わないでください 働いてようやく手に入れたのですから」という一言は第二号の表紙にもなっています。これを見てドキッとしました。老いをそういう風にとらえることができただなと気づかされました。この一言はサートンの『独り居の日記』(Journal of a Solitude 1991年、邦訳：みすず書房)にあるものなんですけれども、誰かの書いた本を読むというのやはりその人の言葉を受け取るということだと思のですが、女性作家に、特別に思い入れなどありますか？

岡戸：特別と言えはそうかもしれないけれど、読みたい特集したいという企画の中に、女性作家が自然と多くなっていくんですね。

並木：須賀敦子さんもそうですし、江國香織さんだったり、ほしよりこさんもそうですが、エッセイの名手が多いですね。

岡戸：そうですね。作品でも、エッセイでも、作家から学ぶべきものは多いと昔からそういう風に思っていますので、『ku:nel』のときも、そういう企画は立てるようになっていたかなと思います。

●私の個人主義

並木：岡戸さんのお仕事を見ていると、現実主義者というか、あまりベタベタせず、お話を聞く相手に対しての態度が温かいけれど、距離がちゃんと取れているという印象があるんですが。

岡戸：いや、そんなことなく、取材対象となったら思い入れは激しくなりますよ。多分、相手がいやがるくらい聞いてると思うんですよ。時間をかけて、スタッフも同じように時間をかけて取材をしていて、それを削ってエッセンスを記事にしているっていう状態ですね。

並木：取り上げていらっしゃる方が、皆さん、ひとりで自立してきちんと生きているというか、人に寄りかかるっていうことをしない方々だと感じます。『つるとはな』自体もそのようだというか、煽らないで、その人を淡々と語るという語り口を、今ではとても貴重だと感じていまして・・・それは意識なさっていますか？

岡戸：そうですね。基本そういう風に紹介したいと思います。自分という人間は、煽っちゃうし、煽られやすい。ダメダメ人間なんですけれども、できれば自分を律したり自分で立ったりできる人間を尊敬するし、そうありたいと思うので、そういう人たちに出てもらっていると。

並木：なるほど。年齢を問わずで、そういう人たちのつながりから、魅力みたいなものが出てくるということですかね？

岡戸：そうですね。国内外問わない。有名無名問わない。そういう人たちからお話を聞ければいいと思っています。

(インタビュー終)

第2部 座談会

【登壇者】

樋口 恵子 (所長／東京家政大学名誉教授)

伊藤 節 (副所長／人文学部教授)

早瀬 郁恵 (兼任研究員／家政学部准教授)

田中 恵美子 (共同研究者／人文学部准教授)

【進行】

宮地 孝宜 (兼任研究員／人文学部講師)

【進行補助】

佐々木 香奈 (人文学部教育福祉学科4年生)

宮地：本座談会では、次の4つの項目について皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

一つ目は大学生生活。大学の学習、資格、課外活動、ボランティア活動等について。二つ目は仕事やキャリアについて。三つ目は家庭生活や家族間の役割などについて、最後に健康についてとなります。

座談会の流れについて説明します。女性未来研究所で実施いたしました調査の中に「あなたがこれまで働いてきた経験から、仕事や家庭生活に関して、若い世代の後輩、大学生に対して良いアドバイスがあれば是非お書きください」という項目があり、卒業生の皆様から貴重なアドバイスをたくさん頂いています。研究員が目を通しましたが非常に参考になる内容で、是非こういった場で皆様にもご披露させて頂きたいということになりました。そこで、まずは先ほど紹介した4つのテーマに関しまして、研究所のアンケート調査の自由記述を紹介させて頂きます。会場の皆様から質問につきましても適宜紹介させて頂きたいと思います。それらをふまえて、登壇の先生方からコメントを頂きたいと思います。

自由記述に関しましては、前方のスクリーンの方に投影します。せっかくの先輩方のアドバイスなので、ここは是非、在学生に読んで欲しいと思い、本学4年生の佐々木香奈さんに読んで頂くということになりました。佐々木さんは私のゼミの学生で、大学での学習、様々な課外活動やボランティア活動の方において優秀な実績をあげている学生でございます。今回、私の突然のお願いにも関わらず、快く引き受けてくれました。

それでは、まず大学生生活に関わって、アンケートの自由記述の紹介をさせて頂きたいと思います。

1. 大学生生活(学習、資格、課外活動、ボランティア活動)について

- ・資格(免許)を持っていることは素晴らしい。いつ、役に立つかわからないので、取れる資格は取って卒業した方が良いと思う。
- ・学生生活の四年(二年)、人としての成長がとても大きい、何か一つ、これだけは、人に負けないというものを身に着けて欲しい。
- ・真剣に、取り組んでいる人には、それに見合う、生涯の友と呼べる相手にも出会うことができる。
- ・行動しないことには、何も身につかない、失敗は学生の特権くらいに思い、色々な事に挑戦して欲しい。海外留学もその一つ、視野を広め、自分の中の当たり前をぶち壊して欲しい。
- ・高いと思っていた壁も努力次第で乗り越えられることを経験して欲しい。
- ・在学中に学んだ事や、サークル活動、ボランティア活動など体験した事は、今後の仕事や生活に必ず役立ちますので、是非何事にも積極的に取り組んでください。
- ・卒業後、どんな仕事をし、どのように生きたいのかを在学中に明確にイメージすることがとても大切です。そこから、自分が、今、何をしなければならぬのかが見えてきます。ただ考えるだけではイメージしづらいので、とにかく行動し、様々な人と出会い、様々な分野にチャレンジすると、いろいろな視点で世界が見えると思います。
- ・社会に出て働くのに一番大切なのは、人とのコミュニケーションだと思います。それは、大学のサークルなどでも学べると思うので、大学でやっているサークル活動は大いに参加するべきだと思います。ぜひ楽しんでいろいろな人とコミュニケーションして下さい。考え方も変わるし、世界も広がります。
- ・就職に関して、実際にその企業に入らないと何が必要か分からない。知識をできるだけ増やし、アルバイトなど色々体験していく事をおすすめしたい。
- ・人生は社会に出てからが圧倒的に長く、大学の4年間は貴重なランディング期間であった。
- ・自信を持つのはいいけれど、もうすこしアドバイスにも耳を傾けてもらいたい。

宮地：ありがとうございました。それでは、アンケートの自由記述を受けまして、先生方の経験やそれぞれの分野に関わるお話等も交えながら、ご自由にコメントをお願いします。

田中：教育福祉学科という学科に所属しております田中恵美子です。教育福祉学科というのは、わりと資格をたくさん取れるところでして、その中でも私は社会福祉士という資格の取得に関して教育をさせて頂いておりますけれども、今のお話の中で資格ということが出て参りまして、やっぱり取った方がいいと、役に立つとか、あるいは自分の、何て言うんですかね、これは負けないうものの一つというのも、やはり資格が結び付いてくるところもあるのかなと思います。学生に、私教員が普段から言っているのは、社会に出て、自分の時間を持つっていうのはとても難しいので、資格の勉強するっていうのは、やっぱり大学生のうちに、時間のあるときに目標をもってやるのがとてもいいんだよっていう話はしております。それは、教育活動上言っていることではありまして、

実際本当にそうなんですけど、私自身の大学時代のことを考えたときには、ただ資格っていう事というよりは、やっぱりやりたいことを何か見つけるっていうプロセスにあったかなという気もしていますので、そこが少し教育としては難しいのかもしれませんが、どうしても入ってくる時に、資格だけを目指して入ってきしまうと、ちょっと窮屈になる時があるかなというのは、正直思っています。その先にある、なんか私の場合は社会福祉士なので、人との関わりが好きだとか、誰かと一緒に関わりながら寄り添って成長していきたいみたいな、そういう思いの途中で資格があるかなと思っているので、なんかその先の、手を差し伸べてほしいと思っている人に寄り添うとか、そういうところの思いみたいなものを大事にしていってくれるといいのかなっていうことは、少し先輩方の書かれた言葉の中から感じた次第です。

早瀬：私は造形表現学科というところに所属しております。私自身の専門は、自分で表現する専門職で、専門は染色ということで物を染めたり、あと生活を彩るようなものを作ったりということで、私の学科の学生は、やはり絵をかいたり、ものづくりをするということをメインに、資格としては美術の先生、あと学芸員とかそういう資格が取れる学科になっています。で、今資格のことは田中先生からお話し頂いたんですけど、今日学生さんがたくさんいれば学生さん向けに少し、ちょっと日頃思っていることを話したいなと、言いたいなと、思ってきたんですけども、その中で最近とみに感じるのは、なんか自信がない。なんかこう、自信がないなあっていうのをすごい感じます、接していて。なんだろう、なん

でそんなに自身がないんだろう。ていうか、なんでそんなに不安に思っているんだろうっていうこと、いつも思っていますよね。SNSとか情報がいつも容易く取れる、おせば取れる時代になってきている。自分が知りたい事をわりとほんとに簡単に、すごく便利な時代になってきているので、たくさんもらえる時代なんですよ。で、そのことが逆に、なんかそれを見るだけでやった気になっていたり、例えばそのネガティブな失敗の話を聞くと、もうやれない、もう怖くてできない、みたいな、そういう意識だけが先に働いているっていうのは、そういうところからきているのかなっていうのをすごく感じることもあります。そういう意味でまず、みんなそんなに自分はやわじゃないよっていうのを、少し教えてあげたいなっていうのをいつも思っています。だから失敗して、何て言うんでしょう、折れる、で折れたら二度と立ち直れないような気ではいるんですけど、意外に時間が少し経てば、違う考え方が生まれてくるよっていうようなことを、授業の中でも教えていかればいいのかあと、まずは気づいてもらえればいいのかあといつも考えています。そういう意味では、普通の授業の中でやれることには限界があるので、まず外へ出てみましょう、で、学外のボランティアとかいろんなものに関わってはどうかっていうような話もしています。その一歩としてうちの学科ではアートキャンプっていう形で、家政大のこの板橋校舎の中で、アートを通じて社会と繋がろうっていう、第一歩としてそういう学内の活動、いろんな学科の人とやってみようっていうのをまずやっています。で、そういうのを通じて、自分たち同士でこういろいろ考えながら、主体的に物事を作っていく、そういう事でやり遂げた達成感がひとつの自信に繋がればということで、そういうことを毎年繰り返しながら、次の年も参加してくれる学生を見ると、なんとなく、ああ少しずつ自信を付けているんじゃないかなっていうのを、実感しているところで、もっともっと皆にはいろんなことを、外向けてね、体験してもらいたいなっていうのをいつも思っております。

伊藤：私が学生時代だったころと、今の社会が違っているっていうことで、メッセージをどのように発信していったらいいかすごく思い悩むところです。私自身の大学の頃っていうのは、英字新聞の編集をしまして、それに駆けずり回って、まとめることだったりとか、対外的なことだとか無我夢中で、大学生活を意識的に充実させるなんていうことはあまり考えなかったような、そういう生活を送ってございました。それと暇さえあれば本を

読んでいたというようなことで、将来、仕事しない人生なんていうのは誰からも教わっていないのですが、考えられませんでした。私はもう70になるので、今から50年前くらいですけど、あの頃の本当に夢中でやっていて、充実して、好きなことやっているんだっていう心の形っていうのは今でも残っています。学生にいうことは(私の所属は英語コミュニケーション学科なんですけれども)就職のための資格っていろいろ、英語のTOEICが何点だとかいろいろあるんですけども、それだけではないですよ。さっき岡戸先生もおっしゃったように、人生の中で大学生活なんかたった四年で、その後が本当長い。ただかそこでちょっとした資格を得て、それをどう使うのっていうようなことも考えると、学生には一応資格ってことは言うんですけども、そのすすめ方はかなり難しい。あんまりあちこち資格で走り回るよりは、メインのひとつくらいにして、あとはとにかく本を読みなさいっていうことを今、言っているところなんです。ただ、今の学生は(私は一応英文学を教えますけど)まず、何も読んでないです。本は全く。ですから、たとえば「若草物語」だとか、「赤毛のアン」だとか、私たちがふつうに読んだような本、もちろん古典とされるようなものであっても、「何それ」とか、まあ、そうですね、シャーロット・ブロンテなんてっていったって「何それ」みたいな感じです。いずれにしても、やはり学生時代は自分の好きなことを懸命にやって、そして、その延長線上にその先があるっていうような大きな視点をなんとか組み込めないかなって感じています。もちろん資格って、四年間で取れる資格ということなんですけれども。大学としては、こういう資格が取れますからということで、一応その価値の売り込み(という言い方は変ですけども)をするんですけども、やはり、もっと大事なものが、なんか今、疎かになっているんじゃないか。だから先程、早瀬先生がおっしゃったように、なんか自信がないっていうか、もうあれもこれもあれもこれもっていう目先のことに追われる生活を続けることで自信喪失にも繋がるんじゃないでしょうか。もちろんその中でも優秀な学生もいますから、そういう学生はまた話が別になるんですけど、まあ一般論としては、このような事が言えるのではないかと思います。

樋口：私84歳でございますから、他に自慢するものないから歳だけ言っておきます。ということは、学生時代は只今から60年以上前のことでございます。ただ、そんなこと関係ないなっていう思いもあるんです。もちろん

パソコンもございませんでしたし、全部手書きでございましたし、それから友達と電話かけるのさえ、結構大騒ぎだったのに、今は瞬時に繋がってしまうという状況で、一番変わったのは何かと言ったら、友人含めた他者とのコミュニケーション手段、これはものすごく変わったと思います。だけど今だって海外行くのはそれなりに大変なことですし、今、先生方の話聞いていたら、私は17年間務めて、1番思ったのは、先生おっしゃっていましたが、私のいたところから自信なかったですよ。これね、1年くらいは私何も感じませんでしたけど、2年、3年、4年卒論の指導も何人かして、4年か6年たったとき、私は本学校の学生は優秀だと、全員じゃないですよ、全員じゃないかもしれないけれど、結構優秀な水準だと思うようになって、そしてむしろ、他の先生や学生自身が自信を失っていることに苛立ちました。だから6、7年目からは、私学生に「あなた方はね、中の上です」ってきりなく言ってきました、中の上ですって。4年間中にいながら上の中か、少なくとも上の下になりなさい。あなた方はそういう資格を十分素質をもっているんです。なんか日本の偏差値の中で、中の上っていうようなね、そういうところでなんか諦めて、自信を失ってる。良いレポート読んで聞かせました。こういうレポート書いた人があなた方の仲間にいる、この樋口自身考えさせられたことである。それも若い目から取り入れたもの、そういうの書いては発表させて、私は自分のもった学生に知識や技術よりも自信を持つことをある程度教えて出した気はしてます。それで今、あの、外へ出てみますとそれぞれそこそこに、いろんな要所要所でいるんですよ。7年前私は大病致しましてね、瀕死の状況で喘いでいたら、有名な大病院です。そうすると何か食事のたびに一口二口食べて。看護師とも違う白衣の天使がなんか傍に立って「お具合いかがでしたか、召し上がれましたか」っていうんですよ。はじめ返事どころなんかじゃないですよ。それでようやく快方の頃になって、「先生に教わりました管理栄養士学科卒業の、只今主任管理栄養士をしております〇〇〇〇でございます」って言われてね、本当にありがたかった、本当にその病院の中核になって、大病院ですよ、それで今度は最後に副院長みたいな人がいて、じかじかにたまに私厚労省の委員してたと思いますけど、アンケート調査取ってきました。「食事はお口に合いましたでしょうか」っていうから、本当は合わなかったんだけど、やっぱり病院の食事はまずいよって思ったけど、学生が白衣の天使のごとき姿を見たら、「手を変え品を変え、いろいろなものを食べさせて頂きまして、食事は富に結構でご

ざいました」って言うておきました。

本当に各地の地方公務員、各地の教員、地域の、一旦退職したんだけど地域の様々なリーダー、それから先生よりずっと先輩くらいの、今山形県の美術の卒業生で、それでも70ですよ、だけど地域をリードしている、そういう方が時々、自作のカレンダーなんか送ってくれます。なんか素晴らしい人たちがいます。ですから、兼任研究員の先生にお願いして、こうしたアンケート取って頂いたっていうのもそれなんですけれど、卒業生の中にも、非常にあの、素晴らしい人たちもいるんですね。

ぜひ私は、本学の学生に、等身大の自信をもって4年間卒業して行ってほしいなと思ってますし、それができると思ってます。で、そこそこの学生時代4年間なんて自分の事言たって、なんだか知らない青春時代なんて、くねくね、迷い道くねくねですよ。よくぞ、4年間私は「転落の詩集」の中に入らず、卒業して、今はここに皆様の前にいられると思うと、青春なんてめちゃくちゃです、ほんとに。後悔、わが青春に悔いなしなんていう人、どういう人かと思っちゃいます。私なんかは、転落の寸前、馬鹿といわれるものは百も繰り返すですよ、とかなんとか言いながら、いろんな経験をしながら無事、すり抜けてきて、今思うとしなければよかったと思う経験はひとつもございません。ですから、学生も十分勇気をもってしっかり自信をもってほしい。例えばね、好きな事やれとか、あるいは将来を控えて資格なんて言いますが、どうしたらいいんでしょう。私は自分が失敗していますから、学生たちには何か世間話でこういう話が出ると、得と好きと二通りあったら、こっち行った方が堅実だろう、こっち行った方が私は好きな事だ、得と好きで迷ったら、私は得を取って失敗してきた、学生時代はやっぱり自信がなかったから。これは学科選択です。私は大学における卒業科目文学志望の科目は、美学美術史学専攻です。で、もうひとつ、私は同じの大学の修了証書もっています。それは大学内における当時は東京大学新聞研究所本科と申しました。15時から授業があって、だから他大学の人は四大出てからじゃないと入れないんですけど、本学内の人に限って、15時からやりますから、3年4年で取ると、そこで完全に履修できるんです。だからこれは東大生の特権だと言われてましたね。だから他大学からも入れるんですけど、その人たちは皆卒業してから来てるんです。ここは結構難しいと言われてまして、東大の中でも4,5人に一人くらいの競争率だったかな。で私実は今の私見てくれれば、皆さんもそう思いなんでしょうけど、真に社会学的人間です。で、卒業して

からの研究会とか、そういったものも人口学とか、家族関係学とか、家族社会学とか、そういった社会学系の研究会に属しやってきました。けども私は本当に2年の終わりに学科選択をするときに、迷いに迷って、間違った選択をしたと思っております。で私自身はやっぱり自分でも社会学的な人間だよな、とっていたんですよ。で、ところがその時、もうその頃から女子学生の就職ってのは絶対ない。それだったら最初の選択が誤ってるんですけど、法学部でも行くようにして、で法学部から当時労働省といったところが1学年に1人か2人とってくる国家公務員試験を受けて、それで労働省に入る、あるいは、たとえば歴史学がうんと好きだなという人はそこで免許証を取って高校教員になる、それ以外なかったのですよ。で、あと1000人に1人くらいの穴をくぐり抜けて、もしその年、新聞社が女子を受けさせてくれたら、そんな状況ですよ。いま朝日だって読売だって4割女が入ってますよ。けどとにかく受けさせてくれたら。だから私逆に自身がありすぎたんですよ。私は100人に1人くらいの競争率なら絶対くぐり抜けて新聞社に入ると。だからそうならば何の学科の専攻でもいいだろう、と思いつつながら、またそれができる自信がない、そしたら安全をとつとこころ、でこれはもう人を当てにしちゃ絶対にいけないということです。美学美術史、私の父親はちょっと変わったタイプの学者でしたけれども、考古学者でその分野の人ならば名前知ってくださるというような感じの学者でした。ですから私が大学の文学部系行くと決めたときはもう、美術史とか考古学の教授たちが、後をお継ぎになるんですね、なんていうことがあったわけです。で父に相談いたしますと、考古学は穴掘りだから女に向かないし、これからは美術や文学館、博物館ができるから、その学芸員ならば女性もなれるかもしれない、みたいなことをちょっとつぶやいたわけです。

父と私は本当にと年寄りっ子のそのまた末っ子ですから、父なんかもういつ死ぬか分からなかったんですけど、本当にやっぱり、自信いっぱいなんて言いながら自信がなくて、けどどうちは父が年寄りだし就職はしなきゃならないと思って、だったら父のルートで頼めば博物館ぐらい、あるいはどっかの美術館ぐらい入れてくれるかなあと思って、学芸員の資格を取るべく、最終的に社会科研究ゼミ、父親は大学人でしたから娘の資質を知ってますから、お前は社会学いったほうが合ってるよ、なんていう半面、当時の学者は自分のコレクションをいっぱい持ってましたから、自分のコレクションを娘が受け継いで、離散しないで済むかもしれないってこと

は、今度は学者としてすごい喜びなんですね。で美術史行こうかしらなんて言ったら父がウキウキしちゃって、有名な先生に急に紹介し始めたりね、したことがあってね、で私は結局、二股かけて新聞研究所いま大学院情報学科というところになっていますけれど、そこまっておかげさまで受かりましたからそこへ行き、と同時に美術史学科へ行ったんです。で私はもう5月に挫折しておりました。美術史学という金にならないといわれている学科に、それでも選んで来る、女も1人いたかな、いっぱいいるんですよ。一等最初に修復中のこく、国分寺かな、中に連れて行かれたのかな。絶対もう専門家じゃなきゃ入れないという修復中の広隆寺の五重塔かな、中に入れてって連れて行ってもらって仏像をずっと見たんですよ。そのとき私もう仲間についていけないと思いました。たまたま環境に恵まれていたから、私は言葉とか、そういうものは一応知っている。けど他の人はもう理学部って将来約束されているようなのに、どうしても美術史やりたくって、親の反対を押し切って来たっていう人たちとね、目の輝きが違うんです。質問の、その時間にそういうものと共にいる喜びが、まるで違うんです。私は打ちのめされて、もうとうとう学芸員の資格を取りませんでした。それで新聞社一本にかけて、そしてめでたく、もの見事というかいろいろ紆余曲折を経て、ついに望みの新聞社には入れず、挫折のふちに落ち込んで、ということから始まったというわけです。

もう長くなるからここでやめますけれど、そこで選んだ、損で選ぶか、損得で選ぶか、好きで選ぶかそれで食っていけないだろうと思われた私たちの周辺の男の何人かは、たとえば1人は博物館に入りました。そして、いいキュレーターになるだろう、のちは博物館だろうと言われていたが、まだ修行中に重いものを持つんですよ。その怪我が原因で、修行中に倒れちゃったもんですから、博物館やめました。あんな優秀な人がかわいそうに思ってしまったら、それから20年くらい経ってたまたまNHKの教養テレビ観てたら、白髪交じりのその男が出てるじゃないですか。で何をしているかと思ったら、彼はそこから経験を生かして、修復の第一人者、古美術の修復の第一人者となって、今ここにいるのです。好きということはこの道が見つかるものだと思って、私はちょっと感激したのを覚えております。

※紙面の都合で、2. 仕事、キャリアについて、3. 家庭生活、家族間の役割などについて、4. 健康については、座談会で紹介した卒業生アンケートの自由記述のみ紹介させていただきます。

2. 仕事、キャリアについて

- ・自分が将来やりたい職業に就いたり、夢をかなえたりするために、資格をとり、努力を積んだ経験は、家庭に入ってからでも十分生かされます。できたら結婚や出産で仕事はやめずに続けていくことをおすすめします。再就職はたいへん難しいので。
- ・働くということに対して、「こうあるべき」という姿を描くことは大切だと思いますが、「こうでなくてはならない」と決めつけすぎないことも大切だと思います。
- ・就職活動や、あるいは実際に就職して、「こんなことがしたいんじゃない…」とってしまうことも多いでしょうが、「こんなこと」の中に意外とやりたいことにつながる道が隠れていたり、全くやりたいことと違っていても、それに取り組んだ努力ややり方が、次の道につながったりすることもあります。
- ・私が学生の頃は、こうなりたいたいからここに就職しないと…とせまく考えてしまっていたのですが、社会に出てみるといろいろな道があるし、回り道も全然「無駄」ではないし、広い目で世の中を、自分を見てほしいと思います。
- ・私が学生の頃は、漠然と「結婚、出産しても仕事を続けたい」と思っていました。でも、実際に社会に出てみて、また出産、育児を経験してみて、それはとても努力のいることだと分かりました。
- ・育児と仕事の両立を希望している学生さんには、必ず仕事から離れなければいけない期間(つわり、出産、育児等)があり、その期間からの復帰方法も含めたキャリア計画を立てられることをおすすめします。
- ・各企業の制度や取りくみは考えている以上に大切です。さらに仕事を続ける方法は、とても多岐に考えられます。いろいろ想像してみてください。最後に、育児は大変ですが、子供はとてもかわいいですよ。
- ・仕事は続けることで身につく、「この会社は私に合っている」と思える。1年や、2年働いただけでは何も身につかず、次の仕事で生かせることは少なく、また最初からのスタートになってしまいます。3年は続けた方が良く思う。
- ・自分が勝てると思うところをがんばり続けた。
- ・結婚して仕事をつづけるのは難しくないが出産育児をしながらは本当にたいへん。
- ・若い頃に理想としていた自分とは違った生活をしているが、それはそれで幸せ。
- ・こうあるべきという姿を描くが、こうでなくてはいけないと決めつけてはいけません。

- ・子供や家庭の都合で、自分の理想だけでは、どうにもならないことがある。
- ・すぎたガマンはしてはいけない。
- ・真面目に生きていれば大丈夫。
- ・いろいろな人に相談すれば、仕事を手放すことはなかったのでは。相談する場所・人がなかった。
- ・ここまではできるけれど、ここはできない。「お願い」と言えることが大事。
- ・じぶんの周りからじわじわ変える。
- ・無駄な経験はない。
- ・次は何をしようか、私自身もまだ考え中です。

3. 家庭生活、家族間の役割などについて

- ・いろいろな生き方があることを忘れてはいけないと思います。安定した会社に入って結婚、出産後も働き続けられればベストなのかもしれませんが、夫や親との関わりがあること、子どもの性格を考えなければいけないこと、働くことの障害になることはたくさんあります。
- ・「大学を卒業して専業主婦」でも堂々と生きていける人になってほしいです。
- ・女性の場合、出産、育児等があり、仕事、家庭との両立は大変なものがありますが、職場や家庭での人間関係をよくしていれば、スムーズにいく事も沢山あると思います。自分の人としての生き方、考え方、自分のまわりにいる人への関わり方が大切かと思えます。
- ・感謝の気持ちがとても大切のように思います。
- ・全てを1人で抱え込まないこと。女性だから母だから妻だからしなければならぬと思わず、まわりに助けを求め、自分をしばらないことが大切ではないかと思えます。
- ・仕事と家庭生活を両立させることは難しいけど、パートナーの理解と協力を得ること、身近な人に相談すること、優先順位(妻、嫁、母、仕事)をつけながら、臨機応変に取り組むことが大切です。
- ・身体を壊さないようにストレス解消法を身につけることも大事です。
- ・仕事、家庭を両立するためには、男性にも協力してもらわなければむずかしい。自分が全てやろう！と思わず、相手としっかり話し合い、仕事の仕方、家庭の中の事をどこまで自分がやるのか、相手がやるのか決めて働いた方がよい。そして、出産後仕事をされる方が多いが、子供を自分の手で育てることは

- 大変だけどとっても楽しいし、とても貴重な体験、人生でこの時しかないと思うと、大切な時間なのだ…と今、実感しています。
- ・着飾っていない状態の男性を知っておくこと。
- ・育児は大変ですが子供は可愛いです。

4. 健康について

- ・あきらめずに自分の信念をしっかりとつらぬくことです。
- ・人間関係でやはり、いきづまり、仕事を続けられない精神状態になってしまうことが今とても多いと思います。心のケア、モチベーションを保てるような相談できる場、人をもつことが大切に思います。
- ・仕事も家庭生活も猪突猛進はNG。余裕を持ち、できれば逃げ道を作っておくこと。身体をこわす前に逃げる。健康を維持していれば、いつでも元に戻れるから。
- ・趣味は大事、仕事や生活をおろそかにしない程度にハマろう。
- ・私は定年まで働くつもりでしたが、病気及び義母の介護のため、途中退職しました。無理をしないといけないこともあると思いますが、とにかく自分の体を第一に考えてほしいと思います。
- ・健康ならばたいいのことは乗り越えられます。また、「思いやり」の心を大切に。腹が立って何か言いたい時、ひと呼吸おいてから発言できたら…これは自分への課題でもあります。
- ・仕事をするには体が資本。忙しくても、心と体を休める時間をとってメリハリのある生活を心がけることが、楽しく長く仕事を続ける秘訣です。そのためにも、自分のリラックス方法は知っておくといいと思います。

健康長寿の延伸を目指したライフスタイルの提案

～加齢と食事摂取傾向の変化 最終章 課題と提言～

木元幸一 Kimoto Koichi , 貝原奈緒子 Kaibara Naoko

日本的食事の栄養学的評価の高まりや、和食が世界遺産となり注目されていることから、日本人の食生活は、日本人の健康長寿に大きく寄与していると思われる。しかし、健康寿命と平均寿命の間の年数が長いことや日本人の食生活が欧米化しているなどの課題も存在する。今回は、日本人の食生活を見直し、健康長寿をさらに維持するための方策を検討した。

我々は日本人と米国人の食事摂取傾向を比較し、日本人の加齢に伴う食事摂取傾向には大きな特徴があることを明らかにし¹⁾、食生活学会誌において報告した。その特徴をここに再掲載すると以下の6項目である。(1) 日本人の摂取エネルギー量は、男女とも15～19歳代で最も高く、20歳代で減少し、60歳代までほとんど変化せず、70歳代以上で減少した。米国人男性の摂取エネルギー量は、30歳前後がピークで加齢と共に減少傾向にあった。(2) 日本人は、40歳代までは鳥獣肉の摂取量が魚介類よりも多いが、50歳代を契機として魚介類の摂取量が鳥獣肉の摂取量を上回った。アメリカの魚介類の摂取量は、鳥獣肉の1/10以下であった。(図1；魚介類・鳥獣肉摂取量；日本食生活学会誌27, No2, (2016) 貝原、木元)

(3) 日本人は、年齢を重ねるに従い野菜類の摂取量が増えた。米国人は男女間で摂取量に差が見られたが、日本人の場合、摂取量の男女間での差は殆ど見られなかった。(4) 豆類では、米国人は摂取量も少なく、30歳代をピークとして減少しているが、日本人は年齢の上昇とともに摂取量が増加していた。また、日本の場合男女間における摂取量の差は見られなかった。(図2大豆の摂取量；日本食生活学会誌27, No2, (2016) 貝原、木元)

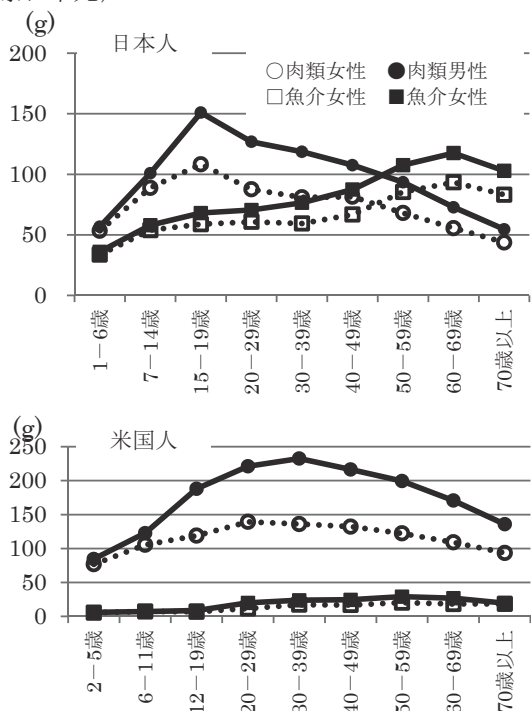


図1 日本人と米国人の年齢別魚介類・鳥獣肉摂取量¹⁾

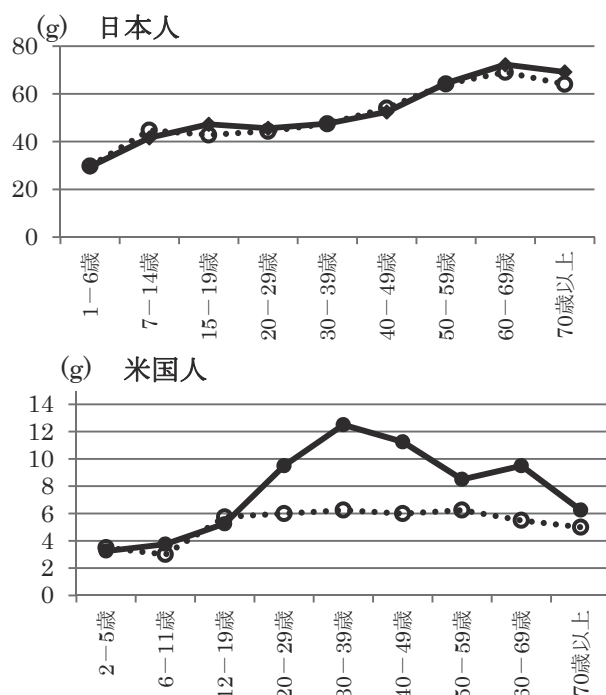
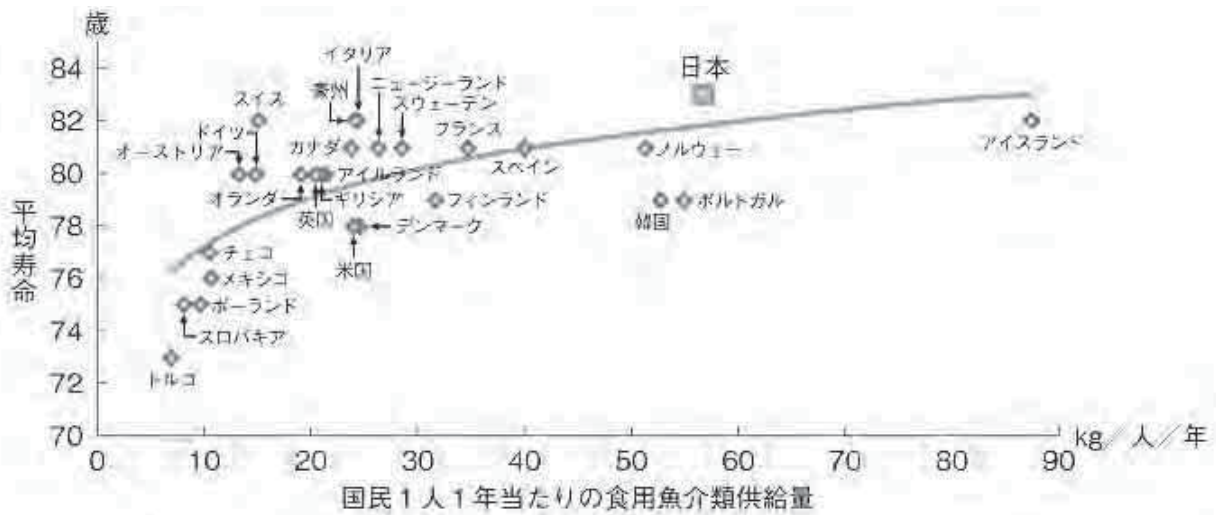


図2 日本人と米国人の大豆摂取量



資料：FAO「Food balance sheets」(日本以外の国)、農林水産省「食料需給表」、WHO「Statistical Information System (WHOSIS)」に基づき水産庁で作成

図3 魚介類の供給量と平均寿命

(5)日本人の果物摂取量は20～30歳代で減少し、その後、年齢の上昇とともに急激に摂取量が増加していた。また、女性の摂取量が男性を上回っていた。米国人の果物摂取量は、年齢の上昇による減少はなく、一定量が維持されていたが、日本人のような増加は観察されなかった。(6)年齢の上昇とともに日本人が摂取量を増加させている食品(魚介類、野菜、豆類、果物類)は、高齢期において栄養上好ましく、生活習慣病を防ぐには好都合のものである。

そこで、今回は、魚介類、野菜類、豆類の健康機能について調べると共に、現在の日本人の摂取状況と今後の課題について検討したのでここに報告する

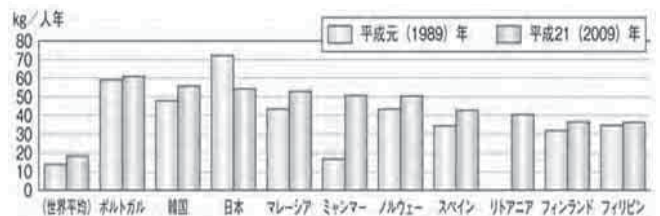
日本は四方海に囲まれており、季節の変化に合わせて折々の新鮮な魚介類を食べている。魚介類の摂取は日本人の健康長寿に貢献しているのだろうか。図3に見られるように、食魚介類供給量と平均寿命とをグラフにとってみると、魚介類供給量の多い国ほど平均寿命が長い傾向がみられる。我が国が世界一の長寿国となっているのも、魚介類の摂食が一因と見て取れる。

我々が既に報告したように米国人に比べて日本人はるかに多くの魚介類を摂食している。しかしながら、魚介類の摂取量は年々減少傾向にあり、平均すると平成21年度から鳥獣肉の摂取量が魚介類の摂取量を上回っている。年齢別にみると、魚介類は年齢の高い人ほど良く食べられており、現在60歳を超える人達は、未だ魚介類の摂取量は鳥獣肉を上回っている。¹⁾

我が国の魚介類消費量は長い間世界一であった。1人当たりの魚介類消費は、2007年にポルトガルに抜かれ、第2位となり、2009年には韓国にも抜かれ、第3位となっている。しかも図4(水産庁HP水産物の消費動向

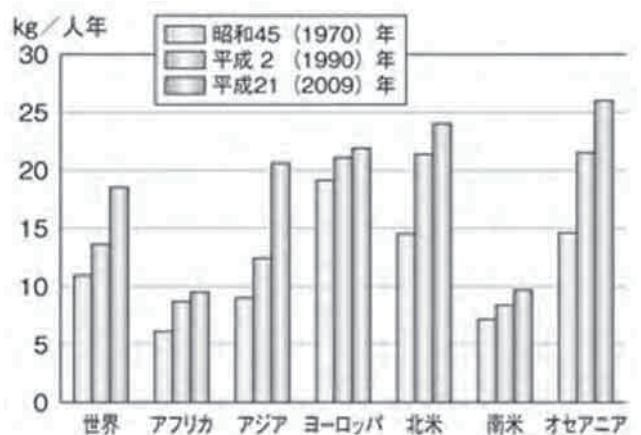
から)²⁾に見られるように、鳥獣肉を主に食べている国を除いて、魚を好んで食べている国の中で唯一、最近20年間で魚の消費量が減少している国でもある。地球上で今後最も人口が増えるのはアジアであり、平成21年度までに魚の消費量が最も増えているのもアジアである(図5水産庁HP水産物の消費動向から)²⁾。日本では魚から鳥獣肉へタンパク源が変化している中で、魚が周辺の国へ行ってしまう日本で食べられる魚が減っている

図4 各国の魚介類の1人当たり供給量の変化²⁾



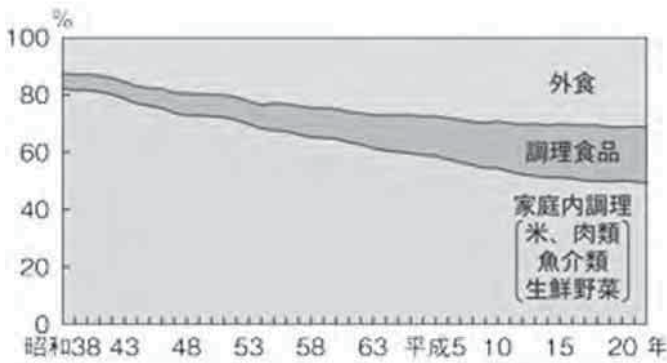
水産庁 HP 水産物の消費動向 から
http://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h22_h/trend/1/t1_2_1_1.html

図5 世界の魚介類の年間供給量の変化²⁾



資料：FAO「Food balance sheets」

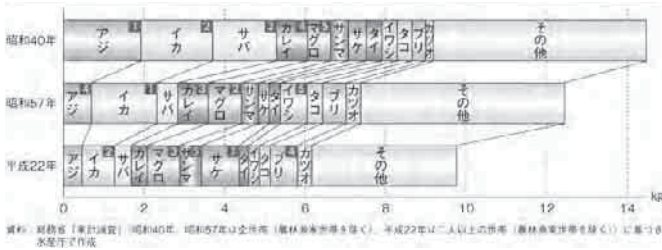
図6 品目別購入数量の割合²⁾



資料：総務省「家計調査」(二人以上の世帯(農林漁家世帯を除く))

ことも考えられ家庭での魚種別の鮮魚購入数量をみると(図6水産庁HP水産物の消費動向から)²⁾、昭和40年にはアジ、イカ、サバが上位3種類を占めているが、平成22年は、サケ、イカ、マグロへと変化している。家庭での下ごしらえが必要な一尾物の購入が減少し、切り身、刺身や干物が増加するなど、魚介類の購入形態が変化し、鮮魚店からの購入が減り、スーパーマーケットか

図7 食料支出額の形態別割合の推移²⁾



資料：総務省「家計調査」(昭和40年、昭和47年は全世帯(農林漁家世帯も含む)、平成22年は二人以上の世帯(農林漁家世帯も含む))に基づき水産庁で作成

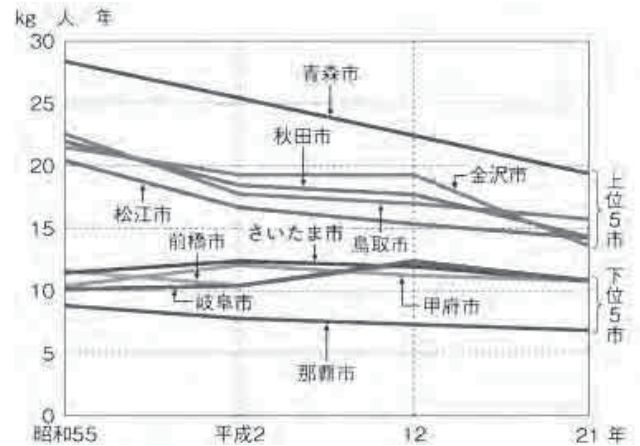
らの購入が増加している。最近10年間における増加が著しいサケについては、チリ、ノルウェー等からの輸入生鮮品が増えている。

家庭における食料への支出額形態の年次推移を調べると(図7)²⁾、外食や調理食品への支出の割合が増加し、家庭での調理品目への支出が減少しており、食の外部化が進行している。サケ・マグロといった「外食・中食仕向け魚種グループ」は輸入割合が高い魚種が多く、食の外部化は、水産物輸入量の増大にも影響している。

家庭における生鮮魚介類の1人当たりの購入数量の推移をみると(図8水産庁HP水産物の消費動向から)²⁾、従来数量の多い青森市、鳥取市、秋田市、金沢市、松江市では減少傾向にあり、さいたま市、前橋市、甲府市、岐阜市、那覇市など購入数量の小さい都市は横ばいであり、その差が減少し地域差が無くなっていることがわかる。生鮮魚介類摂取量の地域差が無くなっているのは、先に述べたように低温輸送技術の発達、量販店を中心と

した水産物流通体系、消費者の魚食の簡便化などを背景として、サケ・マグロといった魚が、内陸地域等の水産物消費を支えている。魚介類の油脂は不飽和脂肪酸が多く、劣化しやすいので低温での流通業の発達による恩恵は計り知れない。

図8 都市別魚介類の購入数量の推移²⁾



魚介類は、タンパク質源としてばかりでなくカルシウムやミネラル、ビタミン類といった栄養素が含まれ、魚の脂質に含まれるDHA(ドコサヘキサエン酸)は脳や神経組織の発達に、EPA(エイコサペンタエン酸)は血栓の予防に効果があることが知られている。また、機能性食品の中で高血圧抑制作用作用がある物質としてペプチドが知られている。アンギオテンシンIIは、アルドステロン分泌を促進し、Na⁺貯留を増加させると共に血管を収縮し、血圧を上昇させる。アンギオテンシンIIは、肺の変換酵素通称ACEによりアンギオテンシンIから生成する。アンギオテンシンIは腎から分泌されるレニンによって肝臓から生産されるアンギオテンシノーゲンから生産される。これをレニン-アンギオテンシン系と呼ばれ生活習慣病である本態勢高血圧の大きな原因となっている。我々は、食品成分中のACE阻害活性成分を検索しその効果を発見し報告してきている。九州大学松井、家政大学木元⁵⁾らは、THM(ヒトRA系導入つくば高血圧マウス)を用いて、イワシペプチドVal-Tyrの高血圧抑制作用を確認した(図9)。ACE阻害活性を有するペプチドが魚介類から数多く報告されている。鳥獣肉の種類と処理方法は比較的限定されるのに対して、カツオ、イワシなど魚介類の種類と処理方法は、日本の伝統と地域性に培われてはるかに多岐にわたり、それだけ多くのACE阻害ペプチドが見出されその効果が報告されている。魚が単にタンパク成分と栄養成分としてだけでなく本態勢高血圧抑制が期待されるACE阻害活性を有する機能性食品としての有効性も、日本人の健康長

寿を支えて可能性が示唆される。また、鳥獣肉類摂取に伴う動物性脂肪の過剰摂取を防ぎ、魚介類に多いポリエン酸などの不飽和脂肪酸を摂取することができる利点もある。

つくば高血圧マウス;ヒトレニン遺伝子導入マウスとヒトアンジオテンシノーゲン遺伝子導入マウスとの交配により得られた両外来遺伝子を有するトランスジェニックマウス

↓
ヒトRA系を特異的に保有する

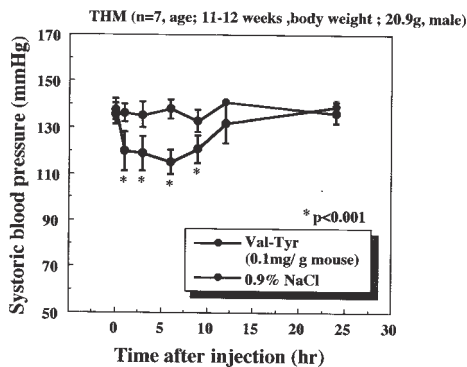


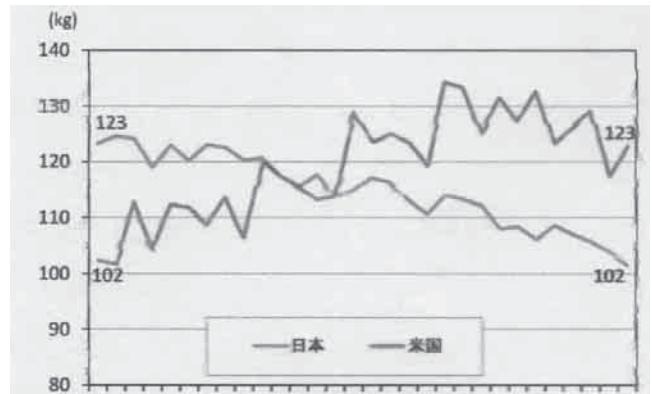
図9 イワシペプチドVal-Tyrの高血圧抑制作用³⁾

農水省の調査によると、魚肉の利用が減少するのは、魚は肉に比べると廃棄する部分が多く、生ごみが出る。台所が狭い世帯では魚の調理がしづらい。前処理、味付けが難しい。玄人っぽく面倒で基本的な調理法を知らない。といった理由がある。伝統的な魚の料理法・調理法を伝える機会がなく、親から子どもへ伝えられていないことが伺えられる。一方でグルメ志向も強いことを考えると、旬の味、個性的な味を損なわないでもっと簡単な調理法や料理の作成法を広めることが必要とも考えられる。

貝原、木元らの報告によれば、野菜というのも、日本人は若い人達よりも高齢者に好んで食べられている特徴がある。若い人達の野菜の消費量は年々減っている。平均すると、日本人は、平成10年から、国民ひとりあたりの野菜消費量がアメリカ人に逆転されている。(図10)

野菜は世界で800種程度あり、日本では150程度栽培されていると言われている。野菜は日本料理には欠かせない素材であるが、近年はサラダとして消費される傾向が強くなって来ている。

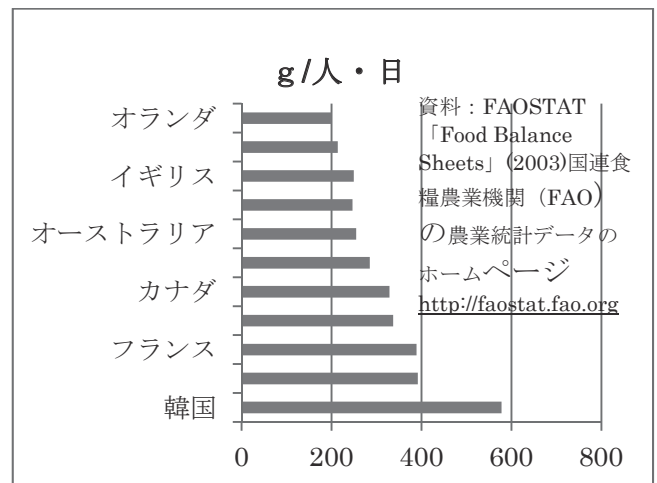
図10 日米における1人1年当たりの野菜消費量の推移⁴⁾



<http://www.maff.go.jp/j/seisan/ryutu/yasai/pdf/2yasai2511.pdf> 農水省野菜をめぐる情勢

FAOSTAT [Food supply quantity(g/capita/day)] vegetables+(total) によれば日本人1人当たりの野菜供給量は290.91 gとなっており、世界177カ国の平均約225 gを上回っています。欧米諸国と比較すると、イタリア416.2 g、アメリカ349.6 gなどの国より下回っています。アジア諸国では、中国は766.83g、韓国は584.63gと高い数値です。(図11)

図11 国別野菜の消費量⁴⁾



「21世紀における国民健康づくり運動(健康日21(第2次))厚生労働省」では、健康を維持するために必要な野菜の摂取目標量を成人1日当たり350g以上としており、同省の国民健康・栄養調査(平成24年)によると、1日当たり平均摂取量は286.5gで、目標の82%程度となっている。現在はもっと少なくなっている。

野菜はビタミン、ミネラル、食物繊維等の重要な供給源であると共に、野菜に含まれる成分が、生活習慣病、循環器疾患やがんの予防に効果的であると考えられており、野菜の摂取量が多い人は少ない人に比べて、がんの発症率が低いなどの研究成果も報告されている。世界

がん研究基金、米国がん研究所は、1997年に「食物・栄養とがん予防：国際的な展望」(Food, Nutrition and the Prevention of Cancer : a Global Perspective)¹⁾を公表し、果物・野菜の摂取により多くの臓器でがん予防効果があると報告した。その後、症例対照研究より信頼性が高いとされている大規模コホート研究成果の報告では、野菜と果物によるがん予防効果について、1997年版の「食物・栄養とがん予防：国際的な展望」で「確実：convincing」とされた食道、胃、大腸、肺でのがん予防は、「可能性大：probable」となっており、他の臓器についても控えめに訂正されている。

現在、世界で最大の野菜生産額はトマトで、トマトは果実を生で食べたり料理に入れたりするほかに、ジュース・ケチャップ・ピューレなどの加工食品としても大量に消費されている。トマトはもともと南米アンデス山脈の高地に自生していたナス科の植物で、ヨーロッパに持ち込まれ、世界中に広がり、日本では明治に栽培されたが、今では当時よりトマト臭の少ないポンデローザ系が作られるようになった。³⁾

ジャガイモは、青葉氏によれば⁵⁾、もともとインカ文明を築いた主要な食糧の一つであったが、スペインによる征服後ヨーロッパに渡り、牛肉とはジャガイモの食文化を産み、やがて世界の4大作物(米、小麦、トウモロコシ、ジャガイモ)の一つとなった。青葉氏によれば、ゴボウは中国北部、ヨーロッパに分布するが、日本では野生しないが、最初は薬用として、その後野菜として韓国と日本でだけ栽培している。日本では戦前消費されていたイモ類やゴボウ・レンコン・カブなどの根菜類は、果菜類に代っている。キャベツは、地中海沿岸分布し、多くの変種を産んでいる。青汁などの原料になるケール(葉キャベツ)などもある。アメリカ国立がん研究所の発表によれば、にんにくに次いで「がん予防に効果が高い」野菜に選ばれている。またキャベツには胃壁の粘膜の再生や潰瘍の治癒に効果的なビタミンUと呼んでいる(正式なビタミンの1種とは認められていない)ビタミンが豊富に含まれている。ビタミンUは別名キャベジンとも呼ばれるように、実はこのビタミンはキャベツから発見された。またビタミンK、繊維質、カリウム、カルシウムなども多い。

木元らは、食品中の高血圧抑制物質について検索し詳細に報告している^{6,7,8)}。降圧効果を示す食品にはACE阻害を示すものが多いが必ずしもそうでないものも存在する。図12と図13には、アシタバとハヤトウリの高血圧抑制作用を示す。

図12 明日葉NAの高血圧抑制作用⁶⁾

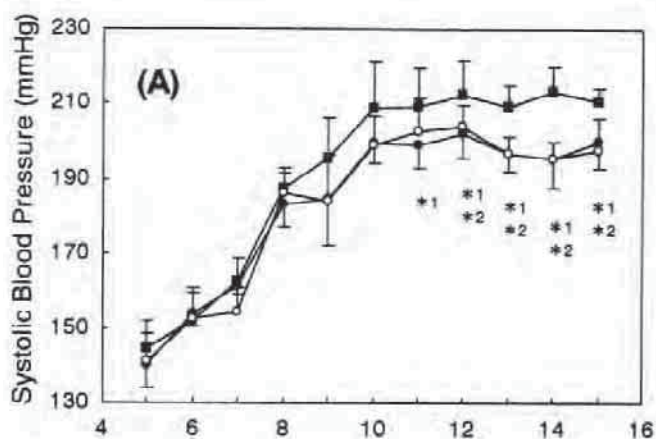
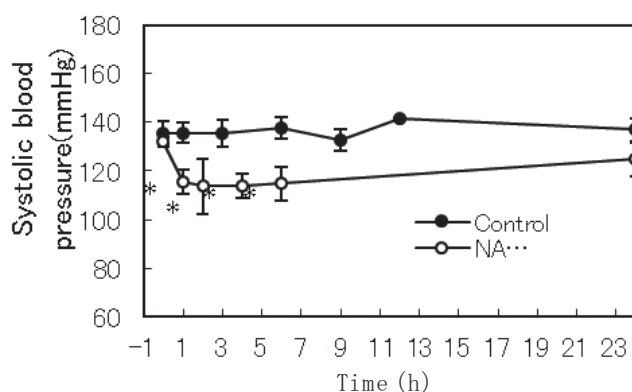


図13 ハヤトウリNAの高血圧抑制作用⁷⁾



日本では、大豆製品が重要な蛋白供給源として食生活の中で重視されていた。現在でも豆腐、納豆、豆乳など日常の食生活になじんだ食品である。1人当たり消費量も世界1位で、納豆、豆腐、味噌・醤油など、大豆製品は日本で大いに発達しているが、日本独自の食品ではない。アジアでは大豆製品の利用が盛んである。FAOの統計によると大豆の食料消費(食用油加工用消費や飼料等の非食用消費を除く)と消費カロリーの世界トップ5(2007年)は、下表の通りである。

食用供給量	1人1日当たりの消費カロリー (kcal/capita/day)
1. 中国	1. 日本
2. 日本	2. 韓国
3. インド	3. 北朝鮮
4. ブラジル	4. コスタリカ
5. ナイジェリア	5. 中国

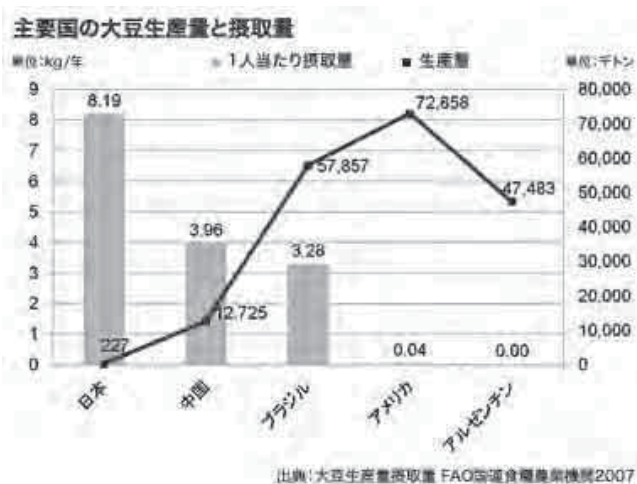
(資料) FAOSTAT

2000年から厚生省(当時)によって始められた「健康日本21(21世紀における国民健康づくり運動)」では、豆類の1日の摂取目標は100g以上と言われている。実際は、平均で約55gと必要量を満たしていない。1人あたりの摂取量を年代別に見てみると、やはり昔から大豆

食品に慣れ親しんでいる50代、60代は平均量より多く摂っている。40歳代以下の摂取量は男女ともに急激に減少している(図2)。

大豆は、欧米でも注目を集めているが、摂取量は未だ少ない。世界一の大豆生産国である米国では、年間約7,300万トンも生産している一方で、1人当たりの年間摂取量はわずか40g。これは日本人1人の1日分にも届かない(図14)。

図14 大豆の生産と消費⁹⁾



大豆製品を準主食としている国はインドネシアである。テンペ(ナットウ)、タウゲ(モヤシ)、タフー(豆腐)などの大豆製品がある。

米国が世界一の大豆生産国であるが、米国の大豆は、当初、飼料や干し草として利用され、その後搾油され、マーガリン、食用油として利用がはじまった。しかし、アメリカは今でも世界一の生産国にもかかわらず、大豆を直接食用とはしない、大豆はFAO統計では穀物でも豆類でも野菜でもなく油脂作物と分類されている。加塩された大豆発酵品である味噌、醤油、タマリなどの源は中国の華北文化圏とされる。ナットウ(納豆)はヒマラヤ、中国雲南省から日本までの食品として知られるが、伝来経路は分かっていない。ジャワのテンペ、ヒマラヤのキネマなども納豆である。豆腐については、ジャワのタフー、ビルマのトーフー、中尾8)によれば、北方遊牧民族が中国にもちこみ、中国で開発され、アジアに広がった。

豆を食べやすくする方法としての豆モヤシは、ジャワやビルマでも栽培され、ダルという半モヤシ化後乾燥豆加工品はインド人の食生活に供されている。インドは多種類の豆を食用としている。大豆などの豆類は、必須アミノ酸構成が米や小麦といった穀物主食を補うたんぱ

く源として重要な役割を果たしている。大豆は畑の肉とも呼ばれ、米欧でもアジアや日本の食生活を参考している根拠になっている。大豆タンパク質を加工して肉のような触感を持たせたものが既に商品となっている。

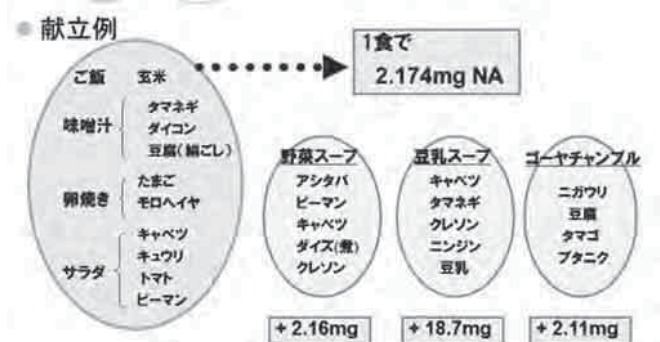
大豆は、栄養的にも十分であるが、佐藤、木元らによれば大豆中のニコチアナミンにはACE阻害作用があり、高血圧抑制作用があると報告されている。

林、木元らは野菜中のニコチアナミン量を測定し、想定される献立中のニコチアナミン量を計算した。

また、野菜スープを工夫することにより多くのニコチアナミン量を摂取することが可能になることを示した(図15)。また、最近大豆中にはニコチアナミン以外に降圧効果のあるペプチドが単離されておりその機能性の効果が一段と期待されている。先述の魚介類からのペプチドの単離も併せて考えると、魚介類や大豆、野菜を食材料とする和食の栄養効果と機能効果は日本人の健康長寿に大きくかかわっている可能性が示唆された。

献立への応用

図15 献立中のNA量



一般的に、人生において最も体力があるのは20歳代から40歳代前半である。米国人の場合、体力のピークと各食品群の摂取量の最大値をしめす年代がほぼ一致していた。体力と食品の摂取量は比例しているのが当然である。しかし日本人は体力が低下するであろうと考えられる年齢になっても摂取量を増やしている食品群があり、それらは生活習慣病を予防するためには好都合のものであったことは注目値する。この現象の原因の一つとして、日本人の食生活環境が変化している中で、今の高齢者が若い時に食べていた食物摂取傾向が高齢となった現在も続いているが、今の若い人達は食生活環境の変化の影響をもちに受けているから違ってきていると推定される。日本人はもともと、米を中心とし、水産物や畜産物、野菜などを組み合わせた食生活であった。しかし近年、ファーストフードや加工食品などの普及により、特に若年者において食生活の欧米化が進んでいる。欧米

型の食事にこのまま近づくと、今後、日本人の平均寿命と健康寿命に影響が現れてくる可能性も危惧される。日本人の食生活環境が変化しているにも拘らず高齢者が独自の食品摂取傾向を示していることは日本人の大きな特徴である。その理由は、日本食のメニューの豊富さがあると言える。地域の歴史と伝統に培われて続いてきている様々な食品と地理的な特徴による四季折々の旬な食材とその処理方法の巧みさによるところが類を見ない食文化を残してきている。年を重ねるとともに、特定の食品群の摂取量が増加していく現象は、ある程度意識的になされていると推定される。意識的というのを二つに分けて考えることができる。一つは、その食品群が身体に良いから積極的に食べている、ということである。もう一つは、加齢に伴う体力・体質の変化が嗜好へ影響していると可能性も推定される。日本人は、老後、親への介護負担が増えるなど家族や居住地域へと生活の主体が変化する。年齢と共に幼少年時に食べていたものなど、日本食・郷土食への回帰も生活の変化と心の流れの中にあることが想像できる。日本には、四季折々の伝統食や豊富な地域食がある。しかしながら、魚介類、野菜類、豆類などの平均摂取量は年々減少しており年齢と共に嗜好が変化していく中で、それらを支える食材や日本の食習慣を継承していくことが重要である。しかしながらグローバル経済圏の中、自国の農水産業と輸入食材の状況も大きく変わってきている。今後は、四季折々の食材と多様な地域食・郷土食を含む和食に、新しい欧米の食材なども栄養評価の高い日本的調理法とメニューの開発により取り入れつつ継承し、発展させていくことが、日本人の健康維持において必須の課題である。

引用文献

- 1) “日本人の加齢に伴う食事摂取傾向の特徴” 日本食生活学会誌27, No2,(2016) 貝原奈緒子, 木元幸一
- 2) 水産庁 “水産物の消費動向から”
http://www.jfa.maff.go.jp/j/kikaku/wpaper/h22_h/trend/1/t1_2_1_1.html
- 3) “Depression Effect induced by Dipeptide, Val-Tyr, in hypertensive Transgenic Mice, . . .” T. MATSUI, K.MATSUMOTO, T.KAWASAKI, K.MURAKAMI, K.kimoto Vol.30, 262-265 (2003)
- 4) 農水省 “農水省野菜をめぐる情勢”
<http://www.maff.go.jp/j/seisan/ryutu/yasai/>

pdf/2yasai2511.pdf

- 5) 青葉 高 野菜の博物学 講談社 BLUE BACKS (1989)
- 6) 清水恵美子, 木元幸一他 J. Nutr.Scie, Vitaminol., Vol.45 (1998)
- 7) “つくば高血圧マウスの血圧に及ぼすニコチアミンの影響” 林あつみ, 村上和雄, 木元幸一他 日本栄養食糧学会誌 vol58, No6 (2005)
- 8) “食品中の高血圧抑制物質について” 木元幸一 日本食生活学会誌 Vol.10 No3 (1990)
- 9) 農水省 “大豆関連データ”
http://www.maff.go.jp/j/seisan/ryutu/daizu/d_data/
- 10) 日本農芸化学会講演要旨30E30113a, 2005年 “ニコチアミンの血圧降下作用とその安全性について” (佐藤拓哉, 木元幸一他, キックマンKK, 東京家政大学)

参考図書

- 1 小原哲二郎、細谷憲政 監修、『食辞林』 樹村房、1999
- 2 杉田浩一、平安知、田島眞、安井明美 編 『日本食品大辞典』 医歯薬出版、2003
- 3 中尾 佐助『料理の起源』 NHK ブックス、1972

健康長寿の延伸を目指したライフスタイルの提案

～若い女性が考える父親および男性の家事・育児への参加～

宇和川小百合 Uwagawa Sayuri, 色川木綿子 Irokawa yuko

今回は行事食および儀礼食について男性側から検討した。その中で調理をしている男性は18.8%だった。今回は女子大生がみた父親の家事、育児への参加状況や男性に期待する役割や意識について調査した。男性の食生活への積極的な参加が自己管理能力を身につけ、健康寿命延伸へ導くと考える。

1. はじめに

日本の人口構成は少子高齢化となり、すでに人口減少が始まっている¹⁾(図1)。65歳以上の人口が占める割合が25%を超えて超高齢化社会(21%を超えた社会)に入っている。日本の平均寿命は男女平均では世界1位、男性は6位の80.5歳、女性は1位の86.8歳である。

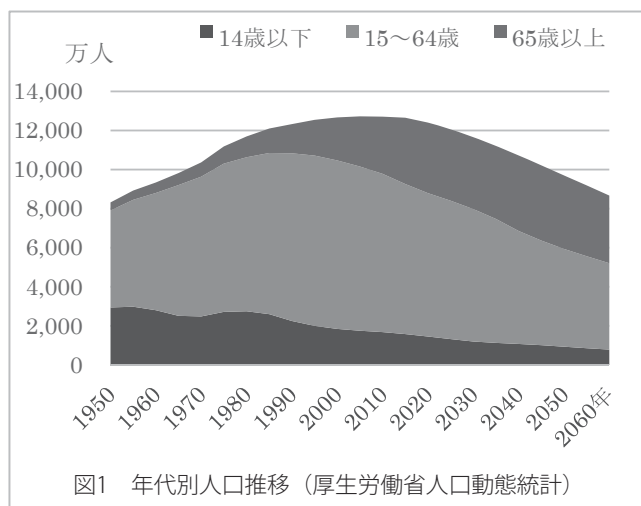


図1 年代別人口推移 (厚生労働省人口動態統計)

資料：2015年以前：総務省統計局「国勢調査」及び「人口推計」2020年以降：国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成24年1月推計)」

(注)1. 2015年は、総務省統計局「人口推計」2. 1970年までは沖縄県を含まない。

そして100歳以上の人口は増加して(図2)2016年には65,692人となった²⁾。1981年に厚生省(現厚生労働省)の委託を受けて(財)健康・体力づくり事業財団が全国の保健所、市町村を通じ100歳以上の高齢者に対して

市町村を通じ1,018人(100歳以上人口1,072人)を対象に「長寿者保健栄養調査」をおこなった。35年の間に100歳以上の人口は60倍以上に増加している。

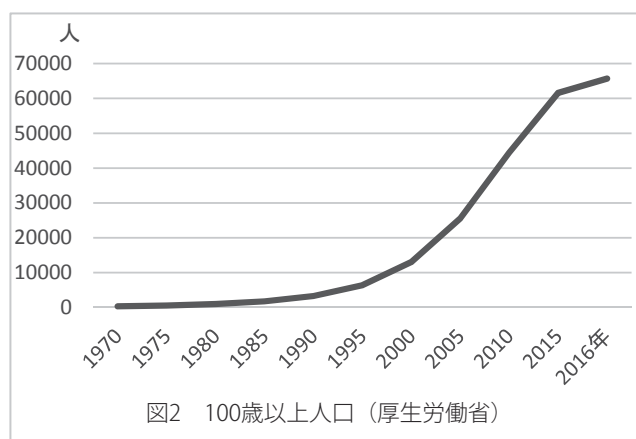
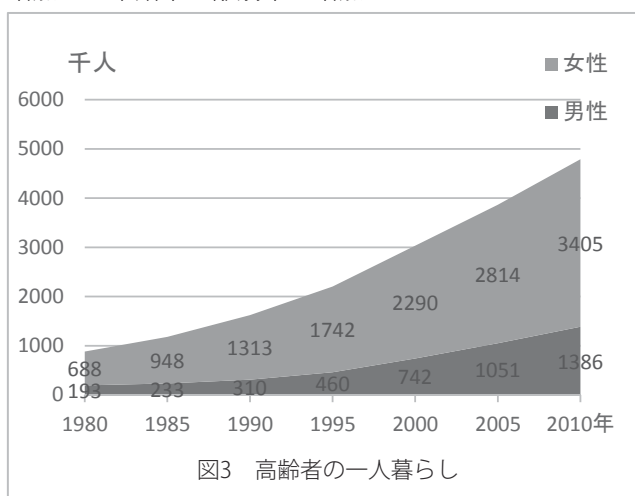


図2 100歳以上人口 (厚生労働省)

その中でアンケート調査のほかに食事摂取状況調査が行われ、保健所の栄養士などが長寿者の自宅や老人ホームなどを訪問して聞き取り調査をおこなった。聞き取り可能な人に前日摂取した食事内容を詳しく調査した。食事調査表の記載が不十分なものが多かったため、解析可能だった220人を対象に栄養素等摂取量および食品群別摂取状況をまとめたものを報告した。³⁾日常生活動作強度によって栄養摂取量には違いがみられたが、男性の平均は $1,122 \pm 352\text{kcal}$ 、女性の平均は $1,014 \pm 379\text{kcal}$ であった。そして、たんぱく質摂取量が40g前後摂取されていた。このたんぱく質摂取量は、当時長寿県であった沖縄の85歳以上の高齢者(n=40)の栄養摂取量⁴⁾と近い摂取量であった。ほとんど寝たきりの高齢者は $918 \pm 401\text{kcal}$ と少ないエネルギー摂取量であったが、施設入所者は栄養管理がされているので栄養バランスが比較的とれていたことや元気な高齢者は和食

が中心と思っていたが、グラタンなど洋風な料理も好んで摂取していた。

近年は核家族化が進み⁵⁾「夫婦と未婚の子のみの世帯」29.7%、「単独世帯」26.5%、「夫婦のみの世帯」23.2%となっている。家族構成のあり方は食生活とかわり大きい。高齢者との同居率は、1980年に7割だったのが2012年には42.3%となり同居の割合は大幅に減少している。また、65歳以上の高齢者の一人暮らしが増加している(図3)⁶⁾高齢者人口(65歳以上)に占める一人暮らしの高齢者は、1980年から2010年の間に男性4.3%から11.1%に、女性11.2%から20.3%に増加し、未婚率や離別率も増加している。



平成26年度の内閣府の全国調査(有効回答数1,480人)「一人暮らし高齢者に関する意識調査結果」⁷⁾によると一人暮らし高齢者の76.3%が「今のままの一人暮らしでよい」と回答している。また、「生活の楽しみ」では、「テレビ、ラジオ」78.8%、「仲間と集まり、おしゃべりをする事や親しい友人、同じ趣味の人との交際」53.1%、「新聞・雑誌」44.0%について「食事・飲食」42.2%となっている。

健康寿命は2013年時点で男性が71.19年、女性が74.21年となり¹⁾伸びてはいるが、平均寿命の伸びに比べると低く、平均寿命と健康寿命との差は広がっている。国も健康寿命の延伸のための施策を展開しているが、社会環境の変化などから考えると男性が食生活の自己管理能力を高めることは必要である。

前回報告した「男性の行事食・儀礼食への意識」⁸⁾では、行事や儀礼に対する認知度は全体に女性よりも男性の方が低く、経験した人はさらに低かった。また、調理をすると回答した男性は19%弱であった。次世代に伝えたいと思っている人は多いので、非日常における年に数回の機会から食への関心を高めてほしいと考える。

今回は女子大生がみた家庭内での家事や育児へのかか

わり方を父親(実際)および男性(理想)についてアンケート調査を実施して検討したので報告をする。

2. 調査方法

2-1 調査対象：東京家政大学、同短期大学部の学生407名

2-2 調査方法：アンケート調査用紙を配布し、その場で回答、回収をおこなった(回収率100%)

2-3 調査時期：2016年7月

2-4 調査項目

①基礎項目：保護者の年齢、就業の有無、世帯構成

②子供の頃からの家庭内での手伝いの状況等

③父親の家事、育児等への参加状況等

④男性がかかわる家事、育児等への参加意識等

3. 結果および考察

3-1 基礎項目

表1 両親の年齢 (%)

年齢	両親の年齢 (%)	
	父親	母親
n=409		
30歳代	9 (2.2)	17 (4.2)
40歳代	92 (22.5)	166 (40.6)
50歳代	265 (64.8)	212 (51.8)
60歳以上	40 (9.8)	11 (2.7)
N.A	3 (0.7)	3 (0.7)

表2 両親の就業 (%)

就業形態	両親の就業 (%)	
	父親	母親
常勤	316 (77.3)	102 (24.9)
自営	69 (16.9)	40 (9.8)
パート	13 (3.2)	173 (42.3)
アルバイト		
無	11 (2.6)	94 (23.0)

表3 家族構成 (%)

家族構成 (%)	
親・子	281 (68.7)
親・子 祖父母	114 (27.9)
その他	14 (3.4)

両親の年齢は、40～50歳代がほとんどであった(表1)。両親の就業形態は父親では「常勤」が多く、母親は「パートやアルバイト」が42.3%、「常勤」24.9%だった(表2)。家族構成(表3)は「親と子」の核家族が多く7割弱で、祖父母と暮らしている学生は27.9%と3割弱だった。学生の兄弟数は「2人」53.1%、「3人」23.0%、「1人」18.6%、「4人」3.9%、「5人以上」1.2%だった。

国立社会保障・人口問題研究所⁹⁾によると結婚持続期間15～19年夫婦の最終的な出生子ども数とみなされる「完結出生児数」は、1940年に1回目の調査が行われており4.27人であったのが、1962年2.83人と3人未満となっており、2010年に1.96人と2人未満になった。子どもを希望しない、または、希望しているのに持たない理由として「子育てや教育にお金がかかりすぎる」と30歳未満の回答が多く、30歳代以上では「ほしいけれどできないから」などの年齢や身体的な理由が多い。晩婚化および未婚率の増加などによって合計特殊出生率は2015年1.46である¹⁰⁾。2005年の1.26から緩やかな回復傾向であるが低い状況は変わっていない。

3-2 学生の家事参加状況

子どもの頃、家庭で手伝いを「よくした」27.1%、「時々した」53.8%と8割の学生は子どもの頃手伝いをしていた。しかし大学生になると「よくしている」24.9%、「時々している」48.4%と減少していた。

3歳ぐらいからお手伝いに興味を持ち始め、料理の手伝いや食事の準備・後片付けなどできることも徐々に増えてくるので、お手伝いは楽しいという気持ちを大切にしながら、経験させていくことが必要である。子どもに手伝わせるのは手間が余計にかかるので面倒と考えずに、人の役に立つ喜びや生きるための手段の学びとして教育していきたいものである。

3-3 父親の家事・育児への参加状況

図4-1のように父親が「朝食の準備をしない」57.9%、「夕食の準備をしない」54.0%と多く、5割以上しているが「朝食」11.4%、「夕食」8.6%と少なかった。家事のなかでも食材や日用品の買い物は父親の参加が比較的多かった。

子どもがいる有配偶男性の家事ケアでは世界の中で日本人男性が低いことが知られている。内閣府の6歳未満の子どもを持つ夫の家事・育児関連時間(1日あたり・国際比較)¹¹⁾によると1位スウェーデン3時間21分、ノ

ルウェー3時間12分、ドイツ3時間、日本1時間07分となり、先進国の最低の水準になっている。

学生は男性に家事に参加してほしいとっていて、「かなりそう思う」35.5%、「ややそう思う」36.7%、「そう思う」22.2%と合計すると94.2%とほとんどの学生が男性の家事参加を希望していた。

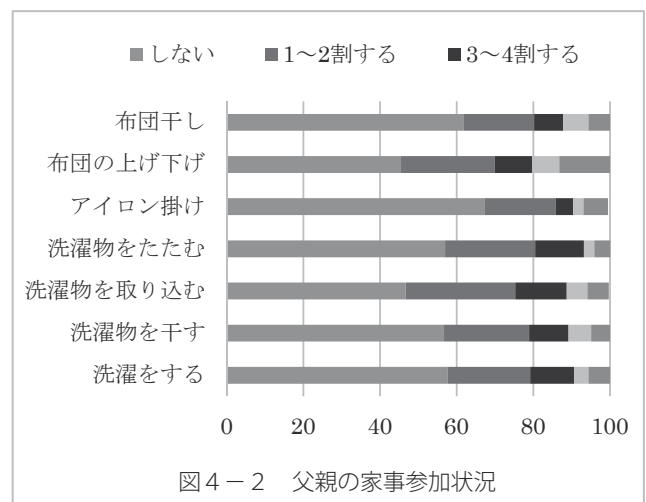
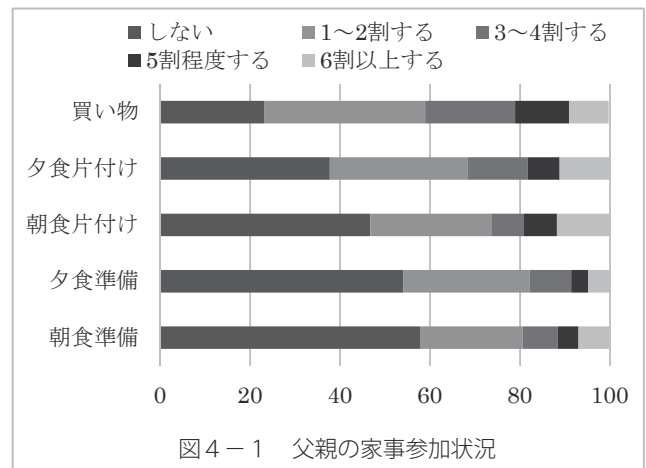


図4-2のように「洗濯をしない」57.7%、「洗濯物を干すことをしない」56.7%、「洗濯物を取り込むことをしない」46.7%、「洗濯物をたたむことをしない」57.0%、「アイロン掛けをしない」67.2%、「布団の上げ下げをしない」45.5%、「布団干しをしない」61.9%と半数以上の父親はしていなかった。「洗濯物を取り込む、たたむ、干す」、「布団の上げ下げ」では1～2割程度する父親が2割強いた。

図4-3では、「ゴミだしをしない」28.6%と少なく、父親がする家事の一つになっているようである。「部屋の掃除をしない」35.0%、「風呂の用意をしない」36.9%、「風呂場の掃除をしない」37.7%、「トイレの掃除をしない」63.3%であった。

20～40歳代の夫の好きな家事ランキング¹²⁾をみるといずれの年代も洗濯が1位で次いで20歳代で部屋の片付け、食事作り、掃除、食器洗い、30歳代で部屋の

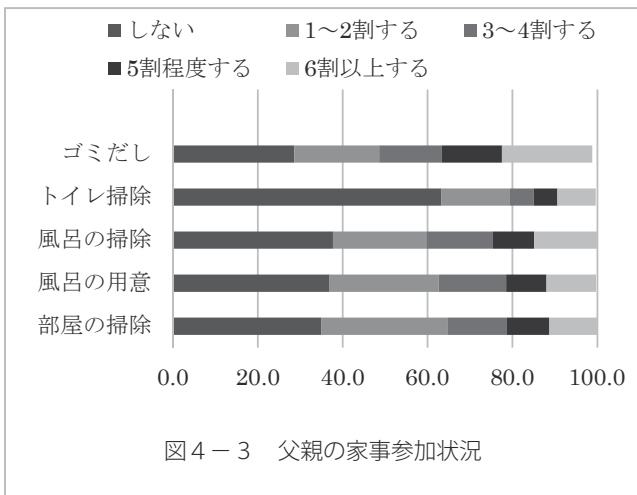


図4-3 父親の家事参加状況

片付け、掃除、食事作り、食器洗い、40歳代で食事作り、食器洗い、部屋の片付け、掃除となっている。家事をする理由は、妻の負担を減らしたい、家族に喜んでもらいたいが、配偶者の機嫌が悪くならないために、配偶者に頼まれるからを上回っていたと報告されている。

第5回全国家庭動向調査¹³⁾によると夫が週1~2回以上おこなった家事では、ゴミだしが40.6%と多く、次いで日常の買い物36.6%、食後の後片付け33.1%、風呂掃除29.1%、洗濯26.0%、炊事21.0%、部屋の掃除19.2%となっている。年齢が若く、あるいは妻が常勤であると夫が家事をする割合が高くなっている。ただし、夫が家事をおこなう頻度をみると若い年代のほうが頻度は高くなっているものの、全体には低い頻度であると報告されている。夫の家事に対する妻からの期待では、期待する31.4%、期待しない68.6%とあまり期待していないようである。妻の夫の家事への評価は、満足51.8%と約半数である。

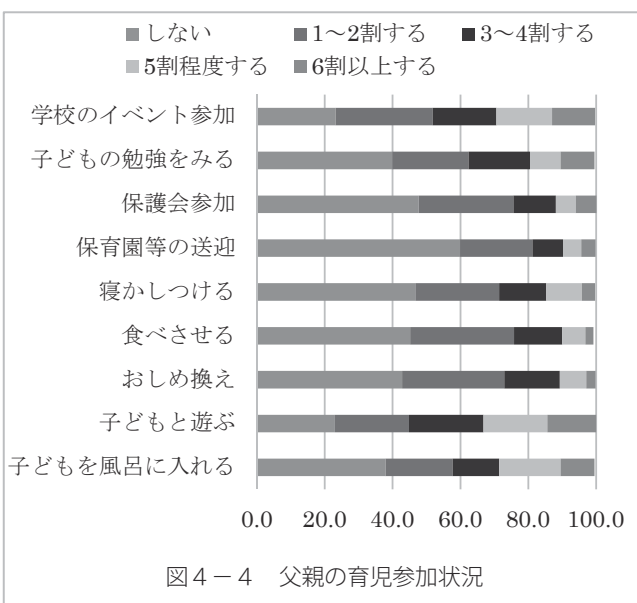


図4-4 父親の育児参加状況

3-4 父親の育児参加状況

学生が幼い頃の父親の様子を思い出し、あるいは家庭の中で聞いている話などから回答してもらったのが図4-4である。

全体に家事よりは育児のほうが参加しているようであるが、「保育園等の送迎をしない」59.9%、「保護者会への参加をしない」47.7%、「子供を寝かしつけたことがない」46.7%、「子どもにミルクや食事を与えたことがない」45.2%、「おしめ換えをしたことがない」42.8%、「子どもの勉強をみたことがない」39.9%、「子どもを風呂に入れたことがない」37.9%、「学校のイベントに参加したことがない」23.2%、「子どもの遊び相手になったことがない」23.0%であった。1~2割程度はやったことがある父親は19.8~30.6%という回答だった。

全国家庭動向調査¹³⁾でも夫の家事の分担割合より育児分担の方が高い割合である。遊び相手になる87.5%、風呂に入れる82.1%、泣いた子どもをあやす65.0%、食事をさせる60.8%、オムツを替える59.3%など年々割合は増えている。年齢が若くなるほど、あるいは妻が常勤であると夫が育児をする割合が高くなっている。育児をおこなう頻度は乳児など子どもが小さい時、あるいは妻が常勤の方が高い頻度である。夫の育児に対する妻の期待では、期待する53.5%、期待しない46.5%であり、家事の評価よりも期待度は高い。

3-5 男性が家事・育児をおこなうことへの意識

学生に男性に家事・育児に対してどうあってほしいか聞いたのが図5である。

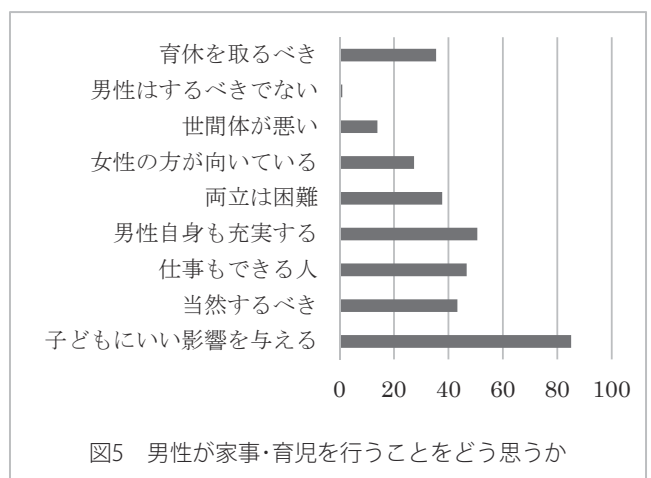


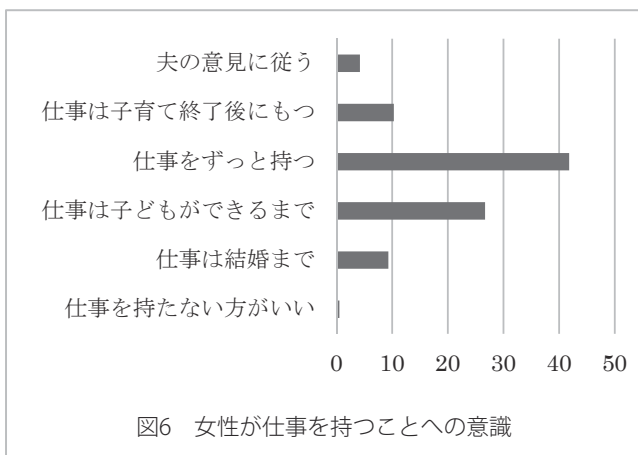
図5 男性が家事・育児を行うことをどう思うか

「子どもにいい影響を与えるのでやってほしい」85.1%、「男性自身も充実し良い事だ」50.6%、「家事・育児をおこなう男性は仕事もできる」46.7%、「男性が家事・育児をおこなうことは当然だ」43.3%、「仕

事との両立は難しい」37.7%、「育児休暇をとるべきだ」35.5%、「家事・育児は女性の方が向いている」27.4%、「妻が家事・育児をしていないと世間体が悪い」13.9%、「男性は家事・育児をおこなうべきではない」1.0%、「男性が家事・育児をすると周囲の目が気になる」0.5%であった。

3-6 女性の就業への意識

学生が将来結婚をした時に仕事をどうするのか聞いたのが図6である。



「仕事をずっと続ける」41.8%、「仕事は子どもができたらやめる」26.7%、「仕事は子どもができたらやめて子育てが終わったら再開する」10.3%、「仕事は結婚したらやめる」9.3%、「夫の意見に従う」4.2%、「女性は仕事を持たない方がいい」0.5%だった。

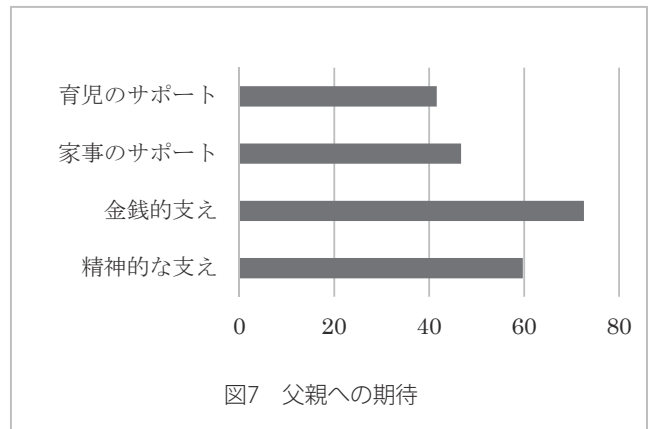
全国家庭動向調査¹³⁾では、29歳以下の妻の回答では、結婚後は、夫は外で働き、妻は主婦業に専念すべきである41.6%、子どもが3歳くらいまでは、母親は仕事を持たずに育児に専念したほうがよい63.5%、夫も家事や育児を平等に分担すべきである85.5%、家庭で重要なことがあったときは、父親が最終的に決定すべきだ66.8%、夫は会社の仕事と家庭の用事が重なった時は、会社の仕事を優先すべきだ67.6%、男の子は男らしく、女の子は女らしく育てるべきである56.6%となっている。そして年代が高くなるほど賛成割合も高くなっている。妻が常勤になると賛成割合は低くなっている。

内閣府男女共同参画局の調査¹⁴⁾によると夫は外で働き、妻は家庭を守るべきであると考えているという質問では、賛成およびどちらかといえば賛成の合計は男性46.5%、女性43.2%で、反対は男性14.5%、女性17.4%と男女の意識の差はあまりないようである。

3-7 父親への期待

学生が父親へ期待することが図7である。

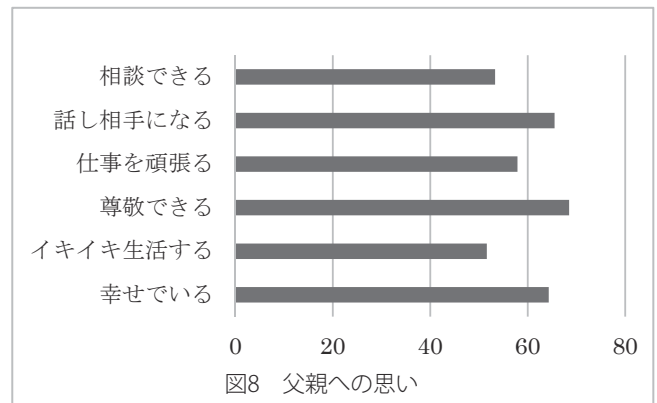
学生ということがあるのか、「金銭的な支え」72.6%と最も多く、次いで「精神的な支え」59.7%、将来は「家事へのサポート」46.7%、「育児へのサポート」41.6%と期待していた。



3-8 父親への思い

父親に対する思いは図8である。

「尊敬できる人」68.5%、「話し相手になってほしい」65.5%、「幸せでいてほしい」64.3%、「仕事を頑張ってほしい」57.9%、「相談相手になってほしい」53.3%、「イキイキ生活してほしい」51.6%と父親を大切に思っていることがうかがえる。



4. まとめ

今回の調査では男性の家事や育児への参加について調べたが、女性からみた男性の実状なので、男性が回答者だったら違う結果かもしれない。また、若い年代になるともっと意識に変化があると思っていたが、意外と変化はないようにも思われる。これから少子超高齢化社会をどのように生きていかなければならないのか、課題はたくさんあるが、まずは、自分の健康は自分で守っていくことが大事である。高齢社会白書の中でも一番の日常

の不安は、健康や病気のこと58.9%とある。今回の調査で食生活に積極的に参加している様子がみられなかったことは残念であった。一人でも生活していけるように自己管理能力をつけることが必要であり、そのことが健康寿命を伸ばすことになる。男性でも女性でも同じであり、子どもでも同じである。小さい頃からの家庭での生活行動や意識づけが大切だと考える。

5. 謝辞

この調査にご協力いただきました学生の皆様に御礼申し上げます。

6. 参考文献

- 1) 内閣府：平成28年版高齢社会白書、日経印刷(株)(2016)
- 2) 厚生労働省 Press Release (平成27年9月13日)：<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12304250-Roukenkyoku-Koureishashienka/0000136883.pdf>
- 3) 宇和川小百合、齊藤禮子、苫米地孝之助：栄養学雑誌 Vol.50No.4 227-235(1992)
- 4) 勝連洋子、佐久川よし子、野甫政子、玉那覇直、外間邦子、外間ゆき：沖縄県における長寿者の食生活に関する研究(第5報)、第36回日本栄養改善学会講演集、pp.110-111(1989)
- 5) 厚生労働省大臣官房統計情報部：平成26年国民生活基礎調査(平成25年)の結果から グラフでみる世帯の状況、統計印刷工業(株)(2014.12)
- 6) 内閣府：平成26年版高齢社会白書、日経印刷(株)(2014)
- 7) 内閣府：平成26年度一人暮らし高齢者に関する意識調査結果 <http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h26/kenkyu/gaiyo/pdf/kekka3.pdf> (2016.12.24)
- 8) 宇和川小百合、色川木綿子：平成27年度東京家政大学女性未来研究所活動報告書、pp.16-17(2016)
- 9) 国立社会保障・人口問題研究所：第14回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)第I報告書、わが国夫婦の結婚過程と出生力、大和綜合印刷(株)(2012)
- 10) 厚生労働省：平成27年版厚生労働白書—人口減少社会を考える—～希望の実現と安心して暮らせる社会を目指して～、日経印刷(株)(2015)、<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/15/>
- 11) 内閣府：平成28年版少子化社会対策白書、日経印刷(2016)
- 12) 花王生活者研究センター：若年夫婦の家事実態(2014年3～9月) <http://www.kao.co.jp/lifei/pdf/report/11.pdf> (2016.12.27)
- 13) 国立社会保障・人口問題研究所：第5回全国家庭動向調査(2013年社会保障・人口問題基本調査)現代日本の家族変動、統計印刷工業(株)(2015)
- 14) 内閣府男女共同参画局：男女参画白書平成28年版 http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/h28/zentai/index.html (2016.12)

健康長寿の延伸を目指したライフスタイルの提案

～高齢者ふれあい食事会の健康効果～

内野美恵 Uchino Mie , 木元幸一 Kimoto Koichi

東京家政大学は行政との協働により、介護認定を受けていない高齢者を対象に、健康効果を目的とした「高齢者ふれあい食事会」を実施している。本食事会による、参加者の健康効果について「健康に生きる力」とされるSOC尺度を測定し、得点に及ぼす効果を検証した。

1. はじめに

国の健康指標として平均寿命と健康寿命がある。世界保健機関(WHO)が提唱した概念である健康寿命とは、健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間をいい、平均寿命との年差は、介護等の支援が必要となる期間とされる。平均寿命と健康寿命の年差を短くする取り組みが、高齢者の生活の質(QOL)の向上だけでなく、医療や介護の費用負担を考える上で重要な要素となっている。

2016年WHO発表の日本人の平均寿命は、男性80.79歳(世界第6位)、女性87.05歳(世界第1位)であり、一方アメリカワシントン大学の研究チームが発表した最新(2013年)の日本人の健康寿命は、男性71.11歳、女性75.56歳であり男女共に世界一であった。平均寿命の男女差でみると女性の方が、約7年長寿となるが、平均寿命と健康寿命との差でみると、その差は男性が約9年、女性が約12年となり、女性の方が男性に比べ健康を損なった状態で生き続ける期間が約3年長いことがわかる。

WHOは健康に影響を与える社会的な要因として、職業、経済力、家族構成、地域という4つの要因をあげており、これらのあり様によって健康寿命の格差が広がっている事実が認められている。健康寿命の延伸は、健康日本21(第2次)の中心課題であり、健康寿命に好影響を与えることが期待できる取り組みを評価し、多様な状況に応じたモデルケースとして集約することが求められている。

2. 高齢者ふれあい食事会のとりくみ

2-1. 北区ふれあい食事会について

本学に隣接する東京都北区の高齢者率は、約25%と都内23区のトップであり、高齢者対策が緊要な課題となっている。これまでは一人暮らしの高齢者の食事支援として、定期的な配食サービスが実施されていたが、要介護者を増やさないためには、高齢者にもっと外出してもらい、地域社会とふれあいの機会を設ける取り組みの方が、孤独感の解消や閉じこもりの防止、生きがいづくり等、健康寿命の延伸に役立つのではないかと、平成14年度より「高齢者ふれあい食事会」がスタートした。

北区高齢者ふれあい食事会は、介護認定のない65歳以上の方を対象に、20～30名がグループとなり、1年間同じ会場で定期的に食事をする取り組みである。北区内の飲食店や公共施設等を会場として、30か所以上で開催されており、当初は一人暮らしの方に限定されていたが、現在はより発展的にコミュニケーションの機会を増やそうと、介護認定のない65歳以上であれば誰でも申し込み可能となっている。

東京家政大学では、平成18年より、ヒューマンライフ支援センターが窓口となり、85周年記念館の学生食堂にて、年間約16回を開催している。

2-2. 東京家政大学のふれあい食事会について

2-2-1. 参加者の栄養状態における推察

新型栄養失調と呼ばれる、3食しっかり食べているためエネルギーは足りているが、たんぱく質やビタミン、ミネラルの不足により栄養失調に陥るといふ高齢者が増

えている現状がある。国民健康・栄養調査の結果から、70歳以上の高齢者の5人に一人が該当すると発表されている。壮年期に血中コレステロール値が高い等の診断を受けた経験や、世の中の粗食をよしとする科学的知見に乏しい情報を真に受けてしまうと、肉や卵を意図的に避けるようになり、結果としてたんぱく質が不足し、栄養失調に陥るといったケースが多いとされている。

新型栄養失調によりたんぱく質が不足すると、筋肉量が低下するだけでなく、免疫力も低下し感染症にかかりやすくなる。高齢者では、心臓病や脳卒中のリスクが高まり、結果として、寝たきりになる可能性が高まることが指摘されている。また、加齢により筋肉量および筋力の低下が生じた状態をサルコペニアといい、転倒のリスクが高くなる。サルコペニアに加え、加齢に伴う膝や腰の関節症の発症や、骨粗しょう症に伴う猫背など運動器の衰えによる身体能力の低下は、機関車のように緩やかに発進し加速的に症状が進む状態を引き起こすため、ロコモティブシンドロームと呼ばれる。サルコペニアおよびロコモティブシンドロームを予防するためにも、高齢者にはたんぱく質の十分な補給が重要となる。

2-2-2. メニューの特徴

本学のふれあい食事会メニューは、ヒューマンライフ支援センターの管理栄養士が監修している。メニュー内容は、新型栄養失調、サルコペニア、ロコモティブシンドロームを予防することを目的とし、たんぱく質が十分に補給できるように肉や魚、大豆製品を積極的に取り入れている。咀嚼嚥下能力が低下している高齢者にとって、肉は噛みきれない、飲み込みづらい等で避けたい食材である場合があるため、肉の部位や切り方、調理法により配慮することはもちろん、肉を主菜だけでなく、副菜や汁物に小分けにして使用するなど美味しさを損なわず完食していただけるよう工夫している。



東京家政大学学園食堂での食事内容（一例）

2-2-3. 学生とのふれあい

参加者に女子学生を交えての食事会としている。食事会に参加を希望する学生を募集し、3～5名の学生が高齢者と一緒に食事を楽しんでいる。祖父母と孫、ひ孫程の年齢差になるが、両者にとって互いの時代を学び、考え方や感覚の違いを発見する新鮮な異世代交流の場となっている。継続して参加する学生も多く、回を重ねるごとに交流が深まっている。



高齢者にとっては、キャンパスですれ違う学生のファッションを見るのが楽しみという方もあり、刺激を受けてか、ご自身もおしゃれをして来校される方が多くみられる

2-2-4. 本学ならではのおもてなし

他の会場では味わえない大学ならではのおもてなしとして、毎回提供する食堂のオリジナルメニューを、手作りのリーフレットにして紹介している。リーフレットには、メニュー、栄養価、食材についての豆知識や健康情報、食事バランスガイドの「つ」量について掲載し、栄養士が、会の冒頭にその日のメニューを説明する際に配布している。

また食事前後に10～30分程度の時間を設けて、参加者との交流のためのミニイベントを実施している。初回に本学の歴史と大学キャンパスについて紹介し、その後学長との記念撮影、大学教員による各種ミニ講座の実施、学生企画によるお楽しみイベントなどを随時実施し、好評を得ている。会の下半期では、参加者が受け身ではなく自主的に参加し、会を作り上げていく方向に誘導し、参加者の特技を発揮していただく取り組みを企画している。

【食事バランスガイドでみた本日の献立】

主食	副食
1 つ(SV)	3.3 つ(SV)

北区+東京家政大学コラボレーション企画

主食	牛乳・乳製品	肉類
5.3 つ(SV)	0 つ(SV)	0.6 つ(SV)

第8回 2016/10/19(水)

今日のご献立

- ごはん
- フリ大根 ……フリ、だいこん
- 様々な菜 ……鶏むね肉、きゅうり、もやし、練りごま
- 茶碗蒸し ……鶏肉、えび、かまぼこ、しいたけ、三つ葉、ゆず、卵
- 季節のフルーツ ……ぶどう

栄養価(1人分)

- エネルギー …… 744kcal
- たんぱく質 …… 41.8g
- 脂質 …… 23.6g
- 炭水化物 …… 87.2g
- 食物繊維 …… 5.1g
- カルシウム …… 137mg
- 食塩相当量 …… 3.2g

縁起の良い出世魚! 「鯖」

魚「へん」に「節」と書いて、「フリ」と読みます。これから縁起にかけてとれる年「フリ」は、節がのって栄貴も豊盛になります。

出世魚って?

成長するにつれて呼び名が変化する魚のことを「出世魚」といいます。

鯛系では「アサリ」→「イナダ」→「ワラゲ」
 鰻系では「ツバス」→「ハマチ」→「メジロ」と変化して、
 鯛系・鰻系ともに最終的に「ア」になります。
 「ボラ」や「ズキ」も出世魚で、呼び名が変わります。

アリの栄養

アリは、血液をサラサラにするといわれている不飽和脂肪酸のEPAとDHAであり、特に女性に豊富に含まれています。血液不足にも効果が含まれており、食血予防に効果があるといわれています。

料理のコツ

焼く前に塩を塗って少

配付リーフレット：毎回リーフレットを作成し、栄養価を表示し、食材についての豆知識や健康情報を紹介している。



大学教員による健康講座では、「ロコモティブシンドロームを防ぐための食生活のポイント」や「食事バランスガイドの活用法」など、食育の場となっている



楽器演奏を特技とする参加者が、マンドリンの演奏を披露

初回	各自マイクを持つての自己紹介 大学紹介：大学キャンパス散策マップの配布
5月	学長よりごあいさつと記念撮影
6月	本学管理栄養士による食事バランスガイドの解説(食育月間)
7月	学生企画：手遊び・歌遊び 大学教員による健康講座
9月	学生企画：生活に関するクイズ
10月	大学教員による健康講座
11月	学生企画：学生の特技の披露
12月	参加者による特技の披露
1月	参加者による特技の披露
2月	北区住民による音楽鑑賞
3月	みんなで合唱

本学食事会でのミニイベントの年間とりくみ例



学生が特技の「うしろうりの口上」を披露



最終回到全員で「翼をください」を合唱

3. 高齢者の健康に生きる力における 大学と行政の協働による高齢者 ふれあい食事会の介入研究

3-1. 健康に生きる力 SOC について

SOC (Sense of coherence)とは、1970年代に、健康社会学者アントノフスキーが人間の「健康」を形成する要因として開発した尺度を言う。Sense of Coherenceとは、首尾一貫感覚と訳されており、困難な状況に直面しても、ストレスをはねのけてやり遂げる能力と解釈されている。SOC 得点が高い状態は、ストレス対処能力が高いと評価される。

3-2. 目的

高齢者の健康寿命の延伸のための取り組みとして、ふれあい食事会の実施が高齢者の健康効果としてどのように影響しているかについて、「健康に生きる力」であるSOC 尺度を用いて測定し、ふれあい食事会の意義について検証することを目的とした。

3-3. 方法

3-3-1. 調査対象者と調査時期

北区ふれあい食事会東京家政大学会場の参加者20名に対し、全15回実施のふれあい食事会への参加前後のSOC 得点の変化について、事前配布自記式調査票により調査を実施した。調査回数は、参加前(初回)と5回目(中間)、最終と3回に分けて行った。

回収数(率)は、いずれも20名に対して、初回:18部(90%)、中間:17部(85%)、最終:18部(90%)であった。

食事会参加者の年齢、性別の分布について図1に示す。毎年、女性が大半を占める傾向にある。

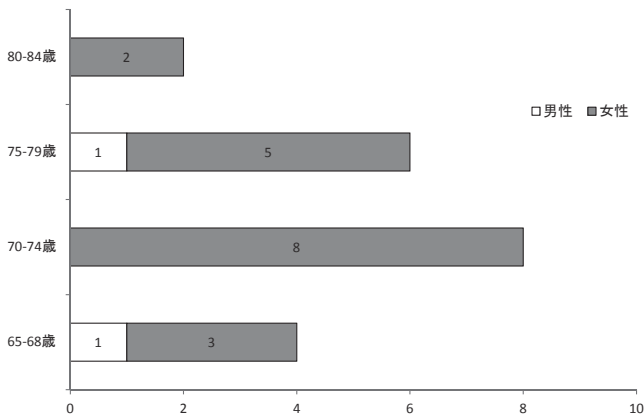


図1. 男女別参加者年齢・性別の分布

3-3-2. 調査項目

アンケートの調査項目は、SOCの他に、食のQOL、健康関連QOL指標、健康関連生活習慣、ソーシャルサポート、食事会に期待すること、食事会で良かったこと、食事会による意識の変化、食事会の料理、属性、その他自由記述について回答を得た。

SOCに関する質問票は、SOC-13の5件法版を採用した。

調査項目		初回調査	中間調査	最終調査
SOC	SOC	○	-	○
食のQOL	SDQOL	○	-	○
健康関連QOL指標	MCS	○	-	○
健康関連生活習慣	PCS	○	-	-
ソーシャルサポート	SPS	○	-	○
食事会に期待する事		○	-	-
食事会で良かったこと		-	○	-
食事会による意識の変化		-	-	○
食事会の料理		-	○	○
属性		○	一部	一部
その他自由記述		-	○	○

表1. アンケート項目一覧

3-4. 結果

主にSOC 得点の結果と、参加者の満足度についての結果について報告する。

3-4-1. 「健康に生きる力」SOCの得点について

全体のSOC 平均得点を初回と最終で対応のあるt検定により比較したところ、初回46.1±2.5点、最終45.1±5.1点であり、ふれあい食事会前後での統計的有意差は認められなかった。続いて、一人暮らしの対象者を抽出して比較したところ、初回46.3±2.0点、最終49.5±3.4点であり、有意なSOC 得点上昇が認められた(表2)。

一人暮らしの対象者のSOC 得点に効果があったことについては、一人暮らしでは機会が少ないと推察される「誰かと食事をする機会」がふれあい食事会により提供されたことが影響したと考えられる。

全体	初回 (2014.5)	最終 (2015.3)		
	人数(人)	平均値±標準偏差	平均値±標準偏差	
SOC	15	46.1 ± 2.5	45.1 ± 5.1	N.S.
SDQOL	15	16.1 ± 2.3	16.4 ± 3	N.S.
SPS	13	71.4 ± 5.9	70.2 ± 7.4	N.S.
PCS	16	41.8 ± 8.6	44.4 ± 7.2	N.S.
MCS	16	50.1 ± 8	50.2 ± 6.4	N.S.

一人暮らしのみ	初回 (2014.5)	最終 (2015.3)		
	人数(人)	平均値±標準偏差	平均値±標準偏差	
SOC	6	46.3 ± 2	49.5 ± 3.4	p<0.05
SDQOL	6	15.8 ± 3.3	16.5 ± 3.9	N.S.
SPS	4	69 ± 4.5	69.3 ± 6.2	N.S.
PCS	7	41.8 ± 9.8	44.2 ± 9.5	N.S.
MCS	7	48.2 ± 8.6	50.6 ± 6.2	N.S.

表2. SOC 得点の比較表

3-4-2. 食事会への期待と、参加後(中間)の評価

初回調査では、ふれあい食事会に期待することの順位を尋ねた。表3の通り、ふれあいよりも食事自体に期待して参加したことが伺われた。

期待の順位	1番	2番	3番	単純合計	調整※
食事の栄養バランス	12	3	1	16	43
食事のおいしさ	4	8	1	13	29
他の参加者とのふれあい	1	5	6	12	19
大学での食事	0	0	7	7	7
学生とのふれあい	1	2	3	6	10

※(1番目に期待)×3+(2番目に期待)×2+(3番目に期待)×1

表3. ふれあい食事会に期待すること(人数)

中間調査では、良かったことを複数回答で選択し、その中から特に良かった項目を1つ選択する形式で尋ねた。図2で示す通り、参加後(参加5回目)には“他の参加者とのふれあい”“学生とのふれあい”が多く選択されており、参加者にとってのふれあい食事会参加のメリットに、交流の要素が強くなったことがわかった。

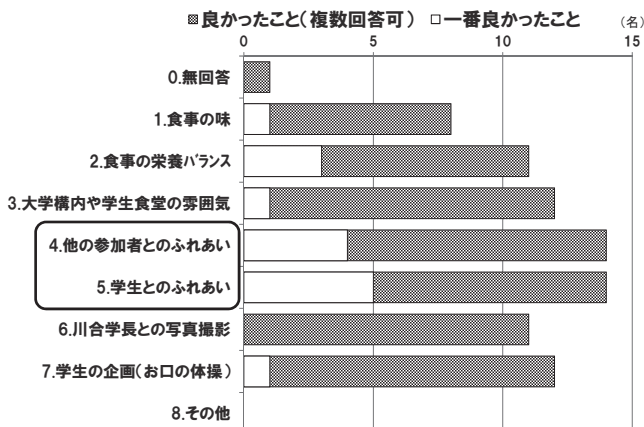


図2. ふれあい食事会に参加して良かったこと(複数回答)

3-4-3. 料理について

料理については、中間調査と最終調査で同じ内容を尋ねた。いずれの調査においても、料理への満足度が高かったことが伺われる。味について“ちょうどよい”と回答した割合、量について“ちょうどよい”と回答した割合、盛り付けについて“きれい”と回答した割合はいずれも中間調査に比べ、最終調査で増加した。

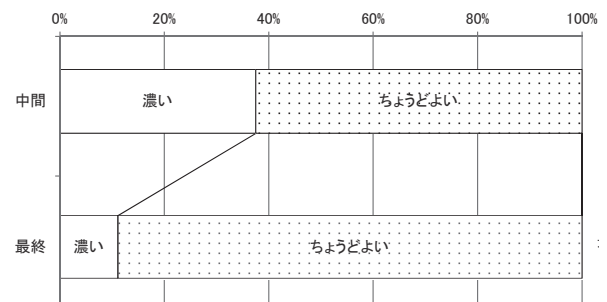


図3. 提供された料理の味について

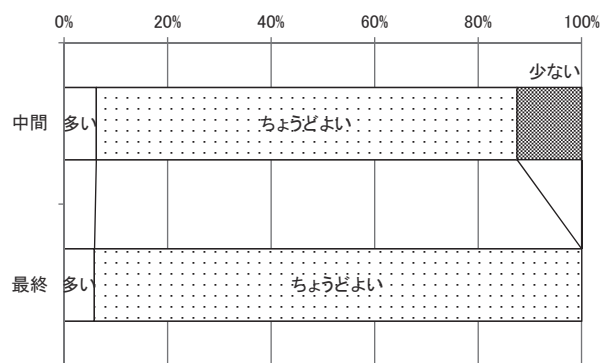


図4. 提供された料理の量について

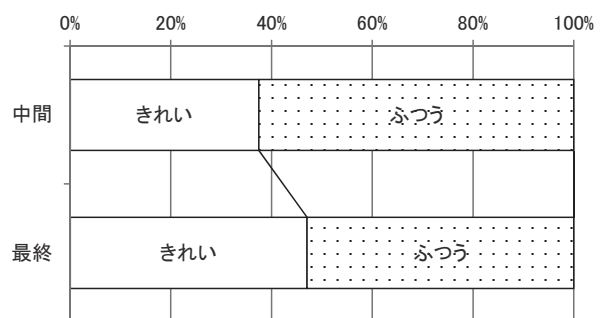


図5. 提供された料理の盛り付けについて

3-4-4. ふれあい食事会への参加による変化

ふれあい食事会への参加を通じた関心、感覚の変化について、項目を挙げて尋ねた。回答は、“強くなった”“どちらかといえば強くなった”“どちらともいえない”“どちらかといえば弱くなった”“弱くなった”の5件法とした。栄養、健康への関心について、“強くなった”“どちらか

「といえば強くなった」と回答した者の合計が8割を超えており、ふれあい食事会とともに開催された講義により関心が高まったと思われた。また、日々の暮らしの張り合いも高まっていた。

3-5. 考察

ふれあい食事会による高齢者の健康効果を、「健康に生きる力」であるSOC尺度を用いて測定した。

一人暮らしの対象者において、SOC得点の有意な上昇が認められ、一人暮らしで少ないと推察される「誰かと食事をする機会」が、本食事会により提供されたためであると考えられた。

一方、非単身者では、SOC得点がかかる傾向が認められた。SOCの特徴として、介入が盛況だったり、満足度が高かった場合に、SOC値が下がるという報告があるが、同居者のいる高齢者では、他者との親密なコミュニケーションが、ストレスになりうるケースがあることが示唆された。

参加後の意識の変化として、ふれあい食事会への参加を通じた関心、感覚の変化については、全体的に「栄養や健康への関心」が高まっており、本食事会は高齢者への

健康情報提供や食育の場としても機能していると考えられる。「日々の暮らしの張り合い」も強まっており、本食事会が精神的に良好な影響を与えていたと考えられる。単身者と非単身者の回答で相違が認められた項目については、「人や社会のために役立ちたいという思い」や「日々の暮らしの張り合い」という項目について、単身者の方が非単身者に比べより前向きな回答が多く得られた。

食事会への期待と、参加後の評価については、初回調査では、「食事の栄養バランスやおいしさ」に期待する回答が多かったのに対し、実際に回を重ねていく中で、中間の調査では、「他の参加者とのふれあい」や「学生とのふれあい」がよくなったとの回答が増えており、参加者のふれあい食事会への参加のメリットとして、「他者との交流」の要素が強くなったことがわかった。

本研究は、坂野純子(岡山大学)、内田庄一(北区健康生きがい課)、關明日香・三宅裕子(株式会社味の素)、大畑瞳(東京家政大学)との共同研究であり、第4回日本食育学会学術大会で発表した。

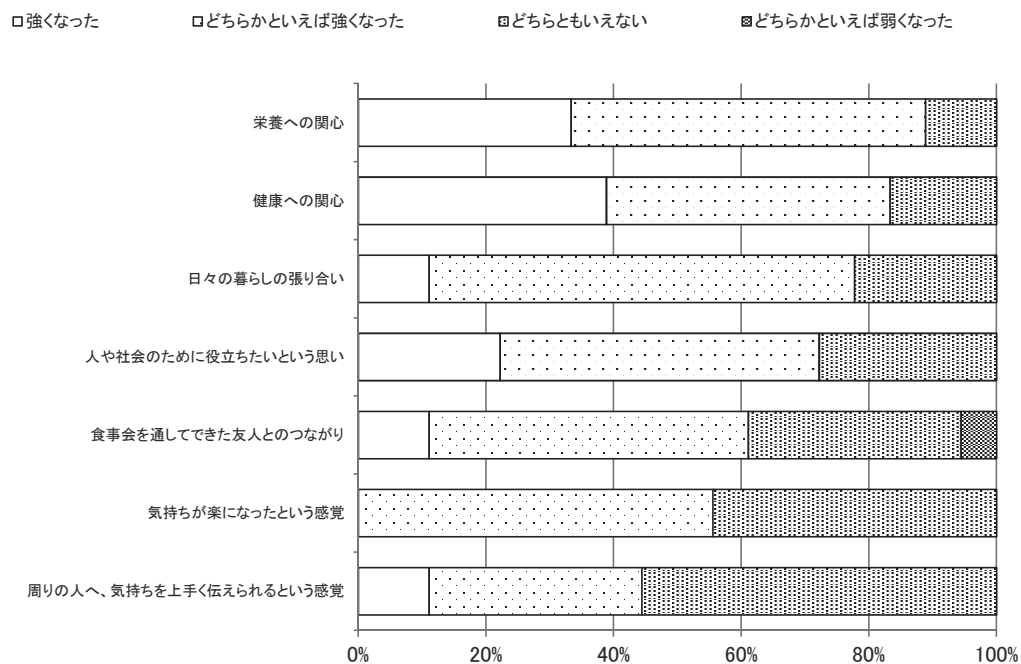


図6. ふれあい食事会に参加したことによる変化

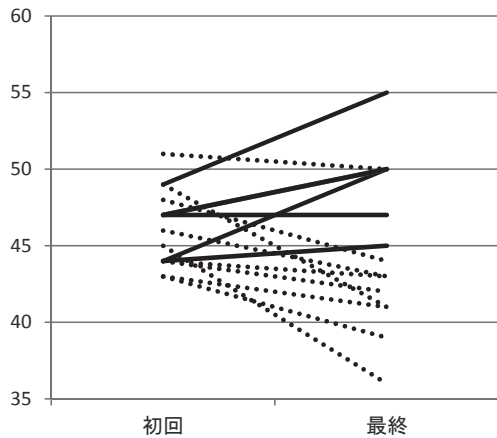


図7. SOC 合計の変化量

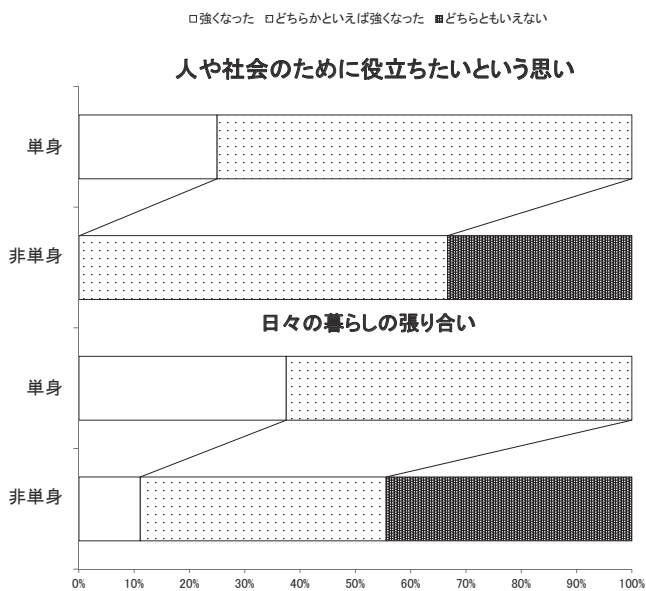


図8. 単身者と非単身者の意識の違い

4. おわりに

産学連携事業として東京家政大学と北区健康生きがい課で実施している「高齢者ふれあい食事会」の健康効果について、「健康に生きる力」であるSOC尺度を用いて測定した結果、単身者においてSOC得点の有意な上昇が認められた一方で、非単身者ではSOC得点が下がる傾向が認められた。

単身の方が、他者との交流や社会とのつながりを求める意識が高いという意識調査結果からみても、単身者と非単身者とは食事会に対するニーズに若干の相違があることが認められた。この意識の違いは、単身者のみで実施していた食事会と、その後非単身者を受け入れた後の食事会の雰囲気の違いにも現れていると、現場のスタッフは感覚的に感じている。単身者のみの方が、イベントや講座への参加者の反応が良く、コミュニケーショ

ンを楽しんでいる様子をはっきりと感じられたとの意見がある。同居家族がいる対象者のSOC得点の向上には、別の施策が効果的であることが示唆される。

参加者の多様なニーズに対応すべく、現在の食事会では、食事会に付随するイベントについては、参加自由としており、食事会だけでイベントには参加したくないという要望にも対応している。

参加者の動機(期待)は、中間調査までに「食事自体」から「他者との交流」に変化していく様が認められた。高齢者にとって他者との積極的な交流は、高次な生活機能の維持に重要とされており、本食事会による交流への関心の高まりは意義があると考えられる。食事会への参加によって「栄養や健康への関心」や「日々の暮らしの張り合い」という意識が高まった結果からみても、いずれの高齢者においてもふれあい食事会は有益であると考えられる。

本食事会が健康寿命の延伸にとって効果の高い取り組みとして、単身者と非単身者が共に楽しみ、相互理解と交流が進むような企画を検討していきたい。

参考文献

- 1) 平成26年版厚生労働白書 健康長寿社会の実現に向けて 厚生労働省
- 2) 北区高齢者保健福祉計画 平成25年3月 東京都北区
- 3) K. Ota, K. Ninomiya, J. Sakano, M. Nanba, Relationships of SOC to social environment and subjective health perception among senior citizens, Information, 17(4), 1627-1632, 2014.

男女共同参画で行う地域防災・減災

～東京家政大学狭山キャンパスの役割の検討～

齋藤正子 Saito Masako , 小櫃智子 Obitsu Tomoko

男女共同参画の視点から地域防災・減災活動の推進を目的にプロジェクトの3年間を取り組んできました。本研究では地域防災・減災活動に関する面接調査、防災活動への参加や報告会を行いました。これらのことから地域防災に対するニーズや取り組みを明確にし、大学と地域防災の連携について示唆を得ることができました。今後の狭山キャンパスの防災活動に関する役割を検討しましたのでご報告致します。

I. はじめに

近年では地震、火山噴火や豪雨による水害など想定を超えた自然災害が多発しています。さらに30年以内に約70%の確率で発生するとされる首都直下型地震による被害の軽減を視野に入れた地域防災・減災対策の取り組みが各地域で取り組まれています。

東京家政大学狭山キャンパスに看護学部と子ども学部が開設されて、本キャンパスでも地域と連携したプログラムが積極的に取り組まれています。

そこで本プロジェクトでは、地域連携の一環として男女共同参画の視点で地域防災・減災活動を推進することを目的としました。今回は3年間のプロジェクト研究報告を致します。

II. 研究プロジェクトの目的

1. 東京家政大学狭山キャンパスにおける地域防災・減災の役割を検討する。
2. 男女共同参画で地域防災・減災活動に取り組み、女性、子ども、障がい者、高齢者に配慮した地域防災プログラムを実施する。

III. 研究方法

1. 半構成的面接調査を実施しました。
1段階：狭山市・入間市の地域防災の取り組みの現状を面接調査し、地域のニーズや課題を把握

しました。

- 2段階：地域防災・減災を積極的に取り組んでいる大学と自主防災組織の方へインタビュー調査を行いました。

※得られたデータから質的帰納的分析を行いました。

2. 参与観察として狭山市・被災県の町会の総合防災訓練や防災カフェなどに参加しました。
3. 面接調査で研究協力者に話題提供を頂いた報告会・意見交換会を開催し、本キャンパスの役割を検討しました。
4. 倫理的配慮として当大学の倫理審査委員会の承認を受けて実施しました。



図1 狭山キャンパスの位置 (狭山市内、入間市に隣接)

IV. 結果

1. 面接調査

面接調査はインタビューガイドを用いて実施しました。回数は1~2回、時間は1回、60分~120分です。

1) インタビューガイドの内容

- (1) 対象：狭山市・入間市の行政、NPO、社会福祉協議会

①地域防災対策の現状と課題、当大学への要望。

(2) 対象：防災に積極的に取り組んでいる大学と自主防災組織

①東日本大震災および平成27年関東・東北の豪雨被害の対応について

②学生のボランティア活動について

③災害時の情報収集について

④大学と地域の防災活動の連携について

⑤男女共同参画で防災・減災に取り組むについて

2) 研究対象者の概要

研究対象者については以下の通りです。

	所属	担当・役割	人数
1	狭山市役所	防災課職員	1名
2	入間市役所	防災・防犯課職員	1名
3	狭山市NPO	自主防災組織	2名
4	入間市	社会福祉協議会	1名
5	被災地県内大学 (A)	防災担当者とボランティア担当者	7名
6	首都圏内大学 (B)	防災担当者	1名
7	A大学と連携する町会 (C)	自主防災組織 防災担当者	2名
8	B大学と連携する町会 (D)	自主防災組織 防災担当者	1名

3) 面接調査の結果

(1) 本学の隣接した地域の自治体の防災担当者へのインタビュー調査

本キャンパスの地域である狭山市・入間市の自治体の防災担当者へのインタビュー調査を実施しました。

<インタビュー調査の概要>

日 時:2014年10月8日(水) 14:00~15:30 (90分)

場 所:東京家政大学 狭山キャンパス

対象者:狭山市・入間市の防災担当者各1名計2名

狭山市は、地域防災計画に基づき、災害予防、風水害、土砂災害の対策として自助・共助のしくみ作りと公助を進めていました。この地域での災害想定は、立川断層帯による地震、入間川・不老川による洪水、土砂災害です。狭山市内には、123自治会中、94の自主防災組織があり、地域の防災・減災活動を行っていました。

自治体の取り組みは、「地震や洪水などのハザードマップ」作り、緊急速報メールやモバイルサイトを活用した情報発信、年1回の総合防災訓練、中学生を動員した防災訓練や帰宅困難者対策でした。災害時の食糧備

蓄については、被災想定避難者に対して3日間分は必要です。しかしながら、全ての備蓄は、管理面などの関係から難しいため、不足分を流通備蓄としてスーパー等と協定を結んでいます。また、自宅での備蓄の必要性を語っていました。また、昨年度からさやま市民大学の講座の中で「地域の防災リーダー養成学科」を開催し、人材育成を行っている。その講座の企画をしていますが、自主防災組織の横断的な役割を担うことを目的に設立されたNPOです。男女共同参画による女性の視点から防災活動に取り組んだ活動を推奨していました。

課題として避難行動要支援者の名簿作りは進んでいますが、個別避難支援計画は要援護者本人の同意のもと、避難支援者等関係者と連携して作成することから、見通しが立たないのが現状であると語っていました。本大学へ要望することは、応急手当て、福祉避難所の設置でした。

入間市も同様に地域防災計画のもとに防災対策に取り組む、市内121地域の全てに自主防災組織があります。自主防災組織が全地域に広まった理由は、過去の大火災の教訓を活かしA地区の防災リーダーが、他の地区で講義を行ったことであると語っていました。自治体では、各地域における防災に関する出前講座の開催、防災訓練や宿泊体験などの取り組みを行っていました。また、3年前から防災リーダーを人材育成に取り組んでいるそうです。防災リーダー研修に女性の参加を要望しましたが100名中、女性の参加は10人だったそうです。その理由は住民から「リーダーが女性なんて」など女性がリーダーになることへの理解が十分得られていないことが一つの要因でした。

入間市の課題として、避難行動要支援者の名簿作成が進んでいない現状を語っていました。大学への要望として、災害時の子どもの遊び相手などの役割を希望していました。

2. 狭山市自主防災組織へのインタビュー調査

災害時や防災活動での地域のリーダーとなりうる女性を育てることを目的として活動され、狭山市の自主防災組織であるNPOの代表者2名にインタビュー調査を実施しました。

<インタビュー調査の概要>

日 時:2014年11月20日(木)12:10~13:20 (80分)

場 所:さやま市民大学(狭山元気プラザ)内

対象者:NPO法人わが街さやまの防災ネットワーク
計2名

内 容:防災活動に対する考えや取り組みについて、本

大学への要望。

インタビューでは、NPO 法人「わが街さやまの防災ネットワーク」の立ち上げに至る経緯や目的、現在の活動状況及び今後の課題等について語られました。

代表の F 氏は20年前より地域の自治会組織で会長を務め、防災活動に取り組んでおり中越地震、中越沖地震、東日本大震災の被災地へ出向く中で、避難所における女性にかかわる様々な問題を目にしてきました。災害時の避難所等では、乳幼児から高齢者のケア、男女の性差への配慮、食事管理など、女性ならではの視点を活かした対応が必要です。しかし、リーダーのほとんどが男性であり、女性リーダーが存在しないことから、「防災の女性リーダーを早急に育成したい」との思いに至ったと、NPO 法人の立ち上げの経緯について述べられました。NPO 法人の理事はすべて女性で構成され、女性の視点を重視した防災リーダーの育成組織は埼玉県内でも初めての試みとなっています。

取り組みとしては、防災リーダー養成コースの企画、運営を狭山市から受託し、市民大学で実施しています。市民をはじめ、狭山市123の自治連合会からの受講者を積極的に募ることで、受講者が受講後各地域で実際にリーダーとなって活動してけるよう熱心な取り組みを行っています。具体的には、「地域連携推進室」を置き、人材登録バンクをつくって、狭山市内の各団体とのマッチングを行っているそうです。防災リーダー養成コースの受講生や修了生等に人材登録バンクへの登録を呼びかけ、さまざまな知識や技術を有している人とそれを求めている団体とを結び付けることで、多くの人々が活躍する場を提供しています。たとえば、子どもを対象とした「防災キャンプ」などの防災教育もその1つの取り組みであることが分かりました。

今後の課題としては、地域の防災力の向上を目指して、NPO 法人のもう1つの目的でもある自主防災組織を結び付ける役割として「防災連絡協議会」の設立に向けて取り組んでいるとのことでした。

また、最後には、狭山市の自主防災組織と同市内にキャンパスを構える東京家政大学と連携した防災活動の取り組みについて語られました。具体的には、看護学部、子ども学部を設置している狭山キャンパスにおいて、医療、教育、福祉の専門性を有した教員及び設備を最大限に生かした防災、また女子大学として女性の視点に立った防災への取り組みを地域と連携して行っていける可能性が見いだされました。

3. 考察

1) 男女共同参画で行う防災対策の必要性

災害時の避難所では、女性に関わる様々な問題が発生しており、女性の視点を取り入れる事が重要です。しかし、防災リーダーの役割は男性が担うことが多く、当地域においても防災リーダー研修への参加についても女性が参加しにくい現状がありました。現状の対応には、災害から女性が影響を受ける男女の差や女性が主体的にリーダーの役割を担えること等を住民から理解を得ることが必要です。

2) 防災活動の現状と狭山キャンパスの役割

狭山市、入間市ともに地域防災計画に基づき、防災対策に取り組み、自主防災組織が防災活動を行っていました。このことから合同で開催する広域防災訓練を提案することやその訓練に当大学も参加し、トリアージ訓練、応急手当、搬送訓練、学生のボランティアなどを行いたいです。また、福祉避難所を開設や女性の視点を踏まえた医療、教育、福祉の専門性を有する教員の防災講座等への参加など地域防災活動の役割を担えると考えました。

4. 防災に積極的に取り組んでいる大学と自主防災組織へのインタビュー調査

1) 面接調査の結果を「防災・減災の取り組み」、「大学と自主防災組織間の連携」、「地域防災・減災における男女共同参画の視点」、「課題」の4つの視点で質的帰納的分析を行いました。

(1) 防災・減災の取り組み

A大学は災害発生時には被災地に出向き、ボランティア活動を実施し、その活動を行うためのシステムを構築していただきました。例えば、先遣隊を出し、被災地のニーズ調査および活動現場の選定、交通手段、特に安全面も含めて調査を行い、支援活動を開始していた。また、ボランティア活動を学生の授業単位として認定する制度がありました。

C町会の自主防災組織では、独自の防災マニュアルを作成し、防災訓練を実践していました。また、災害時相互協力協定を全国の50余りの町会と結び、平時から災害時に備えていました。

(2) 大学と自主防災組織間の連携

B大学は20年前から大学設置地域と災害拠点病院、市の防災担当者と連携した地域防災セミナーを開催し、地域の防災リーダー育成講座を行っていました。そのセミナーの運営には大学

のボランティアサークルの学生が関わり、学生の災害時の人材育成も行っていました。

D町会の自主防災組織は、地域防災セミナーの運営に関わり、大学と災害に関する共同研究に取り組み、災害時要援護者支援に対応した避難所や福祉避難所の開設、在宅避難対策に取り組んでいました。

(3) 地域防災・減災における男女共同参画の視点

避難所の運営には男性リーダーとともに女性リーダーが欠かせないことが語られました。女性リーダーは生活の視点や災害時に支援が必要な要援護者への配慮できるそうです。そのことを社会に提唱して女性リーダーの人材育成を推進していくが必要です。また、男女共同参画の視点だけでなく、多様性のあるセクシャルマイノリティの方への配慮も忘れてはならない事が分かりました。

(4) 課題

自主防災組織の共通した課題として担当者の高齢化が進み、新規の担い手となる特に若い人材が不足していることを挙げていました。自主防災組織の人材確保の取り組みとして、中学、高校の役員にそのまま入ってもらう取り組みを行っていました。また、住民全員参加の防災訓練を実施していました。

V. 参与観察

- ・狭山市の総合防災訓練に研究プロジェクト員1名と大学生4名が参加しました。(平成27年8月開催) 本学の活動内容は避難者名簿作成、炊き出し訓練を行政、地域の住民、中学生、赤十字奉仕団の皆様と活動でした。参加した学生は狭山市在住でないことや在住の総合防災訓練自体に参加することが無かったため防災訓練の意義や活動、地域連携について学ぶ機会となりました。また、総合防災訓練の参加により大学と地域、行政との連携活動をすることができました。
- ・狭山市のNPOと自主防災組織主催の第1回防災カフェ(平成27年7月開催)にプロジェクト研究員が1名参加しました。そこでは女性がリーダーとなり、平時からの備えとして防災食の試食や今後の活動について話し合われていました。これらの訓練やカフェに参加することで地域の防災力を知ることができました。



(写真1: 狭山市総合防災訓練にて活動する大学生)

- ・A大学が連携している自主防災組織主催の防災訓練に参加および観察者として入りました(平成27年11月開催)。自主防災組織の総合防災訓練では、A大学のボランティアサークルの学生が地域の子どもたちを対象とした防災かるたや防災スゴロクを行い、遊びながら防災教育を実施していました。地域での防災訓練に参加する際の参考になり、当大学でも積極的に防災訓練などに参加していきたいと思います。
- ・A大学が大学間連携を行っている「そなエリア東京」にてTKK3大学ブースを設け、来場した子どもや修学旅行生へ減災防災教育の様子を学生とともに見学しました。(平成28年3月開催)。3大学で協働して復興ソングや楽器の演奏をしたり、エコノミー症候群の予防体操を行っていたりしていました。これらことから、今後は本大学と他大学との学生ボランティア活動の連携した活動も行うことを検討していきたいと考えました。
- ・B大学とD自主防災組織、武蔵野赤十字病院が協働開催している武蔵野市総合防災訓練に本学の学生4人と参加しました(平成28年11月開催)。学生は病院で行われるトリアージの傷病者役を行いました。患者の立場から災害時の救急医療を考える機会となりました。また、B大学との交流の場となり、刺激を受けていました。

VI. 報告会・意見交換会

1. 日時: 平成28年7月30日(土)
2. 場所: 東京家政大学 狭山キャンパス 第二・第一講義室
3. 参加者: 合計35名。(内訳: 招聘者7名、所属機関より8名、一般参加者: 10名、女性未来研究所5名)

4. プログラム

1) 主旨：これまでの研究成果のご報告と本研究プロジェクトへのご意見を頂きたく、報告会・意見交換会を企画しました。

2) 挨拶：樋口恵子氏(女性未来研究所所長)

3) 司会：小櫃智子 齋藤正子(女性未来研究所 兼任研究員)

4) 研究報告：平成26・27年度プロジェクト報告を小櫃智子・齋藤正子が発表しました。

内容は、狭山市・入間市の地域防災の取り組みの現状や地域防災・減災を積極的に取り組んでいる大学と自主防災組織の方へインタビュー調査の結果を報告しました。

5) 現在取り組まれている地域防災・減災活動の課題や展望

①千葉淳一氏(狭山市役所 防災課)

テーマは「狭山市の防災対策について」でした。平成27年狭山市不老川の氾濫と被災想定、地域における備え自助と共助、防災会議委員の女性の割合は22%であり、備蓄計画においては女性や高齢者に配慮した備蓄品目は生理用品やオーラルケア用品等を備蓄計画している件について。さらに女性消防団員研修会番外編をDVDにて紹介頂きました。

②松本誠氏(入間市役所 市民部防災防犯課)

「平成28年度入間市防災訓練概要」を中心に、訓練想定、実施内容、気象情報のポイント、避難指示、女性消防団員についてご発表を頂きました。さらに入間市消防団・女性消防団員をDVDにて紹介頂きました。

③高橋和子氏(わが街さやまの防災ネットワーク)

「防災はあなたを救い大切な人を救う！」をスローガンに地域の防災リーダー養成講習、特に女性リーダーの育成を図っているそうです。防災カフェを年に4回開催し、女性消防団との連携、地域での防災週間開催についてお話し頂きました。

④松下庄一氏(入間市社会福祉協議会)

「社協としての災害対応の必要性」～災害ボランティアセンターの使命・役割～について。具体的には災害ボランティア立ち上げ訓練の状況、住民同士の顔の見える関係づくり、要援護者等の見守り体制の充実、ネットワークの構築、災害を想定した各種訓練・講座の実施についてお話し頂きました。

⑤青山真市郎氏(D地域防災活動ネットワーク)

「避難所への避難行動支援と避難所の仕組み作り」武蔵野市境南地域防災懇談会事例～発災から72時間、専門職不在期間の住民による医療と福祉の維持～につい

て。武蔵野赤十字病院とB大学との連携、避難所内の福祉避難室を設置、要援護者トリアージについて。B大学との協働開催している防災セミナーについて。武蔵野市では在宅避難を勧めていることについてお話し頂きました。

⑥三澤寿美氏(A大学健康科学部保健看護学科教授)

「とても小さな防災・減災の取り組み～展望と課題～」について。具体的には、多様なセクシュアリティ；性のグラデーション、日常と非日常の生活の場でのジェンダー、これからの性の健康とは…、災害時の非日常は日常とつながっています。教育の現場で『つなぐ力』と『つながる力』を育てることについてご発表して頂きました。

⑦渡辺信也氏(A大学 学生ボランティア支援課)

A大学のボランティア活動について紹介がありました。ボランティア系サークルというのが68団体あるそうです。東日本大震災時の学生避難者を200人受け入れながら、被災地での活動をされたそうです。また、TKK3大学連携事業、大学の学生同士と一緒に活動できる場を作っていきたいと抱負を述べられました。

6) コメント：樋口恵子氏(女性未来研究所所長)

女性未来研究所のモットーとして、「私たちが描く未来は、一人として誰一人置き去りにしない未来である」。女性が未来構築に携わるには国会議員、地方議員の数を見ても、紹介のあった消防団員にも、そして地域の防災会議の女性比率も実は大変低い。男と女は逆に言えば違うからこそ、セクシュアリティが違う、だから日常がそれなりに言ってみればバランスよく保たれていないと缶詰めにしたからそのアンバランスなひずみはそこに凝縮して出てきます。これから始まるファミレス社会の大介護時代は地域が強くなることです。血縁でなくても支え合う社会を作らなければいけない。私たちは地域の中で一続きの人間の人生100年を取り戻す、こういう役割を一緒にできる仲間が力強い、後輩がこんなにいることが嬉しいとお話を頂きました。

7) まとめ：伊藤節氏(女性未来研究所副所長)

今回は私たちが聞いているだけでもったいないようなお話を聞かせて頂きました。女性未来研究所が3年目に入り、今後大学の地と地域自治体に還元して、同時に地域自治体からも多くのものを学ぶようないい形のネットワークを作る、そういう拠点にできればということを考えています。行政に頼っている時代ではなくなり、もう急速な少子高齢化が進んでいるので狭山キャンパスも何かそういう拠点作りをこれから進めていければいけないと考えています。

5. 意見交換

K氏：国立障害者リハビリテーションセンターの研究所にいます。障害の話は要援護者の中で障害者はわずか1割しかいないので、やはり見落とされています。民生委員さんに伺ったら、障害者というのは地域の不審者という認識も多いそうで、だからこそ障害者について語りにくい、みんなが怖がっているようです。具体的にどうするかとか、どういうふうに捉えるかというところで、連携させていただければ大変ありがたいと思います。

青山氏：先ほど、樋口先生の「地域が強くなればいい」というお話を聞いて、民生委員さんなどいろいろな委員さんがいるがその方々の大多数が50代から上の方女性の方々です。今後、狭山市、入間市と家政大学でお考えいただきたいことは、待機児童ゼロという言葉と女性の活躍って何か相反するような気がして私は疑問に思っています。年額の収入の103万円枠(扶養者控除)を外して稼いでもいいよというような特権を条例等で作っていただかないと、女性だけではなくが公共の公の委員をやってくれる方々がいなくなってしまうのではないかと。

樋口氏：よいボランティア活動をして、本当に就業先からグッドマークをもらった人は、推薦の一つの何かメルクマールにするようなインセンティブはあっていいと思うし、民生委員なんかもきちんとした一定の謝金があってもいいのではないかと考えています。

終了後も活発な意見交換があり、今後も研究の成果を活かして活動していきたいと考えています。

6. 考察

今回の意見交換会では活発な意見交換の場となりました。この報告会・意見交換会から本大学の防災・減災の役割について二点考えました。

一点目は本キャンパスが拠点となり、防災講座や総合防災訓練に参加することです。具体的には、本キャンパスにて地域の住民を対象とした防災講座を開くことや地域へ出前講座に同行し、災害時の子どもや健康に関する支援などを講義すること。地域で開催される防災訓練や防災カフェに参加する。防災に限定するのではなく、平時から顔の見える関係作りが重要であり、地域のイベント開催に参加していくことを考えました。

二点目は大学間連携です。A大学やB大学との連携を

図っていきたいと思います。具体的には、地域防災教育を学生が継続して受講していくことを推進したいです。現在、B大学が開催しているD地域防災セミナーや総合防災訓練への参加をしています。

これらの取り組みの継続が課題だと考えています。

これは将来、女性リーダー育成にもなり得る学生の人材育成に繋がると 생각합니다。



(写真2：報告会・意見交換会にて記念撮影)

V. おわりに

これまでの研究活動により、それぞれで取り組んでいる防災活動やボランティア活動システムが理解できました。これらを参考にして狭山地域の特性や地域のニーズや防災力を活かして、平常時から地域防災・減災に取り組むことが重要です。また、その取り組みは男女共同参画の視点とともに多様なセクシャルマイノリティの方への配慮も必要であることが示唆されました。

また、本キャンパスの役割として、地域の拠点となり、防災講座などを学内外で開催していきたいと思っています。大学間連携として継続したセミナーやイベントに参加していきたいと思っています。

目標に対して、東京家政大学狭山キャンパスにおける地域防災・減災の役割を検討することは達成できました。しかし、男女共同参画で地域防災・減災活動に取り組み、女性、子ども、障がい者、高齢者に配慮した地域防災プログラムを実施することが今後の課題です。今後も子ども学部、看護学部の完成年度に向けて、益々、活発に地域連携に取り組んでいきたいと考えています。本研究にご協力頂きましてここから感謝しています。ありがとうございました。

「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」

～都会の限界集落から見える「未来」～

松岡洋子 Matsuoka Yoko, 斉藤正子 Saito Masako, 米澤純子 Yonezawa Junko
和田涼子 Wada Ryoko, 宮地孝宜 Miyachi Takayoshi, 井上俊哉 Inoue Shunya

1970年代に建てられた団地が高齢化50%を超えてさまざまな問題が発生している。このプロジェクトでは、そうした都内団地を日本の未来の実像ととらえ、実態を明らかにして、住民の方々とともに課題解決策を探り実際のアクションにつなげていくことを目的とした。平成27年度、28年度の2年にわたるプロジェクト活動では、井戸端会議による定性調査、アンケートによる悉皆調査を経てさまざまな課題とともに住民のストレングスが明らかとなり、複数回に及ぶワークショップでは、サロン(つどい場)や助け合い会を望む声が高いことが明らかとなった。

背景と目的

本研究は、都内団地にある「暮らしの保健室(秋山正子室長、看護師)」との共同プロジェクトとして始められたものである。

日本では高齢化率が27%を超えている。これまで高齢化は地方の問題であったが、団塊の世代を中心として今後は都市における高齢化がさまざまな課題を生み出すこととなる。

そうした中、高齢化50%を超える都内団地に着目し、日本の未来における高齢化の問題と住民主体によるソリューション(解決策)を探ることを目的としたのが本研究である。

戦後、日本の各地で住宅不足を背景として、寝食分離・LDK文化を特徴とする「団地」が形成されていった。これは、高度経済成長の時代まで続く。入居した年代層は30歳代、40歳代と似通っており、戦後70年の時代を迎えて、同時に集散的に老いていっている。その結果、高齢化率50%を超える団地が多く発生している。

このプロジェクトでは、東京都内のそうした団地のひとつを取り上げ、高齢化や家族構成、居住年数などの実態を捉えて、住民意識や課題を明らかにし、そのソリューションを住民とともに探るアクション・リサーチを展開しようとした。目的は、地域の問題として団地の実態を定量的・定性的に明らかにすること、その実態を踏まえて住民とともにソリューションを探ることである。

I. 調査研究の概要

このプロジェクトでは、2015年度を「調査の年」、2016年を「地域を耕しつつ、アクションの第一歩を記す年」と定め、図1と図2に示すような枠組みで調査と活動を展開した。

女性未来研究所内における目標としては、「社会貢献と学生参加」を目指している。未来の超高齢社会における「安心して暮らし続けられる地域づくり」に対して、住民主体でどのような活動を展開すればいいのか、東京家政大学の学生がコミュニティ活動に参加しつつともに考え行動するプロジェクトの位置づけである。

図1 2015年度 戸山プロジェクトの流れ

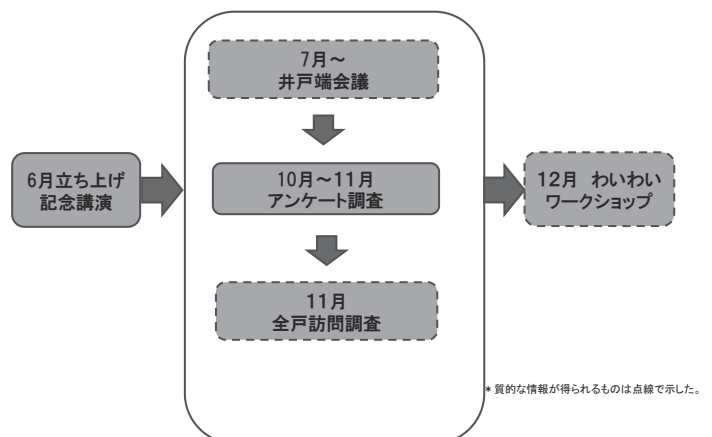
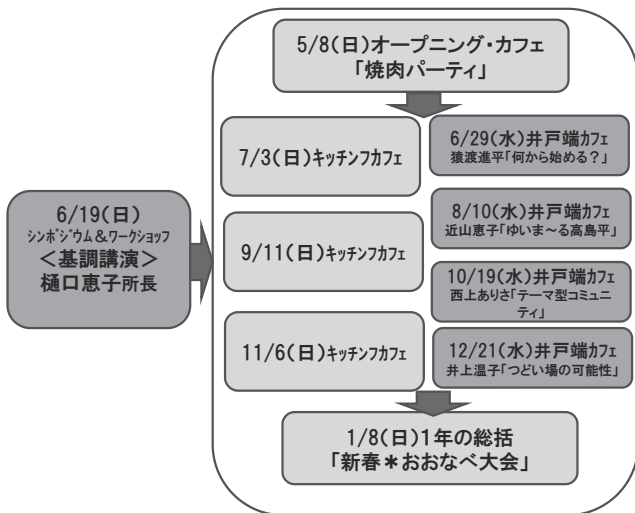


図2 2016年度 戸山プロジェクトの流れ



1. 2015年のプロジェクト活動概要

初年度にあたる2015年度「調査の年」には、6月19日に立上げセミナーを開催し(基調講演:樋口恵子所長)、7月より住民による井戸端会議を開催した(計5回)。セミナー告知は、チラシを作成して学生が団地内を歩いて3400全戸へその都度届けた。

次に、アンケートに先だって井戸端会議で住民の意見を収集した。10名前後のグループに分かれて、戸山ハイツの課題と魅力にして、自由にポストイットに書いて提示しながら話し合っていた。

アンケート調査では、定性調査(井戸端会議)の結果を24項目にまとめてアンケート調査票を作り、戸山ハイツ3400世帯を対象とした悉皆調査を行なった。アンケート封入、各戸への配布は学生が団地内を歩いて各戸のドアポストに入れて配った。回収は、返信用封筒、暮らしの保健室への持参、要望があれば回収に伺う、の三つの方法とした。11月には、回答催促のチラシを作成して、各戸に配布した。

12月21日に「戸山ハイツの困りごとと余っている資源から事業を考える」ワークショップを開催し、さまざまな事業アイデアが出された。

定性調査と定量調査を組み合わせたアンケート調査結果とワークショップ結果についての報告会を2月8日マザアス新宿で開催し、結果はカラー印刷(8ページ冊子)して各戸に配布した。これも、学生が団地を歩いて届けた。

年度末には調査結果をまとめた報告書(100頁、300部)を作成し、自治会長・民生委員の方をはじめとする住民の方、お世話になった新宿区・社会福祉協議会・地域包括支援センター・戸山シニア活動館に配布するほかに、関連組織70カ所に郵送した。

2. 2016年度のプロジェクト活動概要

2016年は「地域を耕しつつ、アクションの第一歩を記す年」と位置づけ、これまでの調査結果を踏まえて行動に移すため、またさらなる認知度のアップを図るために、講師を招聘してシンポジウムを開くとともに、大人数によるワークショップを組み合わせた「ワークショップ&シンポジウム」を6月19日に開催してスタートした。大いなる盛り上がりの中で、参加者は学び、ワークショップでは団地住人のニーズや必要とする事業や活動の方向性が見えてきた。

その後は、講師を招いてみんなで話し合う「井戸端会議」と、料理をともに作って食べながら社会交流を図る「キッチン・カフェ」を2本柱として定期的で開催し、新しい方々の参加を呼びかけるとともに、定着を図りつつ中心メンバーづくりを目指した。

3. 「暮らしの保健室」との共同プロジェクト

このプロジェクトは「暮らしの保健室(室長秋山正子さん、看護師)」との共同プロジェクトとして始められた。チラシ配布やアンケート配布・回収の配布などは「暮らしの保健室」を拠点に行い、ボランティアの方、利用者の方と交流の中で学生たちも多くを学ばせていただいた。



暮らしの保健室は、新宿区市ヶ谷で訪問看護をしてこられた秋山正子氏が、団地の空き店舗を活用して2011年に開設されたものである。「学校に保健室があるように地域にも気軽に来られる保健室を」という趣旨で開設されている。看護師による健康面から心理面、社会面にいたる総合的な相談に応じており、ボランティアによる手芸の会、マッサージ、ヨガなどの機会が提供されている。月曜日から金曜日まで開いており、予約なしでふらっと訪れてお茶を飲みながらおしゃべりを楽しんでいられる方も多い。全国からのマスコミ取材も多く、多様な可能性を提供して、安心して住み続けることのできる地域づくりに貢献している。

II. 2015年度の調査活動

1. 立上げ記念講演(2015年6月17日、地域密着型高齢者施設「マザアス新宿」にて)

樋口恵子所長に基調講演をお願いして、立上げ記念講演を開催した。約70名の参加があり、住民の方を中心に新宿区役所、新宿区社協、保健センター等行政機関からの参加もあり、盛況裡にスタートをきることができた。とともに、住人の方の「戸山ハイツでの暮らしをよくしたい」という関心の強さを確認し、認知いただく上で意義ある記念講演会となった。

2. 井戸端会議(計5回)

計5回の井戸端会議は、「暮らしの保健室」にて開催した。

<方法>

グループに分かれて「戸山ハイツの魅力」と「暮らしの課題」についてポストイットに書いてだしていただきながら話し合い、似通ったものを集めるワークショップ形式をとった。松岡ゼミとの相乗りとし、書きづらい方には学生のサポートをつけて全員参加を心がけた。



コミュニティ活動の経験値が高い猿渡進平氏(大牟田市中央区地域包括支援センター管理者)よりアドバイスを得ながら、企画を進めていった。

<開催日と参加人数>

第1回(7/7) 17名、第2回(7/14) 9名、第3回(9/28) 7名、4回目(10/19) 5名、5回目(11/16) 5名、のべ44名の参加があった。

<結果>

似通ったものを集めた結果、「一人暮らしと高齢化の不安」「孤独死・認知症の人の問題」「男性の閉じこもり」「高齢化による自治会消滅」「交流の不足」「子供・若者がいない」「坂が多くて大変」「エレベータなしで大変」「マナーの悪さ」「どこに相談していいか不明」などに分類す

ることができた。

戸山ハイツの良い点としては、「歴史ある土地柄」「交通・買物に便利」「自然環境がよい」「病院が近い」などが挙げられた。これらの情報は、アンケートの質問項目として展開し検証することとした。

3. アンケート悉皆調査

井戸端会議で得た情報を踏まえて、アンケート悉皆調査を行なった。

<調査デザイン>

調査内容：基本属性(年齢・性別、家族構成など)、居住年数、健康状況、食事状況、利用する施設、定性調査で得た24項目など)

調査対象：全戸(3400戸)における世帯内の最高齢者(最高齢者が回答できない場合は、家族等による代替を依頼、連絡により学生・教員による支援を受け付けた)

配布時期：調査票配布10月14日～18日、回収11月9日～25日(締め切りは11月11日)、督促チラシ配布11月8日

配布方法：全戸配布留め置き(一部地区では、棟自治会長を通じての手渡し)

回収方法：3方法より選択。返信用封筒で郵送、「暮らしの保健室」へ持参、電話で回収を依頼、安否確認を兼ねた訪問でも一部回収した。

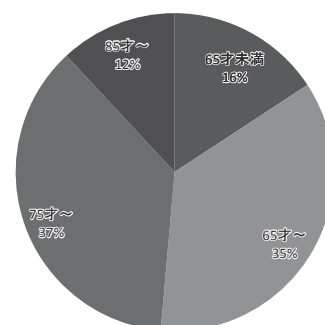
<結果>

1069票の回答(回収率:33.9%)を得ることができた。特筆すべき結果は以下のとおりである。

(1) 回答の半数は75才以上(後期高齢者)

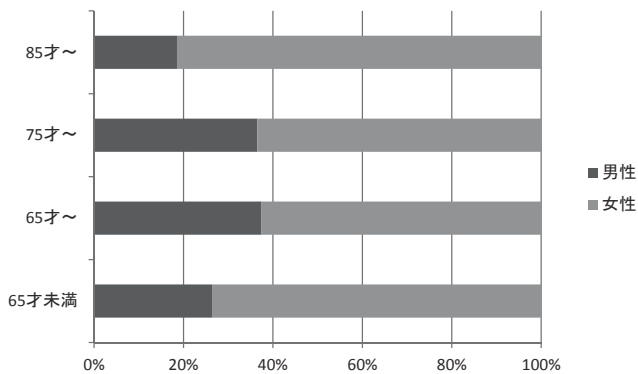
戸山ハイツは高齢化率52.2%(平成27年12月、新宿区住民基本台帳)で、都会の限界集落ともいわれている。回答者平均年齢73.4才、最頻値80才、最高齢者98才であった。回答者の84%が65才以上であり、約半数が75才以上である。回答者の性別は、女性67%・男性33%であった。

グラフ1 回答者の年齢構成



(n=1041)

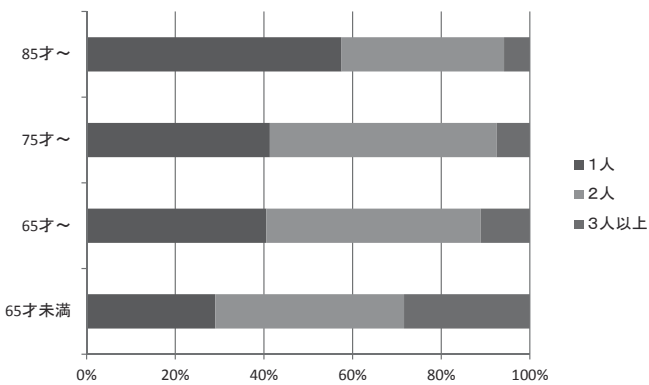
グラフ2 回答者の年齢×性別



(2) 独居・二人世帯(90%)が9割(全国平均64%)

単身(41%)・二人世帯(47%)で88%を占め、全国平均(平成22年国勢調査)の計64%(単身30%・二人世帯34%)を大きく上回った。85才以上だと独居が半数を超えている。

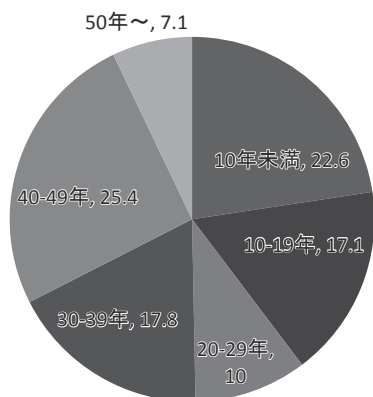
グラフ3 回答者の年齢×家族構成



(3) 居住年数で最頻値は「40年居住」

居住年数の平均は26.4年、最頻値は40年であり、40～49年が25.4%と最も多かった。最長は68年であった。

グラフ4 居住年数



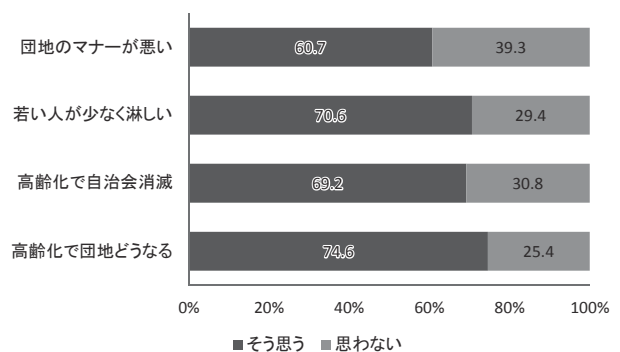
戸山ハイツは戦後間もない1949年平屋住宅が建てられたのが最初である。最長者はそこから居住者

であると推察できる。井戸端会議でも「平屋の頃から住んでいる」という声が聞かれた。

(4) 課題とストレングス

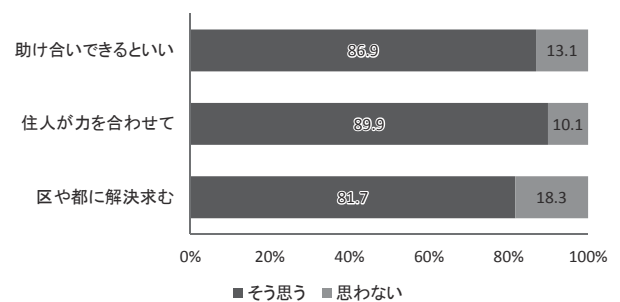
「将来への漠然とした不安(65.7%)」や「このまま倒れたらどうなるのか(55.7%)」といった不安があること、「団地のマナーが悪くなっている(60.7%)」「若い人が少なく淋しい(70.6%)」「認知症の人を見かける(29.5%)」「坂が多くてたいへん(25.6%)」といった課題があることが明らかとなった(数値は「あてはまる」「少しあてはまる」の合計。一方で、「戸山ハイツが大好き」

グラフ5 いろいろな課題が…



「住み続けたい」がそれぞれ約90%と非常に高く、「助け合えるといい(86.9%)」「住民が力を合わせて(89.9%)」と互助のポテンシャルが高いことも確認できた。「自分のこと・介護のことで限界(14.1%)」という厳しい現実も少なからずあった。

グラフ6 行政も大事、互助も重要



4. 「わいわいワークショップ」(12月21日、戸山シニア活動館)

12月21日(月)に「わいわいワークショップ」を開催した。保健センターの担当者、地域包括支援センター長等を含む17名が、4テーブルに分かれた。

団地で「困っていること」を挙げ、続いて「余っている資源」を出し合った。それらを結合させて「事業」をみんなで考案する「ソニミサン・ゲーム」の形式をとった。「交流の場」が各グループの共通項であった。

写真3 わいわいワークショップ(12/21)



- 「カフェ」「サロン」など(6案)(移動販売&相談、ビアガーデン、リサイクルなど)
- 「助っ人参上!」
- 「戸山ハイツ・コミュニティバス」
- 「腐葉土で利益還元(戸山ハイツの落ち葉利用)」

Ⅲ. 2016年度の活動「シンポジウム&ワークショップ」「井戸端カフェ」

2016年度は「地域を耕しつつ、アクションの第一歩を記す年」として、シンポジウム&ワークショップ(6月19日)からスタートした。

年間の継続的な活動としては、「井戸端カフェ」と「キッチン・カフェ」2本の柱で人の輪を広げ、交流を楽しみながら学びの場を提供した。「キッチン・カフェ」については、Ⅳで述べる。

1. シンポジウム&ワークショップ(6月19日、戸山シニア活動館)

このシンポジウムは「戸山ハイツ『未来の物語』を語ろう!」と題して、「第3回女性未来研究所シンポジウム&ワークショップ」の位置づけで開催した。

住民の方、関係機関の方、住宅関係者、研究者など160名の方がご参加くださって、熱気あふれるシンポジウムとなった。

<シンポジウム>

松岡の調査結果報告で始まり、樋口恵子所長の基調講演、猿渡進平氏(大牟田市中央区地域包括支援センター管理者)・西上ありさ氏(スタジオ-Lコミュニティデザイナー)の地域づくりの取り組みについての講演に続き、秋山正子氏のコーディネートにより両名によるディスカッションが行われた。

写真4 シンポジウム&ワークショップ



樋口恵子所長からは、「戸山ハイツは未来の日本である。日本は大介護時代を迎え、ファミレス社会に突入している。血縁・婚姻による家族が消滅しているが、血縁がなくても『地域』を基盤に互いに関心を持ち合って、支え合う社会、誰一人置き去りにしない社会に向けて活動を始めれば日本の未来にも希望がある。高齢化率の高さを武器にして、新しい挑戦をここから発信していきましょう」との力強いメッセージが発信された。

西上ありさ氏からは「趣味や好きなことなど、テーマ型コミュニティで楽しくつながっていきましょう。それぞれの人に能力があり輝きがあり、参加して中心メンバーとして関われば関わるほど得られるものは多く、健康にもいいし、地域課題の解決につながっていく」、大牟田市で認知症SOSネットワークを構築している猿渡進平氏からは「地域で暮らし続けるためには、制度的サービスも必要だが、地域の人々のちょっとした支え合いがあれば在宅でも十分に暮らしていける。これはみんなの願いであり、他人事から自分事へと転換して、地域住民から動き出すことが重要。行政との協働をうまく進めることがポイント」との発信があった。

秋山氏は「とにかく、問題に気づいたら無視せずに行動を始めて、つながって継続していくことが大切です」とのまとめがあった。<ワークショップ>

ワークショップには約80名の参加があり、猿渡氏と西上氏という夢のようなファシリテーターの組み合わせで、8テーブルに分かれて「ソニミサン・ゲーム」を行った。結果は、表1に示されているとおり、「つどい場(サロン)」「助け合い隊」「不用品交換会」が各グループで共通する事業として挙げられた。

表1 ワークショップ（2016年6月19日）の結果

	困っていること	余っている資源	あったらいいな！事業
つどい場	近隣との交流が少なくなった 亡くなくてもわからない	集会所	各号棟に住民集まれる場
	近隣関係、孤立死 気軽に行ける所がない	集会所 シニア活動館	いこいの場「ほっこり」
	ちょっと休む所がない ごはん食べる所がない	空き家、集会所 マザアス新宿1階	多世代交流カフェ
	人とのつながり希薄 一人暮らしの孤独	社会福祉法人、行政 区民センター、保健センター	ネットワークづくり
	一日誰とも話さないこと有 相談相手がいない	号棟の下にある池	花壇作って、皆で育てる
ちょっとお助け	電球変えられない 掃除をするのが億劫	大学生、住民の専知識・技術 人の役に立ちたいと思っている人 リタイアした先輩・男性	何でもお助け事業
	ちょっとした困りごと頼めない 手助けが必要な人多そう	自治会、住民、大学生 リタイアした人（技術） 専門技術もつ住民のスキル	お助け隊（男性グループ）
	買物が大変 重い物・大きい物運べない	中高生のエネルギー 近くの大学生	暮らしのお助け隊
交換会 バザー	モノが余ってしまう	ゴミに出している	公民館に「お持ちください BOX」
	使っていない物（服・家電）	集会所	集会所で交換会
	お店（カフェ）が少ない 買物する所が少ない	作りすぎたごはん 捨てられない衣類、食器・鍋	バザー

2. 井戸端カフェ（4回）

このあと、6月から12月にかけて4回にわたって井戸端カフェを継続した。講師の話聞いて、そのあと参加者で話し合いをした。

これに先立ち、5月8日には「平成28年度オープニング・カフェ」として戸山シニア活動館にて焼肉パーティを行ない、参加者の拡大と交流を進展させた。

(1) 第1回・6月29日・猿渡進平(大牟田市中央区地域包括支援センター管理者、暮らしの保健室)

学生より実際に行うアクションの提案があり「お散歩MAP」が支持された。住民の方が持っている能力・特技を生かしていくと新しい展望が開けるという提案があったりしたが、「何を始めるか」に対しての共通した意思決定はなかった。

(2) 第2回・8月10日・近山恵子氏(NPO法人コミュニティ・ネット理事長、暮らしの保健室)

近山氏は自らが高島平団地で挑戦した高齢者住宅住人の会について話した。継続して会合を持つことが重要であり、「戸山ハイツでも『つどい場』があれば、助け合い会や交換会などすべてが解決する」。食事提供すれば家賃くらいは賄えるはず、との提案があった。高島平団

地での「地域リビングプラスワン」の紹介があり、有志で見学に行くこととなった。

(3) 第3回・10月19日・西上ありさ氏(スタジオ-Lコミュニティデザイナー、戸山シニア活動館)

自治体には財政のゆとりがないので、豊かな地域は住民の手で創っていく必要がある。趣味などの楽しいことをつうじて絆を再生していくのが「テーマ型コミュニティ」であり、「食事、健康、社会参加」が重要である、という話であった。

その後の話し合いでは、「団地内であいさつがない」などの意見が出され、「テーマ型よりも、問題解決で進まなければ、この団地は待たなしの状況である」という発言が多数を占めていた。

(4) 第4回・12月21日・井上温子氏(NPO法人ドリームタウン理事長⇒理事が代理講演、戸山シニア活動館)

初めは4人でスタートしたが、継続していくうちに人が集まってくる。高齢者のみではなく、一人暮らしなどの家族形態に焦点を絞っているので、幼児と母親、小学生の子どもなどもやってくる。ボランティア中心であるが、ここで食事を作って働く事が楽しく、生きがいを感じている。

なにかを始めるにしても、小さなことから始めて継続することが大事なのでがんばってほしい」との励ましの言葉を送っていただいた。

話し合いでは、「あいさつができていないので、あいさつ運動などをはじめてはどうか」という意見が出されたりした。

3. 高島平団地訪問(9月28日)

5名の住人の方と高島平団地「地域リビングプラスワン」を訪ねた。そのあと、「ゆいま～る高島平」も訪問し、サービス付き高齢者向け住宅に改造された住戸を見てサービス拠点で生活支援の内容について話を聞いた。「雰囲気がよい」「戸山ハイツにもこうした食事のできるつどい場があるとよい」などの意見が多く聞かれた。

IV. 2016年度の活動「キッチン・カフェ」

1. 活動の目的と実施要項

(1)「キッチン・カフェ」の目的

目的：低栄養に陥りがちな高齢者に対して、簡単&栄養満点の料理づくりを学生とともに楽しみながら調理を通して健康増進・社会交流を図るとともに様々な情報提供を行い、地域住民の意識向上を図る。

「つくって・食べて・つながろう！キッチン・カフェ みんな元気」をキャッチコピーとして用いた。

(2) 実施要項

内容：料理づくり&食事会(5月・1月は食事&交流が中心で調理はなし)

予算：食事会 5月、1月 50,000円

料理教室 7月、9月、11月 20,000円

参加費：300円(保険料100円、食材費の一部200円として充当)食生活改善と交流という趣旨を理解した上で自主的に参加者を募るため、参加費を徴収する。

(3) 活動日と内容

5月 8日(日) 食事会 焼肉パーティ

7月 3日(日) 料理教室

9月11日(日) 料理教室

11月 6日(日) 料理&食事会

1月 8日(日) 食事会 大鍋大会

(4) 場所

新宿区立戸山シニア活動館調理室および学習室

東京都新宿区戸山2-27-2 ☎03-3204-2422)

(5) 対象者・人数

戸山ハイツ住人、戸山ハイツ関係機関(区役所、保健センター等) 15~20名

募集は 井戸端カフェ参加者、暮らしの保健室と戸山シニア活動館利用者にチラシを配布した。また、これまでの催しに参加された方に電話等で参加を呼びかけた。

(6) その他

東京家政大学女性未来研究所が主催し、暮らしの保健室、外山シニア活動館との共催とし、保険に加入して実施した。

2. 活動の内容と結果

(1) 5月8日(日) 12時~14時30分

食事会 焼肉パーティ

この会は オープニングカフェとして焼肉パーティを行った。参加者は住民15名、大学教員ほか15名、計30名であった。午前9時より学生ボランティアと食材の買出し、10時より調理開始した。

初回のため、どのような流れになるか予測が難しく、不安もあったが、参加希望をされていた方々が12時の開始時刻には来場された。学習室に5-6人がテーブルに着席するようにし、熱々の焼きたてのお肉を提供する方法で、食事会を開始することができた。

焼肉パーティとした理由は、単身世帯が多いことから焼肉を食べることが少ないのではとの考えと高齢であっても栄養状態を良好に保ち、元気で過ごしていただくには、たんぱく源である肉も積極的に食べることを知ってほしいためである。

参加者もこのような体験は珍しいようであったが、学生や顔なじみのかたや初めての方などの食事を楽しまれていた。

図3 5月 焼肉パーティー募集チラシ

「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」
カフェ開催のお知らせ

「いろいろ話し合おう！」

平成28年秋オープニングカフェ(焼肉パーティー)

場所：戸山シニア活動館 調理室&活動室

日時：5月8日(日) 12時から14時30分

参加費：300円

申し込み：戸山シニア活動館 TEL 03-3204-2422

大抵肉を食べながら、いろいろとおしゃべりしましょう！
多くの方の参加をお待ちしています。

これからの活動予定

「つくって・食べて・つながろう! キッチン・カフェ みんな元気」
学生と一緒に楽しみながら作って食べてしゃべりして一週間の始まり!

7月3日(日) 11時~ 定員300円
場所：戸山シニア活動館調理室
定員：16名

申し込み：戸山シニア活動館 03-3204-2422 9時から18時

「なんでもござれ! 戸山シニア・カフェ」

何でもござれも嬉しい、新しくメニューも追加です! 毎週・毎月の活動生
お問い合わせ：暮らしの支援室 03-3206-5114 平日(土・日・祝日を除く) 9時から17時



図4 7月 料理教室 募集チラシ

暮らしの保健室★東京家政大学 女性未来研究所

「戸山ハイツの未来の物語をつむごうプロジェクト」

次回 キッチン・カフェ開催のお知らせ

「つくって・食べて・つながろう!
キッチン・カフェ みんな元気」



学生と一緒に楽しみながら作って
食べて
おしゃべりして...楽しんで時を!



*参加者には特別オリジナル「レシピカード集」プレゼント!

7月3日(日) 11時~14時

場所：戸山シニア活動館 調理室

定員：16名

参加費：300円

持ち物：エプロン、三角巾

申し込み：戸山シニア活動館
03-3204-2422

(2) 7月3日(日) 11時~14時

料理教室『冷凍食品活用』

参加者は募集16名に対し13名であった。その他、戸山シニア活動館のスタッフ2名と大学関係者は教員2名と学生3名で実施した。9時より学生と買い出し、11時開始まで準備を行なった。メニューはごはん、里芋と鶏肉の煮物、ほうれん草とツナの炒め物、いんげんの和風スープ、バナナスムージーとした。単身や夫婦世帯のために単調に成りがちな毎日の食事を冷凍食品を活用することで食材のバラエティを増やし、食事を楽しむことができるような料理教室とした。

里芋は調理に手間のかかる食材といえるが、市販されている冷凍された里芋は、皮むきの必要もなく簡単に料理できる。里芋やいんげんなどの冷凍食品の存在を知らない方もいらしたので、このような冷凍食品の存在を知っていただくだけでも食生活が豊かになると考える。参加者に、料理のレパートリーを増やしていただきたく栄養教育研究室で作成した簡単調理のオリジナルレシピ集をプレゼントした。

「冷凍食品活用」についてアンケートも行った。参加した感想は、参加者全員の13名が「楽しかった」と回答された。戸山シニア活動館での初めての料理教室だったが、好印象を持ってもらえたと感じた。また、普段2人暮らしの参加者が多かったため、戸山ハイツの居住者との会話を楽しめたのではないかと考える。

冷凍食品の活用について理解できたか、という質問は12名の参加者が「よく分かった」と回答した。新たな活用法を伝えることができたと感じた。

メニューの味については、多くの参加者が「里芋と鶏肉の煮物」と「バナナスムージー」は、「とてもおいしかった」と回答した。バナナスムージーについては、バナナを冷凍していたためシャキシャキ感が残り、夏だったこともあり美味しく感じたのだと思われる。

「家庭で実践したいと思いましたか」という質問には、「今すぐ試したい」「試したい」と13名全員が回答した。冷凍食品ということで、いつでも気軽に作れるというイメージを持っていただけたと思う。

(3) 9月11日(日) 11時~14時

料理教室『食物繊維をとろう』

参加者は募集16名に対し、12名であった。大学関係者は教員2名と学生2名である。

今回のメニューは ごはん、スパニッシュオムレツ、オクラの梅肉サラダ、ミネストローネ、ぶどうせりーの5品を料理した。食物繊維の不足を改善できるメニュー

と、電子レンジを活用したオムレツは 参加者に好評であった。できるだけ日常に食している食材を献立に取り入れて、自分でも作ってみたいと思っていただけるように工夫した。

「食物繊維のちから」についてアンケートを行った。

参加した感想では、全員から「楽しかった」という回答が得られた。前回と同様の結果であったが、前回のアンケートをもとに献立作成をするなど、参加者に声を取り入れた活動内容にすることができたからだと考える。

食物繊維の働きについて理解していただけたか、という質問では、8人が「よくわかった」、2人が「わかった」という結果であった。リーフレットの内容に加えて身近な食品を例に挙げながら説明することができたため、参加者が理解しやすい講話をすることができたと考えられる。

メニューの味についての質問では、多くの方に「とてもおいしかった」、「おいしかった」の回答を得ることができた。 本日のメニューを家庭で実践したいか、という質問に対しては4人が「すぐに試したい」、6人が「試したい」という回答であった。電子レンジを活用したレシピを紹介したので、手軽に作ることができると認識して戴けたと考える。

写真5・6 9月 料理教室



(4) 11月6日(日) 11時～14時

料理&食事会『豆の秘密』

今回は男性に料理する、食べていただく喜びを味わっていただくことを目的とした。そのために、募集は料理をする人「ぼく料理人」として8人、「わたし食べる人」12人の募集をした。料理人の男性参加者は4人、食べる人の女性参加者は11人であった。その他、大学関係者が教員3名、学生6名であった。

この日のメニューは以前のアンケートでハンバーグが食べたい、料理したいとの希望が寄せられていたことや、豆の良さを知っていただくために、ごはん、豆腐ハンバーグ、かぶのマリネ、白菜とミックスビーンズのミルクスープ、季節のデザートとした。

「豆の秘密」と題し、学生によるミニ栄養講話を行なった。参加者はミックスビーンズの豆缶や豆腐でつくるハンバーグに興味を示めされた。

今回は、参加の感想のほかに、最後の料理教室ということで3回の料理教室を通しての感想に対する質問も行った。

「参加してみていかがでしたか？」という質問では参加者全員が楽しかったと答えていた。今回は、男性が料理を作る人、女性は料理を食べる人という形で行ったが、男性も女性もそれぞれの役割を楽しんでいただけたのがわかった。また、食べる人である女性に関しては、料理が出来上がるまでの時間を福祉学科の学生協力のもとレクリエーションを行った。

「豆・豆製品のはたらきについて理解いただけましたか？」という質問は良く分かったが14人、分かったが1人であった。イラストを入れたことが、理解の深まりに繋がったと考えられる。

料理の評価に関して「豆腐ハンバーグ」は12人が「とてもおいしかった」と答えていた。和風の味付けが好まれたことや、肉のみではなく豆腐を使うことで軽い食感になったためだと思われる。

写真7 11月 料理教室 ぼく料理人



写真8 11月 料理教室&食事会



(5) 1月8日(日) 12時~14時
食事会(大鍋大会)

募集25名に対し、16名の申込みがあった。そのほか、戸山シニア活動館館長、自治会長、暮らしの保健室秋山室長と杉山保健師の参加、大学関係者は教員3名と学生8名で総計31名であった。

今回は 食事会のため、調理は大学関係者と料理のお手伝いを申し出された3名の住民の方で行った。新年であり季節的に身体の温まる大鍋大会にふさわしいと思われる山形風芋煮、いなり寿司、大根のゆかり和え、白玉汁粉を用意した。山形風煮物は 芋煮を初めて食する方や、久しぶりにおいしい芋煮を食べたと感想されるかたなど、話題提供に一役買っていた。

食事会のあと、教育福祉学科の学生によるレクリエーションの知的活動もあり、食事と交流を図れる会となった。参加者からは 来年度も継続してほしいとの声が寄せられた。

写真9 1月8日大鍋大会



写真10 1月8日大鍋大会



写真11 1月8日 大鍋大会



3. 活動のまとめ

「キッチン・カフェ」の持つ役割は料理をすること、食生活の工夫の情報提供、地域交流、社会参加などさまざまな要素を持つ。しかし、この活動は、住民の方にとって与えられる活動でなく、自ら活動していくヒントとなるような役割を持っていると信じている。食事は生きていくための基本である。楽しく、美味しく食事することが元気に在宅で暮らせることに繋がっていくと考えると独居や夫婦のみの世帯の多い地域だからこそ、定期的に食事会が開催されることが望まれる。地域活性化には地域に住む住民の自らの取り組みが求められると思われる。住民の手と力で料理教室や食事会を開催できるように支援をしたい。私たちはその支援をする立場で基本的には活動を行うことを今後の目標としたい。

V. 成果と課題

2年にわたって活動してきたプロジェクトの成果と今後への視点をまとめる。

1. 成果

(1) 課題とストレングスが明らかになった。

井戸端会議などの定性調査、アンケート悉皆調査による定量調査によって、課題とストレングスが見えてきた。

住民は超高齢化の「不安」「孤立」「寂しさ」「閉じこもり」など、同時に住民がおいていく団地において「絆の希薄さ」に強い不安を感じていることが分かった。同時に、「戸山ハイツが大好き」「ここで暮らし続けたい」「私たちも何か活動したい」というストレングス(強み)につながる気持ちがあることが明確になった。

(2) 若い学生の持つ「力」が歓迎された。

齢化率52.2%の団地において、東京家政大学の学生が訪問して、ピンクのTシャツを着て活動を始めたことは、最初は訝られた側面もあるが多くの方に「若い人を見るようになってうれしい。元気が出る」と喜んでいただく場面を多く体験した。学生たちも、団地のお年寄りとおふれあうことで、高齢期の暮らしの課題や気持ちを体験として学ぶことができた。

(3) 2回のワークショップでは課題が深められ、事業アイデアも。

2回(2015年12月21日、2016年6月19日)のワークショップでは、住民の方がグループに分かれて直接話し合う機会が設けられたが、話し合いが盛り上がった。盛り上がりの内容は、ワークショップ結果(表1)で確認できるが、「近隣との交流が少なくなった」「日頃交流できていない」「一日誰とも話さないことがある」など、絆が希薄で交流が少ない点により集中していた。また、「戸山ハイツにあり活用されておらずもったい資源」についても集会室、自治会などがどんどん挙げられ、楽しみに話し合いながら事業アイデアを出された。住民の方から直接語られる言葉によって、課題の深刻さを認識でき、前向きな姿を見ることができたことは最も大きな成果だと言えよう。

(4) 「顔の見える関係」人的なつながりが形成されつつある。

会を重ねるごとにレポートで参加する方も増えていき、「前回もご参加くださいましたね」などと、大学関係者と住民の「顔の見える関係」が形成されていった。住民間でも新しい出会いが生まれ、信頼関係形成の一步を歩みだせているのではないだろうか。

2016年9月28日には住民の方5名から希望があり、高島平団地「地域リビングプラスワン」を学生とともに訪問して、地域における「つどい場」の意義、運営ノウハウを学ぶようなことも起きた。継続することの重要性を痛感している。

(5) 中心メンバーによる会議などもスタートした。

第4回井戸端カフェ(12月21日)のあとに、17時よりリピート参加者や地区自治会長などに集まっていたいただき、今後の活動について話し合う機会を持つことができた。次回は2017年2月8日を予定している。

(6) 東京家政大学三学部のプロジェクト

このプロジェクトには、東京家政大学にある三学部にも所属する教員が参加している。専門領域を超えて超高齢社会の問題について多角的なアプローチを行なって問題解決を目指し、学生の学びの場としても活用しつつ学際的なアクション・リサーチである。

2. 今後の課題

(1) 出会う、話し合う「場」づくり

2年間の取り組みを通じて痛感したのは、成果①でのべた点であるが、加えて「住民は対話に飢えている」という点である。井戸端カフェで話し合いが始めると、とたんに会話が始まり、戸山ハイツでの問題について話し合いが盛り上がるという状況であった。それだけ問題意識を持つ方が参加してくださっているのであり、課題も多いということである。ワークショップでも「つどい場」を望む声が多かった。気軽に立ち寄れて、話せて、交流できる「場」づくりの可能性について具体的に話し合う必要がある。

(2) さまざまなコミュニティ、資源が存在するが、それらが繋がっていないのではないかと。

戸山ハイツには、地区自治会、号棟自治会、戸山シニア活動でのサークル活動や35号棟演芸会など、さまざまなコミュニティが多様に存在している。しかしそれらが繋がっておらず、分断された形となっている。ネットワーキングによって、何らかの力になるのではないだろうか。

(3) 行政や社会福祉協議会、地区自治会、号棟自治会などとの協働。

今後の課題として、地区自治会長との話し合い、号棟自治会長の方へのアプローチをはじめとして、行政や社会福祉協議会、地域の社会福祉法人との協働についても可能性を模索していくとよいのではないかと。

(4)「学生の若い力」の継続。

「学生」「若い人」の持つ潜在的な力の偉大さを戸山ハイツの住民から教えていただいた。我々は常に一緒にいる状況なので、その潜在的ポテンシャルに気づいていなかったのかもしれない。ワークショップや井戸端カフェ、キッチン・カフェではピンクのTシャツを着ていたため、その若さを強調できたのかもしれない。「若い人が来てくれてうれしい」「話せるのがうれしい」という声をよく聞いた。継続していく必要がある。

(5)さらなる「対話」。

地域福祉はまちづくりにおいては、「住民の声に耳を傾けること」の重要性が言われ、「答えは住民の中にある」と言われている。

グループで話し合っていたく形式を中心に行っているが、今後は1対1のコミュニケーションを深め、より多くの方の気持ちに触れ、真のニーズを深めてきたい。さらなる「対話」の必要を痛感している。

戸山ハイツにお邪魔させていただくようになって1年半が経過した。

まずは、団地の実態とニーズを明らかにしようと調査を始めた。これは、順調に進んだ。2016年度の6月19日のシンポジウム&ワークショップも、樋口恵子所長、秋山正子室長のご協力を得て、プロジェクトの意義を知らせ、仲間を増やし、みんなで考えるという点でそれなりの成果を収めることができ、これも順調に進んだ。しかし、このあとの「井戸端カフェ」については、地道に、地道に継続していくしかなく、「これでいいのか」という時期が続いた。しかしながら、レポートで参加して下さる方々の「顔」が見え始め、個人的な会話も広がる中で、信頼関係も少しずつ形成されていっている様子を感じることができた。地域づくりやコミュニティ・ソーシャルワークは、そのプロセスや成果を数値化することができず、エスノグラフィや物語風に記述していくほかない。

地道ないとなみを続け、人とのつながりを作り、「対話」を継続していく。この地味な手法しかないのではないだろうか。来年度も地味に地道に継続している予定である。

まずは、共同プロジェクトとして活動の拠点となってくださった「暮らしの保健室」室長の秋山正子氏、副室長の杉本弥生氏、戸山シニア活動館館長の滝口宏輔氏に、御礼を申し上げます。

また、学生たちも幾度となく各住戸を訪問してチラシ配布やアンケート回収を行ない、また、和田ゼミ・卒論ゼミの学生たちも朝早くからキッチン・カフェの準備をはじめ、最後の片付けまでよくがんばり、住民の方の輪を広げるとともに心温まる「おいしい場」を作り出す上で大いにがんばりました。

戸山ハイツは1960年代、1970年代に建設された団地で、住人が一斉に老いていく稀有な状況の中で高齢化率52.2%という都会の限界集落の様相を呈している。これは、まさに日本の未来の先取りであり、樋口恵子所長の言にあるように「ここで、地域を基盤とした血縁に頼らない支え合いがうまくいけば、日本の未来にも希望が生まれる」と考えている。

これからも継続して、住民の方が行動を起こすことを支援していきたい。

民生委員の皆様、各地区の自治会長の皆様、各号棟の自治会長さま、本当にありがとうございました。

*調査にあたっては、東京家政大学倫理審査会の審査を受けた上で進めた。

本学園アーカイブズ

～校祖渡邊辰五郎翁の書簡～

林宏一 Hayashi Koichi

女性未来研究所のプロジェクトのひとつとして「学園のアーカイブズ」の作成がスタートした。今回は辰五郎の書簡を紹介する。これは前博物館長の林先生が「博物館紀要」に寄稿いただいた物であるが、辰五郎翁の人柄が偲ばれることから、あらためて紹介する。

はじめに

本学博物館には、校祖渡邊辰五郎翁自筆の書簡が4通所蔵されている。

1. 明治22年2月17日付 柴垣久道様宛 1通 封筒付き
2. 年月日不詳 宛先不明(改良服関係) 1通
3. 年月日不詳 登与子様宛 1通
4. 年不詳9月12日付 高井よう子様宛 1通

このうち4の高井よう子様宛1通は、すでに校祖生誕150年記念に際して刊行された冊子『女子教育の先駆者 渡邊辰五郎と今日の教育』(1994年 渡辺学園)の見返しに一部写真が紹介されており、御存じの方もおられると思われるが、他は久しく収蔵庫に保管されたまま報告紹介される機会もなく今日に至っていた。筆者は、館長在職中に館職員の協力を得てこれらの書簡の解読を進め、博物館紀要第16集(2011年2月)にその成果を発表したところだが、この度本報告書に再録の要請があったので、一部手直しを加え、その責を果たすことにしたい。以下の文章は、既発表の内容と同一であることをお断りしておく。

1. 明治22年2月17日付 柴垣久道様宛書簡(図①, 図②, 図③)

本状は封筒付きで、巻紙仕立て。巻頭部分を欠損する。渡邊滋寄贈。寄贈年月日不詳。

三紙紙継 一紙 縦16・4×横42・2cm 全長85・7cm 封筒 縦18・0×6・9cm(現状)

切手 菊小判弍銭(紅) 消印 丸一印(墨)、「武蔵/東京本郷/廿二年二月/十七日/ト便」

[封筒表書]

本郷区公立本郷学校 (以下欠損)

柴垣久道殿

帛皮下

見本

在中

[封筒裏書]

本郷区東竹町二十五番地(下部欠損)

ノ 一月十七日 渡邊辰五郎

[本文]

(欠損) 調製之御
 思召も御座候ハバ
 御注文ヒ仰付ル様
 相願度且又他分教
 員ニテモ御調製之向
 モ御座候ハバ代價之義ハ
 一時拂ニても二三ヶ月
 賦位ニテモ大兄之
 御保証ヒ成下候方
 へハ直ニ御調製可申上候
 尚裁縫向ハ最念
 入代價者精々相
 働ラキ可申上候先
 ハ右御願迄 草々 頓首
 一月十七日

渡邊辰五郎

柴垣様帟皮下

追啓見本不取敢
 入御覧候間御取立奉願候
 其他御入用候ハバ御報知
 次第何時ニテモ持参可申上候

左ニ入御覧候見本ハ
 過般制定相成候
 教員服ニ適當ノモノヲ
 撰ヒ候ニ付左様御了知
 可下ル候

教員正服

(布見本) 遍りとり だるま
 代金九円五拾銭

(布見本) 全上
 代金拾壹円

(布見本) 全上
 代金八円五拾銭
 ○背廣ナレハ三ツ揃ニテ
 八円ヨリ

御調製

可申上候

(布見本) 遍りの

見本

[読み下し]

(欠損) 調製の御思召しも
 御座候はば
 御注文仰せ付けらるるよう
 相願たく かつ又たぶん教員方にも
 御調製の向きも
 御座候はば 代價の儀は
 一時払いにても 二、三ヶ月
 賦位いにても大兄の
 御保証なし下され候方へは
 直ちに御調製申し上ぐべく候
 なお裁縫(の)向は最念入り
 代價は精々相働き申し上ぐべく候
 まずは右お願いまで 草々頓首
 一月十七日

渡邊辰五郎

柴垣様虎皮下

※「虎皮下」脇付けの一つ

追啓 見本取敢えず
 御覧に入れ候間御取立願奉り候
 その他御入用候はば御報知しだい
 何時にても持参申し上ぐべく候

左に御覧入れ候見本は
 過般制定相なり候
 教員服に適當のものを
 選び候につき左様御了知
 下さるべく候

其アカラシヤ之類御入用ナレハ澤山
御目ニ掛可申上候

それ赤羅紗の類御入用なれば沢山
お目にかけて申し上げべく候

[解説] 本文及び追伸 2 節からなり、文頭数行分を欠損している。

文面から本郷区公立本郷学校柴垣久道宛での、学生・教員制服注文問い合わせにかかわる書簡と判断され、文末には小短冊形に裁たれた布見本が 4 片添付され、代金等の添え書が記されている。

書簡本文の日付は 1 月 17 日とあるが、封筒裏書きの日付及び二銭切手上に押された消印日付から、発信年月日は明治 22 年(1889) 2 月 17 日であることは明らかであり、辰五郎翁の書き間違いと判断される。発信地は「本郷区東竹町二十五番地」、辰五郎翁は明治 17 年(1884) に和洋裁縫伝習所の校舎を本郷区湯島 4 丁目 3 番地から同区東竹町 25 番地に移転している。

官立の学生・教員の制服が公式に制定されるようになったのは、明治 19 年(1886) 3 月 2 日の「帝国大学令」、同 4 月 10 日「小学校令・中学校令・師範学校令」の公布に伴ってのこととみなされ、まず学生の制服、ついで教員の制服といった順序で実施定着していったようである。帝国大学では令発布の年に、第一高等学校では同 20 年 5 月に正科履修の生徒に着用の命が出て、22 年に教員の制服制帽ができたことが知られている(『日本服制史』下 大田臨一郎 平成元年三月 文化出版局)。この前年明治 21 年(1888) 9 月に文部大臣森有礼が文部省訓令第二号で師範学校に対して「尋常師範学校職員ノ儀ハ殊ニ容儀ヲ正シ威重ヲ保タシムルコト職務上必要ニ付自今該学校長教育幹事舎監ハ職務上一定ノ服ヲ着用セシムヘシ」と制服着用を命じた。近代国家の建設を進める中で、教育現場においてもしかるべき体裁を整える必要を意識しての施策と推察される。

本書簡の追伸二節目に「・・・過般制定相成候教員服ニ・・・」の文言が見える。「過般」とあることから制服の制定から間もない時期であることを物語っており、明治 21 年(1888) 9 月の文部大臣森有礼の文部省訓令第二号を契機として次第に官立学校の生徒・教員の制服着用が普及していった状況を窺うことができる。

本郷区公立本郷学校及び柴垣久道の詳細については未詳。ただし柴垣久道は、明治 39・40 年(1906～7) に刊行された東京高等商業学校一橋会発行『一橋会雑誌』第 21・22・28 号の発行人・編集者として名を見せているので、後年東京高等商業学校に籍を移したことが知られる人物である。識者の御教示を俟ちたい。

2. 年月不詳 改良服関係書簡 資料三一五〇(図④)

巻紙仕立て。巻末部分を欠損。宛先、発信年月日も明らかでない。渡邊滋寄贈。寄贈年月日不詳。

二紙紙継 一紙 縦 18・0×横(二枚目、現状) 55・0cm 全長 75・0cm

[本文]

御書面正ニ拝見仕御機嫌能く
御運動ヒ進候由国家之ため
奉賀候改良服之着用ハ
下バキ之ハ女股引下袴ハ別紙
図之通り又下着ニハ通有之
ツツ袖の長着ヲ着用スルカ或ハ
ツツ袖之半胴ギニても宜敷候先ハ
第一ニ襦袢ヲ着シ次ニ胴キ次ニ
上ギ次ニ袴ヲ着ルナリ

[読み下し]

御書面正に拝見仕る 御機嫌よく
御運動進められ候由 国家のため
賀し奉り候 改良服の着用は
下ばき^{これ}之は女股引 下袴は別紙
図の通り また下着には通有の
筒袖の長着を着用するか 或いは
筒袖の半胴着にても宜しく候 先ずは
第一に襦袢を着し 次に胴着 次に
上着 次に袴を着るなり

(図)

下		フランネル単或ハ裕	
	マチ	之ハ冬ノ分	(省略)
袴		夏ハ不用ナリ	

まへ	ヒモ	モモ引	ヒモ	後	モモ引
					マチナシ

右之通りナレ共外ニ	右の通りなれども	ほかに
種々工夫も在之候ニ付	種々工夫もこれあり候につき	
雛形ヲ御送り申度存共	雛形をお送り申したく存ぜども	
何分大多忙之處へ	何分大多忙のところへ	
他府縣より日々改良服之	他府縣より日々改良服の	
注文在之閉口仕候余ハ	注文これあり閉口仕り候	余は
御推察ヒ下候 草々以上	御推察下され候 草々以上	
	渡邊	渡邊

[解説] 全文完備し、本文中ほどに改良服の概略がスケッチされている。

次の3. 登与子様宛とともに改良服にかかわるもので、卒業生からの問い合わせに仔細に回答したものとみなされる。

改良服の考案・製作・普及は辰五郎翁の業績の一つである。小森甚作編『渡邊辰五郎君追悼録』（私立東京裁縫女学校出版部発行 明治41年5月）の傳及び年譜よれば、翁は明治15年（1882）頃に考案を起し、20年頃には世上に広く話題となって同志の佐々木豊治、元田直、山田美妙等と会を組織し種々討議を加え、31年には『婦人改良服指南』を著わすにいたった、と説いている。

辰五郎翁の改良服に関する歩みは、いまひとつ不明なところが多い。『追悼録』に言う明治15年頃の考案は、改良の対象やそれに関わる具体的な著述・試作品があるのかどうか、現在は確認できていない。夫馬佳代子編『衣服改良運動と服装改善運動』（家庭教育社 2007年2月）によれば、翁は明治15年に「改良服を考案する会」を設立し、同志を集めての「衣服改良会」の結成は19年であったことを明らかにしている（「郵便報知新聞」明治19年10月31日附け記事）。以後、翁は教育・医学界現場や婦人改良服の考案・製作・普及に力を注ぎ、明治31年（1898）4月に『婦人改良服指南』（東京裁縫学校発行）を、同36年3月には『婦人改良服裁縫指南』（東京裁縫女学校同窓会）を著わし、広く社会に理論と実践の指針を示し多くの成果をあげている。

本書簡は宛先、発信年月日ともに不明ながら、改良服の着用に対する問い合わせに懇切丁寧に答えていることから、卒業生への返信であることは明らかである。文中に見える「御運動進められ候由」とは、改良服普及に関わる運動と推察される。発信年については不明だが、「他府縣より日々改良服の注文之在り」の文言から、改良服の製品化が進み、他府縣からの問い合わせ・注文が増加した時期のものとみなされる。次の3. 登与子様宛書簡と併せ考えると、おおよその年が割り出せそうである。

3. 恩師の書簡（登与子様宛） 年月不詳（図⑤）

巻紙仕立て。巻末を欠損。発信年月日不明。渡邊滋寄贈。寄贈年月日不詳。

二紙紙継 第一紙 縦18・0×横34・6cm 第二紙 横60・6cm 全長95・2cm

[本文]

[読み下し]

尊書正ニ拝讀仕候
然ハ尊宅於ても皆々

尊書正に拝読つかまつり候
然らば尊宅においても皆々

様御壯健之由奉賀候
私方も幸ヒ一同無事
罷在ル間乍他事御休申
ヒ下度候金貳円正ニ
落手仕候改良服も出来
致居候ニ付近日御送り
可申上候袴之縫目云々
ハ御説之通りニて差支
御座なく候被布之豎
衿なども単ハ豎の方へ
返し衿ハ身頃の方へ返す
何れも都合之善き様ニ
なせし物なれば左様
御承知ヒ下度候猶申上
度事も山々なれ共
不相替大多忙ニ付余ハ
後使ニ譲ル草々敬具
渡邊老人

最愛なる
登与子様玉下

二白御親父様初メ皆々
様方へよろしく
改良服も社會之好兵ヲ
得諸府縣より日々幾回
登なく問合在之閉口仕候
腰廻りニハ菊水或ハ
他之模様などを縫著
するなり御前様之御
見斗ヒニて可成ビレイ
ニ願度候 御前様ニハ
ウス色ノ物ヨカルベシト存候
處折悪しく品切ニ付紺色ヲ
(以下欠損)

様御壯健の由賀し奉り候
私方も幸い一同無事
罷り在る間、他事ながら御休心
下され度く候 金貳円正に
落手仕り候 改良服も出来
致し居り候に付き、近日御送り
申し上ぐべく候 袴の縫い目云々
御説の通りにて差支え
御座なく候 被布の豎
襟なども単は豎の方へ
返し、衿は身頃の方へ返す
何れも都合の善きように
なせしものなれば、左様
御承知くされ度く候
猶申し上げ度き事も山々なれども
相変わらず大多忙に付き、余は
後使に譲る 草々敬具
渡邊老人

最愛なる
登与子様玉下

二白（追伸）御親父様初め
皆々様方へよろしく
改良服も社会の好評を得
諸府県より日々幾回となく
問い合わせ之あり閉口仕まつり候
腰回りには菊水或いは
他の模様などを縫著
するなり お前様の
お見計らいにて可なり
美麗に願いたく候 お前様には
うす色の物よかるべしと存じ候ところ
折悪しく品切れに付き紺色を
(以下欠損)

[解説] 卷末を欠損するが、ほぼ全文の内容は読み取ることができる。2と同じく改良服の話題を主体に、袴の縫い目、被布の縫い方に関する質問への回答からなっている。宛先の登与子から改良服の注文（おそらく見本も兼ねてであろう）があり、それが既に仕上がって送り届ける状況になっているところへ、改めて登与子から金二円の送金と袴・被布に関する質問の手紙があり、それに対する返信であることが分かる。金二円は、改良服の代金であろう。

長文の追伸後半「腰廻り云々」以下は、内容から改良服に関わることとみなされ、袴の腰廻りに装飾用に縫著する模様は「菊水」等が好ましい旨示唆している。「菊水」紋は、明治36年(1903)3月に出版された『婦人改良服裁縫指南』の見本着装図にも取りあげられており、日清戦争から日露戦争にいたる時期の、軍国化著しい当時の世相を反映したものと思われる。「美麗に願いたく候」の文言から、仕上がりは実用的であることはもちろんのこと、美的に

も優れているべきことに念を押しているところに、辰五郎翁の教育方針がよく現れている。

また、登与子用の改良服の布地について「お前様にはうす色のものよかるべしと存じ候」ところが、あいにくふさわしい布地が品切れであったので、やむなく紺色にした、とある。教え子の一人一人の風姿・性格をきっちと承知して、その人にふさわしい布地を選んでいる様子がみてとれ、辰五郎翁の学生に対する深い愛情の一端を窺い知ることができるのも、本書簡の特色であろう。

本文後付の「最愛なる登与子様」の表記、前文の「尊宅に於ても皆々様御壮健之由奉賀候」や追伸の「御親父様初メ皆々様方へよろしく」の文言からも覗えたとおり、登与子とは家族ぐるみの親交があったことが知られる。登与子の特定は卒業生名簿等を当たっても手掛かりがない。この頃の人名表記はかなりルーズであることからすると、「登与子」は「とよ子」、「とよ」、「トヨ」である可能性がある。その観点に立って改めて卒業生名簿や関連の史料を当たってみると、明治33年(1900)東京裁縫女学校高等科を卒業し、郷里の岐阜に帰り岐阜市柳ヶ瀬に岐阜裁縫伝習所を開いた「佐々木とよ」(明治6～昭和26・1873～1951)の名があがる。別に、前出の『追悼録』中「霊前への捧呈品」名簿「志のぶ会」会員氏名中に「小島とよ子」の名もあるが、文面の内容等から推して可能性の高いのは「佐々木とよ」であろう。

「佐々木とよ」については、岐阜県立図書館ホームページ《岐阜県ゆかりの先駆者たち 第26回「私立学校創設の先駆者 佐々木とよ(ささき とよ)》に詳しい。

それによれば、「とよ」は大垣藩の士族の家に生まれ、同地の興文第二高等小学校卒業後、地元の学者に歴史・数学等を学んで知識教養を深め、女性の自立を志して上京し、明治29年(1896)私立共立女子職業学校乙科刺繍科に入学、同31年卒業後、改めて辰五郎翁が教鞭を執る東京裁縫女学校高等科に入学し、高い裁縫技術と近代的な教授方法を学んだ、とある。「とよ」の開いた岐阜裁縫伝習所は東京仕込みの合理的で質の高い教育内容が評判となり入学希望者が殺到し、同36年には市内西野町に移転拡張し佐々木裁縫女学校と改称、その後同42年(1909)佐久間町に新築移転し、大正3年(1914)佐々木実科女学校と改称、同13年(1924)佐々木高等女学校を設置、同15年岐阜市鶯谷に移転、戦後鶯谷女子高等学校と改称し、今日鶯谷中学・高等学校としてその教育活動を続けている。

本書簡の宛先「登与子様」を「佐々木とよ」とするならば、発信の年は、彼女が東京裁縫女学校を卒業し、郷里岐阜で裁縫伝習所を開いた明治33年(1900)以降のことになる。前節でも紹介したとおり辰五郎翁が『婦人改良服指南』を著したのが明治31年、続いて『婦人改良服裁縫指南』を著したのが同36年であることからすると、この頃が辰五郎翁考案の婦人改良服の実用的完成期であり、普及期であったと推測される。事実、明治36年(1903)の『婦人改良服裁縫指南』には、東京裁縫女学校同窓会の名で次のような序文が記されている。以下、いささか長くなるがここにその要所を引用してみよう。

「・・(前略)・・多年考案ヲ盡サレ終ニ一個ノ新意匠ヲ立テラレタリ 凡テ美觀ヲ主トスルモノニ實際ノ應用ニ不便多ク又實際ノ應用ニ便利ナルモノハ概ネ美觀ヲ欠ク 是世間事物一般ノ情態ナリ 然レ共先生ノ新案ヲ見ルニ其從來ノ服装ノ不便ナル点ヲ去リテ而カモ外觀ノ美ヲ損セズ 一個ノ改良服トシテ優ニ頭角ヲ表ハスモノナリ 此改良服新意匠ノ發表セラレタル未ダ漸ク二年ニシテ今日既ニ之ヲ用フルモノ甚々少シトセズ ・・(以下略)・・」

辰五郎翁の婦人改良服が、他のそれに較べて一際優れていることを賞するとともに、改良服新意匠を発表してはまだ二年を経つに過ぎないのに、かなり世間に広く普及している、と述べている。この二年の経過の文言に着目するならば、本書が36年3月の刊行であることから新意匠の発表は明治34年であったことが明らかとなる。さらに本書簡に見える「改良服も社会の好評を得 諸府県より日々幾回となく問い合わせ之あり閉口仕まつり候」の文面からすると、新意匠発表後大きな反響を呼ぶ中で相応の時間が経過していることが窺え、それやこれやを勘案すると本書簡の発信年は明治34年から36年頃と判断される。これに拠るならば、前の2の書簡もほぼ同じ時期のものと考えて差し支えなからう。このことを補強するものとして、明治33・34年頃に東京裁縫女学校を卒業した生徒による「卒業生の声」の中に、改良服についての実際の見聞を語っているところがあり(三友昌子 『「卒業生の声」を聞くー「裁縫雛形」をもっと知るために』 本学博物館報No.54 2010年秋の号)、この頃が辰五郎翁の婦人改良服普及運動の興隆期であったことを裏付けている。

4. 9月12日付け 高井よう子様宛書簡(図⑥)

巻紙仕立て。卷子装。寄贈者、寄贈年月日不詳。

本紙一紙 縦18・0cm 全長106・8cm

[本文]

御問合せ之趣き了承
御返事左尔
女兒三才祝着本式
截ちハ三っ身尔手も四っ身
尔ても宜し
切地ハ縮緬裾模様又ハ
腰模様紋付裏緋縮
緬となし袖形りを丸く
する事
下着ハ赤の無垢二枚を重
ね都合三枚重尔する事
略式なれば
ゆうぜん縮緬位尔て宜し
紋付けざれば袖形りを
角尔すべし
下着ハ前同様無垢二枚
之事又白二枚でもよし
四寸内外
帯ハ巾三寸尔三寸の一
位の丸帯を用ゆ地ハ
繻珍又ハ大和錦の類
運針尔用ゆる材料
或学校或教授所尔てハ
小倉を最良として用
ひ候ども女子尔ハ不適當
ニ付矢張白洋巾又ハ俗尔天竺
ト云フ品柄又ハキヤルコ 俗ニキヤラコ
白木綿位之所をよしとす
小倉を針目細かく手早く
縫ふ事ヲ得被候へハ誠尔結構
なれど其ハ仕立屋の男職
人様のなすべき事尔て婦
人尔ハ到底出来可多き方
なれば先づ前記の木綿又ハ
かなきん等をよろしとす
文部省の試験は昨年
までハ十一月尔願書提出規則なりしが

[読み下し]

御問ひ合わせの趣了承
御返事左に
女兒三才祝着 本式
裁ちは三ツ身にても四ツ身
にても宜し
切れ地は縮緬裾模様または
腰模様紋付き 裏緋縮緬
となし 袖形り丸く
する事
下着は赤の無垢二枚を重ね
都合三枚重ねにする事
略式なれば
ゆうぜん(友禅)縮緬位にても宜し
紋付けざれば袖形りを
角にすべし
下着は前同様無垢二枚
の事 又白二枚でもよし
四寸内外
帯は巾三寸に三寸の一位(抹消線)
の丸帯を用ゆ 地は
繻珍又ハ大和錦の類
運針に用ゆる材料
或いは学校或いは教授所にては
小倉を最良として用ひ候ども
女子には不適當
に付き やはり白洋布又ハ俗に天竺
と云う品柄又ハキヤルコ俗にキヤラコ
白木綿位の所をよしとす
小倉を針目細かく手早く
縫うことを得られ候へば誠に結構
なれど 其れは仕立屋の男職人様
のなすべき事にて 婦人
には到底出来がたき方
なれば 先づ前記の木綿又ハ
かなきん等をよろしとす
文部省の試験は昨年
までは十一月に願書提出規則なりしが

本年規則改正相成今年
より七月中提出すべき
事定められ候へば今年ハ
最早間尔合い申さ須候
然様御了承ヒ成爲し
先ハ御返事迄
草々
九月十二日 渡邊老人
高井よう子様

本年規則改正相成り 今年
より七月中提出すべき
事に定められ候へば 今年ハ
最早間に合い申さず候
然るよう御了承成られたし
先ずは御返事迄
草々
九月十二日 渡邊老人
高井よう子様

[解説] 首尾完備した長文の書簡で、高井よう子からの女兒三歳祝着本式の仕様及び生徒指導現場における運針用布地の選択、文部省の教員検定試験願書提出時期の確認等に関する質問への返信である。これまでの書簡からも窺われるとおり、実用に即した懇切丁寧な回答は誠意と愛情に満ちており、一人一人の卒業生と対等に向き合って指導交流する辰五郎翁の姿勢がよく表れている。

高井よう子は旧姓平野、名は「よう」といい、明治31年(1898)東京裁縫女学校本科を卒業し、郷里の名古屋に平野裁縫女学校創立した人物である。9月12日の発信日のみで発信の年が記されていないが、本文後半の文部省試験願書提出時期に関して「本年規則改正相成り、今年より七月中に提出すべき事云々」の文面から、この年を特定することができる。手懸かりは既出の明治36年刊行の『婦人改良服裁縫指南』附録の「高等女学校 女子師範学校 裁縫家事教員試験問題集」にある。同附録の裁縫科文部省第十六回本試験の項をみると、前回まで年が明けた1月か2月に実施されていた本試験が、明治35年(1902)には10月に変更されている。本試験に対する予備試験も定例で行われていたようで、十五回までは毎年11月であったものが、十六回は8月に繰り上げられている。このことから知られるとおり、明治35年に教員検定試験の規則が改正され、本試験とそれに伴う願書提出の期日が早まり、従来11月であった願書提出締め切りは7月中提出締め切りとなったことが確認される。これによって、本書簡の発信年は明治35年であることが明らかとなる。

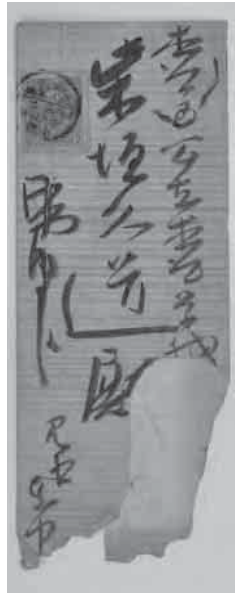
おわりに

以上、本学博物館が収蔵保管する校祖渡邊辰五郎翁の4通の書簡について、解説・読み下しを行い、若干の解説を附してみた。

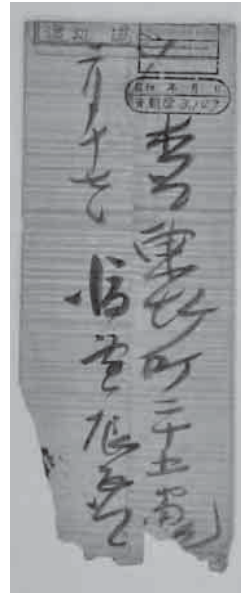
発信時期からみると、1の明治22年柴垣久道宛が最も早い。2・3・4の書簡は東京裁縫女学校時代の教え子との卒業後の交流に伴う書簡で、概ね辰五郎翁晩年に近い明治35年から36年の頃に集中している。ことに卒業生との交信は、きめ細やかで愛情にあふれた内容であり、辰五郎翁の人柄が偲ばれてこころ打たれるものがある。懇切丁寧、しかも要所は厳しく押さえた質問への回答は、和洋裁縫伝習所以来、いやさらに遡って生地千葉県長南の地で開いた裁縫塾以来の辰五郎翁の教育理念に裏打ちされたものといえることができる。

これらの書簡を詳細に検討分析することにより、辰五郎翁の教育活動の実際がより鮮明に解明されることを期待して、この小稿を終えることにする。

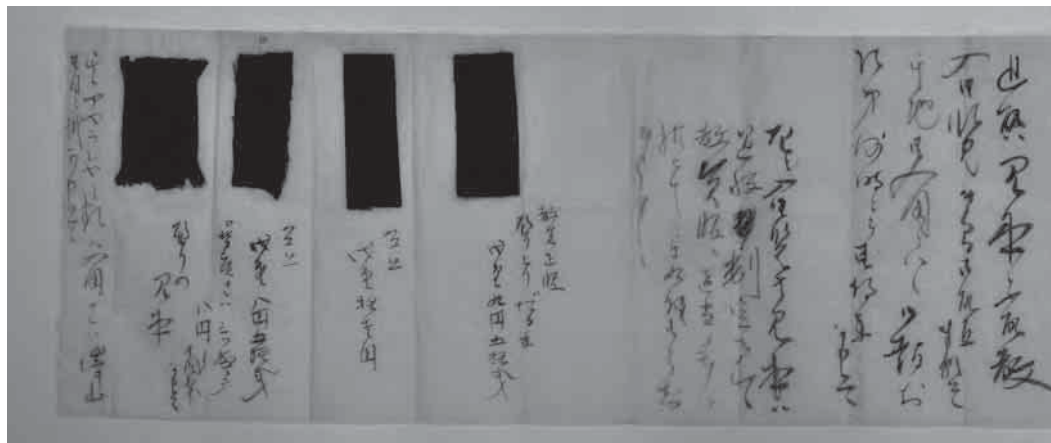
図① 柴垣久道宛封筒 表



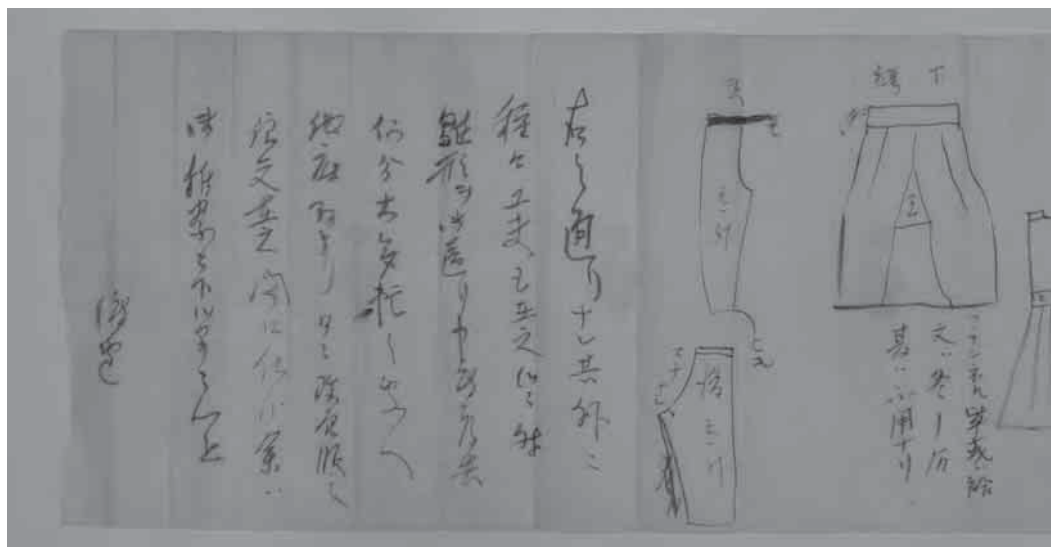
図② 柴垣久道宛封筒 裏



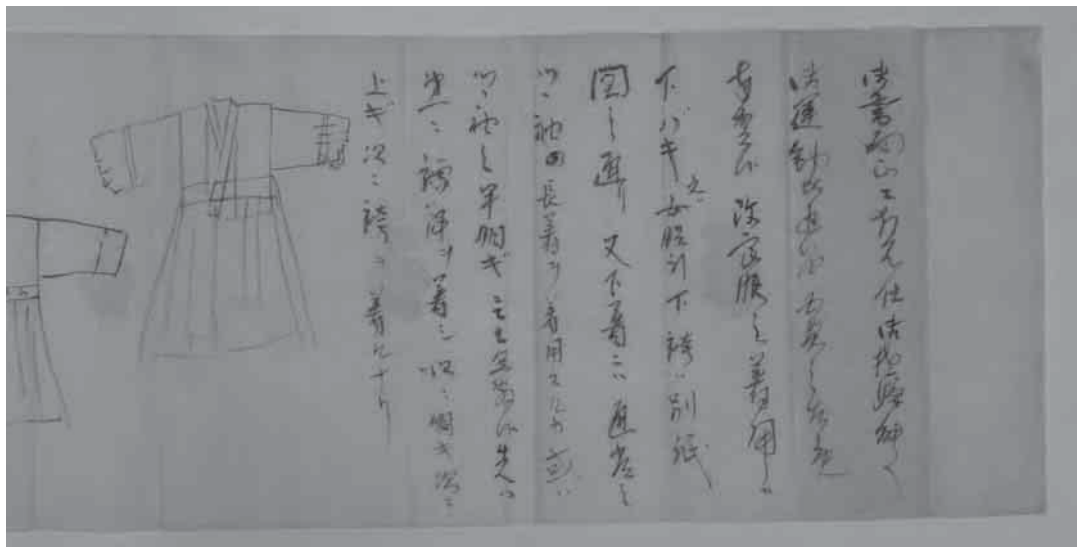
図③ 柴垣久道宛書簡



図④ 改良服関係書簡



男石も
 以信方
 少別の身又他
 全方
 一以拂
 知信
 又保
 直
 裁縫
 下
 星垣相
 信者



考書
 法運針
 下小キ
 女服
 別紙
 又下着
 袖の長
 早羽
 上キ
 着
 着

おわりに

老舗の女子大として女性参画の未来づくりに関わる独自の研究・実践活動をという使命を担い、研究員が3年間のプロジェクトを立ち上げて発足した当研究所もいよいよ締めめの年を迎えました。4月には狭山キャンパスにて健康とジェンダーに関するシンポジウム、6月には戸山ハイツにて「未来の物語をつむごうプロジェクト」と題したシンポジウム & ワークショップ、7月には地方自治体関係者を招いての「男女共同参画で行う地域防災・減災」の研究報告会、10月の学園祭では『つるとはな』の編集者を招き「教えて先輩!学びたい、繋ぎたい、打ち立てたい、私の人生」と題する対談、及び世代間問題に関するシンポジウム、1月には米国大使館との共催「人生100年時代、熱望される女性のリーダーシップ」のシンポジウム、3月にはこれまでの成果を内外に披露する「女性未来フェスタ」の開催と、まさにラストスパータ的に盛りだくさんの活動を展開してまいりました。

本年度については4月より女性活躍推進法が施行されたことも特筆しなければなりません。追い風とはいえ単純に喜ばしいだけのものではなく、これによって女性を取り巻く状況について更にいろいろな問題点が浮き彫りになりました。そしてますます加速する少子高齢化社会の問題。女性未来研究所にとって次のステージは真に正念場です。これまでの成果を踏まえ、そこから新たにどのような展望を開いていけるかを考えながら、研究員が一丸となって進んでいかなければなりません。引き続きのご支援を何卒よろしくお願いいたします。

この3年間、様々な形で支えてくださいました全関係者に心より御礼申し上げます!

女性未来研究所 副所長

英語コミュニケーション学科教授

伊藤 節

Itoh Setsu

List of writers

執筆者一覧

あ

青木幸子

伊藤節

井上俊哉

色川木綿子

岩田三代

内野美恵

宇和川小百合

太田八重美

小櫃智子

か

貝原奈緒子

木元幸一

さ

齋藤正子

鮫島奈津子

た

田中恵美子

な

仲谷ちはる

並木有希

能澤慧子

野口麻美

は

林宏一

早瀬郁恵

樋口恵子

平野順子

ま

松岡洋子

宮地孝宜

崇田友江

や

米澤純子

わ

和田涼子

(五十音順)

編集後記

平成28年度 東京家政大学女性未来研究所 活動報告書をお届けします。今回の活動報告書は、前半に本研究所「提言」および「ジェンダー論」の前期・後期の授業報告を新たな章立てとして設け、後半に第一期（平成26年度から平成28年度）の3年間の研究プロジェクト総集編としました。編集にあたっては、昨年度と同様に編集委員会は設けず、プロジェクトごとのリーダーと編集担当者を中心に、執筆者の自主と自律の精神に基づき進めました。編集方針などの全体に関わることは、平成28年6月9日第3回から平成29年2月9日第10回の8回にわたる定例研究会で検討を重ね、決定しました。また、研究プロジェクト総集編の「抜刷版」を作ることになり、この期間に定例研究会とは別に希望ページ数や希望部数などの調査・回答のやりとりもありました。先生方のご協力とご配慮に、心より御礼申し上げます。

3年目の節目となる女性未来研究所の活動は、2年目より更に加速度を増し、活発に広範囲に事業を展開しました。4月と6月の主催シンポジウム、7月の研究プロジェクト報告会、9月からの男女共同参画講座、10月の学園祭企画シンポジウム、その他に、1月の米国大使館との共催シンポジウム、年度末には「女性未来フェスタ」を開催しました。

執筆期間は、12月20日に原稿依頼、1月11日に原稿メ切、1月18日に入稿と、超ハードスケジュール（昨年度を更に短縮です）の挑戦でしたが、みなさまのご協力のもと、無事に乗り越えることができました。

最後に、本書および抜刷版の校正・編集作業に多大なるご尽力をいただいた株式会社パワープランナーの高木武社長、田中恵治様、制作担当の篠里美様、表紙デザイン協力をいただいたヒューマンライフ支援センターの坂本理恵さん、そして執筆者のみなさまに心より感謝申し上げます。

女性未来研究所 事務室主任
仲谷ちはる

平成28年度 東京家政大学 女性未来研究所 活動報告書
第1期（平成26年度～平成28年度）研究プロジェクト総集編

2017年3月31日 発行

発行	東京家政大学 女性未来研究所 〒173-8602 東京都板橋区加賀 1-18-1
企画・編集	東京家政大学 女性未来研究所
表紙協力	東京家政大学 ヒューマンライフ支援センター
印刷・製本	株式会社 パワープランナー
